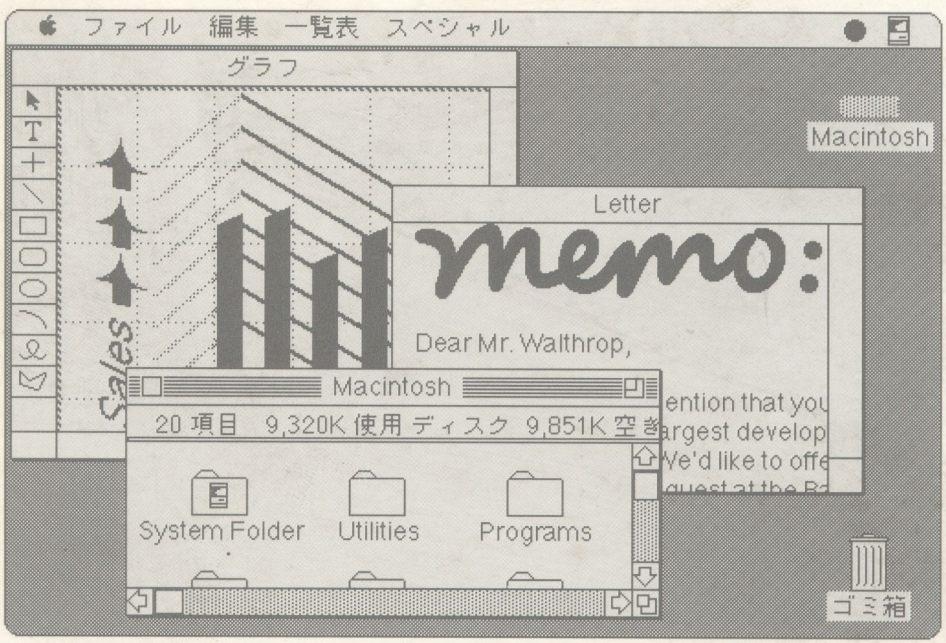
Macintosh® System Software User's Guide

Macintosh システムソフトウェアガイド（KanjiTalk™ Version 6.0.4）

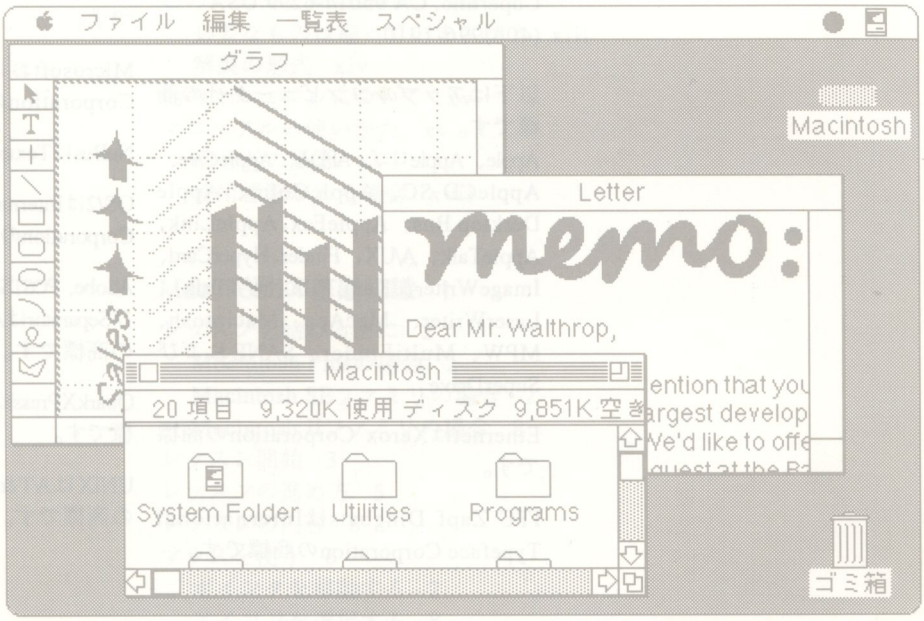


保証と責任の範囲

本マニュアルおよびメディア（該当ソフトウェアを収納した媒体）の保証は、本製品を当初購入いただいた日から90日間に限定されております。アップルコンピュータ社は、本マニュアルに記載された製品に関し、明示または黙示の品質、性能、商品価値、またはどのような特定の使用目的に対する適合性についても、その保証は表示いたしません。この結果、本ソフトウェアは、現状のままで販売されるものです。購入者は、本製品の品質および性能に関する全責任を負担するものとします。アップルコンピュータ社は、本ソフトウェアまたはマニュアルの欠陥の結果発生する直接、間接、特別、偶然または必然的な損害について、仮に当該損害が発生する可能性があると告知されていた場合でも、一切の責任を負いません。同時に、当社はプログラムまたはデータの回復に要する費用、または再製に要する費用を含めて、アップルコンピュータ社の製品に記憶された、または使用されるプログラムにつき、一切の責任を負いません。アップルコンピュータ社の販売元、販売店またはこれらの社員は、この責任に関し、いかなる修正、拡大または追加をすることを授権されていません。

Macintosh System Software User's Guide

Macintosh システムソフトウェアガイド（KanjiTalk™ Version 6.0.4）



APPLE COMPUTER, INC.

本マニュアルおよびマニュアル中に記載されているソフトウェア（コンピュータプログラム）は、アップルコンピュータ社により、すべての版権を保存されています。ソフトウェアの正常な使用またはバックアップコピーを作成する場合を除き、アップルコンピュータ社の書面による同意なしでは、本マニュアルやプログラムは、一部または全部を問わず、複製されるか否かを問わず、他人のために複製を許可するものではありませんが、購入された本マニュアルおよびソフトウェアを他人に売却、または贈与することはできます。複製とは、本マニュアルを他の言語や書式に翻訳、書き換えすることも含みます。

本マニュアル中に記載されているソフトウェアは、使用する本人がバックアップのためにコピーする場合を除き、コピーすることを禁じます。

Appleロゴはアップルコンピュータ社の登録商標です。キーボードから入力可能なAppleロゴ（Option-Shift-K）についても、これをアップルコンピュータ社からの書面による事前の許諾なしに商業的な目的で使用すると、商標および企業間の自由競争原理の侵害となる場合があります。

©Apple Computer, Inc., 1990
20525 Mariani Avenue
Cupertino, CA 95014-6299 USA
(408)996-1010

以下はアップルコンピュータ社の商標です。
Apple、Appleロゴ、APDA、Apple*Care*、AppleCD SC、AppleColor、Apple Desktop Bus、AppleFax、AppleLink、AppleTalk、A/UX、Finder、HyperCard、ImageWriter、KanjiTalk (漢字Talk) 、LaserWriter、 MacApp、Macintosh、MPW、MultiFinder、SANEおよびSuperDrive

EthernetはXerox Corporationの商標です。

ITC Zapf DingbatsはInternational Typeface Corporationの商標です。

LinotronicはLinotype Co.の商標です。

MacWriteはClaris Corporationの商標です。

MicrosoftおよびMS-DOSはMicrosoft Corporationの商標です。

NuBusはTexas Instrumentsの商標です。

OS/2はInternational Business Machines Corporationの商標です。

Adobe, POSTSCRIPT, Illustrator 88 およびSeparatorはAdobe Systems Incorporatedの商標です。

QuarkXPressはQuark Incorporatedの商標です。

UNIXはAT&T Information Systemsの商標です。

目次

はじめに xi

このマニュアルについて xii
必要なものは揃っていますか？ xiii
解説の形式 xiv
他のマニュアルについて xv
マニュアルの使いかた xv
初心者の場合 xv
使用経験がある場合 xvii

1 Macintoshの基礎知識 1

レッスンを始める前に 2
Mocintosh Plusの場合 2
Macintosh SEファミリの場合 2
Macintosh IIファミリの場合 2
レッスン開始 3
レッスンの進め方 5
レッスンの内容 6
マウスを使う 6
ポインタを移動する 7
アイコンを選択する 8
アイコンをドラッグする 9

マウス操作のまとめ　10
メニューからコマンドを選ぶ　11
作業対象を選択する　11
メニューをプルダウンする　11
メニューからコマンドを選ぶ　13
メニュー操作のまとめ　13
ウインドウを操作する　14
ウインドウのサイズを変更する　15
ウインドウをズームする　16
ウインドウを移動する　17
他のアイコンからウインドウを開く　18
ウインドウを選択する　19
他のアイコンを開く　20
ウインドウを閉じる　22
スクロールバーで表示範囲を変更する　24
ウインドウ操作のまとめ　25

2　Macintoshシステムの使用準備　27
この章について　28
SCSIハードディスクの使用準備　28
SCSIハードディスクのイニシャライズ　29

3　システムソフトウェアのインストール　33
この章について　34
旧システムソフトウェアを更新する場合　34
簡易インストール　34

4　アプリケーションと書類について　41
アプリケーションの使いかた　42
アプリケーションの起動　42
書類の作成　44
書類に名称をつけて保存する　45
書類の内容を編集する　48
同一内容を別々の書類に保存する　51
アプリケーション操作のまとめ　52
書類の整理　53
フォルダの使いかた　53
フォルダのネスティング　56
階層ファイルシステムの活用　59
アプリケーション内での書類の開きかた　62
階層ファイルシステムと書類の保存　63

不要な書類／フォルダ破棄　65
作業を始める前に　66

5　Macintoshの基本操作　67
この章について　68
マウスの使いかた　68
“選択する”と“選ぶ”　68
クリック　69
ダブルクリック　70
シフトクリック　71
マウスボタンを押し続ける　72
ドラッグ　73
アイコンの一括選択　74
ウインドウの操作　76
ウインドウを選択する　77
ウインドウを移動する　77
ウインドウサイズを変える　78
ウインドウをズームする　80
ウインドウを閉じる　82
スクロールバーの機能　83
1行ずつスクロールする　84
ウインドウ単位でスクロールする　85
見たい部分までジャンプする　86
テキストの編集　87
テキストを挿入する　87
テキストを選択する　88
テキストを移動する　89
カットとペースト　89
コピーとペースト　90
テキストを差し替える　91
テキストをを削除する　91
TeachTextとReadMe書類　91

6　デスクトップ：Macintoshの作業環境　93
この章について　94
デスクトップとファインダ　94
ファインダの機能　95
ファインダのコントロール　96
アイコンの操作　96
アイコンの名称を変更する　96
書類、アプリケーション、フォルダをコピーする　99

書類、フォルダ、アプリケーションを同一ディスク内で
移動する 100
書類、フォルダ、アプリケーションを別のディスクに
コピーする 100
アイコンの情報を調べる 102
“インフォメーション”コマンドを使う 103
書類またはアプリケーションをロックする 104
書類またはアプリケーションのロックを解除する 105
フォルダ、ディレクトリ、階層ファイルシステムを活用する 105
フォルダ 105
ディレクトリ 106
階層ファイルシステム 107
フォルダを作成する 108
フォルダ間で書類、フォルダ、アプリケーションを移動する 109
書類とアプリケーションの操作 110
アプリケーションを開いて書類を作成する 110
アプリケーション内で書類を新規作成する 111
ファインダから既存書類を開く 112
ディレクトリダイアログボックス 113
アプリケーション内で既存書類を開く 114
“保存”コマンドを使う 117
“新規保存”コマンドを使う 117
書類の内部処理 119
保存の重要性 120
プリント 121
プリンタを選択する 121
LaserWriterの”用紙設定”コマンドについて 122
ファインダから書類をプリントする 124
ファインダから複数の書類をプリントする 124
アプリケーションから書類をプリントする 125
ディスクまたはフォルダのディレクトリをプリントする 125
カラープリントについて 127
“ゴミ箱”を使う 127
書類、フォルダ、アプリケーションを破棄する 128
“ゴミ箱”に破棄したものを復元する 128

7 ファインダのメニュー 129
この章について 130
アップルメニュー 130
Finderについて 130
デスクアクセサリ 131
ファイルメニュー 131
編集メニュー 134

一覧表メニュー 136
スペシャルメニュー 137
カラーメニュー 139

8 デスクアクセサリ 141
この章について 142
デスクアクセサリのインストール 142
時計 143
計算機 145
セレクタ 145
ポート直結のプリンタを選ぶ 146
AppleTalkネットワーク上のデバイスを選ぶ 148
AppleTalkの接続および切り離し 150
他のAppleTalkとネットワーク上のデバイスを選ぶ 151
コントロールパネル 151
コントロールパネル（General） 152
デスクトップパターンを変更する（カラーモニタ） 153
挿入ポイントの点滅速度を設定する 155
メニューの点滅回数を設定する 155
時刻を設定する 155
日付を設定する 155
RAMキャッシュを設定する 156
スピーカボリュームを設定する 157
カラーコントロールパネルを使う 157
選択時のハイライトカラーを変更する 157
キーボードコントロールパネルを使う 160
リピート入力速度を設定する 160
リピート入力開始までの時間を設定する 160
モニタコントロールパネルを使用する 161
表示色数またはグレイ階調数を設定する 161
モニタの位置関係を設定する 163
マウスコントロールパネルを使う 166
マウストラッキングを設定する 166
ダブルクリックの反応速度を設定する 167
サウンドコントロールパネルを使う 167
起動デバイスコントロールパネルを使う 168
ソフトキーボード 168
ソフトキーボードを使う 169
スクラップブック 170
スクラップブックにイメージを追加する 170
スクラップブックからイメージを取り除く 171
スクラップブックから書類へイメージを移動またはコピーする 171

スクラップブックを複製する 172

9 キーボードについて 173
この章について 175
Macintosh Plusキーボード 176
アップルキーボード 178
アップル拡張キーボード 180
オプションキャラクタ 182
アクセント記号付きのキャラクタを入力する 183
Easy Access 184
“sticky keys” 機能を使う 184
“mouse keys” 機能を使う 186
メニューコマンドのショートカット 187
ファインダのキーボードショートカット 188

10 フロッピーディスクについて 189
この章について 190
フロッピーディスクの容量とフォーマット 190
フロッピーディスクのイニシャライズ 191
800Kフロッピードライブ 192
400Kフロッピードライブ 195
SuperDrive 197
ディスクをMS-DOS用にイニシャライズする 199
SuperDrive と従来型フロッピードライブの混用 201
MacintoshとMS-DOSコンピュータ間のデータ交換 202
ディスクの消去 202
フロッピーディスクをイジェクトする 203
ファインダの“イジェクト”コマンドを使う 204
フロッピーディスクアイコンを“ゴミ箱”へドラッグする 206
他の方法でフロッピーディスクをイジェクトする 207
フロッピーディスクをコピーする 208
フロッピーディスクをハードディスクにコピーする 208
フロッピーディスク間のコピー 209
フロッピードライブ2基を用いてコピーする 209
ハードディスクを媒介としてコピーする 211
フロッピードライブを1基だけ用いてコピーする 214
フロッピーディスクの内容を保護する 214
フロッピーディスクをロックする 214

11 ハードディクスについて 217
この章について 218
SCSIハードディスクの使用準備 218
SCSIハードディスクのイニシャライズ 219
SCSIハードディスク再のイニシャライズ 223
Apple HD SC Setupのその他の機能 223
更新 223
パーティション 224
テスト 224
ドライブ 225
ハードディスク活用の手引き 225

12 マルチファインダ 227
マルチファインダについて 228
知っておくべきこと 228
使用条件 229
実装メモリ容量の確認 229
この章について 230
この章の利用方法 230
マルチファインダの使用を設定する 231
マルチファインダの使用を解除する 232
マルチファインダの操作例 233
作業の内容 233
解説の内容 233
デスクトップ 234
アプリケーションの起動 234
移動方法（1）：アップルメニュー 234
移動方法（2）：ウインドウ 235
デスクトップ全面を使用するアプリケーション 236
移動方法（3）：グレイ表示のアイコン 237
移動方法（4）：メニューバーの小アイコン 237
デスクアクセサリ 238
バックグラウンドプリント 239
Background Printingのしくみ 239
バックグラウンドプリント機能の確認 240
PrintMonitor 241
PrintMonitorのウインドウ 242
初期設定ダイアログボックス 244
プリント中止／プリント再開 246

メモリ管理について　246
　ファインダのメモリグラフ　247
　メモリの断片化　248
　断片化したメモリブロックをまとめる　249
　アプリケーションのメモリサイズを変更する　249
スタートアップコマンド　251
　起動アプリケーションの設定　252
マルチファインダ活用の手引き　253

付録A
起動ディスクについて　255

この章について　256
起動ディスクの機能　256
　起動ディスクのその他の機能　257
起動ディスクの作成と更新　257
　作業をはじめる前に　257
　起動ディスクを作成／更新される前に　258
　Installerの使用方法　258
　システムソフトウェアのカスタマイズ　261
　起動ディスクの内容　265
起動ディスクのカスタマイズ　266
　起動ディスクの検出　266
　システムフォルダの混用　267
起動ディスクの切り替え　268
起動ディスク内容の整理　269

付録B
トラブルシューティング　270

この付録について　271
一般的なトラブル　271
マルチファインダ使用時のトラブル　278

索引　283

はじめに

このマニュアルには、Apple® Macintosh®コンピュータに付属のシステムソフトウェア、漢字Talkをご利用いただく上で必要な情報が収められています。システムソフトウェアとはコンピュータ自体の動作に必要な各種プログラムを指し、これらのプログラムによりMacintoshの操作環境や各種機能が実現されます。漢字Talkは、“スクリプトマネージャ”と呼ばれるアップルコンピュータ社の世界的な統一システムの一環として開発されました。

システムソフトウェアを使用する前にMacintoshのセットアップを完了してください。セットアップには電源、マウス、およびキーボードの接続、またシステム構成によってはプリンタなどの周辺デバイスの接続が含まれます。これが完了していない場合はいったんこのマニュアルを離れて「オーナーズガイド」の指示にしたがいセットアップを行なってください。

このマニュアルについて

システムソフトウェアの基本的な理解のため、最初の４つの章だけは系統だったレッスンおよび使用準備の解説から構成されています。それ以降の章はそれぞれが独立した解説内容を持ち、必要な情報をすばやくさがし出せるようになっています。

各章の内容は次の通りです。

- 第１章「Macintoshの基礎知識」は、初めてMacintoshを使用される方を対象とした入門レッスンとなっています。システムソフトウェアを実際に使用しながらMacintoshの基本操作の全てが無駄なく学べます。
- 第２章「Macintoshシステムの使用準備」では、ハードディスクのイニシャライズの仕方を解説します。まだハードディスクをイニシャライズしていない方はこの章を読んでイニシャライズしてください。
- 第３章「システムソフトウェアのインストール」ではシステムソフトウェアのインストール方法を解説します。初めてMacintosh を使用される方は、必ず第２章および第３章に記載の作業を済ませてください。
- 第４章「アプリケーションと書類について」では、第１章の内容をもとに、実際の作業に必要となる各種操作方法が解説されています。
- 第５章「Macintoshの基本操作」にはMacintoshの基本操作が作業内容別にまとめられています。クイックリファレンスとしてご活用ください。
- 第６章「デスクトップ：Macintoshの作業環境」では、Macintoshの作業環境を実現するプログラム、Finder™（ファインダ）のコマンドが１つずつ解説されています。
- 第７章「ファインダのメニュー」では、デスクトップ上でメニュー化されている各種コマンドの使用方法がまとめられています。
- 第８章「デスクアクセサリ」では、システム付属のミニアプリケーションについて解説します。デスクアクセサリは、デスクトップ上だけでなくアプリケーションでの作業中にも呼び出して使用できます。
- 第９章「キーボードについて」では、Macintosh用の各種キーボードについて説明し、種類別に各キーの機能を解説します。
- 第10章「フロッピーディスクについて」では、Macintoshに採用されている3.5インチフロッピーディスクの活用方法がまとめられています。
- 第11章「ハードディスクについて」では、Apple SCSIハードディスクのイニシャライズ（初期化）方法を順を追って説明し、ハードディスクの活用法について解説します。

- 第12章「マルチファインダ」では、Macintoshにおいてマルチタスク環境を実現するオペレーティングシステム、MultiFinder™(マルチファインダ)が解説されています。また、マルチファインダの簡単な使用例を通してマルチタスク環境活用の実際を解説します。
- 付録A「起動ディスクについて」では、起動ディスクとは何かを解説し、その作成および更新方法を説明します。
- 付録B「トラブルシューティング」にはトラブル時の対処法がまとめられています。

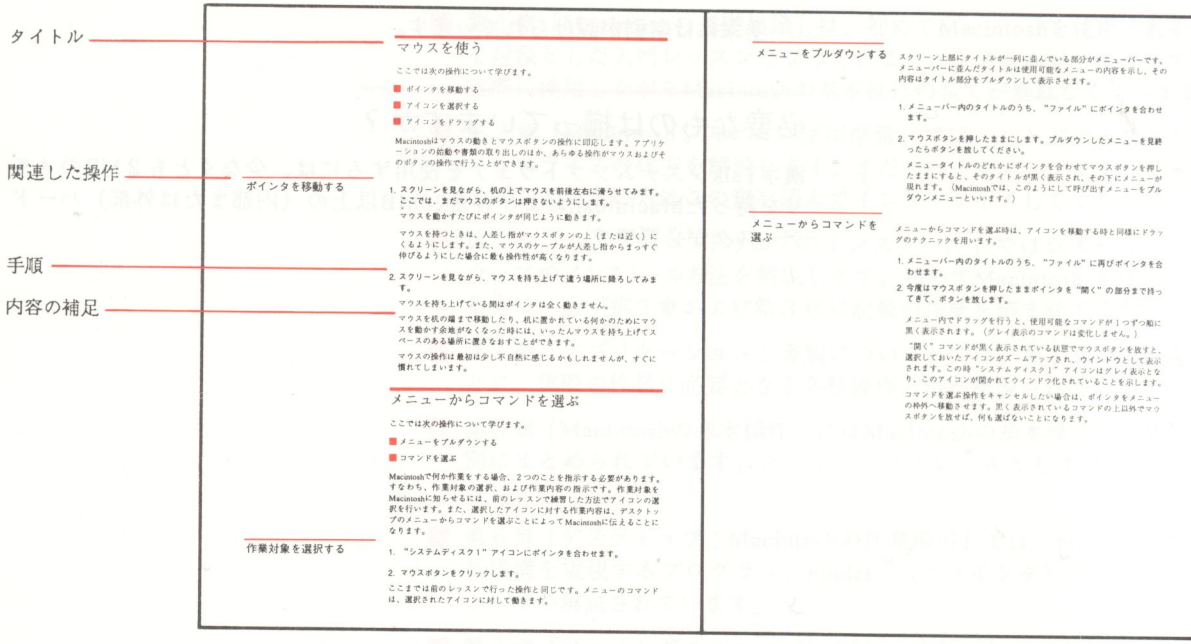
巻末には索引が設けられています。

必要なものは揃っていますか？

漢字Talkシステムソフトウェアを使用するには、少なくとも2MBのメモリを持ったMacintoshおよび容量20MB以上の（内部または外部）ハードディスクが必要です。

解説の形式

このマニュアルの解説内容は章ごとに独立していますので、ページを追って順に読み進まれなくとも差しつかえありません。解説内容は次のような形式で統一されていますので、クイックリファレンスとしてご活用いただけます。



■ 図P-1　解説内容の構成

操作方法は作業内容ごとに解説されています。実際に行なう操作は太字で示されており、番号付きでいくつかのステップに分けられています。操作方法をひと通り習得された後は、太字部分だけを読めばクイックリファレンスとして活用できます。

特に基本的な操作では、操作方法だけでなくその使用目的を理解することが大切です。このような情報は、太字部分以外に補足解説として記載されています。

他のマニュアルについて

このマニュアルを含め、Macintoshには数冊のマニュアルが付属しています。しかし、Macintoshの操作方法を学ぶためにこれらのマニュアルを全てお読みになる必要はありません。各マニュアルは、何かわからないことがあった時に手早く参照できるように構成されています。以下に、別冊マニュアルの内容を記します。

- **Macintoshオーナーズガイド**：Macintoshのセットアップが完了していない場合、まず「オーナーズガイド」を開いてMacintoshの使用準備を行なうことになります。「オーナーズガイド」には、システム構成のあらまし、ソフトウェアとハードウェアの関係など、入門者向けの解説も記載されています。また、巻末にはMacintoshに関する技術的な情報や用語解説が収められているほか、Macintosh関連の各種技術資料も紹介されています。「オーナーズガイド」および「システムソフトウェアガイド」の中の、**太字**の用語は「オーナーズガイド」の用語解説のページで扱われています。
- **Macintosh日本語入力操作ガイド**：システムに付属の2.0変換入力方式を使った日本語の入力方法が説明されています。また、漢字Talkの設定変更などに使用する“コントロールパネル”モジュールの使い方も説明されています。
- **Macintoshユーティリティガイド**：付属のユーティリティの使用方法が説明されています。ユーティリティには、Macintoshシステムをカスタマイズする際に使用する特別なプログラムも含まれています。これによりMacintoshを作業内容に合わせて再設定し、最も効率の良い状態で使用できます。

マニュアルの使いかた

付属の各マニュアルに特定の使用方法はありません。Macintoshの使用経験度に応じて自由に参照できるように構成されています。

初心者の場合

Macintoshを初めてお使いになる方には、次のステップに沿ってマニュアルを利用されると便利です。

1. Macintoshのセットアップがまだ済んでいない場合、付属のセットアップガイド、“Open Me First”、または「オーナーズガイド」第1章の指示にしたがってMacintoshシステムの設置および使用準備をします。

2. このマニュアルに戻り、第1章を読みながらMacintoshの基本操作を1つずつ学びます。第1章で扱われている操作は、漢字Talkシステムソフトウェアをインストールする上で非常に大切なものですので必ずご習得ください。

3. このマニュアルの第2章「Macintosh システムの使用準備」および第3章「システムソフトウェアのインストール」へ進みハードディスクの使用準備およびシステムソフトウェアのインストールを行ないます。

4. このマニュアルの第4章へ進み、アプリケーションおよび書類について学びます。

5. 一度も使用していないフロッピーディスクは使用前にイニシャライズする必要があります。このマニュアルの第10章の「フロッピーディスクのイニシャライズ」のページを読んでイニシャライズ方法を学びます。

6. 付属のマスタディスクは全てバックアップしておくことが必要です。このマニュアルの第10章の「フロッピーディスクをコピーする」のページを読んでバックアップを行ないます。

7. 起動ディスクについて学びます。これは付録A「起動ディスクについて」で説明されています。フロッピーディスク、ハードディスクのいずれを起動に用いる場合も、必要な情報は付録Aの「起動ディスクについて」のページに収められています。

8. 別冊の「Macintosh日本語入力操作ガイド」を読んで日本語の入力方法を詳しく学びます。

Macintoshにプリンタなどの周辺デバイスを接続する場合、その周辺デバイスに付属のマニュアルを参照して正しく接続してください。アプリケーション使用の際も、そのアプリケーションに付属のマニュアルをご参照ください。

使用経験がある場合

次の手順は、このマニュアルで解説されている操作方法を既にご存じの方にとっても参考になるはずです。

1. 別冊「オーナーズガイド」の第1章を読み、Macintoshのセットアップを行ないます。Macintoshの機能や内部の働きなどの概要も「オーナーズガイド」で解説されています。

2. このマニュアルの第2章、第3章を読み、内部（または外部Apple SCSI）ハードディスクの使用準備およびシステムソフトウェアのインストールを行ないます。

3. 付属のマスタディスクは全てバックアップしておくことが必要です。このマニュアルの第10章「フロッピーディスクをコピーする」のページを読んでバックアップを行ないます。

4. 起動ディスクについて学びます。この方法は第11章「ハードディスクについて」で説明されています。

5. 付属のインストーラを用いて起動ディスクを作成します。詳しくは付録Aの「起動ディスクの作成および更新」をご覧ください。

6. 第10章を開き、マルチファインダについて学びます。

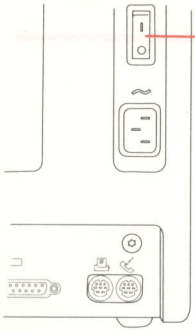
7. 別冊の「Macintosh日本語入力操作ガイド」を読んで日本語の入力方法を詳しく学びます。

8. 「Macintoshユーティリティガイド」を参照して、新しいユーティリティの使用方法を学びます。

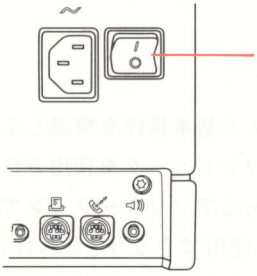
第1章

Macintoshの基礎知識

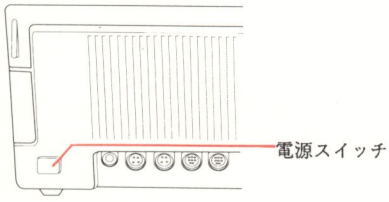
この章ではApple® Macintosh®コンピュータの基本操作を解説します。ここで扱われている内容はMacintosh以外のコンピュータを使用されてきた方にも必要となります。Macintoshでは、あるアプリケーションで習得した操作方法が他のアプリケーションでも使用できます。これは、統一された操作環境を提供するMacintoshユーザインタフェースによるものです。新しいアプリケーションを使用する度に操作方法を覚えなおす必要はありません。



■ 図1-1
Machintosh Plus 裏面



■ 図1-2
Machintosh SE 裏面



■ 図1-3
Machintosh II 裏面

△重要

レッスンを始める前に

この章では、ケーブルの接続をはじめ、Macintoshのセットアップに必要な作業が全て完了しているものとして解説を行ないます。もしセットアップが完了していない場合、いったんこのマニュアルを離れ、付属のセットアップガイド、“Open Me First”、または「オーナーズガイド」第1章の指示にしたがってセットアップを行なってください。

レッスンを始める前に、Macintoshの電源を一度オフにすることが必要です。

- 電源がオフの状態にある場合、そのまま「レッスン開始」のページへ進みます。
- 電源がオンの状態にある場合、今ここでオフにします。電源をオフにする方法は機種により異なります。機種別の方法を次に示しました。

Macintosh Plusの場合

オン／オフスイッチは、本体の裏側にあります（図1-1）。このスイッチのオフ側を押して電源を切ります。

Macintosh SEファミリの場合

オン／オフスイッチは、本体の裏側にあります（図1-2）。このスイッチのオフ側を押し込めば電源が切れます。

Macintosh IIファミリの場合

Macintosh IIファミリの各機種では、日常的な電源オフはソフトウェア的に行なうようになっています。電源をオフにするにはスペシャルメニューから“終了”を選びます。メニューの操作をまだ習得されていない場合、本体裏面の電源スイッチ（図1-3）を用います。このスイッチを一度だけ押せば電源が切れます。いずれの場合も、電源が完全に切れるまで数秒かかります。（身近にMacintoshの使用経験のある方がいらっしゃれば、その方にも相談してみてください）

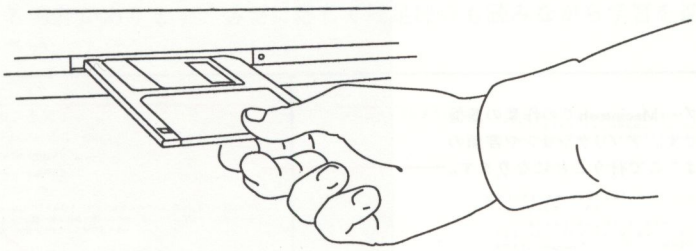
Macintosh II 裏面の電源スイッチは、日常的な電源のオン／オフのために設けられているのではありません。Macintoshコンピュータの使用経験がおありになる場合、必ずスペシャルメニューから“終了”を選んで電源を切ってください。（初めての方は、とりあえず裏面の電源スイッチを用いて電源をお切りください）△

レッスン開始

次の方法でMacintoshの電源をオンにし、レッスンを開始します。

1. Macintoshに付属のフロッピーディスクのうち、ラベルに“システムディスク”と記されたものを用意します。

2. システムディスクをフロッピードライブにセットします。このとき、ラベル面を上にし、シャッタの付いた側から先に挿入します。



■ 図1-4　フロッピーディスクの挿入

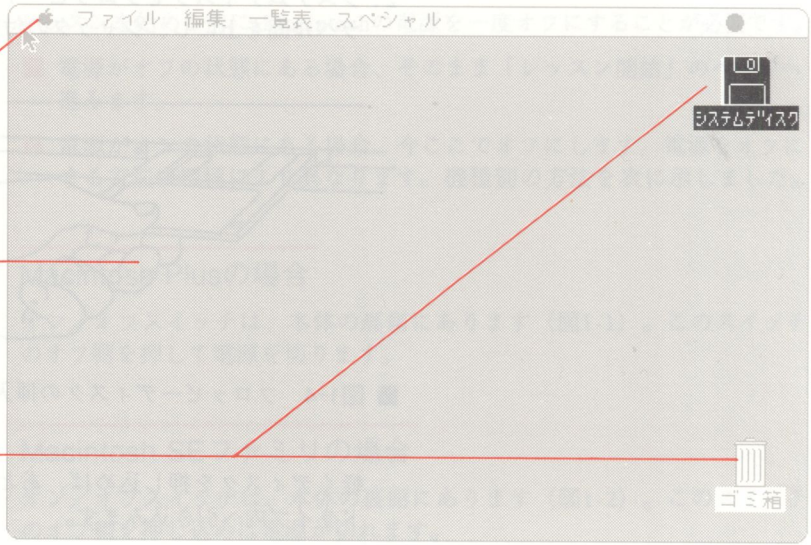
軽くディスクを押し込めば、あとはMacintoshが自動的にディスクをドライブ内へ引き込みます。

△重要　システムディスクの内容を保護するため、ディスクをロックして書き込み禁止状態にしておいてください。△

3．Macintoshの電源をオンにします。

スピーカが鳴り、電源の投入を確認できます。フロッピードライブから聞こえる軽い作動音は、Macintoshがディスクの情報を読み取り始めたことを示します。ウェルカムメッセージが数秒間表示された後、スクリーン中央に**アイコン**（小さな図形）が現れます。

まもなく、次の画面が現れます。



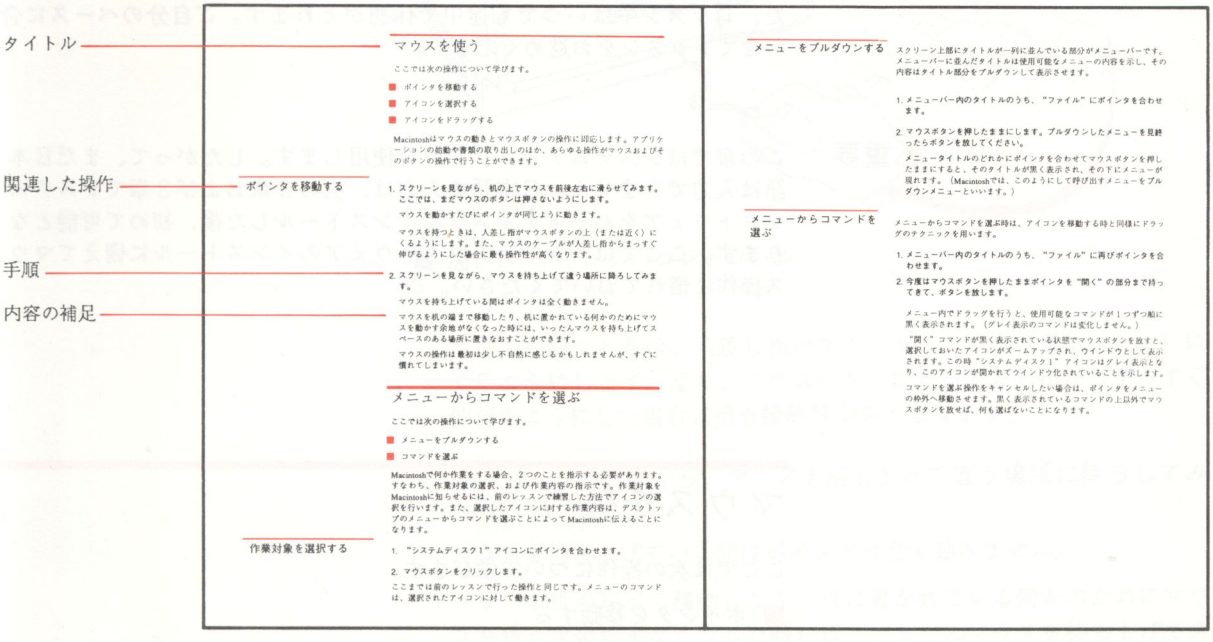
■ 図1-5　システムディスクの起動画面

❖ **表示が違っているとき**：内部ハードディスクがある場合、その使用準備がすでに完了しているとハードディスクのアイコンも表示されます。とりあえず、ここではハードディスクアイコンを無視して次のページに進みます。

レッスンの進め方

この章には、Macintoshの基本操作が１つずつ解説されています。解説は最も基本的な操作から始まり、その基本操作をもとに徐々に高度なテクニックが身に付くように構成されています。したがって、この章の内容をそのまま順に習得することによりMacintoshの操作方法を効果的に学習できます。操作方法は作業内容ごとに解説されています。

実際に行なう操作は**太字**で示されており、番号付きでいくつかのステップに分けられています。太字部分のステップ番号を順に追いながら操作を行なってください。また、ステップによっては補足解説が設けられている場合があります。必要に応じて補足部分も読みながら学習を進めてください。



■ 図1-6　解説内容の構成

❖ レッスンを中断したいとき：レッスンをどこかで中断し、後で再開しても構いません。区切りの良いところで中断することが望ましいのですが、その際はMacintoshの電源をオンのままにしておけば中断部分からレッスンを再開できます。（電源をオフにした場合はレッスンの最初から中断部分までの操作を行なうことになります）

レッスンの内容

レッスンの内容は次のように操作別に分けられています。

- マウスを使う … ポインタおよび操作対象の移動
- メニューからコマンドを選ぶ … Macintoshに命令を与える
- ウインドウを操作する … ウインドウの開閉、およびウインドウのサイズと位置の変更
- アプリケーションを使う … 書類の作成、編集、および保存
- フォルダに作業内容を整理する … ファイルシステムの使用

Macintosh 用のアプリケーションで作成したものは全て書類として扱われます。ワープロソフトで作成した手紙、表計算ソフトのデータ、グラフィックスなども書類として扱います。

Macintoshでは、これだけの操作もわずか1時間足らずで習得できます。また、レッスン中はいつでも途中で休憩がとれます。ご自分のペースに合わせてレッスンをお進めください。

△重要

この章ではシステムディスクだけを使用します。したがって、まだ日本語は入力できません。日本語の入力は、次の2章および3章でシステムソフトウェアをハードディスクにインストールした後、初めて可能となります。ここでは、システムソフトウェアのインストールに備えてマウス操作に慣れておいてください。△

マウスを使う

ここでは次の操作について学びます。

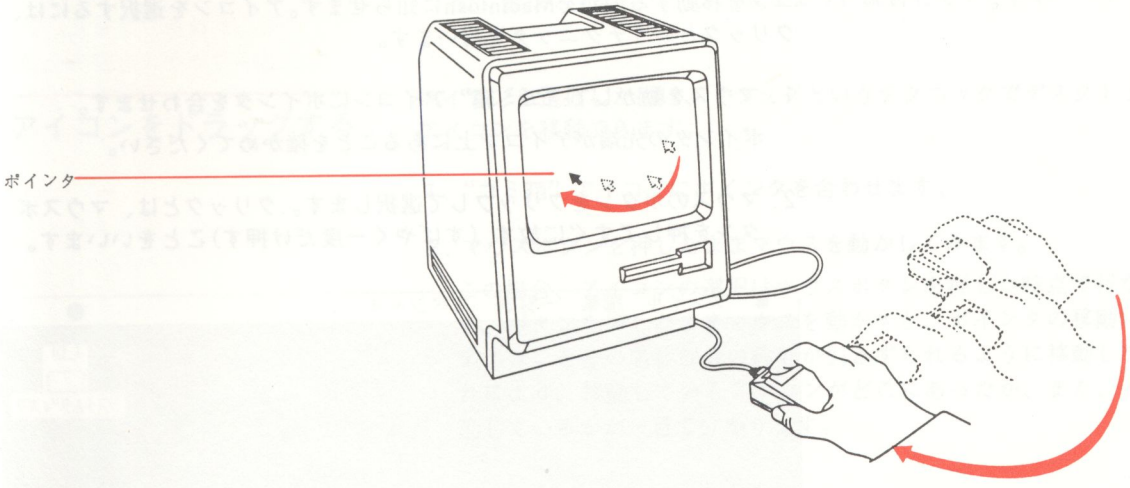
- ポインタを移動する
- アイコンを選択する
- アイコンをドラッグする

Macintoshはマウスの動きとマウスボタンの操作に即応します。アプリケーションの起動や書類の取り出しのほか、あらゆる操作がマウスおよびマウスボタンの操作で行なえます。

ポインタを移動する

1. スクリーンを見ながら、机の上でマウスを前後左右に滑らせてみます。ここでは、まだマウスのボタンは押さないようにします。

   マウスを動かすたびにポインタが同じように動きます。



■ 図1-7　ポインタのコントロール

マウスを持つときは、人差し指がマウスボタンの上（または近く）にくるようにします。また、マウスのケーブルが人差し指からまっすぐ伸びるようにした場合に最も操作性が高くなります。

2. スクリーンを見ながら、マウスを持ち上げて違う場所に降ろしてみます。

   マウスを持ち上げている間はポインタは全く動きません。

   マウスを机の端まで移動したり、机に置かれている何かのためにマウスを動かす余地がなくなった時には、いったんマウスを持ち上げてスペースのある場所に置きなおせます。

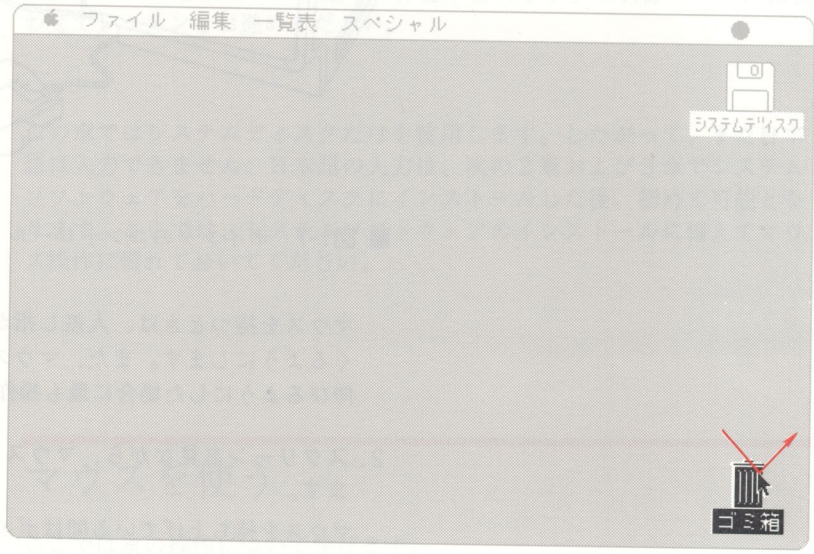
   マウスの操作に違和感を持たれた方でも、しばらく使用していただけば自然に操作できるようになります。

アイコンを選択する

デスクトップは使う人に合った形に整理しておけますが、この操作もマウスを使って行なうことになります。この段階ではデスクトップは整理を要するほどではありませんが、ハードディスクを使用するようになるとアイコンが多数表示され、デスクトップの整理が必要になってきます。アイコンを移動する場合、まず対象となるアイコンを選択し、どのアイコンを移動するのかをMacintoshに知らせます。アイコンを選択するには、クリックというテクニックを用います。

1. マウスを動かして“ゴミ箱”アイコンにポインタを合わせます。
   ポインタの先端がアイコン上にあることを確かめてください。

2. マウスのボタンをクリックして選択します。クリックとは、マウスボタンを押してすぐに放す（すばやく一度だけ押す）ことをいいます。



■ 図1-8　アイコンの選択

「選択する」という操作は、Macintoshにとって重要な意味を持っています。選択されたアイコンは黒く表示されます。この時、他に黒く表示されていたアイコンがあれば逆に白く表示されます。スクリーンで何かが黒く表示されていれば、それが選択された状態にあることを意味します。ここでは“システムディスク”アイコンは白く表示されていますから、選択されていないことになります。デスクトップ上の何かを作業の対象としたい時は必ずそれを選択し、何に対して作業をしたいかをMacintoshに伝えます。

3．“システムディスク”アイコンをクリックします。

今度は“システムディスク”アイコンが選択されました。“ゴミ箱”の方は、もはや選択されていません。

マウスボタンを放す時は、マウスを動かさないようにします。マウスを全く動かさずにクリックできるように練習してください。

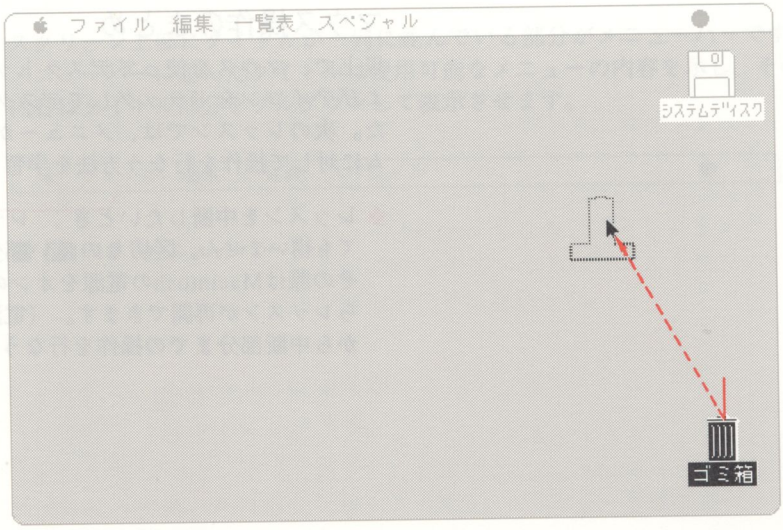
アイコンをドラッグする

アイコンを選択した後は、ドラッグというテクニックでデスクトップ上のアイコンを移動できます。

1．“ゴミ箱”アイコンにポインタを合わせます。

2．マウスボタンを押したままマウスを動かしてみます。

この場合、アイコンの選択はマウスボタンを押した時点で行なわれます。ボタンを押したままマウスを動かすと、ポインタの移動につれてアイコンとその名称部分の輪郭が引きずられるように移動します。これにより、移動しているアイコンがどこにあったか、また、どこへ移動しているかが一目で分かります。



■ 図1-9　アイコンのドラッグ

3．マウスボタンを放します。

アイコン自体がマウスボタンを放した位置に移動します。

4．今度は、“システムディスク”アイコンをドラッグします。

アイコンをスクリーン左端までドラッグしてみてください。スクリーンの端までドラッグしてもアイコンが消え去ることはありません。また、マウスを動かすスペースが足りない時は途中でマウスを持ち上げて置きなおした後、ドラッグを再開できます。（ただし、途中でマウスボタンを放してしまうと、その時点でドラッグを終了したことになります）

5．“ゴミ箱”アイコンを選択し、ポインタがスクリーン上部のメニューバーに重なるまでドラッグした後、マウスボタンを放します。

この場合、“ゴミ箱”は選択を行なった位置から移動しません。メニューバー部分へポインタを移動させてマウスボタンを放すと、ドラッグ操作を途中でキャンセルできます。

自由にアイコンがドラッグできるまで練習してください。

マウス操作のまとめ

以上で、マウスを使ってデスクトップ上のアイコンを選択する方法、およびアイコンをドラッグしてデスクトップを整理する方法を習得しました。次のレッスンでは、メニューからコマンドを選び、選択したアイテムに対して操作を行なう方法を学習します。

❖ **レッスンを中断したいとき：** レッスンをどこかで中断し、後で再開しても構いません。区切りの良い部分で中断することが望ましいのですが、その際はMacintoshの電源をオンのままにしておけば、中断した部分からレッスンが再開できます。（電源をオフにした場合、レッスンの最初から中断部分までの操作を行なうことになります）

メニューからコマンドを選ぶ

ここでは次の操作について学びます。

- メニューをプルダウンする
- コマンドを選ぶ

Macintoshで何か作業をする場合、2つのことを指示する必要があります。すなわち、作業対象の選択、および作業内容の指示です。作業対象をMacintoshに知らせるには、前のレッスンで練習した方法でアイコンの選択を行ないます。また、選択したアイコンに対する作業内容は、デスクトップのメニューからコマンドを選ぶことによってMacintoshに伝えることになります。

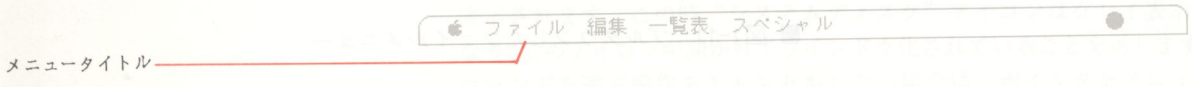
作業対象を選択する

1. “システムディスク” アイコンにポインタを合わせます。
2. マウスボタンをクリックします。

   ここまでは前のレッスンで行なった操作と同じです。メニューのコマンドは、選択されたアイコンに対して働きます。

メニューをプルダウンする

スクリーン上部にタイトルが一列に並んでいる部分がメニューバーです。メニューバーに並んだタイトルは使用可能なメニューの内容を示し、その内容はタイトル部分をプルダウンして表示させます。

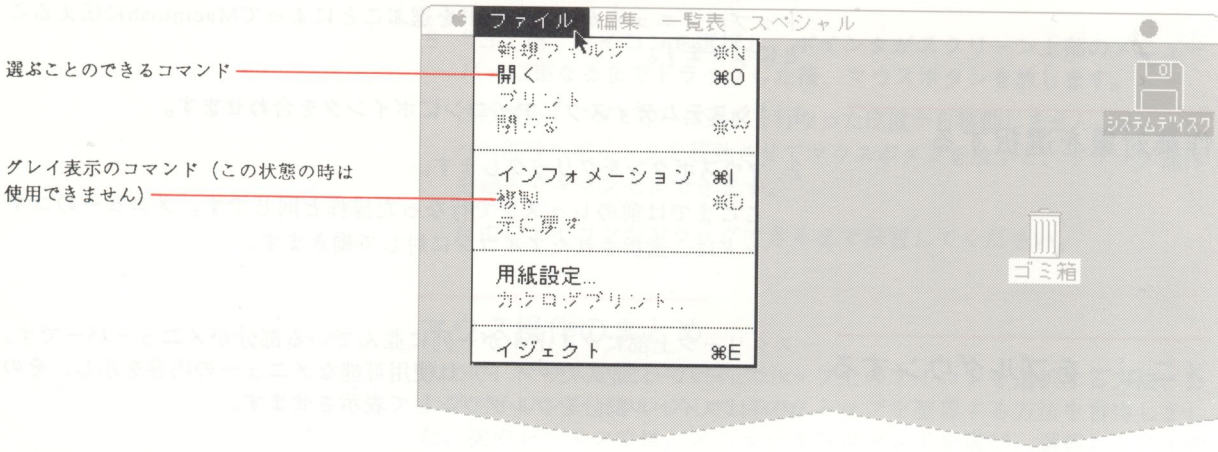


■ 図1-10 メニューバー

1. メニューバー内のタイトルのうち、“ファイル”にポインタを合わせます。

2. マウスボタンを押したままにします。プルダウンしたメニューを見終ったらボタンを放してください。

   メニュータイトルのどれかにポインタを合わせてマウスボタンを押したままにすると、そのタイトルが黒く表示され、その下にメニューが現れます。（Macintoshでは、このようにして呼び出すメニューを“プルダウンメニュー”といいます）



■ 図1-11　プルダウンしたファイルメニュー

プルダウンしたメニューには、選択対象に対して有効なコマンドが並んでいます。ファイルメニューにはアイコンを開くためのコマンド（“開く”）が含まれています。

メニュー内のコマンドのうち、グレイ表示となっているものは使用できません（図1-11の“プリント”など）。現段階の処理に関係のないコマンドは使用する必要がないからです。

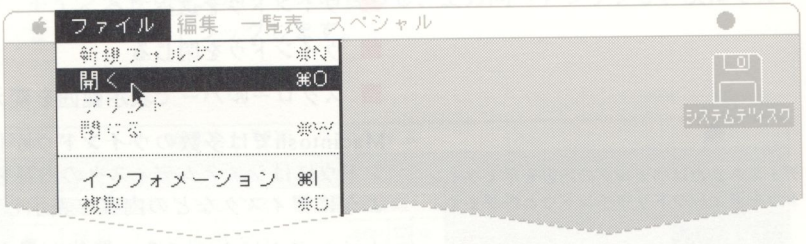
メニューはマウスボタンを押している間だけ表示されます。

メニューからコマンドを選ぶ

メニューからコマンドを選ぶ時は、アイコンを移動する時と同様にドラッグを用います。

1. メニューバー内のタイトルのうち、“ファイル”に再びポインタを合わせます。

2. 今度はマウスボタンを押したままポインタを“開く”の部分まで持ってきて、ボタンを放します。



■ 図1-12　コマンドを選ぶ

メニュー内でドラッグを行なうと、使用可能なコマンドが1つずつ順に黒く表示されます。（グレイ表示のコマンドは変化しません）

“開く”コマンドが黒く表示されている状態でマウスボタンを放すと、選択しておいたアイコンがズームアップされ、**ウインドウ**として表示されます。この時“システムディスク”アイコンはグレイ表示となり、このアイコンが開かれてウインドウ化されていることを示します。コマンドを選ぶ操作をキャンセルしたい場合は、ポインタをメニューの枠外へ移動させます。黒く表示されているコマンドの上以外でマウスボタンを放せば、何も選ばないことになります。

メニュー操作のまとめ

以上で、デスクトップ上のアイテム（“システムディスク”アイコン）を選択し、次にコマンド（“開く”）を選びました。Macintosh上での作業の際は、いつもこの「選択」および「選ぶ」からなる2段階の操作を行なうことになります。

❖ **レッスンを中断したいとき：** レッスンをどこかで中断し、後で再開しても構いません。区切りの良い部分で中断することが望ましいのですが、その際はMacintoshの電源をオンのままにしておけば、中断した部分からレッスンが再開できます。（電源をオフにした場合、レッスンの最初から中断部分までの操作を行なうことになります）

ウインドウを操作する

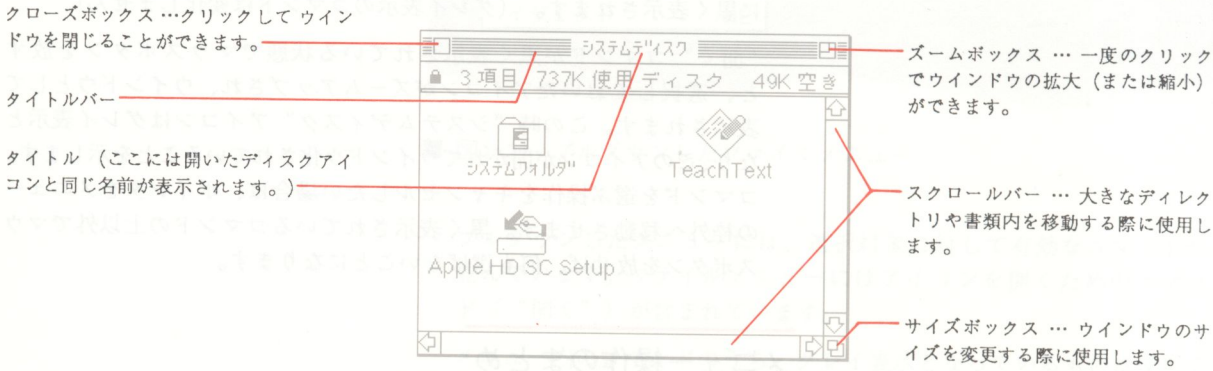
ここでは次の操作について学びます

- ウインドウのサイズを変更する
- ウインドウを移動する
- 複数のウインドウを重ねて表示する
- ウインドウを選択する
- ウインドウを閉じる
- スクロールバーで表示範囲を変える

Macintoshでは多数のウインドウが使用されます。前ページで開いたウインドウにはシステムディスクの内容を表すアイコンが表示されました。このようにディスクなどの内容を表示したものを**ディレクトリ**と呼びます。

ディスクまたはフォルダの内容を示すウインドウをディレクドリウインドウと呼びます。

ウインドウによってその機能が異なることがあります。操作の流れによりウインドウが作業を行なう場所となったり、単にメッセージを表示する場所となったりします。しかし、ほとんどのウインドウには共通部分があります。それらを図1-13に示します。



■ 図1-13　ディスクアイコンから開いたディレクトリウインドウ

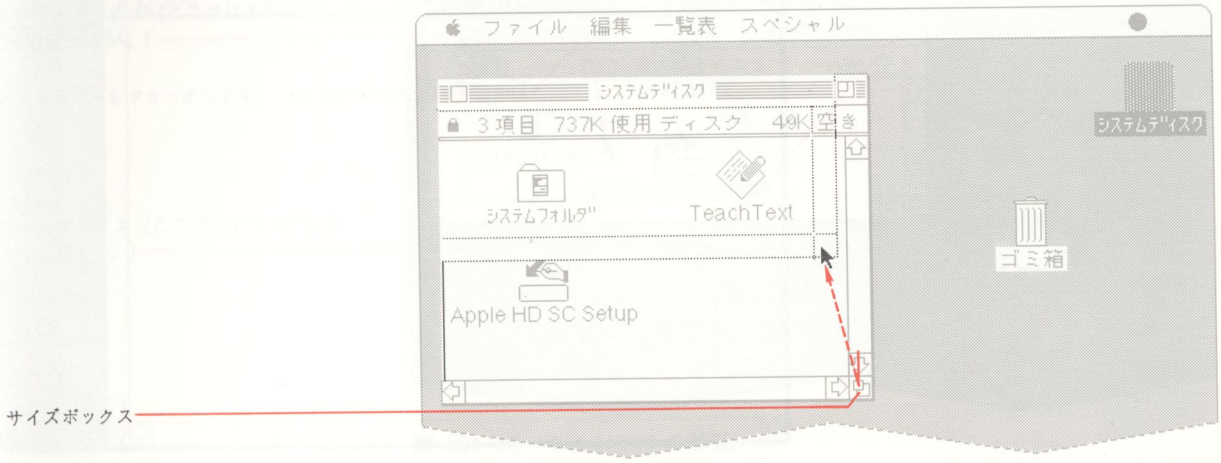
ウインドウの機能については次のページから詳しく解説します。

ウインドウのサイズを変更する

デスクトップで書類を扱う際、ウインドウを大きく広げておけばその中に何があるかを見ることができるため大変便利です。しかし、小さなウインドウもそれなりに使いやすい場合があります。小さなウインドウはデスクトップ上を移動させることができるほか、同時に2つのウインドウを表示させておくこともできます。

ウインドウ右下隅にあるサイズボックスにより、ウインドウのサイズを自由に変更できます。

1. ポインタをサイズボックスに合わせ、上方向へドラッグし、次にそのまま左方向へドラッグします。



■ 図1-14 サイズボックスの使い方

2. マウスボタンを放します。

ドラッグにつれて、破線状のウインドウの輪郭が移動します。左方向へドラッグすると輪郭の幅がだんだん狭くなり、また、上方向へドラッグすると輪郭が上へ縮んでゆきます。もちろん、左上方向へ斜めにドラッグしても構いません。ウインドウの輪郭は、あるところまでしか小さくなりません。ウインドウのサイズは、マウスボタンを放した時点で変化します。

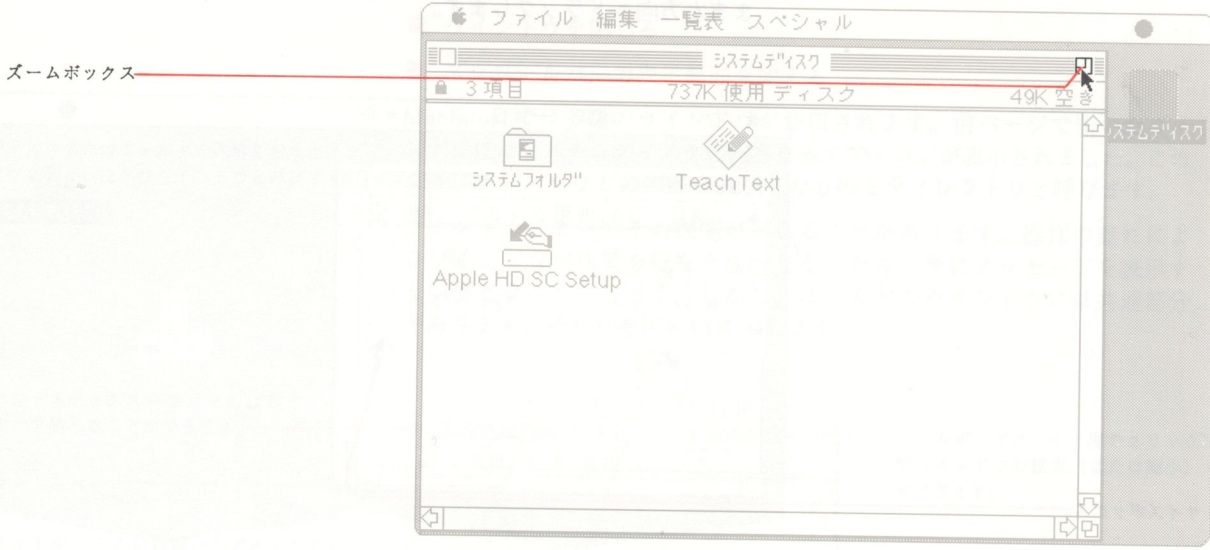
ウインドウのサイズを変更しても、その内容には全く影響がありません。ただ、内容の表示範囲が変化するだけです。

ウインドウをズームする

ウインドウのサイズはズームボックスを用いても変更できます。この場合はドラッグを全く必要としないため、サイズボックスよりも便利な場合があります。ズームボックスでは一度のクリックでウインドウのサイズを変更できますが、サイズや形の微調整はできません。

1. ポインタをズームボックスに合わせ、クリックします。

   ウインドウは、ほぼスクリーン全体に広がります。



■ 図1-15　ウインドウのズーム

2. もう一度ズームボックスをクリックします。

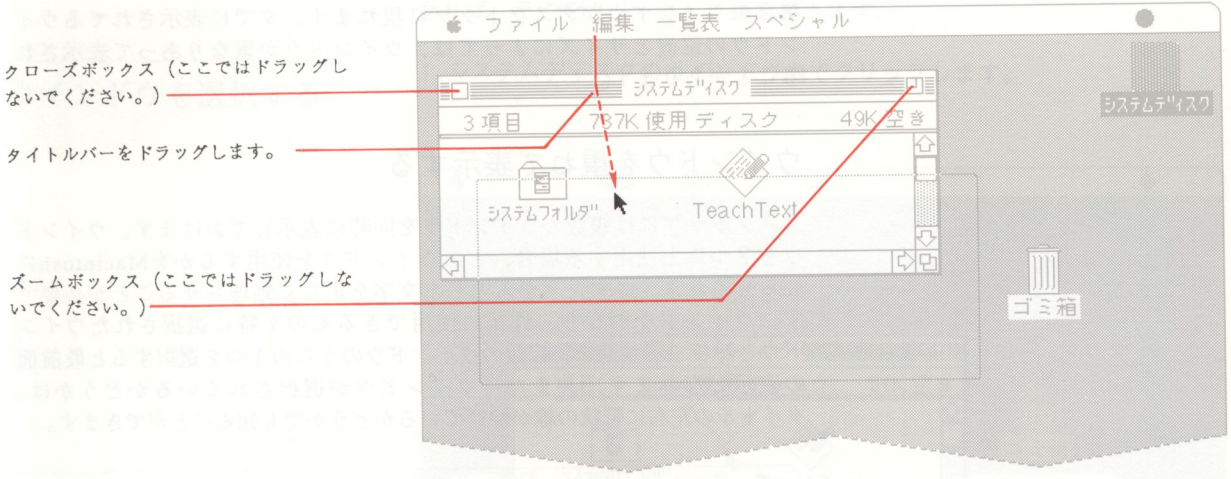
   今度はウインドウがもとのサイズに戻ります。ズームボックスを使用すると、一度のクリックでスクリーン全体に作業内容を表示できます。また、もう一度クリックするだけでウインドウをもとの状態に戻せます。

ここで、サイズボックスをドラッグしてシステムディスクのウインドウのサイズをいろいろと変化させてみてください。サイズボックスを右下方向へドラッグすると、ウインドウを広げることができます。また、ズームボックスでもウインドウの大きさを変化させてみてください。ズームボックスをクリックするとウインドウは常にズーム前の状態に戻ります。

ウインドウを移動する

アイコンを移動するのと同様に、ウインドウもデスクトップ上を自由に移動できます。ウインドウを移動するにはそのタイトルバー部分をドラッグします。このとき、ポインタはタイトルバーの上であればどこに置いても構いません。ただし、ポインタをズームボックスや**クローズボックス**（タイトルバーの左端）に合わせると、ウインドウの移動ではなくズームしたり閉じたりすることになります。

1. ポインタをシステムディスクのウインドウのタイトルバー上のどこかに合わせます。（ただし、ズームボックスやクローズボックスには合わせないでください）



■ 図1-16　ウインドウの移動

2. マウスボタンを押したままでマウスを動かし、システムディスクのウインドウをドラッグします。

3. マウスボタンを放します。

   アイコンを移動する場合と同様、破線状のウインドウの輪郭がドラッグの動きについてきます。マウスボタンを放すとウインドウは輪郭のある位置に移動します。ドラッグの途中でマウスボタンを放しても、再びそこから同じ方法でウインドウの移動を再開できます。

   移動を途中でキャンセルしたい時は、そのままポインタをメニューバーまで移動させてマウスボタンを放します。また、アイコンと同様にウインドウが移動できる範囲もデスクトップ内に限られています。長いドラッグを行なってもウインドウがスクリーンから消え去ることはありません。ただし、ウインドウの一部分だけをデスクトップに表示させておくことはできます。

以上の操作内容を練習してください。ウインドウのサイズ変更および移動が自由にできるようになったら、次のレッスンに進んでください。

他のアイコンからウインドウを開く

いままでに学習した方法で、システムディスクのウインドウをスクリーンの脇の方へ移動します。次に、ウインドウを縮小し“ゴミ箱”アイコンが見えるようにしておきます。

1. “ゴミ箱”アイコンを選択します。

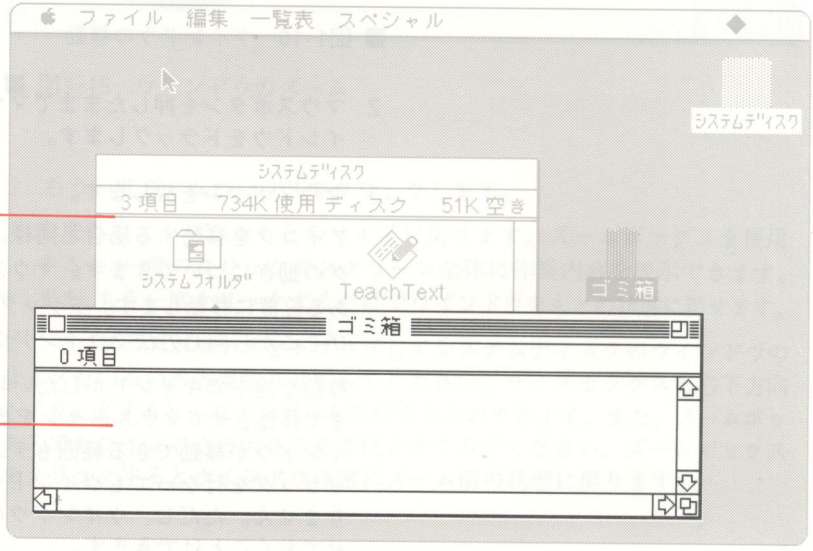
2. ファイルメニューから“開く”を選びます。

   ポインタをファイルメニューのタイトルのうち、“ファイル”に合わせてマウスボタンを押し、そのままポインタを“開く”まで移動させてボタンを放します。

第2のウインドウがデスクトップに現れます。すでに表示されてるウインドウの位置とサイズによっては、ウインドウが重なりあって表示されることがあります。

ウインドウを重ねて表示する

デスクトップには複数のウインドウを同時に表示しておけます。ウインドウを2つ以上使用する場合、どのウインドウを使用するかをMacintoshに知らせておき、コマンドや入力した文字を正しく処理させることが必要です。ウインドウのうち、作業に使用できるものを特に**選択されたウインドウ**と呼びます（通常、複数のウインドウのうちの1つを選択すると最前面の表示となります）。また、ウインドウが選択されているかどうかは、タイトルの左右に帯状の線が伸びているかどうかでも知ることができます。



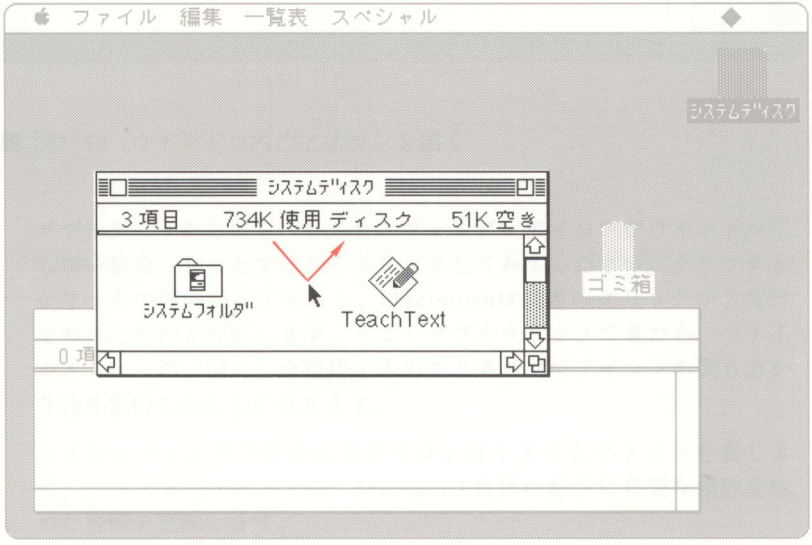
■ 図1-17 重なり合ったウインドウ

“ゴミ箱”アイコンを開くと、その内容（現在は空）は自動的に選択された状態でウインドウ表示されます。一方、システムディスクのウインドウは、この段階では選択されていません。ウインドウ内で作業を行なうには、そのウインドウを選択する必要があります。この操作を行なうには、システムディスクのウインドウ内のどこかをクリックします。

システムディスクのウインドウを縮小した後に“ゴミ箱”ウインドウを開いた場合、システムディスクのウインドウ全体が“ゴミ箱”ウインドウの裏に隠れてしまうことがあります。その際には、今までに習得した操作で“ゴミ箱”ウインドウのサイズ変更や移動を行ない、システムディスクのウインドウが見えるようにしてください。ウインドウの一部でも見える状態になれば、そこをクリックして選択できます。

ウインドウを選択する

1.システムディスクのウインドウ内でクリックします。



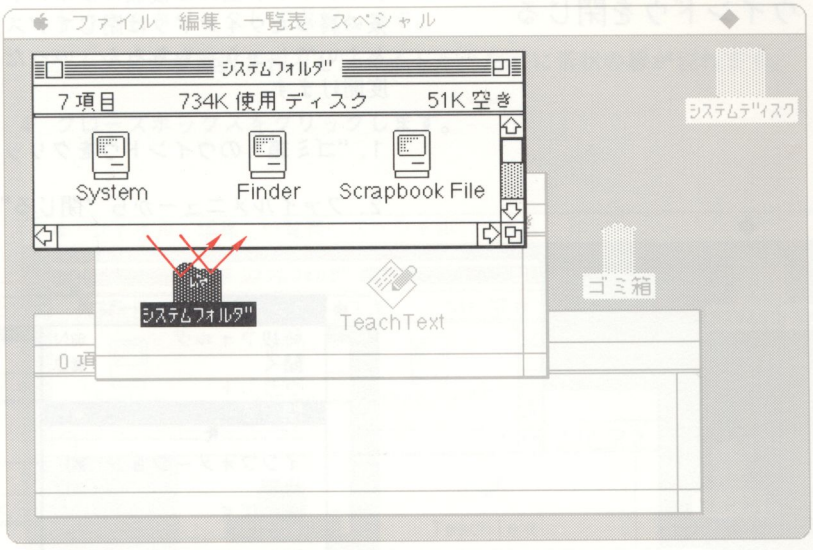
■ 図1-18 ウインドウの選択

デスクトップの最上層に出てきたウインドウは、そのタイトルバーが黒く表示されると同時に、スクロールバーおよびサイズボックスが現れてウインドウが選択されたことがわかります。選択されていないウインドウで作業を行ないたい場合、まずそのウインドウ内でクリックを行ない選択された状態にします。また、ウインドウの全体がデスクトップに表示されていない場合、スクロールバーやサイズボックスが見えるまでウインドウをドラッグしなければならないことがあります。

Macintoshは、いままで実際に行われた操作に忠実にしたがっています。このため、実際のデスクトップのようすが上の図と異なるかもしれません。ウインドウのサイズおよび位置は自由に設定できます。

他のアイコンを開く

デスクトップ上のアイコンを開いたのと同様に、ディレクトリウインドウ内のアイコンも開いてウインドウ化できます。今までは、アイコンを選択してファイルメニューから“開く”を選ぶ方法を使用してきました。ここでは、同じ操作に**ダブルクリック**というテクニックを用います。このテクニックは、メニューを経由しないすばやい操作ができるため、“ショートカット”と呼ばれます。このショートカットを用いてシステムディスクのウインドウ内にある“システムフォルダ”というアイコンを開いてみましょう。（“システムフォルダ”アイコンが“ゴミ箱”ウインドウに隠れている場合、ここで“ゴミ箱”ウインドウを縮小しておいてください。その後システムディスクのウインドウを選択し、“システムフォルダ”アイコンが見えるようにウインドウを広げておきます）



■ 図1-19 ウインドウ内のアイコンを開く

ダブルクリックしても“システムフォルダ”アイコンがウインドウ化しない場合、もっとすばやくクリックしてみてください。クリックとクリックの間隔が長すぎると、Macintoshは通常のクリックが2度行なわれたものと判断します。うまくダブルクリックできたら、ファイルメニューの“開く”を使用する方法とあわせてアイコンの開き方を2通り習得したことになります。

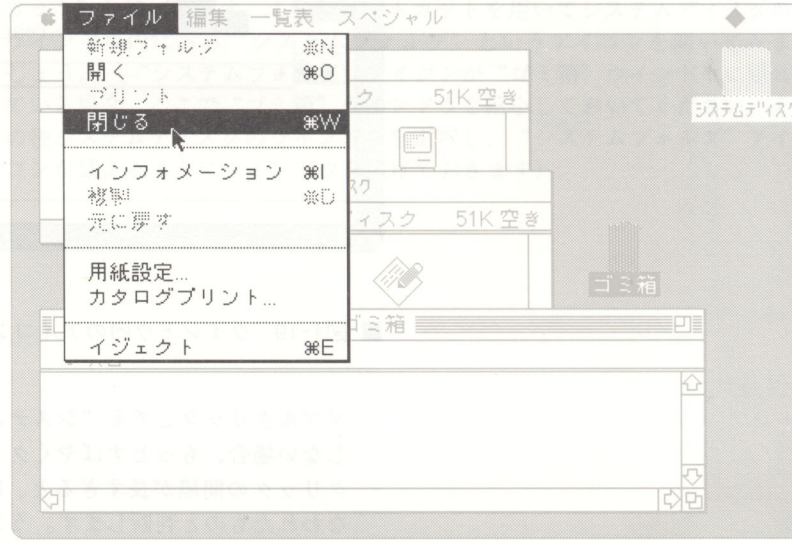
システムフォルダ内にある各アイコンはシステムファイルを表します。システムファイルとは、Macintosh自体の動作に必要な情報を収めた書類を意味します。

ウインドウを閉じる

デスクトップ上には複数のウインドウを同時に表示させておけますが、作業の終ったウインドウは閉じてデスクトップを使いやすい状態にしておくとよいでしょう。もちろん、いったん閉じたウインドウは必要に応じて再度開けます。

1. “ゴミ箱”のウインドウをクリックして選択します。

2. ファイルメニューから“閉じる”を選びます。



■ 図1-20　ファイルメニューから“閉じる”を選ぶ

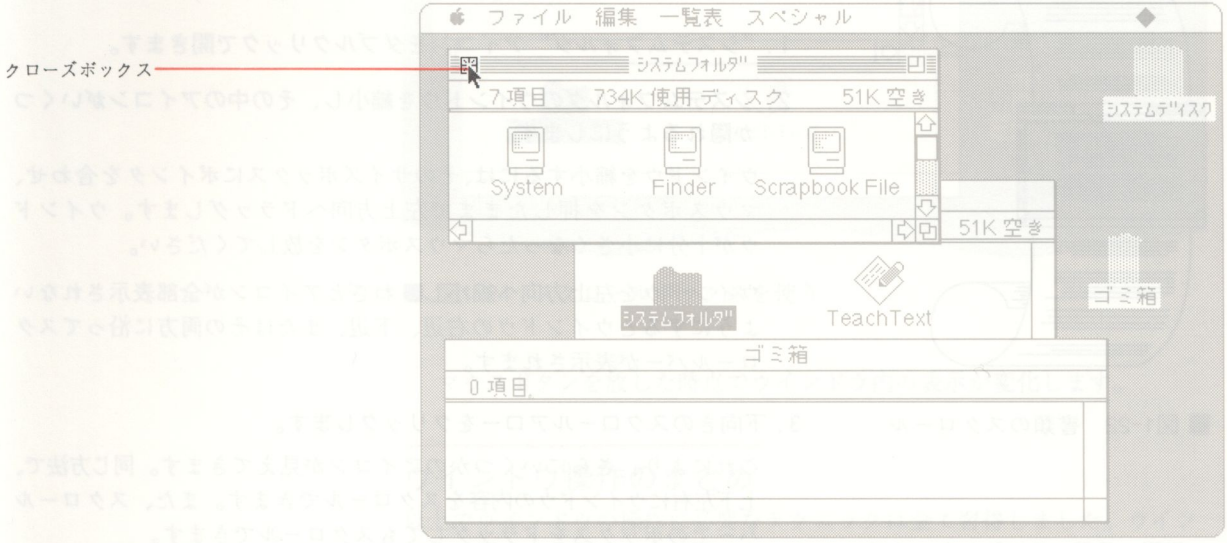
ウインドウが縮小しアイコンに戻ります。ファイルメニューから“閉じる”を選ぶと、常に選択された（最上層にある）ウインドウが閉じ、そのすぐ下の層のウインドウが選択された状態となります。

今度は、ショートカットを用いてシステムフォルダのウインドウを閉じてみましょう。タイトルバー左端のクローズボックスを一度クリックすると選択されたウインドウを閉じることができます。

3. システムフォルダのウインドウがまだ選択されていなければ、ウインドウ内をクリックして選択します。

ウインドウが選択されると、タイトルの左右に帯状の線が現れます。

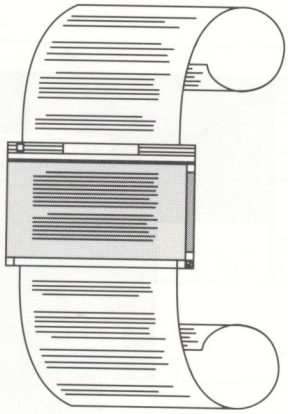
4. クローズボックスをクリックします。



■ 図1-21 クローズボックスを使う

これはファイルメニューから“閉じる”を選ぶのと同じ操作です。

スクロールバーで表示範囲を変更する



■ 図1-22　書類のスクロール

ウインドウのサイズを最大にしても、その中の書類やディレクトリ全体を一度に見ることのできない場合があります。ディレクトリや書類が長くてその内容を１つのウインドウでは表示しきれない場合、表示はウインドウに収まる量ごとに行なわれます。

選択されたウインドウにはスクロールバーが表示され、ウインドウの内容を前後左右に動かせます。これにより、ウインドウに表示されていない部分を見ることができます。

1. “システムフォルダ”アイコンをダブルクリックで開きます。

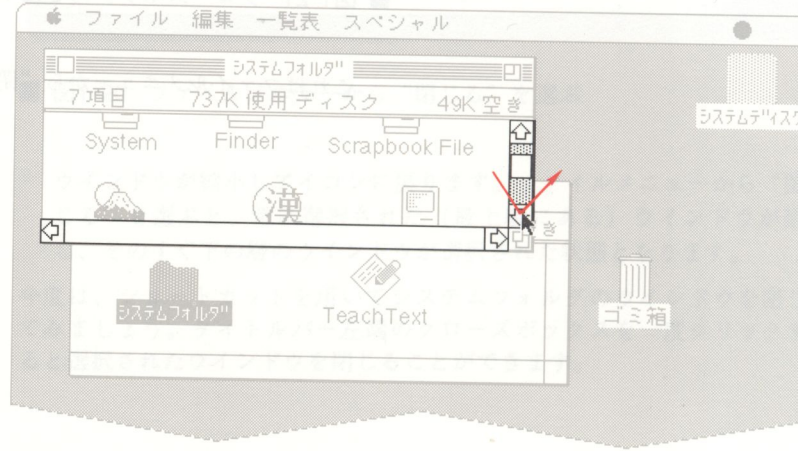
2. システムフォルダのウインドウを縮小し、その中のアイコンがいくつか隠れるようにします。

   ウインドウを縮小するには、そのサイズボックスにポインタを合わせ、マウスボタンを押したままで左上方向へドラッグします。ウインドウが十分に小さくなったらマウスボタンを放してください。

   ウインドウを左上方向へ縮小し、わざとアイコンが全部表示されないようにするとウインドウの右辺、下辺、またはその両方に沿ってスクロールバーが表示されます。

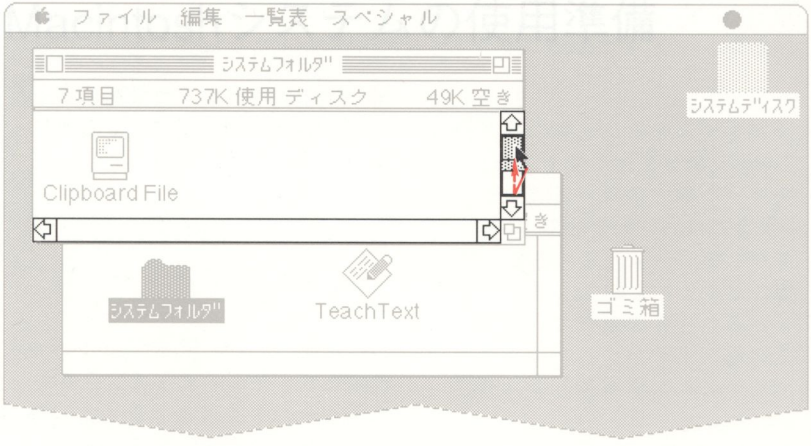
3. 下向きのスクロールアローをクリックします。

   これにより、さらにいくつかのアイコンが見えてきます。同じ方法で、上下左右にウインドウの内容をスクロールできます。また、スクロールバー上のボックスをドラッグしてもスクロールできます。



■ 図1-23　スクロールアローを使う

4．縦のスクロールバー上のボックスをいちばん上までドラッグします。



■ 図1-24　スクロールボックスを使う

マウスボタンを放した時点でウインドウ内の表示が変化します。

ウインドウ操作のまとめ

以上でウインドウの操作に必要なテクニックは全て習得しました。ウインドウを開いたり閉じたりするほか、ウインドウのサイズ変更、移動、選択、そして表示内容のスクロールをマウス１つで自在に行なえるはずです。

これで、基本的なMacintoshの操作は全て習得したことになります。Macintoshで使用するアプリケーションの種類にかかわらず、ここで学んだ操作が全ての作業の基本となります。つまり、操作の対象となるものをデスクトップ上で選択し、次にコマンドを選ぶという操作を一貫して使用することになります。アプリケーションでのウインドウの開閉、サイズ変更、および移動にも、ここで学んだ操作がそのまま役立ちます。

△重要　Macintoshシステムを本格的に使用するには、ハードディスクの使用準備を行なうことが必要です。使用準備には、ハードディスクのイニシャライズに加えて今までレッスンで使用してきたシステムソフトウェアをハードディスクにインストールすることが含まれます。これにはこの章で習得した基本操作が必要になります。

ここで、この後の第２章および第３章へ進み、ハードディスクの使用準備およびシステムソフトウェアのインストールを行なってください。ここで休憩しても構いませんが、Macintoshの電源をオンのままにしておけば、そのまま第２章の使用準備へ進めます。△

第2章

Macintoshシステムの使用準備

この章では、Macintoshを本格的に使用するため未使用のSCSIハードディスクをイニシャライズします（SCSIとはSmall Computer System Interfaceの略で、通常“スカジー”と発音されます）。Macintoshの使用経験の有無にかかわらず、この章の指示にしたがってハードディスクの使用準備を行なってください。

ハードディスクについては第11章でも解説されています。この章で行なうシステムの使用準備が整った後は、第11章も参考にしてシステムをフルに活用してください。

この章について

この章では次の内容について解説します。

■ SCSIハードディスクの使用準備

ハードディスクを使用すると、より快適で効率的な作業が可能となります。これは、ハードディスクの高速性により情報の保存や取り出しの待ち時間が減少されるためです。また、ハードディスクにはフロッピーディスクとは比較にならないほど多くの情報を保存しておけます。（20MBのハードディスクの容量は800Kフロッピーディスク約25枚分に相当します）

ハードディスクでの作業はフロッピーディスクの場合と何ら変わるところはありません。アイコンやウインドウなどについても第1章で習得した操作をそのまま使用できます。構造上の大きな違いはディスクのイジェクトにありますが、作業上はハードディスクをイジェクト不可能な高速／大容量のフロッピーディスクと見なしても構いません。

新しいハードディスクは使用準備（イニシャライズ）を行なった後、Macintoshシステムの起動ディスクとしておくことが必要です（起動ディスクとは、Macintoshの電源をオンにする度に起動情報が読み出されるディスクを指します）。ハードディスクのイニシャライズ後は、システムソフトウェアをインストールすることになります。

SCSIハードディスクの使用準備

新しいハードディスクはイニシャライズを行なうことにより、はじめてシステムソフトウェアをインストールし、情報を保存できるようになります。Macintoshの操作に慣れた方も必ずこの章をお読みください。

△重要　この段階でハードディスクのイニシャライズが済んでいるかどうかを確認してください。ハードディスクがイニシャライズされている場合、すでに何か情報が保存されているかも知れません。使用可能な状態のハードディスクを再度イニシャライズすると、そこに保存されている情報は全て失われます。

ハードディスクのイニシャライズ状態を調べるには、システムディスクをフロッピードライブに挿入し、電源をオンにします（すでにMacintoshの電源がオンになっている場合、スペシャルメニューから“終了”を選んだ後、システムディスクを挿入し、再度電源をオンにします。Macintosh PlusおよびMacintosh SEファミリの場合、スクリーンの“リスタート”と表示された部分をクリックします。Macintosh IIファミリの場合はキーボードのパワーオンキーを押します）。この後表示されるデスクトップにハードディスクのアイコンがあれば、イニシャライズが完了していることになります。その場合も、必要に応じて再度イニシャライズできます。△

❖ 外部ハードディスクを使用する場合：外部SCSIハードディスクの場合にも同様の使用準備が必要です。アップル社製の外部SCSIハードディスクであれば、この章で解説する方法で使用準備を行なえます。アップル社以外のハードディスクを使用される場合、そのハードディスクに付属のマニュアルの指示にしたがってください。

SCSIハードディスクのイニシャライズ

1. Macintoshの電源がオンになっている場合、ファイルメニューから“終了”を選んで電源をオフにします。

   フロッピーディスクが挿入されていれば、ここで自動的にイジェクトされます。

   Macintosh PlusまたはMacintosh SEファミリの場合、スクリーンの表示がいったん消えた後、“リスタート”を含むメッセージが現れます。

   Macintosh IIファミリの場合、完全に電源が切れます。

2. システムディスクをフロッピードライブに挿入し、Macintoshを再起動します。

   Macintosh PlusまたはMacintosh SEの場合、スクリーンの“リスタート”部分にポインタを合わせてクリックします。

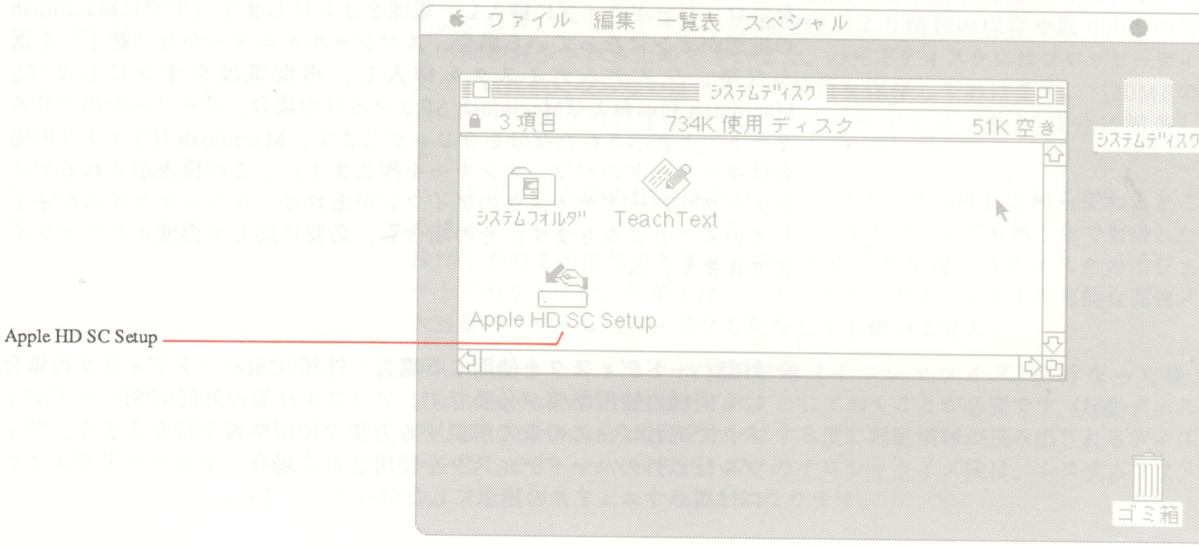
   Macintosh IIファミリの機種の場合、キーボード上のパワーオンキーを押します。

   しばらくするとデスクトップが表示され、“システムディスク”アイコンが現れます。

3．“システムディスク”アイコンを開きます。

アイコンを選択した後、ファイルメニューから“開く”を選びます。（アイコンをダブルクリックして開くこともできます）

システムディスクのウインドウ内に、“Apple HD SC Setup”アイコンがあることを確認します。

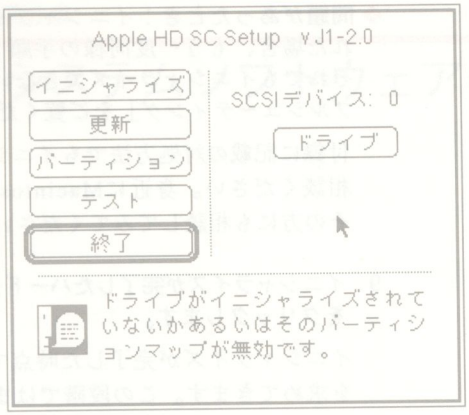


■ 図2-1　システムディスクのディレクトリウインドウ

4．“Apple HD SC Setup”のアイコンを開きます。

5．スクリーンに現れるメッセージを確認します。

ウインドウ下部のメッセージは、ハードディスクの使用準備がまだ済んでいないことを示します。



■ 図2-2　Apple HD SC Setupのメッセージ

6．“SCSIデバイス”のすぐ右側に表示の数字（SCSI ID番号）を確認します。

△重要　SCSI ID番号は0から6までのいずれかが表示されます。ハードディスクが1台しかない場合、0が表示されます。複数のハードディスクがある場合には“ドライブ”の部分をクリックしてイニシャライズしたいハードディスクのSCSI ID番号を表示させてください。クリックしても目的の番号が表示されない場合、SCSIターミネータおよびケーブルが正しく接続されているかどうかをご確認ください。詳しくは付属の「オーナーズガイド」をご覧ください。△

7．スクリーンの“イニシャライズ”をクリックします。

イニシャライズを開始するとハードディスクに保存された情報は全て失われます。このため、Macintoshはここでイニシャライズ開始の確認を求めてきます。

8．スクリーンの“ＯＫ”をクリックします。

これでハードディスクのイニシャライズが開始されました。イニシャライズ中には進行状況を示すメッセージが表示されます。イニシャライズ完了までの時間はハードディスクの容量などにより異なりますが、20MBのハードディスクでは5分ほど要します。

イニシャライズの完了もメッセージにより知ることができます。

❖ **問題があったとき**：イニシャライズの失敗を知らせるメッセージが現れた場合、もう一度同様の手順でイニシャライズを試みてください。それでもイニシャライズできない時は、このマニュアルの付録「トラブルシューティング」をご覧ください。

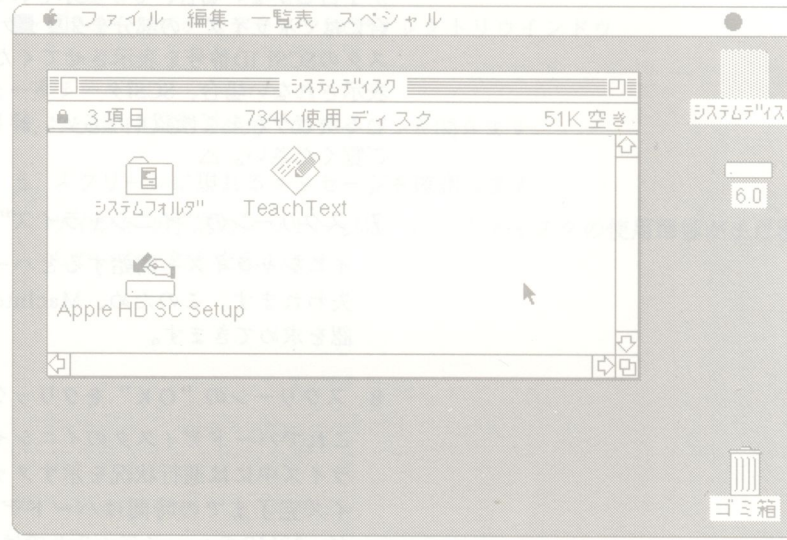
付録に記載の対処方法でもイニシャライズできない場合は販売店にご相談ください。身近にMacintoshの使用経験者がいらっしゃる場合、その方にも相談してみてください。

9. **イニシャライズが完了したハードディスクに6.0の名称を付け、“OK”をクリックします。**

イニシャライズが完了した時点でMacintoshはハードディスクの名称を求めてきます。この段階ではまだ日本語を入力する準備ができていませんので、とりあえず6.0とタイプしておきます。ここで付けた名称は後で自由に変更できます。

10. **スクリーンの“終了”をクリックします。**

これで、スクリーンはデスクトップの表示に戻ります。イニシャライズしたハードディスクのアイコンがデスクトップ右上に表示されていることを確認します。



■ 図2-3　ハードディスク使用準備の終了

第3章

システムソフトウェアのインストール

この章では、イニシャライズの完了したハードディスクにシステムソフトウェアをインストールし、起動ディスク化する方法を解説します。

この章について

イニシャライズが完了したばかりのハードディスクを起動ディスクにするには、システムソフトウェアのインストールが必要です。この章では、付属のユーティリティ、Installerを使用し、Macintoshの用途に応じた構成でシステムソフトウェアをインストールします。

旧システムソフトウェアを更新する場合

従来のシステムソフトウェアがインストールされたハードディスクをお持ちの場合、システムフォルダごとバックアップを行い、そのシステムフォルダを“ゴミ箱”へドラッグした上で以下の操作を行ってください。

❖ 注意：ユーザ辞書ファイルのコピーを忘れずに取っておいてください。

簡易インストール

Installer（インストーラ）は、システムの動作に必要なソフトウェアファイルを自動的に起動ディスクへコピーします。Installerは、フォント、デスクアクセサリ、サウンドリソースなどを起動ディスク上のSystemというシステムファイルへコピーします。

Installerをご使用になる前に、付属のディスクのバックアップを準備してください。

Installerは次の手順でご使用ください。

1. すでにMacintoshに電源が投入されている場合、スペシャルメニューから“終了”を選びます。

2. Macintoshのフロッピードライブに「インストーラディスク」をセットします。

   ディスクはラベル面を上にし、シャッタの付いた側から先に挿入してください。

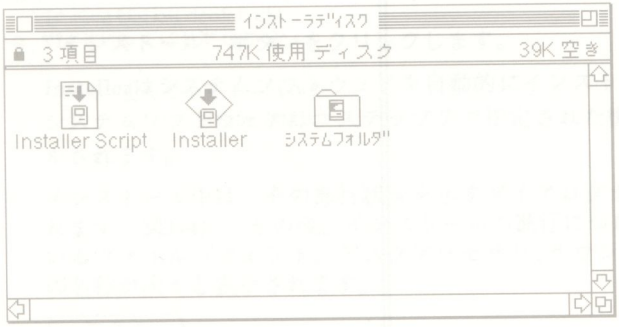
3. Macintoshを再起動させます。

   しばらくすると、デスクトップが表示されます。

4. インストーラディスクのアイコンを選択して開きます。

アイコンはクリックすれば選択されます。アイコンを選択した状態でファイルメニューから“開く”を選べば、そのアイコンが開きます。(かわりに、アイコンをダブルクリックするだけでも同じ操作ができます)

インストーラディスクの内容がウインドウ表示されます。

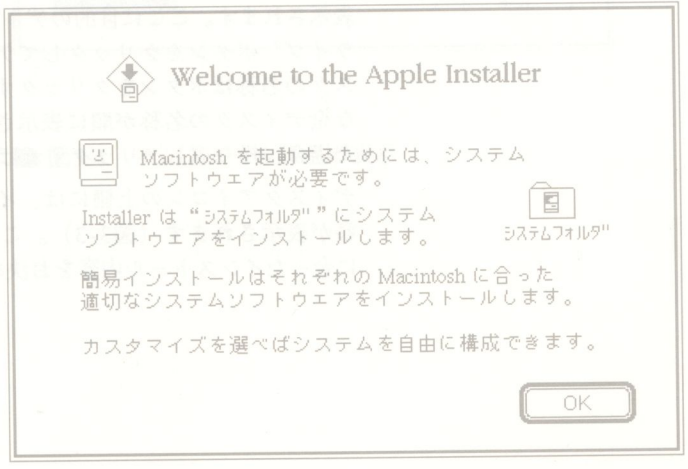


■ 図3-1　インストーラディスクの内容

5. Installerのアイコンを選択して開きます。

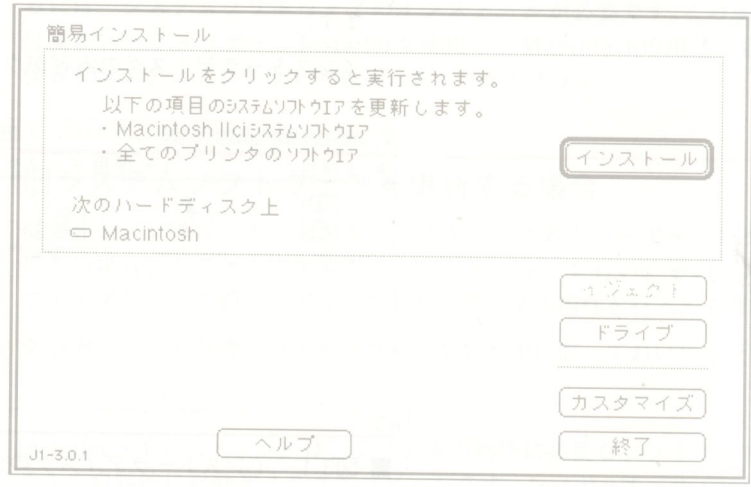
アイコンはクリックすれば選択されます。アイコンを選択した状態でファイルメニューから“開く”を選べば、そのアイコンが開きます。(かわりに、アイコンをダブルクリックするだけでも同じ操作ができます)

まもなくInstallerの起動メッセージが表示されます。



■ 図3-2　Installerの起動メッセージ

6. 起動メッセージをお読みになった後、“OK”ボタンをクリックします。
簡易インストール用のダイアログボックスが現れます。



■ 図3-3　簡易インストールのダイアログボックス

7. システムソフトウェアのインストール先となるディスクを選択します。

ディスクアイコンの右側には、上図のように、現在選択されている（つまり、これから行なうインストールの対象となる）ディスクの名称が表示されます。ここに目的のディスク名が表示されていない場合、“ドライブ”ボタンをクリックしてディスクを切り替えてください。ディスクの名称はボタンをクリックする度に変化し、システムで使用可能な全ディスクの名称が順に表示されます。目的のディスクを通り過ぎた場合、繰り返しクリックすれば、表示は最初のディスクに戻ります。

ディスクアイコンの上側には、インストールできるソフトウェアの内容が表示されます（図3-3）。これをご覧になり、ご使用のシステムに合ったインストール内容をお決めいただけます。

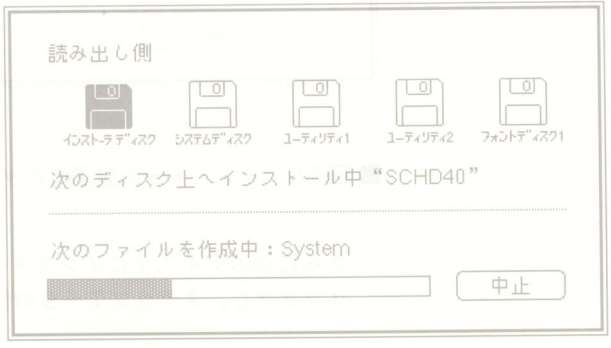
❖ 注意：インストールするソフトウェアをご自分でお選びになりたいかたのため、Installerにはカスタマイズ機能が組み込まれています。“カスタマイズ”ボタンをクリックすれば、表示は簡易インストールからカスタマイズに切り替わります。簡易インストールにない構成でインストールを行ないたい場合などにご利用ください。

カスタマイズ機能の詳細については、付録Aの「起動ディスクについて」をご覧ください。

8．“インストール”ボタンをクリックします。

Installerはシステムソフトウェアを自動的にインストールし始めます。システムソフトウェアは、ステップ7で指定された構成でインストールされます。

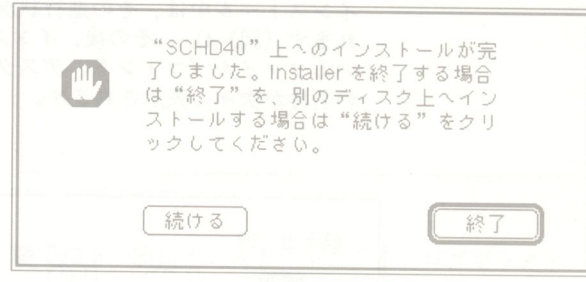
インストール中は、その進行状況を示すダイアログボックスが表示されます（図3-4）。その後、インストールの進行につれてコピーされているファイル（フォント、デスクアクセサリ、サウンドリソースなど）の名称が次々と表示されます。



■ 図3-4　インストール状況の表示

Installerは複数のフロッピーディスクからファイルを読み込んでインストールを行ないます。Installerは不要になったディスクを自動的にイジェクトし、その都度メッセージを表示して必要なディスクを要求しますので、メッセージにしたがってディスクを入れ替えてください。インストールは数分で完了します。インストールが完了すると、Installerはメッセージを表示し、さらに別なディスクにシステムソフトウェアをインストールするかどうかの確認を求めてきます。（図3-5）

❖ Installerのメッセージについて：フロッピーディスクを対象にインストールを行なうと、容量不足のためInstallerが途中で処理を中止する場合があります。その場合、Installerを終了し、第10章の「フロッピーディスクについて」を参考に再度インストールを行なってください。



■ 図3-5　インストール完了時のダイアログボックス

さらに別のディスクにインストールを行ないたい場合、“続ける”をクリックし、ステップ7～9の作業を繰り返してください。

10. “終了”をクリックします

スクリーンはInstallerからデスクトップへ戻ります。

11. スペシャルメニューから“リスタート”を選びます。

Macintoshはフロッピーディスクを全てイジェクトし、システムソフトウェアのインストールされたハードディスクから起動します。フロッピーディスクから起動したい場合、そのディスクをイジェクト直後にフロッピードライブに押し込んでください。

- カスタマイズについて：Installerのカスタマイズ機能を利用すれば、システムソフトウェアを独自の構成でインストールできます。簡易インストールにない構成でインストールしたい場合にご利用ください。詳しくは付録A「起動ディスクについて」をご覧ください。また、簡易インストール後にシステムソフトウェアを追加したい場合にもカスタマイズ機能が利用できます。プリントリソースのうち、ハードディスクにLaserWriter用のものだけをインストールしたい場合などに便利です。

第4章

アプリケーションと書類について

この章では、第1章の基本操作を習得し、第2章および第3章でシステムの使用準備を完了された方を対象に、Macintoshでのアプリケーションおよび書類の扱いに必要な基本操作を順を追って解説します。

アプリケーションの使いかた

この章では次の内容について解説します。

- アプリケーションの起動
- 書類の作成
- 書類の整理

この章ではMacintoshに付属のアプリケーション、TeachTextを使用します。Macintosh用アプリケーションの多くはフロッピーディスクで提供されますが、コピープロテクトされていない限りハードディスクにインストールしてから使用することになります。TeachTextはシステムディスクに収められています。ハードディスク内にTeachTextのアイコンがない場合は第6章を参照し、ハードディスクにコピーしてください。

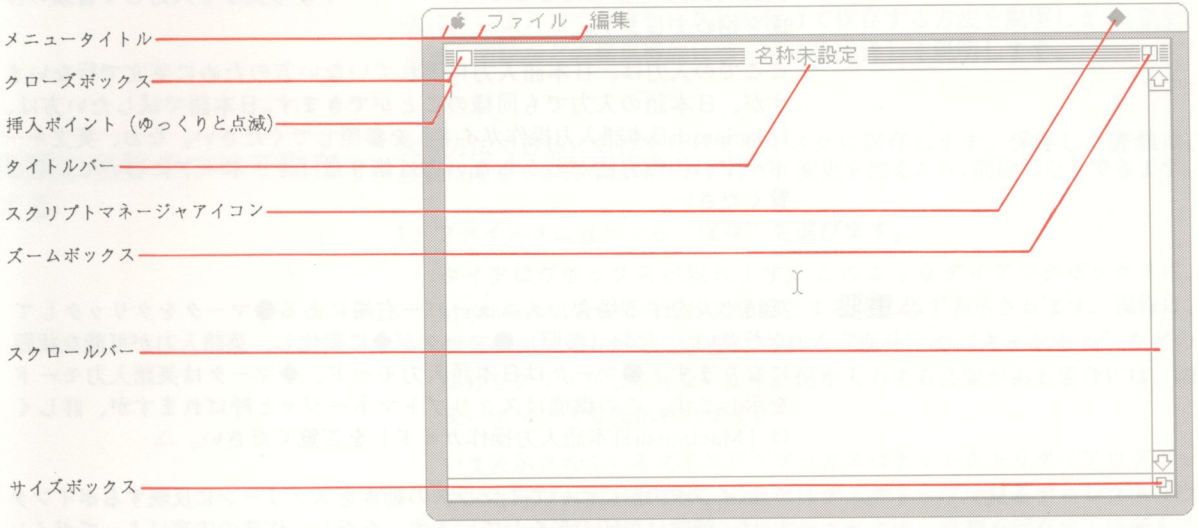
アプリケーションの起動

1. ハードディスクのウインドウを開きます。
2. ハードディスクのウインドウ内にTeachTextのアイコンがあることを確認します。

   TeachTextのアイコンがウインドウ内に見えない場合、第1章で習得した方法を用いてウインドウを広げます。

3．“TeachText”アイコンをダブルクリックするか、選択してファイルメニューから“開く”を選びます。

TeachTextの画面が現れます。ここには文字をタイプするための白紙のウインドウが用意されています。



■ 図4-1　TeachTextの画面

多くのアプリケーションはこのTeachTextのように専用のメニューを持ち、ウインドウにはタイトルバー、クローズボックス、サイズボックス、ズームボックス、スクロールバーなどがあります。起動したばかりのTeachTextでは“名称未設定”の名前で空白の書類ウインドウが表示されますが、名称は書類の保存時に付けます。これらはほとんどのアプリケーションに当てはまります。

ここでは、アプリケーションの一般的な操作を学ぶためにTeachTextを使用します。TeachTextの応用例については後で説明します。

書類の作成

ここでは次の内容について解説します。

- 書類に名称を付けて保存する
- 書類の内容を編集する
- 同一内容を別々の書類に保存する

TeachTextを起動したところで、キーボードから文字を入力して書類の作成を始めましょう。

ここでの入力は、日本語入力に慣れていない方のために英文で行ないますが、日本語の入力でも同様のことができます。日本語で試したい方は、「Macintosh日本語入力操作ガイド」を参照してください。なお、英文キーボードの操作方法がわからない方は第9章「キーボードについて」をご覧ください。

△重要

英語で入力する場合、メニューバー右端にある●マークをクリックしてください。（図4-1参照）●マークが◆に変化し、英語入力が可能な状態になります。●マークは日本語入力モード、◆マークは英語入力モードを示します。この機能はスクリプトマネージャと呼ばれますが、詳しくは「Macintosh日本語入力操作ガイド」をご覧ください。△

❖ ポインタの形について：マウスの動きをスクリーンに反映するポインタは、通常は矢印の形をしています。ただし、作業の内容によってポインタの形が変化することがあります。たとえばMacintoshが処理に多少の時間を要する場合、ポインタが腕時計の形に変化します。いまTeachTextが表示している文字Ｉの形をしたポインタは、**Ｉ字型**（Ｉビーム）ポインタと呼ばれます。ポインタを入力や編集可能な部分に移動させると、ポインタがＩ字型に変化します。

スクリーン上でゆっくりと点滅している小さな縦のバーを、**挿入ポイント**と呼び、タイプする文字がスクリーンのどこに表示されるかを示しています。入力を誤った場合、*delete*（または*backspace*）キーを押して訂正したい部分を削除します。

1．英文入力モードに切り換え、次の例題を入力してみてください。

```
The following is my best guess for a production
schedule.  Please keep in mind that it is subject to
change once reality gets underway.  Let me know if I'm
cheating anyone of the time he or she needs, or if I'm
not allowing for black holes.
```

通常のタイプライタと同様、Macintoshのキーボードも主に文字や数値を入力するために使用します。

2．行の終りに近付いても*return*キーを押さないで、そのまま入力を続けるようにします。

ワープロソフトなど、文章の入力や編集のできるアプリケーションでは、通常のタイプライタのように行末近くで*return*キーを押すことを気にする必要はありません。続けて入力すればTeachTextが自動的に次の行へ移動してくれます。これを**自動改行機能**と呼びます。

次に、いま入力した書類に名称を付けて保存する方法を説明します。変更、追加、削除などの編集機能については後で詳しく説明します。

書類に名称をつけて保存する

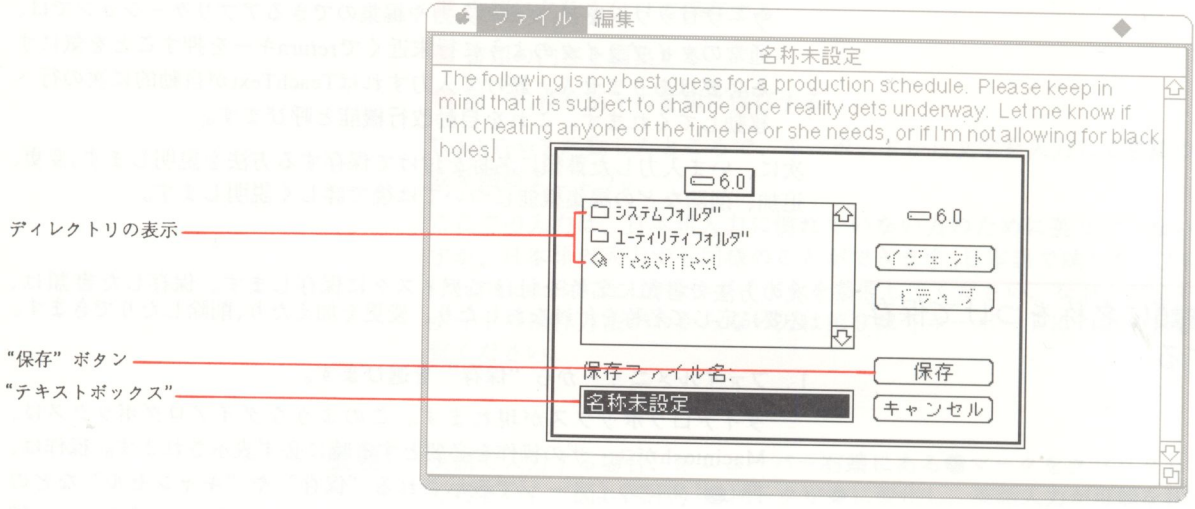
次の方法で書類に名称を付けてディスクに保存します。保存した書類は、必要に応じて名称を付けなおしたり、変更を加えたり、削除したりできます。

1．ファイルメニューから“保存”を選びます。

ダイアログボックスが現れます。このようなダイアログボックスは、Macintoshがユーザの操作を必要とする時に必ず表示されます。操作は、押しボタンのイメージで表示される“保存”や“キャンセル”などの部分をクリックして行ないます。何か入力する必要がある場合には、細長いボックスも表示されます。

いま表示されているダイアログボックスはディレクトリダイアログボックスと呼ばれるものです。これにはデスクトップで見るディレクトリウインドウと同じ内容が表形式で表示されます。書類を保存する場所もこのダイアログボックスで指定できますが、ここでは今使用しているハードディスクにそのまま保存します。（ここではその他のメッセージは無視してください）

ダイアログボックス内で“保存ファイル名”と示されているテキストボックスに書類の名称を入力します。ここではまだ書類に名称を付けていませんので、“名称未設定”と表示されています。テキストボックス自体は選択された状態（黒く表示）で現れますので、このままタイプすると自動的に内容が置き換えられます。マウスでテキストボックス内の挿入ポイントを移動させる必要はありません。



■ 図4-2　ディレクトリダイアログボックス

2. テキストボックスに,*First Memo*と入力します。

3. "保存" ボタンをクリックします。

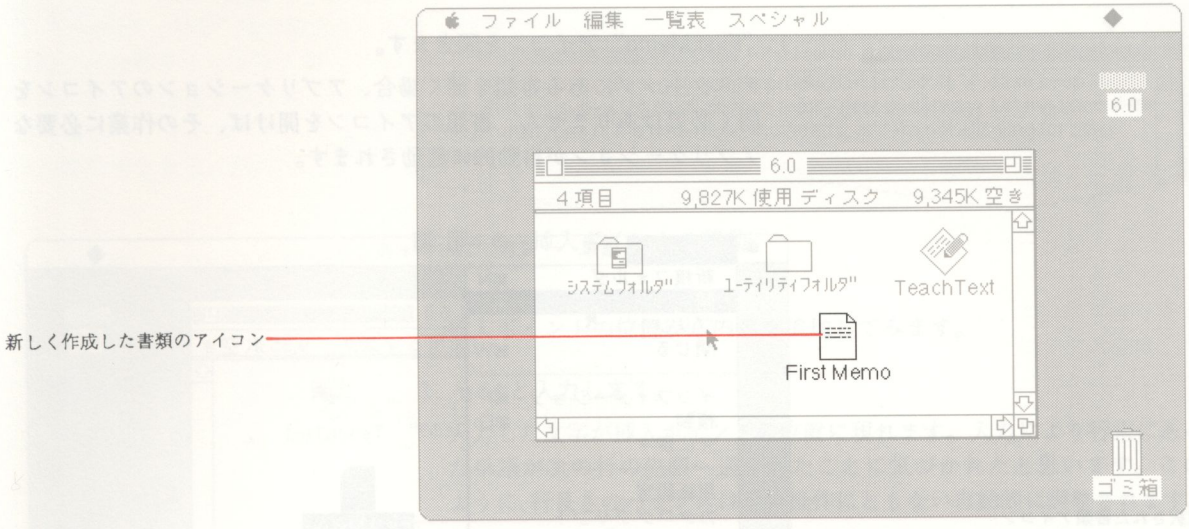
書類はスクリーンに表示されているのと同じ状態でディスクに保存されます。保存が完了すると再度書類ウインドウが現れ、タイトルバーには先ほど付けたばかりの名称が表示されます。

❖ 保存のタイミング：書類に名称を付けた後のほか、時間をかけて作業する場合には、途中で約15分おきに書類の保存を行なうように心がけてください（息抜きにもなります）。万一、作業中に電源コードが抜けたり停電になったとしても、15分相当の作業内容を失うだけで済みます。

書類をディスクに保存したら、TeachTextを終了してデスクトップへ戻ります。

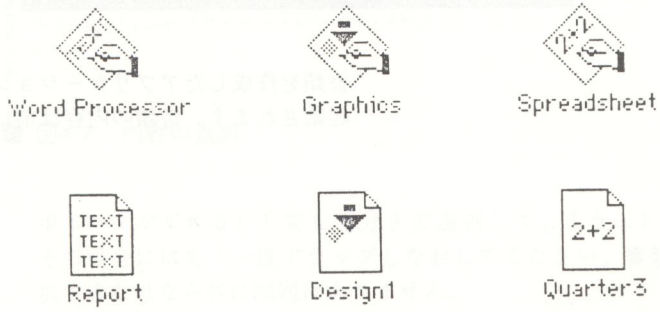
4. ファイルメニューから "終了" を選びます。

デスクトップが現れ、ハードディスクのディレクトリウインドウ内には先ほど作成した書類のアイコンも表示されます。



■ 図4-3　書類アイコン

ディレクトリウインドウ内に新しく現れたアイコンにより、作成した書類およびその名称を知ることができます。書類アイコンも他のアイコンと同様に、再度作業したい場合には選択して開けます。



■ 図4-4　書類およびアプリケーションアイコンの例

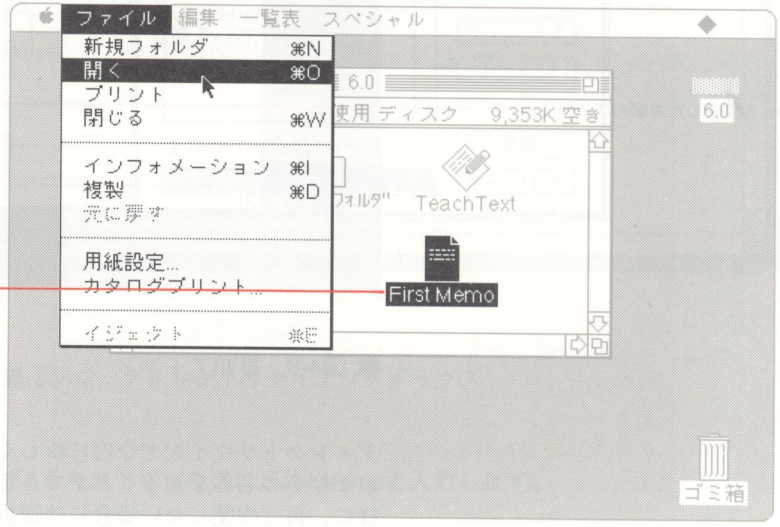
書類アイコンのデザインは使用したアプリケーションによって異なるため、書類ごとに使用したアプリケーションが識別ができます。また、書類のアイコンを開けばそれに合ったアプリケーションが自動的に起動されます。

書類の内容を編集する

ここでは、「書類に名称を付けて保存する」のページで作成した書類に手を加えてみます。

1．“First Memo”アイコンを開きます。

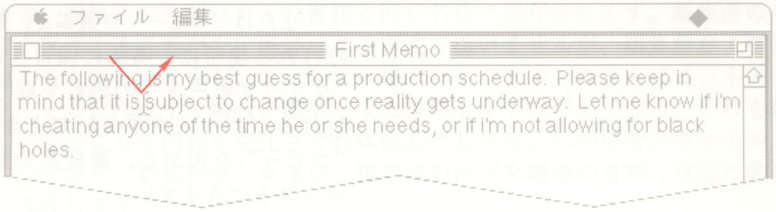
デスクトップにある書類を開く場合、アプリケーションのアイコンを開く必要はありません。書類のアイコンを開けば、その作業に必要なアプリケーションが自動的に起動されます。



■ 図4-5　書類アイコンからアプリケーションを起動

書類を作成したアプリケーション（この場合はTeachText）が自動的に起動されます。書類の内容は前に保存した時の状態で表示されます。

2．単語subjectの直前でクリックを行ない、挿入ポイントをそこへ移動させます。



■ 図4-6　挿入ポイントの移動

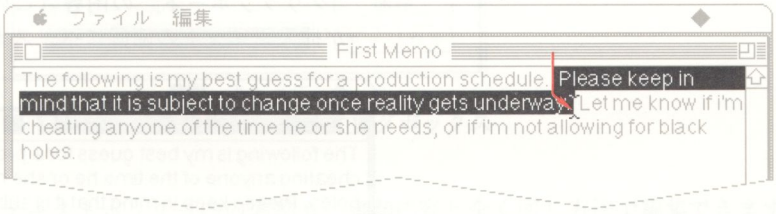
挿入ポイントの位置から内容を追加してみます。

3．notと入力します。

入力した文字が挿入ポイントの位置に現れます。入力により行末にあった単語が次の行の先頭へ送られたことに気づかれたと思います。このように、行長さのバランスは編集操作にともない自動的に調整されます。

今度は内容の一部を選択し、それを別の位置へ移動してみます。

4．単語scheduleに付いたピリオド（.）の直後にポインタを置き、そのまま次の文の終りまでドラッグします。これ2番目の文全体が選択されます。



■ 図4-7　内容の選択

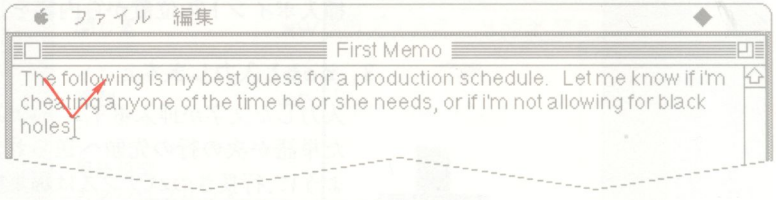
ポインタがずれると不要な部分まで選択してしまうことがあります。その場合にはもう一度ドラッグしなおしてください。書類の内容を選択するだけなら特に問題はありません。

書類内でのドラッグは、選択を意味します。アイコンはクリックするだけで選択できましたが、書類内では選択したい範囲を上下左右にドラッグします。

5. 編集メニューから“カット”を選びます。

選択された部分がスクリーンから消えます。編集メニューから“カット”または“コピー”を選ぶと、選択された部分が**“クリップボード”**と呼ばれる場所に一時的に保管されます。挿入ポイントを移動した後に“クリップボード”の内容を取り出せば、選択部分を他の場所へ貼り付ける（ペーストする）ことができます。（“カット”のかわりに“コピー”を選ぶと、選択部分をスクリーンに残したまま他の場所にペーストできます）

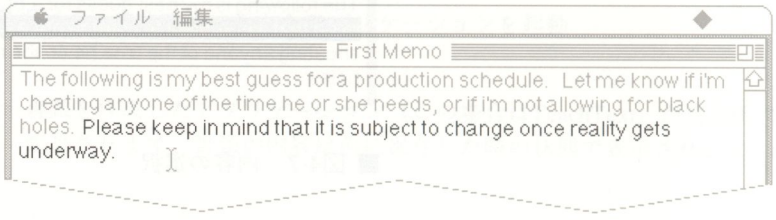
6. 単語**holes**に付いたピリオド（.）の直後でクリックし、挿入ポイントをそこへ移動します。



■ 図4-8　挿入ポイントの移動

7. 編集メニューから“ペースト”を選びます。

“クリップボード”の内容（この場合は先ほど“カット”した部分）が挿入ポイントの位置にペーストされます。



■ 図4-9　選択部分のペースト

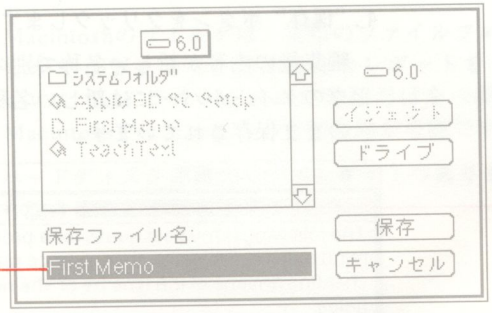
“クリップボード”の内容は、次に“カット”または“コピー”を選ぶまでそのまま保管されます。したがって、同じ内容を何度でも繰り返してペーストできます。また、“クリップボード”の内容はアプリケーションを終了した後も保管されたままですので、あるアプリケーションで保管したものを他のアプリケーションで利用できます。グラフィックアプリケーションで作成したイラストをワープロソフトで作成するレポート内に取り込むことなども可能です。

同一内容を別々の書類に保存する

編集した書類は保存しておく必要があります。保存には２つの方法があります。その１つは、ファイルメニューから“保存”を選ぶ方法です。この場合、編集後の書類はもとの書類と同じ名称で保存されます。編集前の内容を保存する必要がない場合はこの方法で構いませんが、編集前および後の内容を両方とも保存しておきたい場合があります。たとえばビジネスレターを多数作成する場合、雛型となる書類を１つ保存しておき、それを基に宛先によって内容を変化させれば便利でしょう。この場合、ファイルメニューから“新規保存”を選び、編集後の内容を雛型の書類とは別の名称で保存します。

1. ファイルメニューから“新規保存”を選びます。

   ディレクトリダイアログボックスが現れます。これは、はじめて名称を付けた時に現れたものと同じものです。テキストボックスには、すでに付けられている名称が黒く表示されます。



最初に付けた名称（黒く表示）

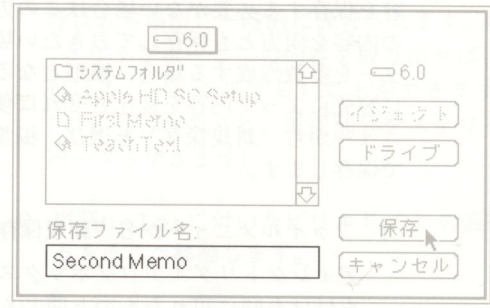
■ 図4-10　“新規保存”ダイアログボックス

テキストボックス内の名称も、書類内容と全く同じ方法で編集できます。（また、そのまま新しい名称を入力すれば表示の書類内容は自動的に置き換えられます）

2. ポインタを単語**First**の直前に置き、この単語の終りまでドラッグします。これで**First**だけが選択されます。

3. Secondと入力します。

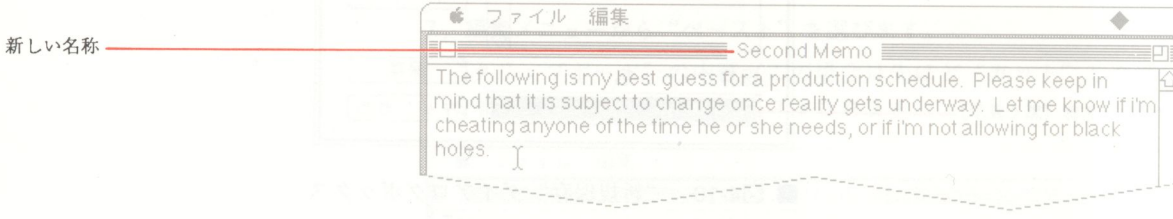
選択部分だけが入力した文字と置き換わります。



■ 図4-11　書類の名称変更

4. “保存” ボタンをクリックします。

編集後の内容が新しい名称で別の書類として保存されます。ウインドウのタイトルバーには新しい名称が表示されます。編集前の書類はそのまま保存されています。



■ 図4-12　新しい名称で保存された書類

5. ファイルメニューから “終了” を選びます。

スクリーンはTeachTextからデスクトップへ戻ります。デスクトップには、もともとあった書類アイコンのほか、いま保存したばかりの書類のアイコンも表示されます。

アプリケーション操作のまとめ

ここでは、TeachTextを用いてアプリケーションの起動および終了、そして書類の作成、編集、保存の方法を学びました。これらの方法は、すべて第1章で扱われている基本操作に基づいたものです。後は、次のページから説明する操作を習得すれば必要な操作を全て身に付けたことになります。

書類の整理

ここでは次の内容について解説します。

- フォルダの使いかた
- フォルダのネスティング
- 階層ファイルシステムの活用
- 階層ファイルシステムと書類の扱い
- 不要な書類およびフォルダの破棄

以上でアプリケーションの起動、書類の作成／編集／保存、そしてアプリケーションの終了といった一連の操作を学びました。今度はデスクトップの書類を整理する方法について解説します。デスクトップでは書類の分類、複製、名称変更、破棄などができます。

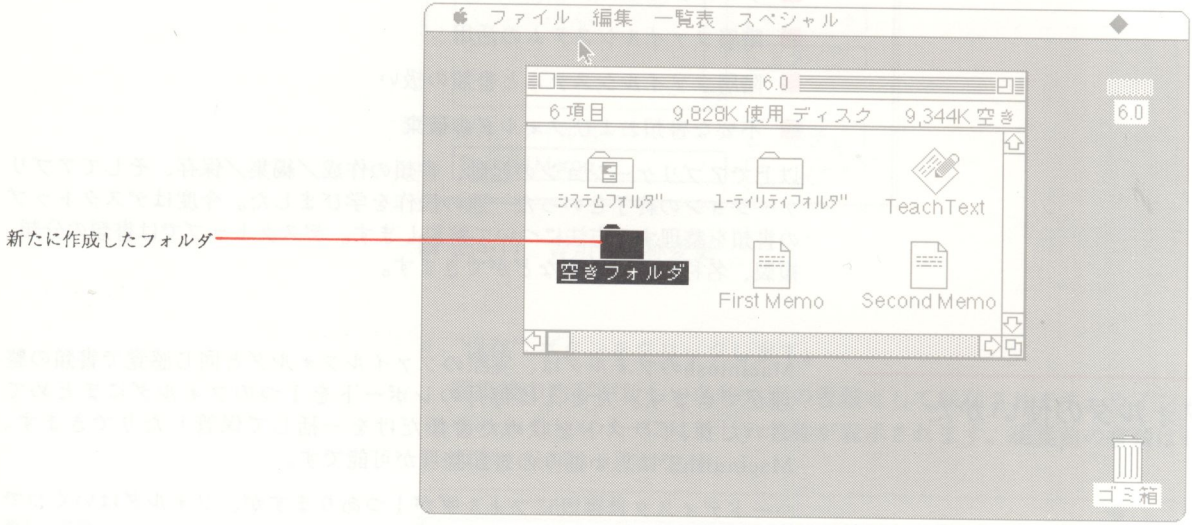
フォルダの使いかた

Macintoshのフォルダは、実際のファイルフォルダと同じ感覚で書類の整理ができます。たとえば毎月のレポートを1つのフォルダにまとめておいたり、イラストを収めた書類だけを一括して保管したりできます。Macintoshでは思い通りの書類整理が可能です。

ハードディスクには既にフォルダが1つありますが、フォルダはいくつでも設けることができます。

1. ファイルメニューから“新規フォルダ”を選び、新しいフォルダを作成します。

ハードディスクのウインドウに“空きフォルダ”という名称のアイコンが現れます。



■ 図4-13 新しいフォルダの作成

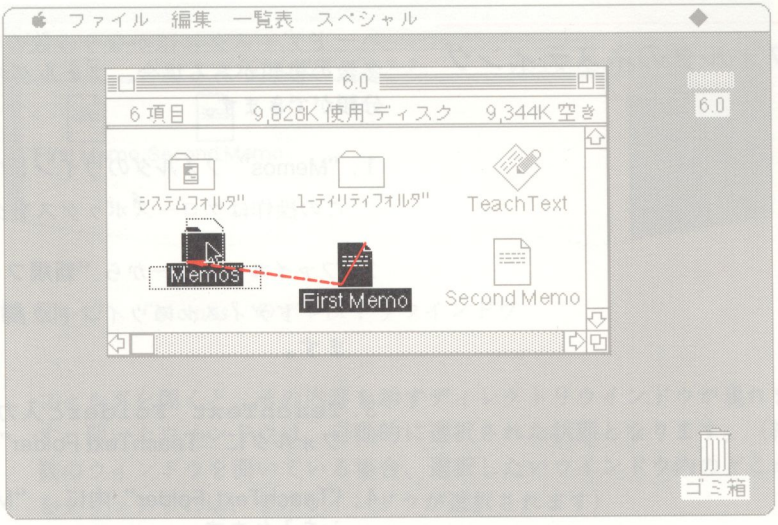
作成したばかりのフォルダには自動的に“空きフォルダ”の名称が付けられると同時に、アイコンが選択された状態になります。したがって、このまま入力を行なうことで名称の設定ができます。（作成したフォルダのアイコンが見えない場合、ウインドウを拡大してください）

2. Memosと入力し、*return*キーを押します。

*return*キーを押すと、入力した名称が確定されます。フォルダの名称は“空きフォルダ”から“Memos”に変わります。

通常は、名称変更の前に対象となるアイコンをクリックして選択します。これは他のアイコンの名称を誤って変更することを防ぐためです。ただし、ここで行なったように作成したばかりのフォルダの名称を変える場合にはクリックしておく必要はありません。（作成時に自動的に選択されます）

3．今までに作成した2つの書類を1つずつ“Memos”フォルダのアイコンにドラッグします。フォルダのアイコンが黒く表示された時にマウスボタンを放してください。

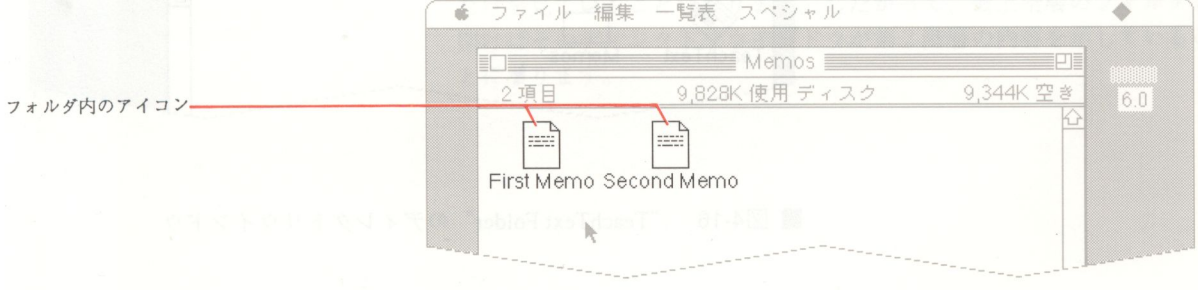


■ 図4-14　書類をフォルダにドラッグする

フォルダアイコンに書類アイコンの輪郭が重なると、フォルダアイコンは黒く表示されます。マウスボタンを放した時に書類アイコンがフォルダ内に落し込まれ、フォルダアイコンは通常の表示に戻ります。

4．“Memos”フォルダのアイコンを開きます。

フォルダのウインドウ内には、先ほどドラッグした書類のアイコンが表示されます。



■ 図4-15　“Memos”フォルダの内容

書類アイコンをフォルダアイコンにドラッグすると、書類はフォルダ内へ移動します。フォルダが開かれている場合、そのウインドウ内へ書類をドラッグすれば同じことができます。

フォルダのネスティング

ハードディスクにはかなりの数の書類やフォルダを保管しておけます。多数の書類がある場合、フォルダの中にさらにフォルダを設けて書類の分類ができます。

1. “Memos” フォルダのウインドウが開いている場合、これを閉じます。

   この操作はクローズボックスをクリックするだけです。

2. ファイルメニューから “新規フォルダ” を選びます。

   ハードディスクのウインドウ内に “空きフォルダ” アイコンが現れます。

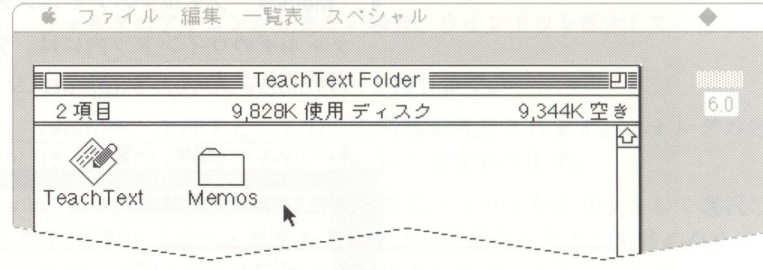
3. **TeachText Folder**と入力して*return*キーを押します。これで、フォルダに “TeachText Folder” の名称が付きます。

4. “TeachText Folder” 内に、“Memos” および “TeachText” のアイコンを入れます。

   先ほど書類をフォルダに入れた際に用いた方法を使ってください。

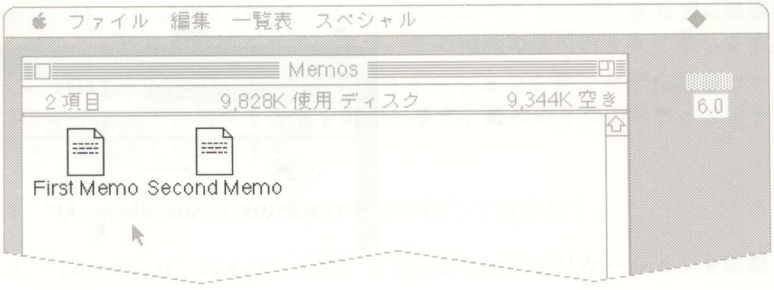
5. “TeachText Folder” のアイコンを開きます。

   “TeachText Folder” のディレクトリウインドウ内に、“TeachText” および “Memos” のアイコンが表示されます。



■ 図4-16 “TeachText Folder” のディレクトリウインドウ

6．“Memos”フォルダを開きます。



■ 図4-17 “Memos”のデレクトリウインドウ

フォルダを開くと、その内容を示すディレクトリウインドウが現れます。開いたウインドウは、自動的に選択された状態となります。（複数のウインドウを開いている場合、選択したいウインドウ内のどこかをクリックすれば、そのウインドウが選択されます）

7．“Memos”フォルダ、次に“TeachText Folder”を閉じます。

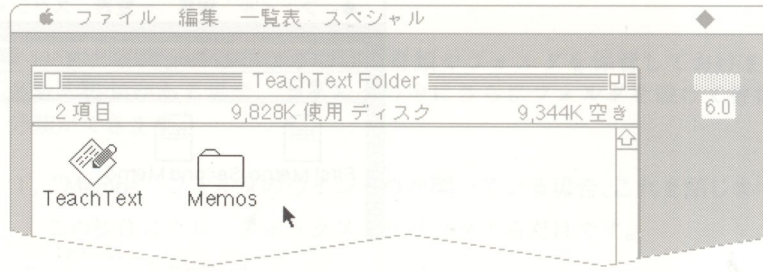
フォルダのウインドウを閉じると、そのウインドウの輪郭が縮まりながらアイコン表示へと戻ります。フォルダを閉じる度にそれがどのウインドウに属しているかを知ることができます。

フォルダ内にさらにフォルダを設けることを**ネスティング**といいます。最初のフォルダも含めて約12フォルダまでネスティングできますが、５フォルダ以上にわたってネスティングした場合には書類やアプリケーションの取り出しが煩雑になると感じる人が多いようです。

フォルダのネスティングは保存場所の階層化を意味します。デスクトップ上のフォルダが全て閉じられている状態では、最上階層の保存場所だけを見ていることになります。したがって、最上階層のフォルダを開けばそのディレクトリウインドウが第２階層の内容を示していることになります。

8．“TeachText Folder”を開きます。

表示されたディレクトリウインドウは第2階層に相当します。

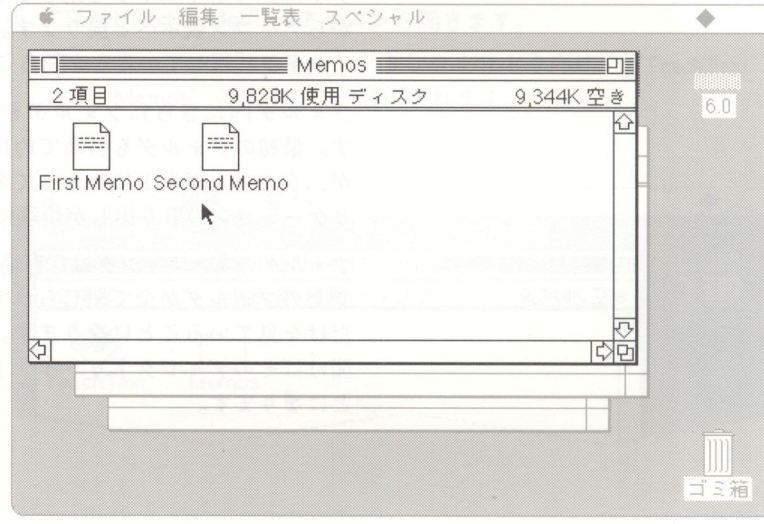


■ 図4-18　第2階層のウインドウ

第2階層にあるフォルダ（この場合“Memos”）の内容は、第3階層に相当します。同様に、ネスティングが深くなるごとに第4階層、第5階層...と続きます。

9．“Memos”フォルダを開きます。

表示されたディレクトリウインドウは第3階層に相当します。



■ 図4-19　第3階層のウインドウ

このように、Macintoshではフォルダのネスティングによる書類やアプリケーションの整理が可能ですが、この保存方式を**階層ファイルシステム**（HFS）と呼びます。

階層ファイルシステムの活用

アプリケーションの使用に他の階層にある書類を開きたい場合があります。このためにデスクトップへ戻ってフォルダ間を行き来しなければならないとしたら、階層ファイルシステムもやっかいなものとなります。しかし、Macintosh用アプリケーションにはデスクトップに戻らずに階層間を移動する機能が準備されています。この機能の使用例を次に示します。

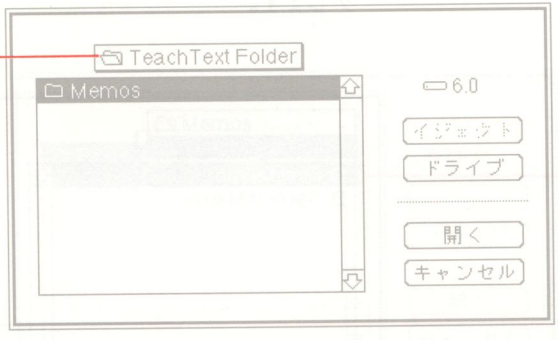
ここではTeachTextを用いて、アプリケーションを終了せずに階層ファイルシステム内で作業する方法を説明します。最初の3つのステップでそのための準備をしておきます。

1. “Memos” フォルダのウインドウを閉じておきます。
2. “TeachText” アイコンを開いてTeachTextアプリケーションを起動します。
3. “名称未設定” のウインドウを閉じます。

   ウインドウを閉じるにはクローズボックスをクリックするか、ファイルメニューから “閉じる” を選びます。

   ここではまだ新しい書類を作成しません。“名称未設定” ウインドウを閉じた状態で、階層ファイルシステム内にある書類を開く準備ができました。
4. ファイルメニューから “開く” を選びます。

   次のようなダイアログボックスが現れます。



■ 図4-20　“開く” によるダイアログボックス

ダイアログボックスのタイトル部分には、現在使用している階層のフォルダ名（この場合は “TeachText Folder”）が表示されます。その下の大きなボックスには、現在使用している階層にある書類およびフォルダのうち、TeachTextから開くことのできるものが表示されます。（この場合は “Memos” フォルダのみ）

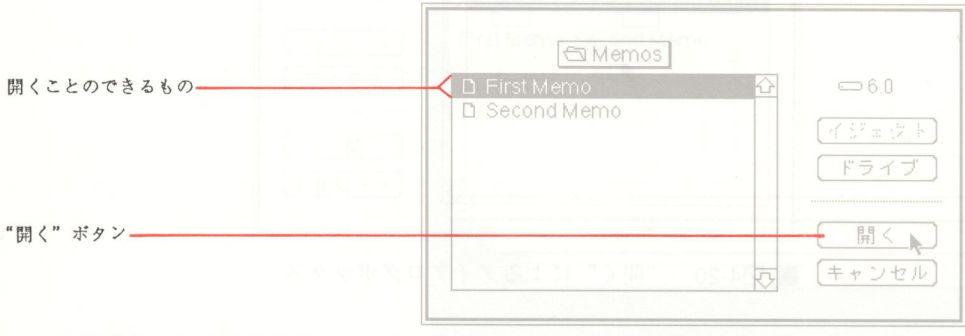
いま表示されているダイアログボックスは、TeachTextが持つファイルメニューから呼び出したことに注意してください。このため、TeachTextから開く必要のないもの、たとえばTeachText自体の名称などは表示されません。このように、アプリケーションが表示するダイアログボックスには使用中の階層にある書類やフォルダが全て表示されるわけではありません。

フォルダがあれば、必ずディレクトリダイアログボックスに表示されます。

5．“開く”ボタンをクリックして、“Memos”フォルダを開きます。

“Memos”の部分は黒く表示されていますので、すでに選択された状態にあることがわかります。したがって、そのまま“開く”ボタンをクリックすれば“Memos”フォルダを開けます。（かわりを、黒く表示された“Memos”の部分をダブルクリックしても開けます）

“Memos”フォルダを開くことにより、すぐ下の階層へ移動したことになります。ダイアログボックス上部のタイトルにより、現在どの階層にいるかが確認できます。先ほどと同様、タイトル下のボックス内には、現在の階層にある書類およびフォルダのうち、開くことができるものが示されます（ここでは“First Memo”と“Second Memo”のみ）。このうち、選択された状態で表示されている書類は“開く”ボタンを一度クリックするだけで開けます。これ以外の書類を開くには、その名称部分をクリックして選択し、その後に“開く”ボタンをクリックします。

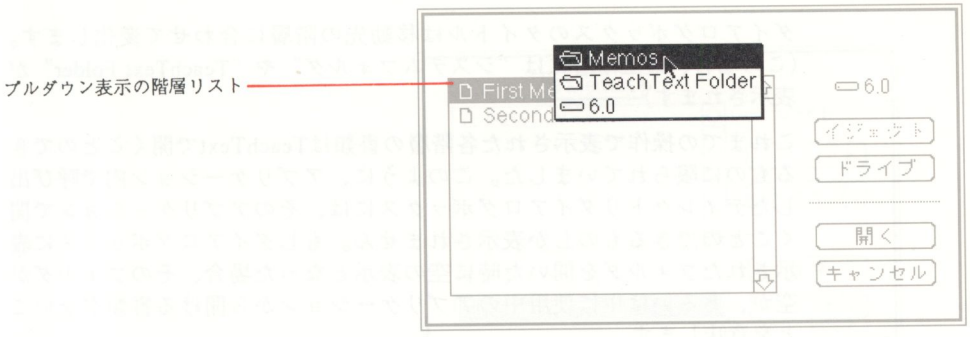


■ 図4-21　次の階層の内容

他の階層にある書類を開くにはダイアログボックスのタイトル部分をプルダウンします。プルダウンした部分には前後の階層（フォルダ）名が表示されます。

6. ダイアログボックスのタイトル部分にポインタを合わせ、マウスボタンを押したままにします。

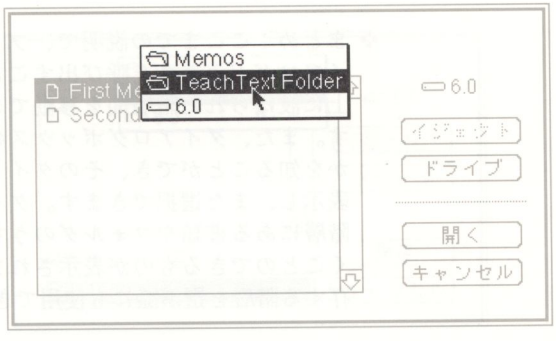
内容を見終ったらマウスボタンを放してください。



■ 図4-22　前後の階層の表示

プルダウンした階層リストはファイルメニューと似ています。このリストには最上階層までのフォルダ名が順に表示されます（最上階層の名称は常に一番下に表示されます）。移動先の階層を選ぶには、プルダウンしたリストを縦方向へドラッグします。

7. もう一度階層リストをプルダウンし、“TeachText Folder”を選びます。



■ 図4-23　階層間の移動

これで1つ上の階層の“TeachText Folder”へ移動しました。ここからは“Memos”フォルダを開くこともできます。ダイアログボックスのタイトルが移動先の階層に合わせて変化したことに注意してください。

8．もう一度階層リストをプルダウンし、今度は最上階層にあたるハードディスクを選びます。

ハードディスクは、イニシャライズ後に名称変更していなければ“6.0”と表示されているはずです。

ダイアログボックスのタイトルは移動先の階層に合わせて変化します。（この場合、最上階層には“システムフォルダ”や“TeachText Folder”が表示されます）

これまでの操作で表示された各階層の書類はTeachTextで開くことのできるものに限られていました。このように、アプリケーション内で呼び出したディレクトリダイアログボックスには、そのアプリケーションで開くことのできるものしか表示されません。もしダイアログボックスに表示されたフォルダを開いた時に空の表示となった場合、そのフォルダが空か、あるいは中に使用中のアプリケーションから開ける書類がないことを意味します。

アプリケーション内での書類の開きかた

ここで、すでに作成した書類を1つ開いてみましょう。

1．“TeachText Folder”を開きます。

2．“Memos”を開きます。

3．いずれかの書類を開きます。

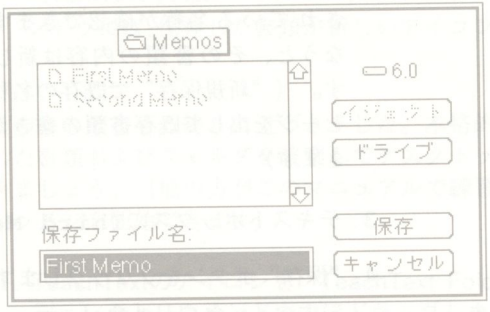
ディレクトリ内の1番目の書類（この場合“First Memo”）が自動的に黒く表示されます。2番目の書類を開くには、その名称部分をクリックした後に“開く”ボタンをクリックします。

❖ まとめ：ここまでの説明で、ファイルメニューの“開く”を用いてダイアログボックスを呼び出すこと、そして、そこからハードディスク上に設けられた階層間を移動できることがおわかりになったと思います。また、ダイアログボックスのタイトルにより現在どの階層にいるかを知ることができ、そのタイトルをプルダウンすると前後の階層を表示し、また選択できます。タイトル下のボックス部分には、現在の階層にある書類やフォルダのうち、使用中のアプリケーションから開くことのできるものが表示されます。これらの操作方法は、書類を保存する階層を選ぶ際にも使用できます。

階層ファイルシステムと書類の保存

1．ファイルメニューから“新規保存”を選びます。

ここでは書類の内容には手を加えずに、書類を別の名称で保存してみます。

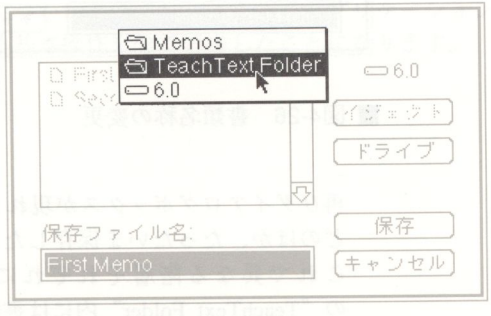


■ 図4-24　“新規保存”によるダイアログボックス

“新規保存”によっても“開く”で呼び出したのと同じようなダイアログボックスが現れます。

今度は書類の保存場所に他の階層を選んでみます。

2．ダイアログボックスのタイトル部分をプルダウンし、“TeachText Folder”を選びます。



■ 図4-25　“TeachText Folder”を選ぶ

“TeachText Folder”内に収められている“TeachText”および“Memos”のアイコンが表示されます。ダイアログボックスのタイトルは階層間の移動にともない変化します。

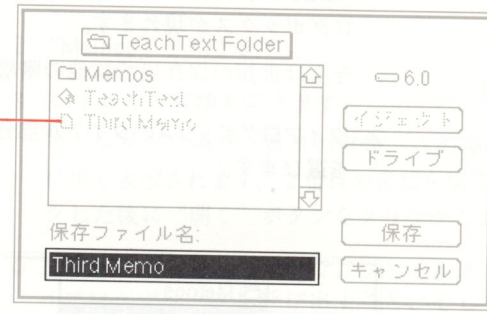
書類を保存する際には、現在の階層にあるアプリケーション、書類、およびフォルダは全て表示されます。これにより、すでに使用されている名称が確認できます。既存の書類と同じ名称で保存を行なうと、その書類の内容は新しい保存内容に書きかえられてしまいます。（“新規保存”で既存の名称を入力すると、Macintoshは警告メッセージを出して既存書類の書きかえを行なうかどうかの確認を求めてきます）

3. テキストボックスに**Third Memo**と入力します。

4. “保存”ボタンをクリックします。

   これにより新しい書類が“TeachText Folder”に保存されます。

5. ファイルメニューから“新規保存”を選びます。



■ 図4-26　書類名称の変更

再びダイアログボックスが現れます。今度は既存の書類やフォルダなどのほか、たったいま保存したばかりの書類の名称も表示されます。これで異なる階層それぞれに書類が保存されました。第2階層の“TeachText Folder”内には書類が1つ、第3階層の“Memos”フォルダ内には2つの書類が保存されています。

6. テキストボックスに**Fourth Memo**と入力します。

7. “保存”ボタンをクリックします。

8. ファイルメニューから“終了”を選びます。

“TeachText Folder”のディレクトリウインドウが現れます。このウインドウには、保存した書類が新しいアイコンとして表示されています。

不要な書類／フォルダの破棄

この章もそろそろ終りに近づきました。本格的な作業に備え、今まで作成した書類およびフォルダを破棄してデスクトップをもとの状態に戻しておきましょう。（他の方がこのマニュアルで練習される場合にもスムーズにレッスンを開始できます）

1. TeachTextのアイコンを“TeachText Folder”からハードディスクのディレクトリウインドウ内にドラッグします。

これでTeachTextがレッスン開始時の場所に戻りました。

2. “Memos”フォルダを“ゴミ箱”へドラッグします。

これでレッスン中に作成した書類をフォルダごと破棄したことになります。

3. “TeachText Folder”のウインドウを閉じ、そのアイコンを“ゴミ箱”へドラッグします。

4. スペシャルメニューから“ゴミ箱を空にする”を選びます。

文字通り、“ゴミ箱”へ捨てたものが完全に破棄されます。

おつかれさまでした。これでアプリケーションで書類を扱う際に必要となる基本操作を全て習得したことになります。

作業を始める前に

以上でMacintoshの基本操作を一通り解説しました。これで本格的な作業を開始できます。参考までに、作業開始前の確認事項を次にまとめておきました。

- **ハードディスクを使用されるのはこれが初めてですか。**初めてハードディスクを使用される方は、このマニュアルの第10章もご覧になってください。ハードディスク使用上の注意や活用のヒントが記載されています。
- **何かアプリケーションを用意していますか。**今すぐにアプリケーションを使用して作業を開始できます。アプリケーションに付属のマニュアルをご覧になった上、Macintoshの作業環境を楽しんでください。
- **Macintoshについてさらに詳しい情報が必要ですか。**Macintoshについてもう少し詳しくお知りになりたい場合は、付属の「オーナーズガイド」が参考になります。Macintoshシステムの紹介、技術仕様、参考図書などが記載されています。

第5章

Macintoshの基本操作

この章には、クリックやドラッグから編集操作まで、Macintoshでの作業には必ず使用される基本操作の要約が収められています。第1章および第4章の内容を習得されたばかりの方、またマウス、アイコン、ウインドウなどの操作方法を既にご存じの方は、今すぐこの章をお読みになる必要はありません。解説は作業内容別に分けられていますので、必要に応じてクイックリファレンスとしてご活用ください。

この章について

この章では次の３つの操作を取り上げています。

- マウスの使いかた
- ウインドウの操作
- テキストの編集

マウスの使いかた

Macintoshでは次のマウス操作で全ての作業（テキストおよび数字の入力以外）を行なえます。

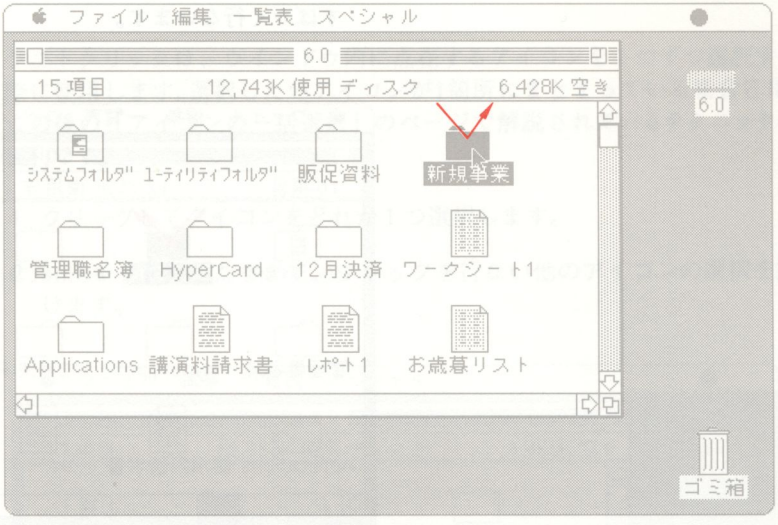
- クリック … スクリーン上の何かを選択する操作です。（ダブルクリックを用いると、アイコンを選択して開く操作を一度に行なえます。シフトクリックを用いると複数のアイコンを自由に選択できます）
- 押し続ける … 選択したものに対する操作を持続させます。
- ドラッグ … 選択したものを移動したり、選択範囲を変更する操作です。（複数のアイコンを同時に移動することもできます）

“選択する”と“選ぶ”

Macintoshで何か作業する場合には、２つの操作を行ないます。まずスクリーンから作業の対象を「選択」し、次のその作業の内容を指示します。マウスをクリックすることが、作業の対象をMacintoshに知らせることになります。たとえば、アイコンをクリックするとMacintoshはそのアイコンを黒く表示し、いま何が選択されたかを使う人に知らせます。作業の対象を選択した後は作業内容を知らせることになります。選択したアイコンを開くにはファイルメニュー内のコマンドのうち“開く”を使用します。このように、メニュー内のコマンドの１つを指定する操作を「選ぶ」といいます。

クリック

1. 選択したいものの上にポインタを合わせます。
2. マウスボタンを押してすぐに放します。



■ 図5-1　クリック

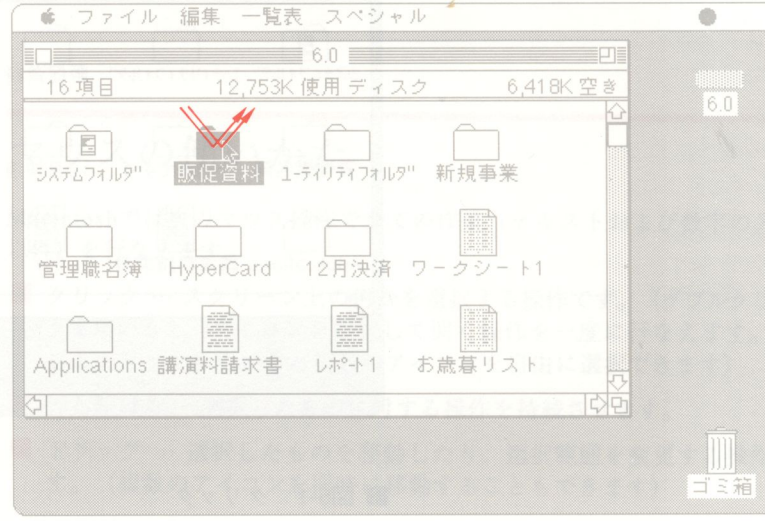
クリックとは、このようにポインタを何かに合わせた後にマウスボタンを一度だけすばやく押すことを意味します。

ダブルクリック

1. ポインタをアイコンに合わせます。

   ポインタは、これから開きたい書類、フォルダ、またはアプリケーションのアイコンの上に置きます。

2. マウスのボタンを押してすぐに放す操作（クリック）を、続けて2回すばやく行ないます。



■ 図5-2　ダブルクリック

ダブルクリックを用いると、書類、フォルダ、またはアプリケーションのアイコンをすばやく開けます。アイコンを選択しておいてファイルメニューから“開く”を選んでも同じことができますが、慣れればダブルクリックの方が簡単だと思われるはずです。

英語などの単語を1つ選択する際にもダブルクリックが使用できます。たとえば、ある文の中の単語を1つだけ削除したい場合、単語部分ををダブルクリックすればその単語だけが選択できます。選択した後は、*backspace*（または*delete*）キーを押せばその単語が削除されます。

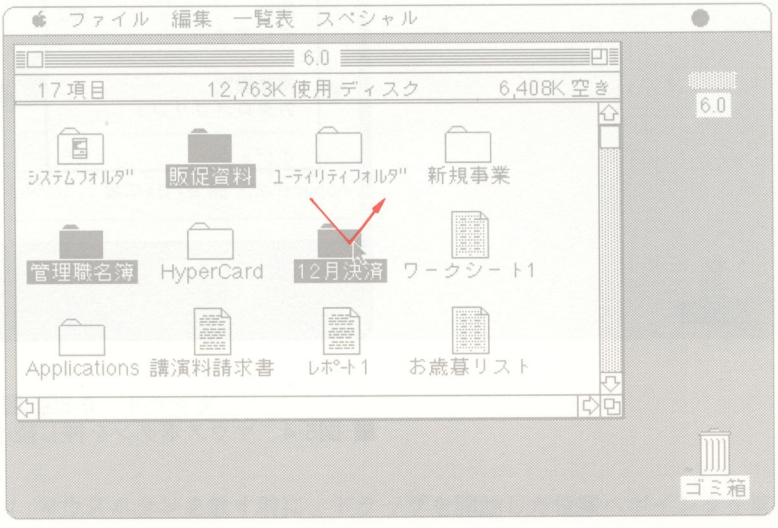
❖ **日本語の場合は：**日本語だけのテキストでは、スペース（空白）で区切られた単語（ワード）が存在しません。日本語テキスト内で選択を行なう場合、ドラッグというテクニックを用います。このテクニックについては後述します。

ダブルクリックがうまくいかない場合、一度目と二度目のクリックの間隔が速すぎるか遅すぎることが考えられます。クリックの速度を変えてみてください。Macintoshが反応するダブルクリックの速度は使う人の好みに設定しておけます。設定はデスクアクセサリ“コントロールパネル”で行ないます。（詳しい方法については第７章をご覧ください）

シフトクリック

シフトクリックは、ウインドウ内に点在するアイコンを１つずつ選択する際に使用します。選択したいアイコンが1箇所にまとまっている場合には、この後の「アイコンの一括選択」のページで解説されているテクニックが便利です。

1. クリックしてアイコンをどれか１つ選択します。
2. *shift*キーを押したままで、クリックを行ない他のアイコンの選択を続けます。



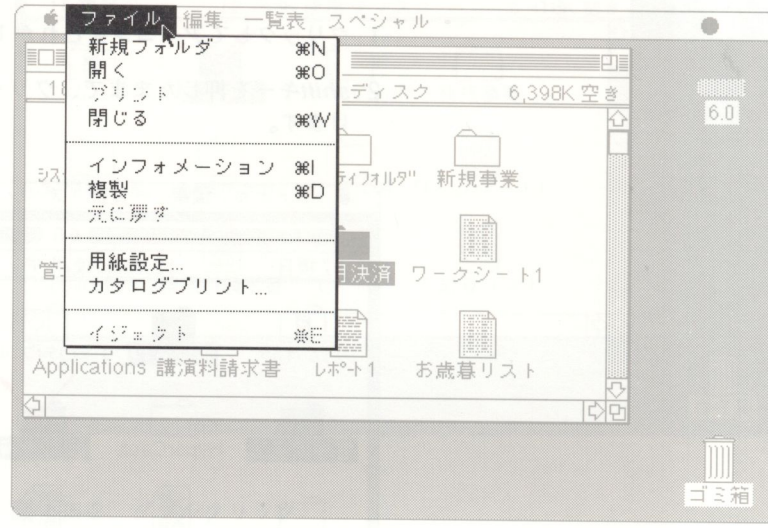
■ 図5-3　シフトクリックで点在するアイコンを選択する

*shift*キーを押し続けている限り、クリックを続けるだけで連続的に複数のアイコンが選択できます。複数のアイコンを選択した場合、同じ方法で部分的に選択を解除できます。選択を解除したいアイコンをシフトクリックすると、そのアイコンだけ選択が解除されます。

マウスボタンを押し続ける

1. ポインタをメニュータイトルやスクロールアローなど、スクリーンの動作を起こさせる部分に合わせます。
2. マウスを動かさずに、マウスボタンを押したままにします。

   マウスボタンを押し続けている間、その効果が持続します。たとえばスクロールアロー上で押し続けると、ウインドウの内容が連続的にスクロールします。また、メニュータイトル上で押し続けると、マウスボタンを放すまでメニューがプルダウンされたままの状態で表示されます。



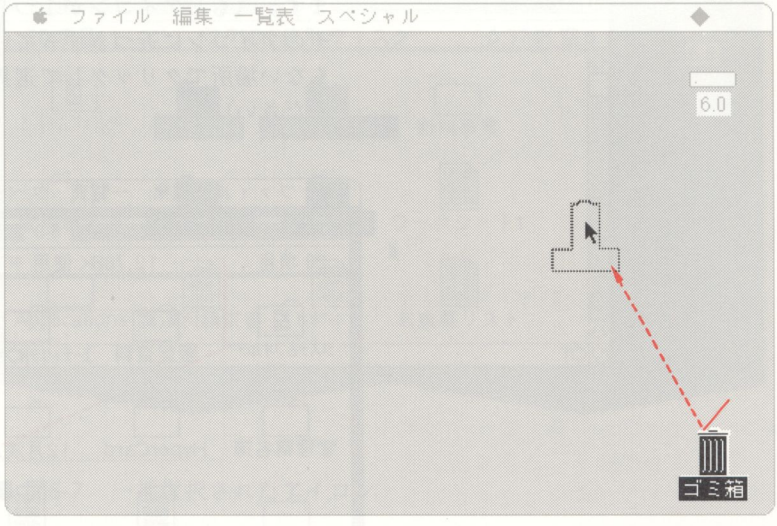
■ 図5-4　マウスボタンを押し続ける

ドラッグ

1. ポインタをアイコンのどれかに合わせます。
2. マウスボタンを押したまま、マウスを動かします。

   マウスボタンを押した時点でポインタのあるアイコンが黒い表示に変わります(選択されます) 。このままマウスを動かすと、アイコンの輪郭がポインタの動きにつれて移動します。
3. マウスボタンを放します。

   マウスボタンを放すと、アイコン自体がその輪郭の位置に移動します。



■ 図5-5　ドラッグ

1. マウスボタンを放す前に、ドラッグを開始した位置へポインタを戻します。

   ポインタをメニューバー内へ移動させ、そこでマウスボタンを放してもドラッグが中止できます。

   プルダウンメニュー内でのドラッグを中止するには、ポインタをメニューの外へ移動させ、そこでマウスボタンを放します。
2. マウスボタンを放します。

アイコンの一括選択

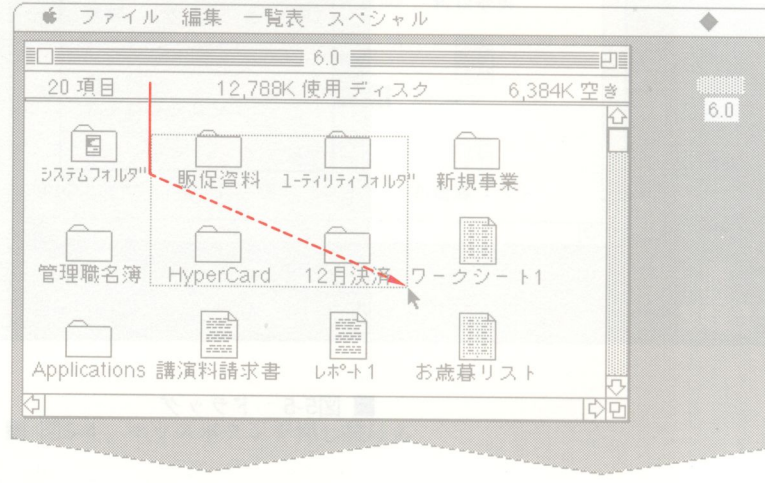
ウインドウ内に点在するアイコンは、シフトクリックで1つずつ選択できます。しかし、選択したいアイコンが1箇所にまとまって（グループで）表示されている場合、次の方法で一度に選択してしまうことができます。

1. 選択したいアイコン全てを取り囲む四角い枠を想定し、その枠の一角にポインタを置きます。

   ポインタはアイコン自体に触れない位置に置きます。

2. 想定した枠の対角線にそってドラッグします。

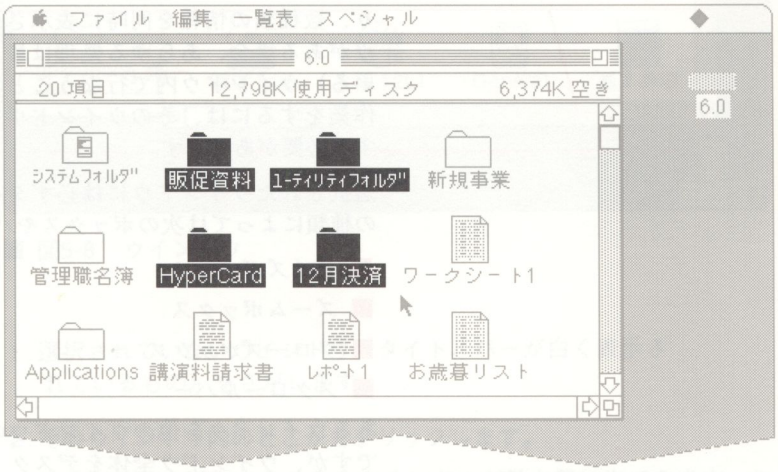
   想定した枠が実際に現れ、その輪郭がドラッグにともない大きくなります。（もしアイコンが1つしか選択されなかった場合、ポインタがそのアイコンに近づきすぎていたことになります。ウインドウ内に何もない場所でクリックして選択を解除し、ステップ1からやり直してください）



■ 図5-6　アイコンの一括選択

3. マウスボタンを放します。

マウスボタンを放した時点で枠内のアイコンが全て黒い表示に反転し、選択されたことがわかります。あとは選択されたアイコンのどれか1つにポインタを合わせるだけで選択された全アイコンが操作できます。この方法で、複数のアイコンを一度に“ゴミ箱”へドラッグしたり、別のフォルダへ移動したりできます。また、シフトクリックを用いるとアイコンの選択を1つずつ解除できます。



■ 図5-7　一括選択されたアイコン

この選択方法は、同じウインドウにあるアイコンのほか、デスクトップ上のアイコンに対しても有効です。異なったフォルダやディスクにある書類を同時に扱いたい場合、それぞれのアイコンをデスクトップのグレイ部分までドラッグすれば、そこで全て選択できます。

アイコンを一括選択すると、それらを一度に処理（プリントなど）できます。

ウインドウの操作

ウインドウの内容は、その一部または全部が四角い枠によって取り囲まれた状態にあります。表示される内容にはディスクやフォルダのディレクトリ、デスクアクセサリ、アプリケーションで作成する書類などが含まれます。ほとんどの種類のウインドウは自由に開閉することができるほか、移動、サイズ変更、および表示内容のスクロールができます。

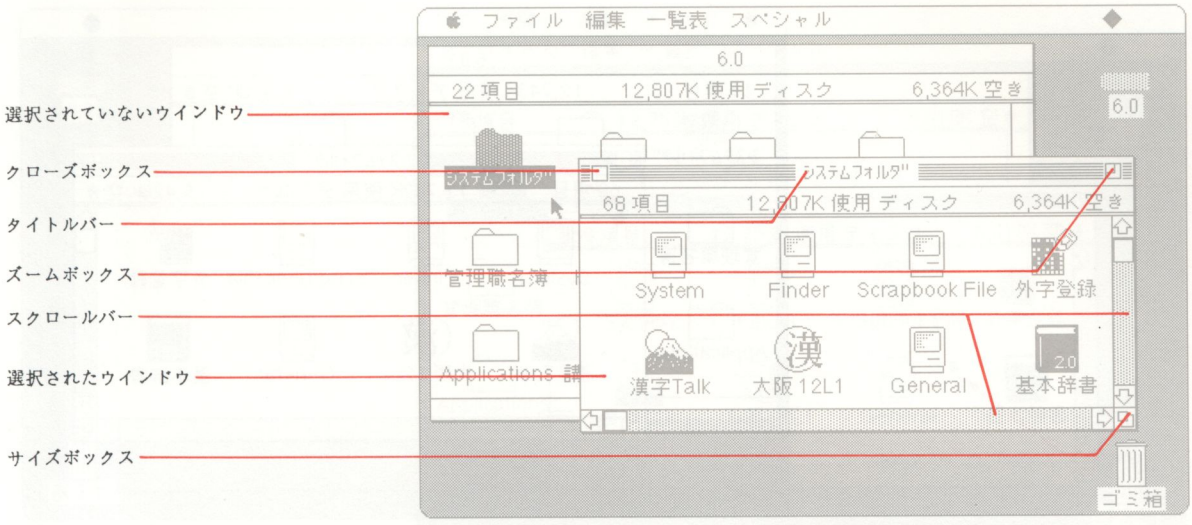
デスクトップには複数のウインドウを同時に開いておけます。これにより、数種類の情報を同時に表示させることが可能です。複数のウインドウがある場合、あらゆる処理は最上層に表示されている（＝選択されている）ウインドウ内で行なうことになります。これ以外のウインドウで作業をするには、そのウインドウをクリックして選択し最上層の表示にする必要があります。

選択されたウインドウには必ずタイトルバーがありますが、ウインドウの種類によっては次のボックスやバーを持つものがあります。

- サイズボックス
- ズームボックス
- クローズボックス
- スクロールバー

あるウインドウを他のウインドウの下に完全に隠してしまうことは可能ですが、ウインドウ全体をデスクトップの外側へドラッグすることはできません。また、ウインドウが見えなくなるまで縮小することもできません。

アプリケーション内では、ウインドウの動作が、デスクトップ上のそれと多少異なる場合があります。詳しくはそれぞれのアプリケーションに付属のマニュアルをご覧ください。



■ 図5-8　ウインドウ

ウインドウを選択する

1. 選択されていないウインドウ（タイトルバーが白く表示されているもの）をさがします。

2. そのウインドウ内のどこかをクリックします。

   ウインドウを選択するとそのウインドウが最上層に出てきます。これが選択されていないウインドウの上に重なると、下側のウインドウの一部または全部が見えなくなる場合があります。隠れてしまったウインドウの内容を見るには、選択されたウインドウを移動するか縮小します。

ウインドウを移動する

1. ウインドウのタイトルバー内のどこかにポインタを置きます。

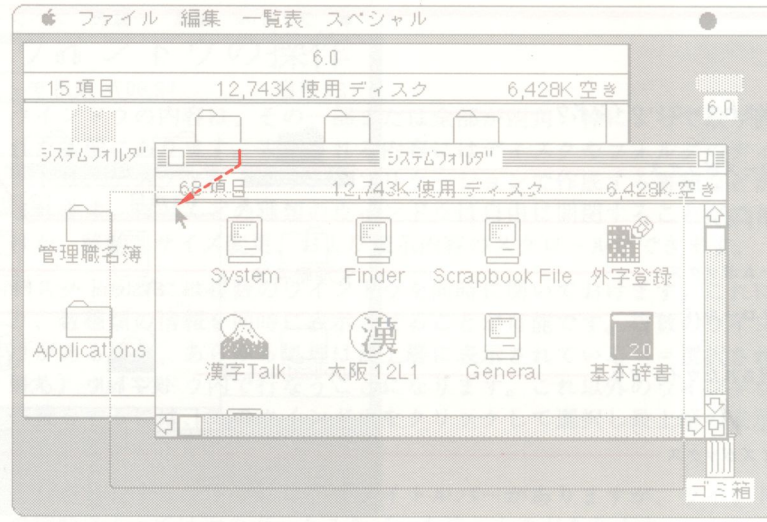
   このとき、クローズボックスやズームボックスにはポインタを合わせないようにします。

2. マウスボタンを押したままにします。

   このウインドウが今まで選択されていなかった場合、この操作で選択したことになります。コマンドキーを押したままマウスボタンを押せば、ウインドウを選択せずに移動できます。

3. ウインドウをドラッグして新しい位置へ移動させます。

   ウインドウ全体をデスクトップの外へ移動することはできません。



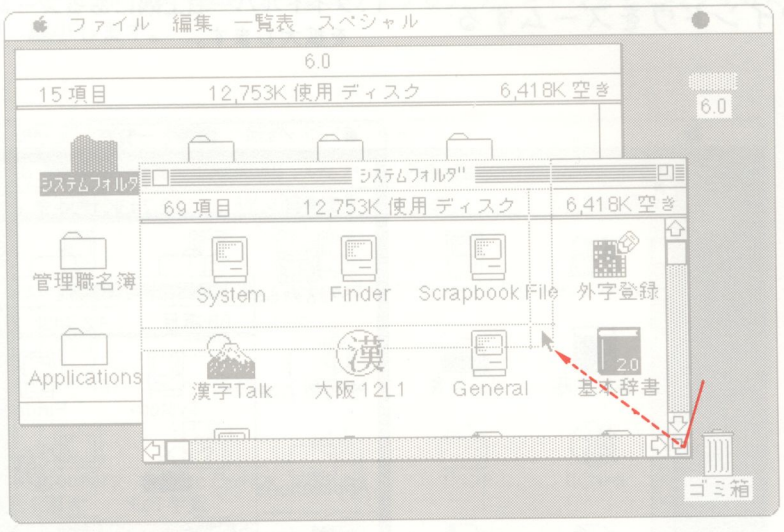
■ 図5-9　ウインドウの移動

途中で移動をキャンセルするには、ポインタをメニューバー内へ移動した後でマウスボタンを放します。

ウインドウサイズを変える

1. ウインドウ内のどこかでクリックし、そのウインドウを選択します。
2. ウインドウ右下隅にあるサイズボックスが見えない場合、そのウインドウを移動してサイズボックスが見えるようにします。
3. サイズボックスをドラッグします。

   水平にドラッグするとウインドウの幅が変化し、垂直にドラッグすると高さが変化します。斜め方向へドラッグすれば幅と高さを同時に変更できます。



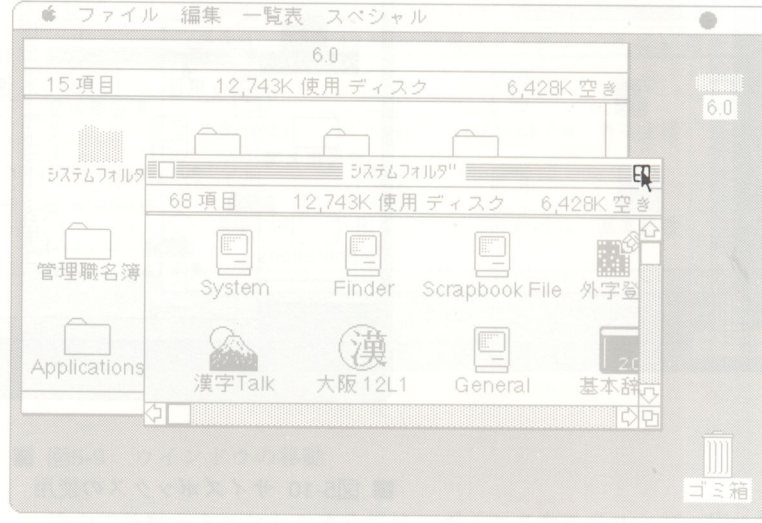
■ 図5-10 サイズボックスの使用

4. マウスボタンを放します。

マウスボタンを放した時点でウインドウのサイズが確定されます。

ウインドウをズームする

1. タイトルバー右上隅にあるズームボックスをクリックし、ウインドウを拡大します。



■ 図5-11　ズームボックスによるウインドウの拡大

2. ズームボックスをもう一度クリックし、ウインドウをもとのサイズに縮小します。



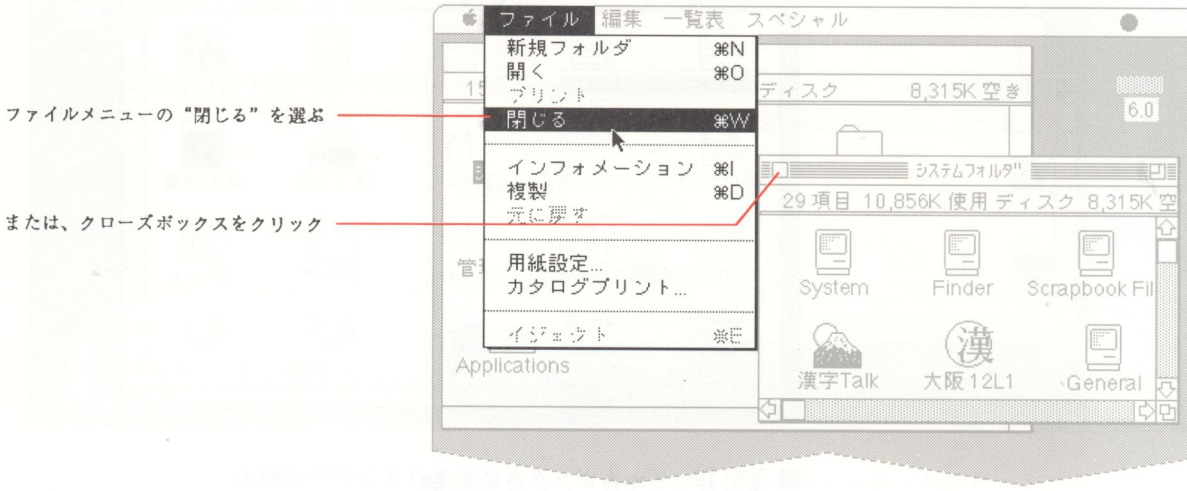
■ 図5-12 ズームボックスによるウインドウの縮小

ズームボックスのないウインドウもあります。その場合、サイズボックスで代用します。

ウインドウを閉じる

1. ウインドウ内のどこかをクリックして、閉じたいウインドウを選択します。

2. ファイルメニューから“閉じる”を選ぶか、タイトルバー左端のクローズボックスをクリックします。

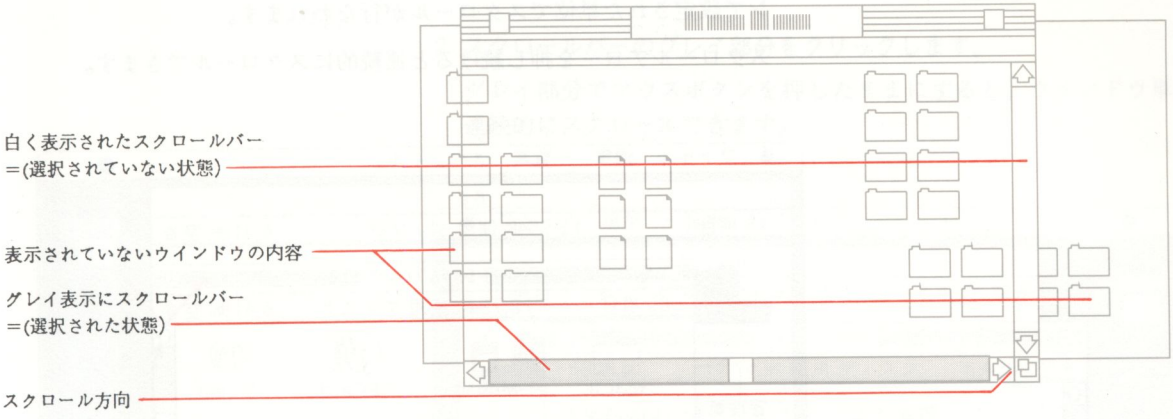


■ 図5-13　ウインドウを閉じる

クローズボックスを持たないウインドウもあります。その場合はウインドウ内のどこかでクリックすれば、そのウインドウを閉じることができます。アプリケーションが“閉じる”コマンドを持たず、ウインドウにもクローズボックスがない場合、そのアプリケーションに付属のマニュアルをご覧ください。

スクロールバーの機能

スクロールバーにより、ウインドウに一度で表示しきれない部分を見ることができます。ウインドウのスクロールバー部分がグレイ表示になっている場合、そのウインドウには現在表示されている以上の内容が収められていることを意味します。ウインドウの内容は各スクロールバーの方向にスクロールできます。



■ 図5-14　スクロールバーの機能

水平方向に伸びるスクロールバーがある場合、ウインドウの内容は左右にスクロールできます。同じ様に、垂直方向に伸びるスクロールバーでは上下のスクロールが可能です。この2種類のスクロールバーの片方しかないウインドウ、または両方ともないウインドウもあります。これにより、一度に表示しきれない内容がウインドウに収められているがどうかを知ることができます。

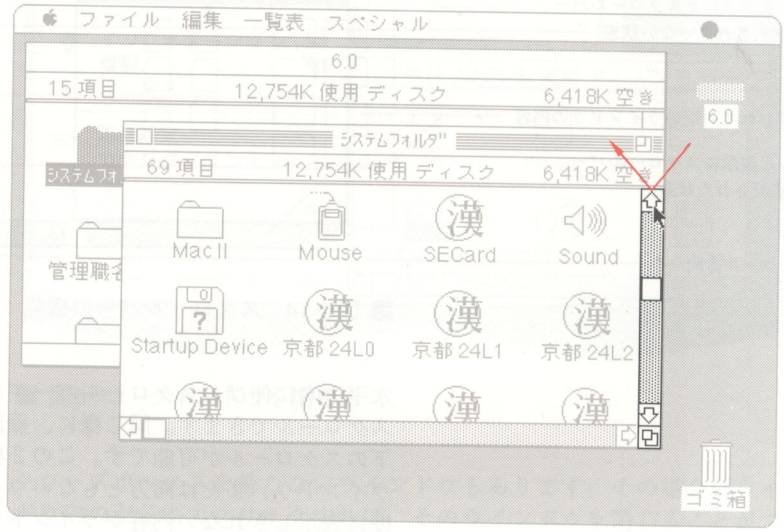
スクロールバーの操作によりスクロールの量をコントロールできます。

1行ずつスクロールする

1. 今見ている内容より上の部分を出すか、下の部分を出すかを決めます。
2. 見たい部分の方向を向いたスクロールアローをクリックします。

ワープロや表計算アプリケーションでは一度のクリックにつき書類の内容が1行スクロールされます。グラフィックスアプリケーションの場合は書類内容は行単位では処理されないため、そのアプリケーションで設定された単位でスクロールが行なわれます。

スクロールアローを押し続けると連続的にスクロールできます。



■ 図5-15 行単位のスクロール

ウインドウ単位でスクロールする

1. グレイ表示のスクロールバー上の小さな白い箱(スクロールボックス)の位置を確認します。

   スクロールボックスがスクロールバーの最上部または最下部にある場合、1方向にしかスクロールすることができません。スクロールボックスの両側にグレイ部分があれば、どちらの方向にもスクロールできます。

2. スクロールバーのグレイ部分をクリックします。

   グレイ部分でマウスボタンを押したままにすると、ウインドウ単位で連続的にスクロールできます。



■ 図5-16　ウインドウ単位のスクロール

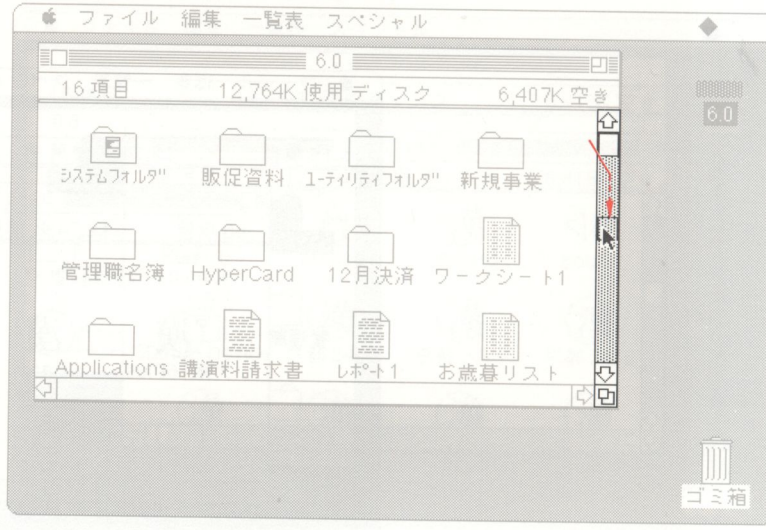
見たい部分までジャンプする

1. ディレクトリまたは書類のどの部分を見たいのかを決めます。

   垂直方向のスクロールバーはディレクトリまたは書類の長さを表し、水平なスクロールバーは幅を表します。

2. スクロールバーの全長を書類（またはディレクトリ）の長さと想定し、おおよその位置までスクロールボックスをドラッグします。

   たとえば、書類の中ほどを見たい場合にはスクロールボックスをスクロールバーの中央までドラッグします。



■ 図5-17　見たい部分までジャンプする

書類のページ番号をスクロールボックス内に表示するアプリケーションがあります。

テキストの編集

テキストの編集には、編集したい部分を選択すること、そしてその部分に変更を加えることの2段階の操作が必要です。この操作は、単にアイコンの名称を書き換える場合をはじめ、文章の並びを変えたい時、さらには書類全体に渡って手を加える時にも同じように使用します。通常の編集作業にはマウスおよびキーボードを使用しますが、ここではマウス操作と編集メニューを中心に解説します。

デスクトップ上では、次のものが入力および編集の対象となります。

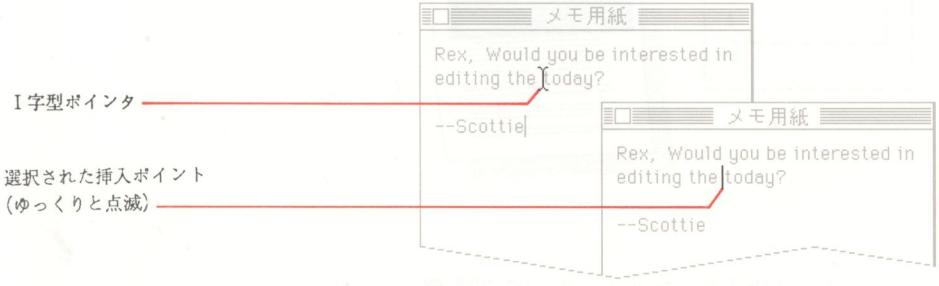
- アイコンの名称… ディスク、フォルダ、アプリケーション、書類など
- “スクラップブック”や“メモ用紙”などのデスクアクセサリ中のテキスト
- コメントボックス内のテキスト（ファイルメニューの“インフォメーション”を選ぶと表示されます）

各種アプリケーションでの入力および編集の詳細は、それぞれのアプリケーションに付属のマニュアルをご覧ください。このマニュアルでは第9章の「メニューコマンドのショートカット」のページも参考になります。

テキストを挿入する

1. マウスでI字型ポインタを入力したい位置へ移動し、クリックします。

   クリックした位置に挿入ポイント（ゆっくり点滅する小さな縦のバー）が現れます（方向キーを用いても挿入ポイントの移動ができます）。既存のテキストがない場合（ダイアログボックス内など）、挿入ポイントが所定の位置にセットされて現れることもあります。



■ 図5-18　挿入ポイントの設定

   挿入ポイントの点滅速度は3段階に切り換えることができます。詳しくは、第8章の「コントロールパネル（General）」のページをご覧ください。

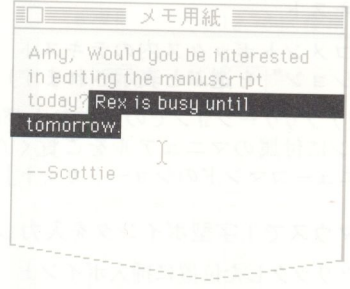
2. キーボードから入力を行ないます。入力したテキストは挿入ポイントの位置に表示されます。

テキストを選択する

1. I字型ポインタを選択したいテキストの先頭部分に合わせ、マウスボタンを押したままにします。
2. そのまま選択したいテキストの終りまでドラッグします。（2行にわたって選択する場合は斜め方向へドラッグできます）
3. マウスボタンを放します。

選択したテキストは、編集メニュー内のコマンドを用いて手を加えることができます。

欧文テキストでは、ダブルクリックで単語の選択ができます。



■ 図5-19　テキストの選択

テキストを移動する

ここでは、単語や文を移動して書類の内容に手を加える作業について解説します。コンピュータを利用した編集には、紙と鉛筆やタイプライタを用いる場合とは比較にならないほどの柔軟性があります。テキストの移動に使用するコマンドは、“カット”、“コピー”、および“ペースト”です。これらのコマンドを作業の内容に合わせて活用します。

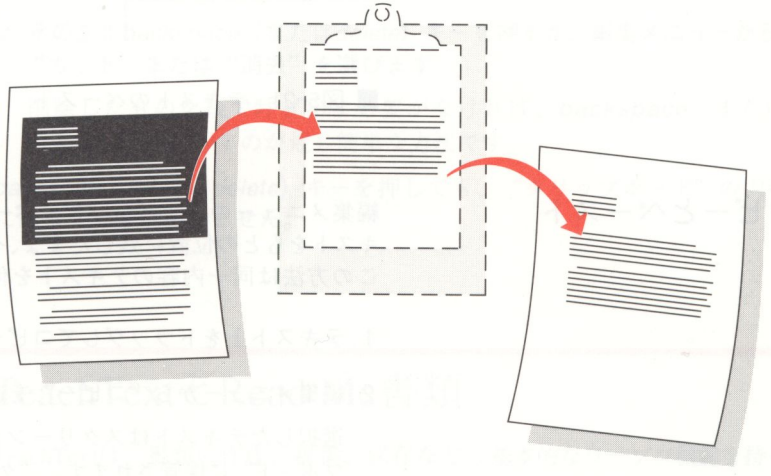
カットとペースト

編集メニューの“カット”および“ペースト”の2つのコマンドを組み合わせて使用すると、テキストを部分的に切り取り（カット）、その切り取った部分をほかの場所に貼り付ける（ペースト）ことができます。

1. テキスト上をドラッグして移動したい部分を選択します。

2. 編集メニューから“カット”を選びます。

   選択されたテキストがスクリーンから消えます。この時、カットしたテキストは“クリップボード”に保管されます。“クリップボード”の内容は、もう一度“カット”または“コピー”コマンドを使用するか、Macintoshの電源を切るまで変化しません。

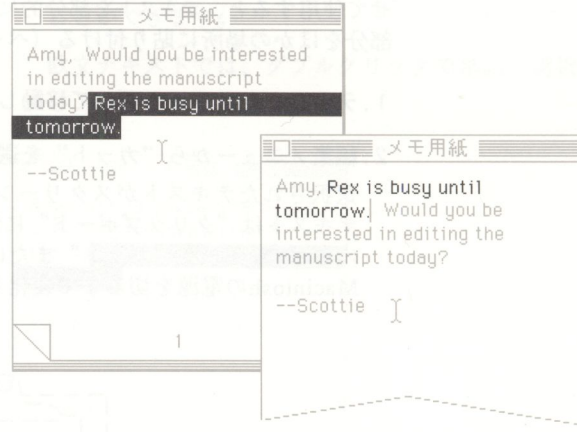


■ 図5-20　カットとペーストのしくみ

3. テキストを入れたい場所でクリックし、挿入ポイントを決めます。

4.編集メニューから“ペースト”を選びます。

“クリップボード”の内容が挿入ポイントの位置に現れます。“クリップボード”の内容は、そこに何か新しいテキストが保管されるまでそのまま残ります（Macintoshの電源を切ると“クリップボード”の内容は失われます）。“クリップボード”の内容は何度でも取り出してペーストできます。



■ 図5-21　テキストのペースト

コピーとペースト

編集メニューの“コピー”と“ペースト”を組み合わせて使用すると、テキストをもとの位置に残したまま、そのコピーを他の場所へ移動できます。この方法は同一内容のテキストを何度も使用したい場合などに便利です。

1.テキスト上をドラッグしてコピーしたい部分を選択します。

2.編集メニューから“コピー”を選びます。

選択したテキストはスクリーンから消えず、それと同じものが“クリップボード”に保管されます。“クリップボード”の内容は、もう一度“コピー”コマンドを使用するか、Macintoshの電源を切るまで変化しません。

3.テキストを入れたい場所でクリックし、そこに挿入ポイントをセットします。

4. 編集メニューから“ペースト”を選びます。

“クリップボード”の内容が挿入ポイントの位置に現れます。“クリップボード”の内容は、そこに何か新しいテキストが保管されるまでそのまま残ります（Macintoshの電源を切ると“クリップボード”の内容は失われます）。“クリップボード”の内容は何度でも取り出してペーストできます。

❖ スクラップブックについて：デスクアクセサリの“スクラップブック”を利用してもテキストおよびグラフィックスのコピーができます。詳しくは第8章「デスクアクセサリ」をご覧ください。

テキストを差し替える

1. テキスト上をドラッグして選択します。

2. そのまま差し替えたいものを新たに入力するか、編集メニューから“ペースト”を選び、すでにカットまたはコピーしたテキストと差し替えます。

テキストを削除する

1. テキスト上をドラッグして選択します。

2. そのまま*backspace*（または*delete*）キーを押すか、編集メニューから“カット”または“消去”を選びます。

削除したものを後で呼び出す必要がなければ、*backspace*（または*delete*）キーを押すのが最も簡単な方法です。

backspace（または*delete*）キーを押しても、“クリップボード”の内容には全く影響はありません。

TeachTextとRead Me書類

TeachTextは、書類の作成、編集、保存などの基本的なワープロ機能を持ったアプリケーションです。このマニュアルの第3章のレッスンを完了された方は、すでにTeachTextの起動方法および書類編集の基本操作をご存じのことと思います。

また、TeachTextはアップル社やその他のソフトウェア開発会社から製品に関するできる限り最新の情報を提供するためにも利用されています。通常、この情報は“Read Me”という名称の書類で提供され、マニュアルに収めることのできなかった出荷直前の情報が収められます（ディスク上に書類を作成するほうがマニュアルにするよりはるかに速いためです）。Read Me書類の内容を表示するためにTeachTextが使用されます。



■ 図5-22　Read Me 書類

TeachTextは、Macintoshに付属のシステムディスクに収められています。Read Me書類がある場合、提供されるディスクのどこかに収められています。通常は“Update Folder”という名称のフォルダ内にあります。TeachTextで参照できる書類を開く方法は2通りあります。

- TeachTextを起動します（TeachTextのアイコンを選択してファイルメニューから“開く”を選ぶか、このアイコンをダブルクリックします）。TeachTextが起動すると“名称未設定”のタイトルが付いたウインドウが開かれますので、これを閉じます（クローズボックスをクリックするか、ファイルメニューから“閉じる”を選びます）。次に、ファイルメニューから“開く”を選びます。すると、ダイアログボックスにTeachTextから開くことのできる書類およびフォルダが表示されます（Read Me書類があればそれも表示されます）。ここで、必要な書類を選択し、開きます。
- デスクトップで、開きたい書類（Read Meなど）を選択してファイルメニューから“開く”を選ぶか、そのアイコンをダブルクリックします。TeachTextは自動的に起動されます。

TeachTextのウインドウに呼び出した書類はプリントすることもできます。ただし、Read Me書類の内容は変更できないようになっています。

TeachTextを用いて書類を作成する場合、TeachTextが持つ編集機能が全て使用できます。ウインドウに表示されているテキストの一部をカットまたはコピーして“クリップボード”に保管したり、保管した内容をペーストしたりできます。だたし、“クリップボード”を開いてその内容を見ることはできません。

TeachTextの操作方法は第4章で詳しく解説されています。

第6章

デスクトップ：Macintoshの作業環境

この章では、“デスクトップ”と呼ばれる作業環境を実現するプログラム、Finder™（ファインダ）をご使用いただく上で重要ないくつかの概念を紹介した後、デスクトップの活用方法を処理内容別に解説します。

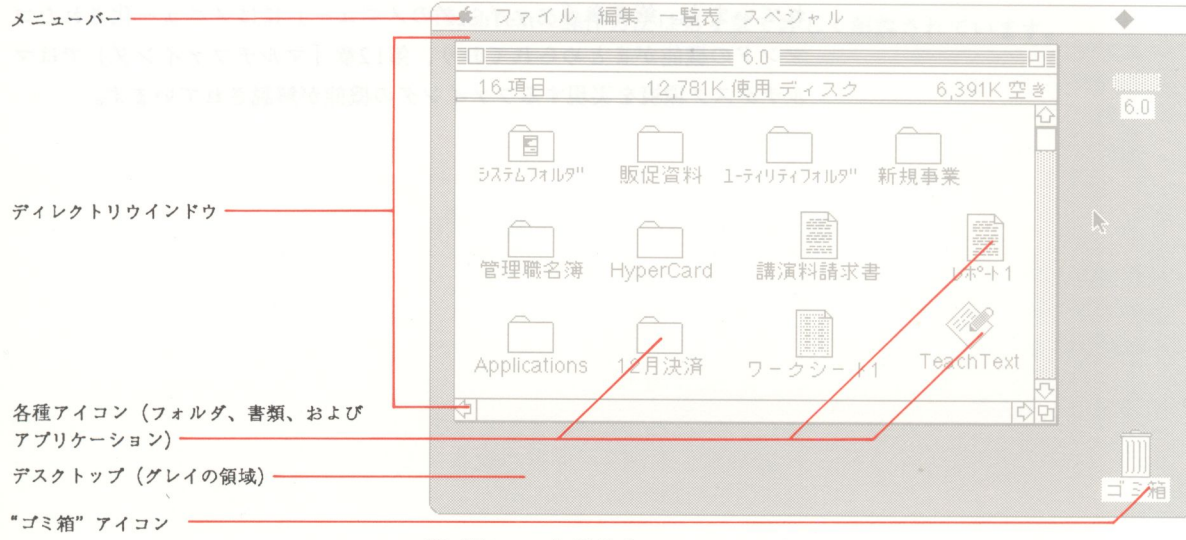
本書では、この章のほか、さらに2つの章がファインダの解説にあてられています。第7章「ファインダのメニュー」にはメニュー化されたコマンドの機能がまとめられており、第12章「マルチファインダ」ではマルチタスク環境を実現するファインダの機能が解説されています。

この章について

この章には、デスクトップにアイコンとして現れる書類、アプリケーション、フォルダ、およびディスクを管理するシステムソフトウェア、ファインダの役割がまとめられています。デスクトップ上のアイコンを開いたり整理する方法をはじめ、コピー、移動、破棄、名称変更、ロックの方法などが解説されています。

デスクトップとファインダ

Macintoshに電源を投入した後、最初に現れる画面を、机にたとえてデスクトップと呼んでいます。デスクトップ上部にはメニューバーがあり、その下のグレイの領域にはフォルダ、書類、アプリケーション、およびゴミ箱を表すアイコンが表示されます。デスクトップはMacintoshの作業環境を形成し、情報の整理、保存、編集、複製、変更、破棄など、あらゆる処理の基盤となります。デスクトップはFinder（ファインダ）と呼ばれるシステムソフトウェアによってつくり出され、またその機能が維持されています。



■ 図6-1　典型的なデスクトップ

Macintoshのマニュアルでは“ファインダ”という表現が頻繁に使用されていますが、スクリーンにはファインダを表すものがなく、デスクトップとの混同にもつながっているようです。ファインダ自体の存在は、システムフォルダ内の“Finder”というアイコンにより知ることができます。ファインダはMacintoshの始動時に自動的に開かれるため、そのアイコンは開けません。ファインダは常にキーボードやマウスの操作状態を監視し、アイコンの選択、アプリケーションの起動、書類の破棄などの操作に即応します。

❖ **起動アプリケーションの変更**：Macintoshの始動時、ファインダ以外のアプリケーションが開かれるようにも設定できます。詳しくは第7章の「スペシャルメニュー」のページをご覧ください。

ファインダの機能

ファインダは次にような機能を持っています。

- デスクトップ上の書類、アプリケーション、およびフォルダの管理（フォルダやディスクに収められたものも含まれます）
- 書類、アプリケーション、フォルダ、ディスクの開閉、コピー、移動、名称変更、および破棄
- ディスクのイジェクト
- ディスクのイニシャライズおよび内容の消去
- 書類の保護（書き込み禁止指定時）
- ファイルメニューの“インフォメーション”コマンドに対する書類情報の取り出し
- Macintoshコンピュータの電源オフおよびリスタート

アイコンの選択、ドラッグ、ダブルクリックなどのマウス操作、そしてメニューバーのコマンド機能もファインダにより実現されています。（メニューについては第7章でも詳しく解説されています）

ファインダのコントロール

ファインダは基本的にマウスやキーボードの操作に応じて動作するアプリケーションプログラムですが、眼に見えない形でフォルダや書類の状態を絶えず監視するほか、ディスク関連の処理も行ないます。アプリケーションは、機能によりワープロや表計算などに分類できますが、ファインダの場合、書類、フォルダ、ディスクなどを扱うことが、その機能です。通常、ファインダが行なう処理はスクリーンで確認できますが、進行中の作業に影響を与えない形でファインダが動作する場合もあります。

アイコンの操作

デスクトップには、ディスク、書類、フォルダ、およびアプリケーションを表す4種類のアイコンが表示されます。これらアイコンの操作は日常的に行なうことになります。

アイコンの名称を変更する

個々のアイコンには名称が付きます。アプリケーションを表すアイコンには、その名称が付いており、イニシャライズしたディスクにも名称が付きます。また、書類を初めて保存する際にも名称を指定します（書類を新たに開いた時点で名称の設定が必要なアプリケーションもあります）。フォルダの場合、通常は作成時に名称を付けます。一度付けた名称は後で変更できます。名称の設定や変更に関する情報も、ファインダにより管理されます。

アイコンが表示されている書類、フォルダ、アプリケーションまたはディスクの名称は、ディスクトップ上で変更できます。（目的のアイコンが他のディスクにある場合、ディスクを挿入するほか、フォルダを開いたりウインドウをスクロールする必要があるかもしれません）

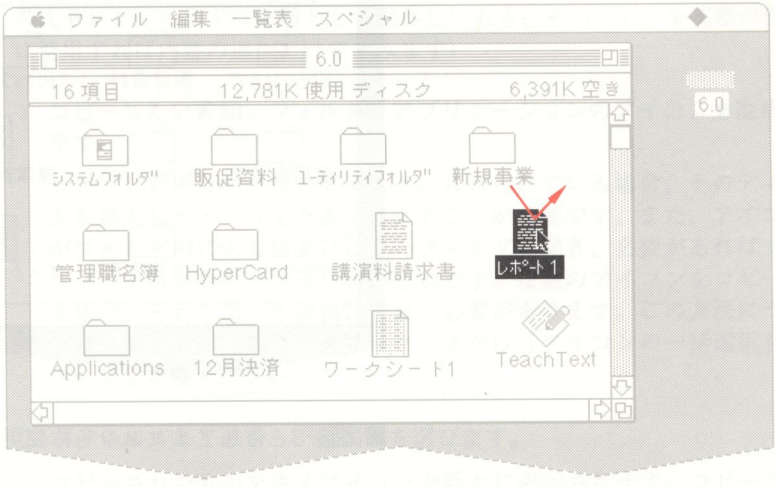
- **名称変更の例外：** “System” および “Finder” アイコンの名称は変更できません（これらの名称はシステムの一部として登録されています）。これらのアイコンをクリックしてもポインタがI字型に変化することはありません。

  ロックされている書類やアプリケーションの名称も変更できません。（ロックの設定および解除には、ファイルメニューの “インフォメーション” コマンドを使用します。この方法は、この後の「書類またはアプリケーションをロックする」のページで解説されています）

  また、ロックされているフロッピーディスクの名称も変更できません。（詳しくは第10章の「フロッピーディスクの内容を保護する」のページをご覧ください）

フロッピーディスクの名称を変更した場合、それと同じ名称をディスクのラベルに書き込んでおいてください。Macintoshがディスクの挿入を求める場合、デスクトップで付けた名称を用いるからです。

1.名称を変更したいアイコンを選択します。



■ 図6-2　アイコンの選択

2.クリックして挿入ポイントをセットします。

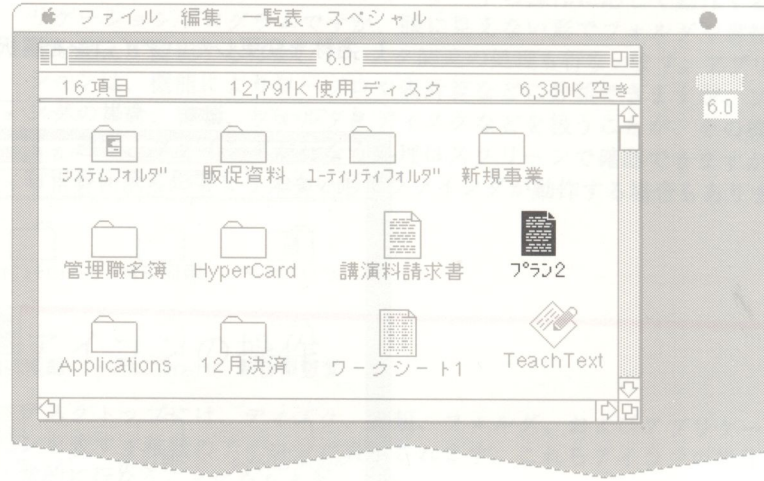
アイコンを選択すると、その名称部分も自動的に選択されます。全く異なった名称にしたい場合、このままステップ3へ進みます。

名称に追加する場合、I字型ポインタを移動させた後、クリックして挿入ポイントをセットします。

名称の一部分を削除または変更したい場合、ドラッグにより、さらにその部分を選択します。

3.新しい名称を入力します。

選択しておいた部分（今までの名称）が更新されます。



■ 図6-3　書類アイコンの名称変更

同一フォルダまたはディレクトリ内では、同じ名称を複数のアイコンに付けることはできません。すでに使用されている名称を付けようとすると警告メッセージが現れます。

アイコンには、その内容が分かるような名称を付けるようにしてください（後で見たとき識別しやすくなります）。書類およびフォルダには15文字（英語モードでは31文字）、またディスクには13文字（英語モードでは27文字）分までの長さの名称が設定できます。半角および英語モードのコロン（：）を除き、キーボード上の文字全てが使用できます。また、途中にスペースを入れることもでき、大文字も小文字も使用できます。ただし、半角または英語モードのピリオド（.）で始まる名称は使用できません。

4.必要があれば、編集メニューを利用して手を加えます。

詳しくは第5章の「テキストの編集」のページをご覧ください。

別の名称変更方法

アプリケーション内では、“新規保存”コマンドを利用して書類の名称を変更できます。これは、書類を保存する直前に行ないます。（詳しくはこの後の「新規保存コマンドを使う」のページをご覧ください）

書類、アプリケーション、フォルダをコピーする

アイコン表示されているもの、書類、フォルダ、およびアプリケーションは、その複製（コピー）を作成できます。この機能はバックアップの作成にも利用できます（詳しくは第10章の「ディスク全体をコピーする」のページをご覧ください）。書類のコピーを作成してコピーの方で作業をすれば、もとの書類をそのまま保存しておけます。この方法は、同じ形式で内容の異なる書類を複数作成する場合などに応用できます。（頻繁に使用する定型書式やレターヘッドは書類として保存しておき、そのコピーを実際の作業に使用すれば内容の追加だけですみます）

1. コピーしたい書類、フォルダ、アプリケーションのアイコンを選択します。

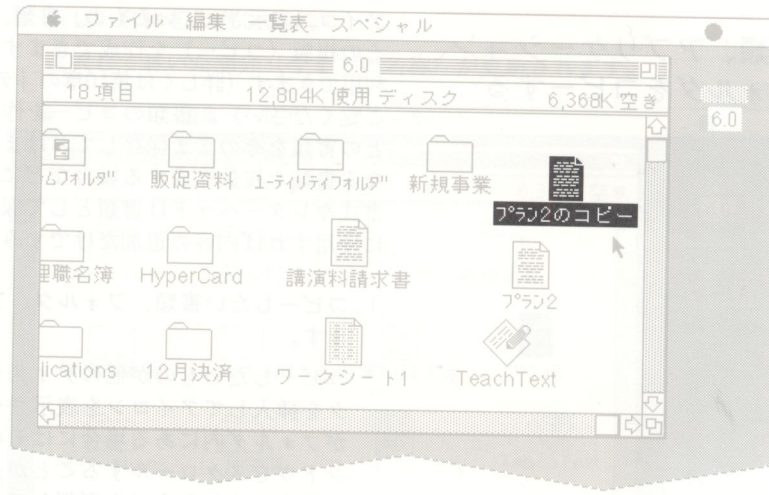
   コピーしたいものが他のディスクに収められている場合、そのディスクを挿入してアイコンを表示させることが必要です。また、アイコンがフォルダ内にある場合にはそのフォルダを開き、必要があればウインドウをスクロールすることが必要です。複数のアイコンをコピーする場合、それら全てを選択しておく必要があります。この方法については、第4章の「シフトクリック」または「アイコンの一括選択」のページをご覧ください。

2. ファイルメニューから“複製”を選びます。

   コピーされたものを表すアイコンが新たに表示されます。コピーされたばかりのアイコンの名称は、コピー元の名称に“のコピー”という文字列が付きます。たとえば、“メモ1”という書類のコピーには“メモ1のコピー”という名称が付きます。通常のアイコンと同様、コピーしたアイコンも他のフォルダやディスクにドラッグできます。

3. コピーしたアイコンの名称を変更します。

   コピー作成直後は、そのままキーボードから新しい名称を入力できます。これ以外の場合は、まず目的のアイコンをクリックして選択してから名称を変更します。詳しくは、この章の「アイコンの名称を変更する」のページをご覧ください。



■ 図6-4　アイコンのコピー

書類、フォルダ、アプリケーションを同一ディスク内で移動する

1. 移動したい書類、フォルダ、アプリケーションのアイコンを選択します。
2. アイコンを移動させたい場所までドラッグします。

基本的には、アイコンのドラッグは、それが表す書類、フォルダ、またはアプリケーションを移動させることを意味します。

同一ディスク内のどこか（“ゴミ箱”以外）にアイコンをドラッグすると、書類、フォルダ、またはアプリケーションの保存場所を変更できます。アイコンを“ゴミ箱”へドラッグすると、書類、フォルダ（およびその内容）、アプリケーションを破棄できます。（アプリケーションの場合、破棄前に確認のため警告メッセージが現れます。ロックされている書類やアプリケーションの場合、警告メッセージは破棄できないことを知らせてくれます。ロックについては、この後の「書類またはアプリケーションをロックする」および「ゴミ箱を使う」のページをご覧ください）

書類、フォルダ、アプリケーションを別のディスクにコピーする

書類、フォルダ（およびその内容）、およびアプリケーションは、デスクトップにそのアイコンが表示されていればディスク間でコピーできます。ディスク間のコピーの場合も、コピー元およびコピー先のディスクアイコンが両方とも表示されていなければなりません。ここではコピー元を“送り側”、コピー先を“受け側”と呼ぶことにします。

1. 必要なら、受け側ディスクを挿入し、そのアイコンをデスクトップに表示させます。

   ディスクアイコンまたはそのアイコンから開いたディレクトリウインドウが表示されていることが必要です。

2. 必要なら，送り側ディスクを挿入し、そのアイコンをデスクトップに表示させます。

   1フロッピードライブシステムの場合、送り側ディスクを入れる前に受け側ディスクをイジェクトしておきます。これにはファイルメニューの“イジェクト”コマンドを用います。（“イジェクト”コマンドを用いると、イジェクトしたディスクのアイコンがグレイ表示でデスクトップ上に残ります）

3. 送り側ディスクのアイコンを開きます。コピーしたいアイコンがフォルダ内にある場合、そのフォルダを開き、必要ならスクロールして目的のアイコンを表示させます。

   送り側ディスクのディレクトリウインドウを開いておき、コピーするアイコンが見えるようにしておく必要があります。受け側ディスクは、アイコンのままでもウインドウ化した状態でも構いません。

   複数のアイコンをコピーする場合、それら全てを選択しておく必要があります。この方法については 第4章の「シフトクリック」または「アイコンの一括選択」のページをご覧ください。



■ 図6-5　ディスク間のコピー

4. コピーしたいアイコンを受け側にドラッグします。

ドラッグ先は、ディスクやフォルダのディレクトリウインドウでもアイコン（またはグレイ表示のアイコン）でも構いません。

ディレクトリウインドウ内へコピーする場合、そのウインドウ内であればドラッグ先はどこでも構いません。アイコン上へドラッグしても、ファインダが自動的にそのアイコンに最も近くて保存可能な場所を選んでくれます。

1フロッピードライブシステムの場合、Macintoshはコピーが完了するまでに何度かダイアログボックスを表示し、ディスクを入れ換えるタイミングを知らせてくれます。

5. 送り側と受け側でアイコン名の重複がある場合、ダイアログボックスが現れますので、コピーの実行／中止を判断します。

受け側にコピーするものと同じ名称のものがある場合、Macintoshはダイアログボックスにより受け側の内容をコピーと入れ換えて良いかどうかの確認を求めてきます。この時“ＯＫ”ボタンをクリックすると、コピーが実行され、受け側の内容が完全に置き換えられます。（フォルダをコピーしている場合、フォルダごと内容が置き換えられます）
コピーされたものは、ディレクトリウインドウ内に表示されます。（ディスクまたはフォルダアイコンにドラッグした場合、そのディレクトリウインドウを開いてコピーの結果を確認することになります）

6. 以上の操作をコピーではなく移動にするには、コピーが完了した時点で送り側のアイコンを“ゴミ箱”へドラッグします。

ディスク間でアイコンのドラッグコピーを行なった場合、安全のため送り側のアイコンはそのまま残されます。送り側に残ったアイコンが不要の場合、そのアイコンを“ゴミ箱”へドラッグすれば破棄できます。また、破棄したアイコンが占有してていたディスクスペースを解放するにはスペシャルメニューから“ゴミ箱を空にする”を選びます。

アプリケーションの使用中にも書類のコピーができます。詳しくは、この後の「書類とアプリケーションの操作」のページをご覧ください。

アイコンの情報を調べる

アプリケーションのバージョンや書類のサイズ、作成日時などの情報は、ファイルメニューの“インフォメーション”コマンドを用いてアイコンごとに確認できます。このコマンドは書類やアプリケーションをロックする際にも使用します。（アイコンをロックしておくと誤操作による名称変更や破棄を防げます）

❖ マルチファインダとインフォメーションウインドウ：インフォメーションウインドウにはマルチファインダ使用時に用いる機能が組み込まれています。この機能は、アプリケーション実行のために確保するメモリサイズ（容量）を調節することを目的としています。この機能を利用するには、メモリ管理について理解しておく必要があります。詳しくは第12章の「メモリ管理について」をご覧ください。

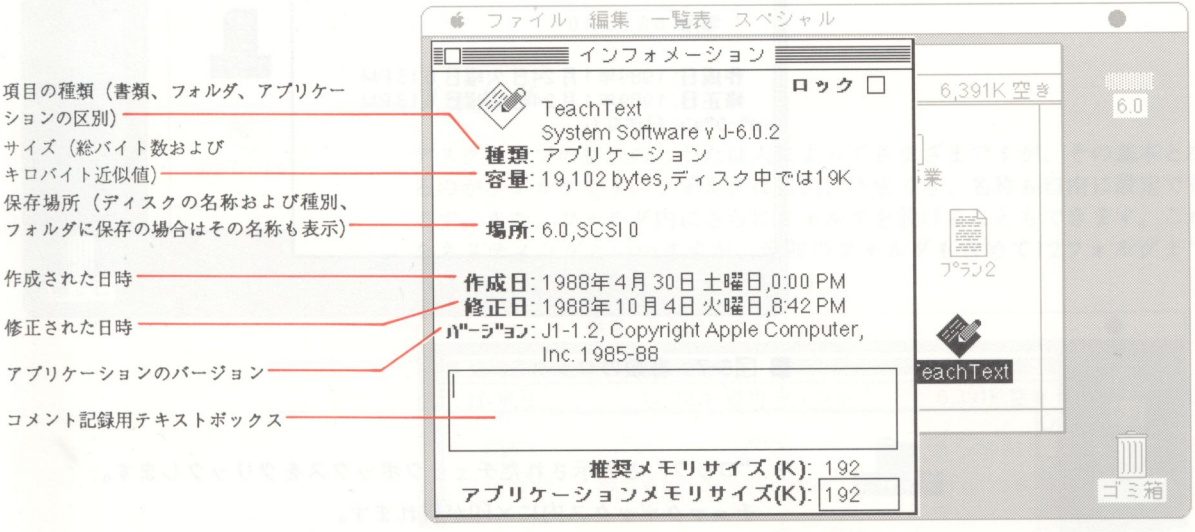
“インフォメーション”コマンドを使う

1. 書類またはアプリケーションのアイコンを選択します。

   複数のアイコンを選択しておくと、それら全てに関する情報を表示できます。

2. ファイルメニューから“インフォメーション”を選びます。

   選択しておいたアイコンそれぞれについて、インフォメーションウインドウが表示されます（このウインドウは、デスクトップで開くウインドウと同じように移動／選択し、閉じることができます）。ウインドウには次のような情報が表示されます。



■ 図6-6　インフォメーションウインドウの例

MultiFinder™（マルチファインダ）使用時にアプリケーションのインフォメーションウインドウを開くと、さらに詳しい情報がテキストボックスの下に表示されます。詳しくは第12章「マルチファインダ」をご覧ください。

書類またはアプリケーションをロックする

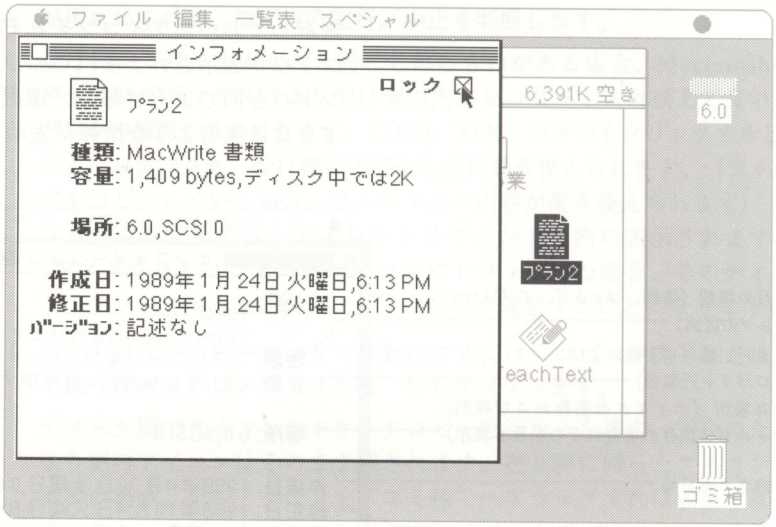
大切な書類やアプリケーションはロックしておくと、誤操作による名称変更や破棄を防げます。ロックされた書類は開いたりプリントしたりすることはできますが、その内容に変更を加えて保存することはできません。

フロッピーディスクの場合、ディスク自体についたロック機構を用います。詳しくは第10章の「フロッピーディスクの内容を保護する」のページをご覧ください。

1. ロックしたい書類またはアプリケーションのアイコンを選択します。

2. ファイルメニューから“インフォメーション”を選びます。

   インフォメーションウインドウが現れます。



■ 図6-7　書類のロック

3. “ロック”と表示されたチェックボックスをクリックします。

   チェックボックス内に×印が現れます。

   どの書類やアプリケーションがロックされているかを確認するには、一覧表メニューからアイコン以外の表示を選びます。ディレクトリウインドウを見ると、ロックされている項目の右側には小さな鍵のマークが表示されます。

書類またはアプリケーションのロックを解除する

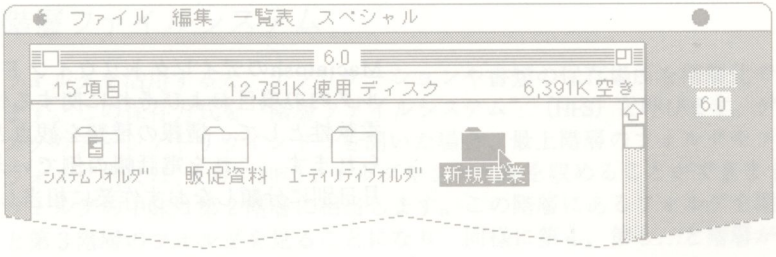
1. ロックを解除したい書類またはアプリケーションのアイコンを選択します。
2. ファイルメニューから“インフォメーション”を選びます。
   インフォメーションウインドウが現れます。
3. ×印の付いた“ロック”のチェックボックスをクリックします。
   これでロックが解除されました。

フォルダ、ディレクトリ、階層ファイルシステムを活用する

Macintoshでワープロ、表計算、グラフィックスなどのアプリケーションを使用する場合、作業内容は全て書類として作成し保存することになります。そのまま作業を続けると、書類やアプリケーションの数も増え、デスクトップにアイコンを表示させておく余地がなくなるかもしれません。

フォルダ

デスクトップの整理のしかたは人によってさまざまですが、その基本となるのがフォルダです。フォルダは自由に作成でき、名称も自由に設定できます。また、フォルダ内にさらにフォルダを設けることもできます。これをネスティングといいますが、最初のフォルダも含めて12フォルダまでネスティングを続けることができます。



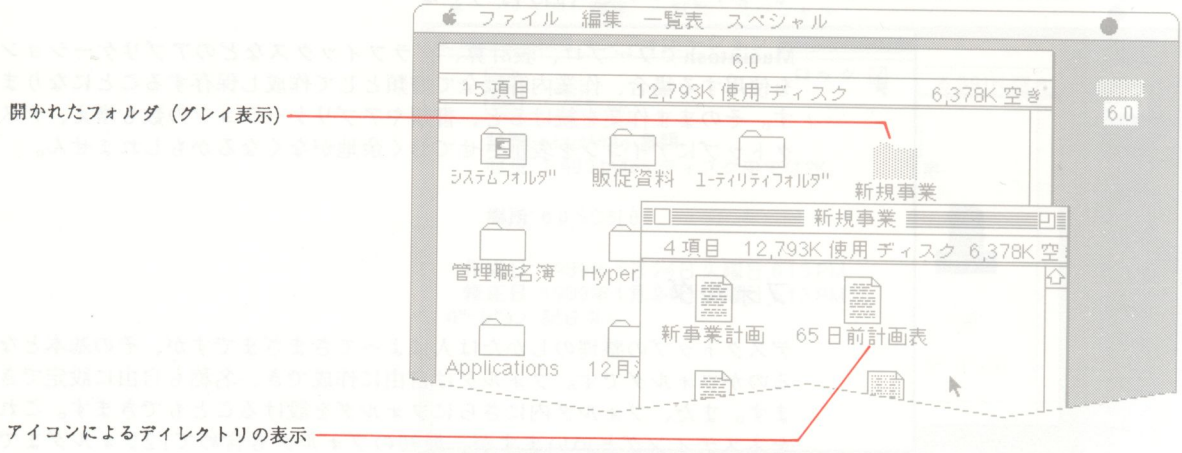
■ 図6-8 Macintoshのフォルダ

フォルダを活用するとアプリケーションや書類を階層的に整理し、使いやすい形で保存しておけます。

ディレクトリ

Macintoshが持つフォルダ機能の便利な点は、書類やアプリケーションの保存場所を変えてもファインダが常にその状態を把握してくれることにあります。この保存場所に関する情報は、**ディレクトリ**として記録されます。フォルダを作成する度にファインダは自動的に新しいディレクトリを設け、フォルダに対する変更をただちにディレクトリの内容に反映させます。

作成したフォルダの数にかかわらず、フォルダごとに1つのディレクトリが割り当てられます。フォルダを開いた時に表示されるウインドウの内容がディレクトリに相当します。（ディスクの場合も同様です）



■ 図6-9　フォルダのディレクトリウィンドウ

Macintoshのディレクトリウインドウには、ちょうど電話帳のようにフォルダ内の項目およびそれに関する情報が収められます。電話帳にはない柔軟性として、情報の種類を観点として表示形式を変化できる点があげられます。これを電話帳の例でいえば、加入者を住所別や電話機設置年月日別に分類しなおす作業に相当します。

一覧表メニューから、それぞれのフォルダにつき次の情報を基準に項目の表示形態および順序を選べます。

- アイコン（通常サイズまたは小型）
- 名前（英語の場合、アルファベット順）
- 日付（最新の項目から）
- サイズ（降順）
- 種類（書類、アプリケーション、フォルダの順。英語の場合、種類ごとにアルファベット順）
- カラー（カラーモニタ使用のMacintosh II系機種のみ）

一覧表メニューからの指定は選択されたディレクトリウインドウに対してのみ有効で、変更はただちに表示に反映されます。この機能を利用して最もディスクスペースを多く占有しているアプリケーションを調べたり、改訂を重ねた書類のうち最新のもの見つけたりできます。

ディレクトリウインドウの表示形態を変えても通常の作業には何の影響もありません。どのような表示状態であっても、項目はアイコンにより識別できます。一覧表メニューでアイコン以外の表示（名前、日付、サイズ、または種類）を選んでおいても、各項目の左端には小さなアイコンが表示されます。これらのアイコンも、通常のアイコンと同様にクリック、ダブルクリック、またはシフトクリックを用いた操作ができます。

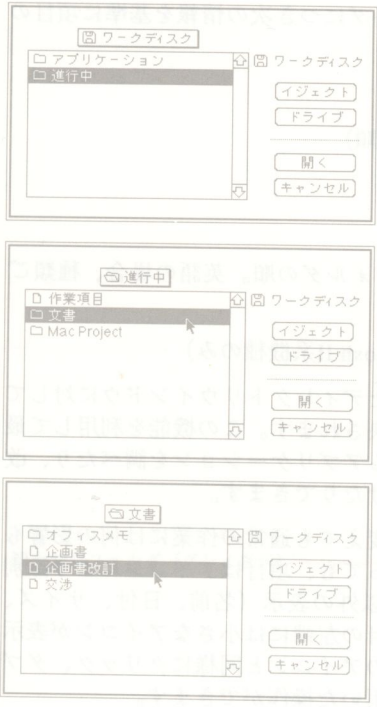
あるウインドウ内の表示形態を変えても、他のウインドウには何の影響もありません。

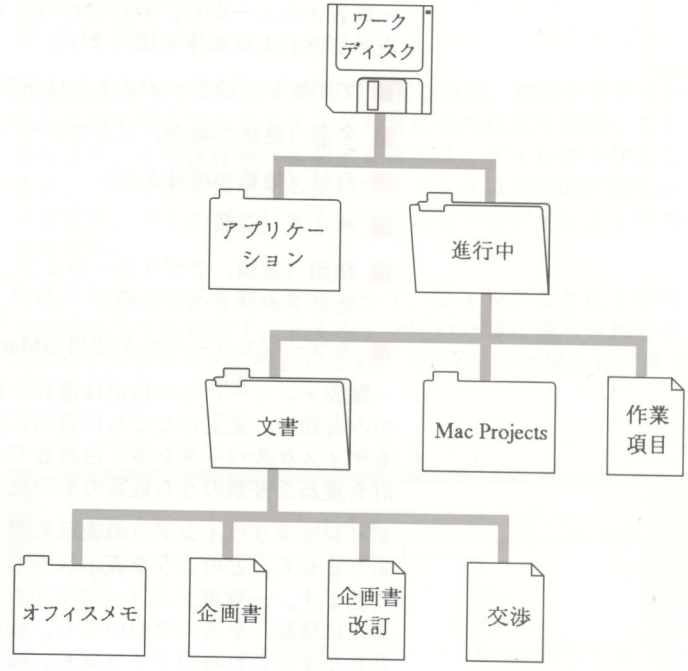
一覧表メニューについては第7章でも詳しく解説されています。

階層ファイルシステム

フォルダを活用すると、アプリケーションや書類の保存場所を階層化できます。この保存方式を“階層ファイルシステム”（HFS）と呼びます。ディスクのディレクトリウインドウを開いた場合、最上階層のフォルダやファフォルダ内には、さらに別のフォルダやファイルを収めることができます。フォルダの中味は第2階層に相当します。この階層にあるフォルダを開くと第3階層のフォルダを見ることになり、同様に第4、第5...と階層が深くなって行きます。

フォルダ内にフォルダを設けることを**ネスティング**といいます。12階層までネスティングを続けることができますが、一般に5階層以上になると操作が煩雑になることがあります。





■ 図6-10　階層ファイルシステムの構造

多重の階層でも、書類やフォルダの名称が分かっていれば“ファイル検索”を使用して簡単にさがし出せます。“ファイル検索”の使用方法については、付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

フォルダを作成する

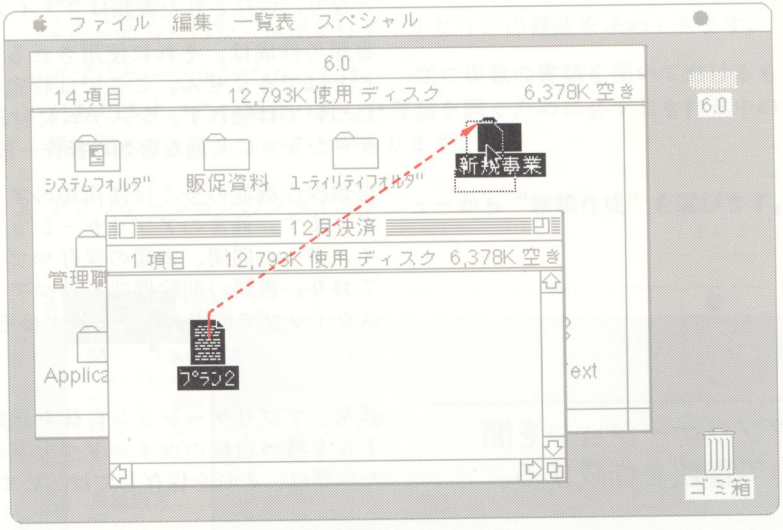
1. ファイルメニューから“新規フォルダ”を選びます。
   作成したばかりのフォルダには“空きフォルダ”の名称がつきます。

2. そのまま新しい名称を入力します。

フォルダ間で書類、フォルダ、アプリケーションを移動する

1. フォルダ内から移動させたい項目のアイコンを、他のフォルダのアイコン（またはウインドウ）へドラッグします。

   他のディスクのフォルダへ移動させたい場合、移動ではなくコピーを行ないます。



■ 図6-11　フォルダ間で書類を移動する

2. 移動元と移動先でアイコン名が重複していることを知らされたら、移動の必要性を考慮します。

   移動を続行するには、“ＯＫ”をクリックします。

   同一フォルダ内で書類またはフォルダの名称を重複させることはできません。複数の書類またはフォルダに同じ名称を付けたい場合、それぞれを異なったフォルダに保存してください。

❖ 注意：移動先に移動するものと同じ名称のものがある場合、Macintoshは内容を入れ換えて良いかどうかの確認を求めるダイアログボックスを表示します。ここで“ＯＫ”ボタンをクリックすると移動先の内容が置き換えられます。（フォルダをコピーしている場合、フォルダごと内容が置き換えられます。この場合、フォルダ内での名称の重複は無視されます）

   移動によって内容を入れ換えたくない場合には“キャンセル”ボタンをクリックします。同一名称を持つもののどちらか一方の名称を変更した後で、もう一度移動先へドラッグを行ないます。

書類とアプリケーションの操作

Macintoshでは、作業の結果は全て書類として扱われます（アプリケーションによっては文書又はドキュメントとも呼ばれます）。小さなメモや表計算のワークシートなど、情報の種類は異なっていても保存時には書類となり、保存された書類はファインダによりアイコン表示されます。

書類の作成は、それに使用されるアプリケーションと切り離して考えることはできません。ここでは特定のアプリケーションの動作や使用方法については触れず、システムに付属のTeachTextを例に、あらゆるアプリケーションに共通な書類の操作一般について解説します。

書類操作機能の多くは使用中のアプリケーションを離れることなく利用できます。通常のアプリケーションには、書類の作成をはじめ、書類ウインドウの開閉、書類の保存やプリントなどが標準機能として装備されており、書類の削除機能を持つアプリケーションもあります。また、デスクトップで作成したフォルダはそのまま使用できます。

アプリケーションを開いて書類を作成する

通常、アプリケーション自体を始動すると“名称未設定”のようなタイトルを持つ白紙のウインドウを開かれます。このウインドウ内で行なった作業は、それを保存してはじめて書類として扱われるようになります。

1. 使用したいアプリケーションのアイコンを選択します。

   アプリケーションが他のディスクに収められている場合、そのディスクを挿入してアプリケーションのアイコンを表示させることが必要です。また、アイコンがフォルダ内にある場合にはそのフォルダを開き、必要があればウインドウをスクロールする操作が必要です。

2. ファイルメニューから“開く”を選びます。

   かわりに、アイコンをダブルクリックしても始動ができます。

   アプリケーションが始動すると、名称が設定されていないウインドウが表示されます。

3. アプリケーションのウインドウ内で作業を行ないます。（作業の内容はアプリケーションによって異なります）

4. 作業内容を書類に保存し、名称を設定します。

   これで書類が作成されました。

アプリケーション内で書類を新規作成する

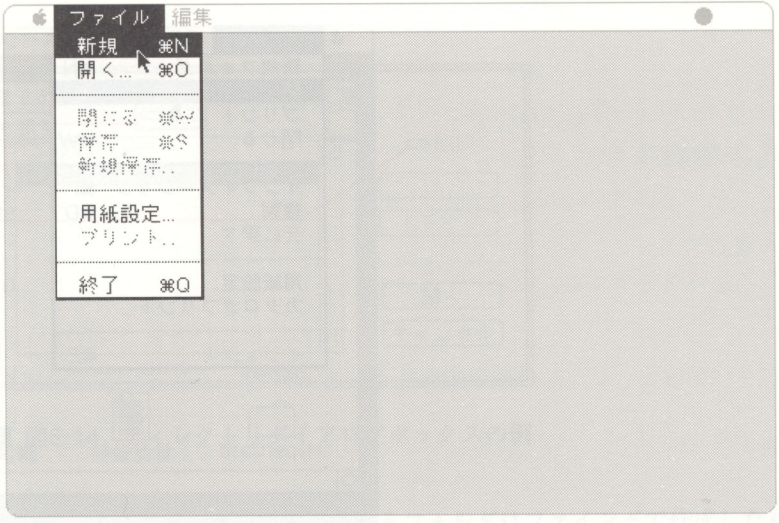
ここではアプリケーションが既に始動され、書類を開いているものとします。次の操作により書類に閉じた後、引き続き新しい書類を作成します。

1. ファイルメニューから“閉じる”を選び、現在表示されている書類を閉じます。

   書類の内容に変化があった場合、アプリケーションはその書類を閉じる前に新しい内容で保存を行なうかどうかの確認を求めてきます。

   アプリケーションによっては、一度に複数の書類を開いておけるものがあります。この場合、新しい書類を開くために必ずしも作業中の書類を閉じなくてもよいことがあります。

2. アプリケーションのファイルメニューから“新規作成”を選びます。



■ 図6-12　新しい書類の作成

新しい書類ウインドウが表示されます。アプリケーションの多くは保存の際に名称の設定を求めてきますが、一部には書類の作成直後に名称設定を要するものがあります。

ファインダから既存書類を開く

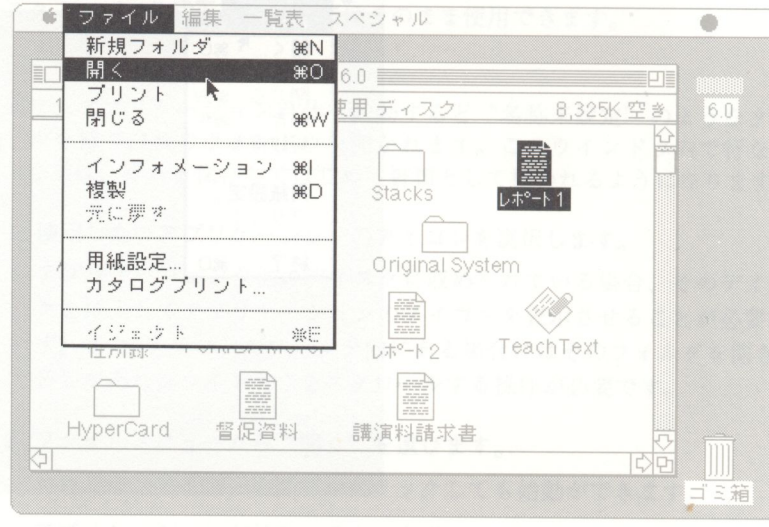
書類を開くには、そのアイコンを選択した後に開く操作を行ないます。この場合、書類を開くと同時にその作成に使用されたアプリケーションが自動的に始動されます。

1. 作業したい書類のアイコンを選択します。

   書類や、その作成に用いたアプリケーションが他のディスクに収められている場合、そのディスクを挿入し、書類はそのアイコンを表示させることが必要です。また、アイコンがフォルダ内にある場合にはそのフォルダを開き、必要があればウインドウをスクロールする操作が必要です。

2. ファイルメニューから“開く”を選びます。

   目的の書類アイコンをダブルクリックするだけでも開けます。

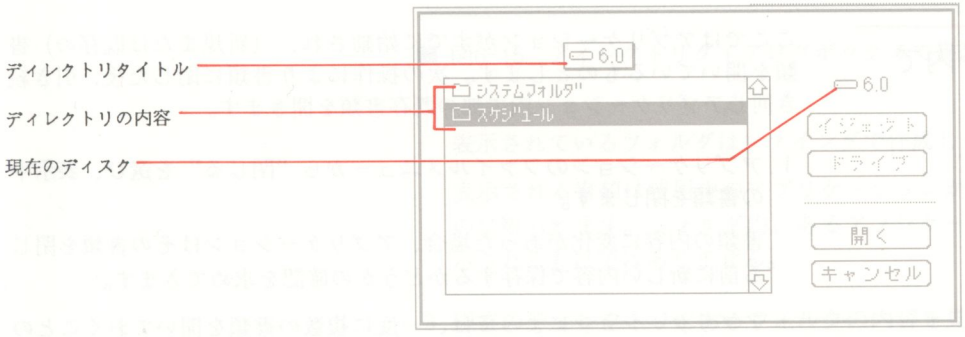


■ 図6-13　ファインダから書類を開く

ディレクトリダイアログボックス

アプリケーションにおいても階層ファイルシステムの活用が考慮されています。ファイルメニューから“開く”または“新規保存”を選んだ時、または書類作成後はじめて“保存”を選んだ時、ファインダで作成したフォルダの階層がアクセス可能となります。（フロッピーディスクの場合、フォルダの活用はイニシャライズに条件があります。詳しくは第10章「フロッピーディスクについて」をご覧ください）

アプリケーションでの階層ファイルシステムの利用には、ディレクトリダイアログボックスが用いられます。ダイアログボックスのタイトル部分には現在のフォルダまたはディスクのディレクトリ（アイコン付き）が表示され、その下にはフォルダの内容が（英語の場合はアルファベット順で）表示されます。また、右上部分には現在のディスク（アイコン付き）が示されます。



■ 図6-14　ディレクトリダイアログボックスの例

このダイアログボックスに表示されるフォルダはファインダで作成したものです。しかし、表示される書類は使用中のアプリケーションから開くことのできるものに限られています。フォルダ内にあるアプリケーションや書類が全て表示されるわけではありません。

アプリケーションからフォルダを開く手順も、ファインダの場合と同じです。ダイアログボックスに表示のフォルダを選択し“開く”ボタンをクリックします。また、フォルダの名称部分をダブルクリックするだけでも同じように開けます。スクロールバーでリスト中を上下に移動し、開きたいフォルダを選ぶこともできます。

このようにフォルダ内のフォルダを開くことで、階層ファイルシステム内を移動し、目的の書類を捜し出したり保存場所を選んだりできます。

❖ ショートカット：現在のディレクトリで開きたいもの名称が分かっている場合、その名称をタイプしてすばやく目的のフォルダや書類を見つけ出せます。1文字タイプする度にリスト中で該当する項目が順に選択されます。たとえば、文字Mをタイプすると、Mで始まる名称のフォルダまたは書類があればそれが自動的に選択され、次にAとタイプすればMAで始まるものが選択されます。続けてタイプすれば該当するものが順に選択されます。

もしタイプが途切れると次にタイプする文字は前の続きではなく新しい名称の開始とみなされます。（タイプする文字がひと続きとみなされるかどうかのタイミングは、“コントロールパネル”デスクアクセサリの“Delay Until Repeat”のセッティングにより調整できます）

ディレクトリダイアログボックスを開いた時点では、最後に書類を開いたか保存したディレクトリ（最上階層の場合はディスクディレクトリ）が表示されます。ここから階層内を上下して書類を保存するフォルダを決めることができます。

アプリケーション内で既存書類を開く

ここではアプリケーションがすでに始動され、（新規または既存の）書類を開いているものとします。次の操作により書類に閉じた後、引き続き同じアプリケーション内で他の既存書類を開きます。

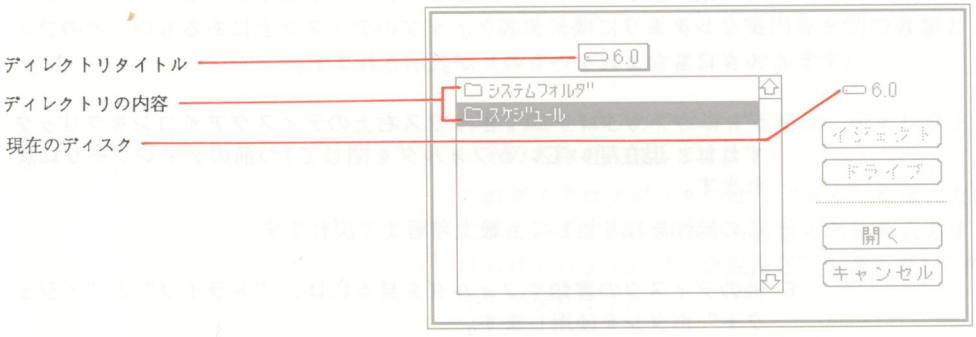
1. アプリケーションのファイルメニューから“閉じる”を選び、表示中の書類を閉じます。

   書類の内容に変化があった場合、アプリケーションはその書類を閉じる前に新しい内容で保存するかどうかの確認を求めてきます。

   アプリケーションによっては、一度に複数の書類を開いておくことのできるものがあります。この場合、新しい書類を開くために、必ずしも作業中の書類を閉じなくてもよいことがあります。

2. アプリケーションのファイルメニューから“開く”を選びます。

ダイアログボックスが現れます。タイトル部分には、現在のフォルダまたはディスクのディレクトリ（アイコン付き）が表示され、その下にはフォルダの内容（英語の場合はアルファベット順で）が表示されます。右上部分には現在のディスク（アイコン付き）が示されます。



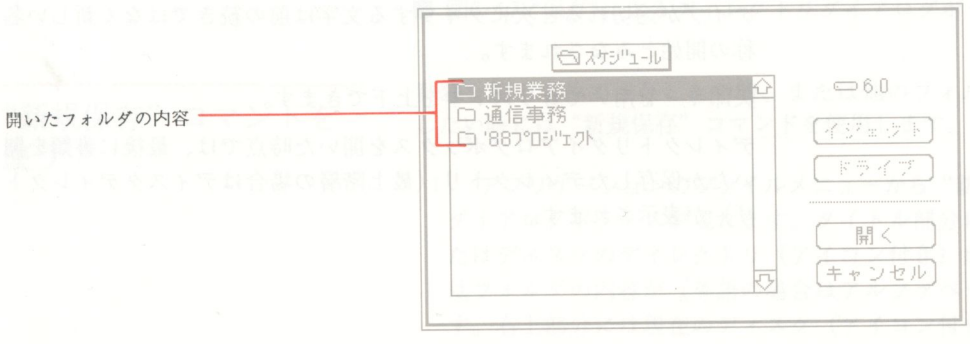
■ 図6-15　ディレクトリダイアログボックスで書類を開く

表示されているフォルダはファインダで作成したものです。

表示される書類は使用中のアプリケーションから開くことのできるものに限られます。フォルダ内にあるアプリケーションや書類が全て表示されるわけではありません。

3. 現在のディレクトリにあるフォルダの内容を見るには、その名称を選択し、“開く”

ボタンをクリックします。名称部分をダブルクリックするだけでも開けます。



■ 図6-16　ダイアログボックスから開いたフォルダ

このように、フォルダ内のフォルダを開くことで階層ファイルシステム内を移動し、目的の書類捜し出せます。

4. フォルダの階層をさかのぼるには、ディレクトリタイトル部分をプルダウンし移動先のフォルダを選びます。

プルダウンされた部分には、階層内のフォルダのリストが表示され、その最下部にはディスクのディレクトリが表示されます。ディスクのディレクトリには、デスクトップのディスク上にあるもの（どのフォルダにも含まれないもの）が表示されます。

5. ディレクトリダイアログボックス右上のディスクアイコンをクリックすれば、現在開いているフォルダを閉じて1つ前のディレクトリに戻れます。

この操作を繰り返しても最上階層まで戻れます。

6. 他のディスクの書類やフォルダを見るには、“ドライブ”と“イジェクト”ボタンを使用します。

“ドライブ”ボタンをクリックする（または*tab*キーを押す）度に、ドライブが順に切り替わります。このボタンがグレイ表示となっている場合、他に使用できるディスクがないことを意味します。

フロッピーディスクを入れ替えたい場合、“ドライブ”ボタンを何度かクリックして目的のディスクの表示にします。次に“イジェクト”ボタンをクリックすればそのディスクがイジェクトされます。

7. 書類を開くには、その名称部分を選択して“開く”ボタンをクリックします。名称部分をダブルクリックするだけでも同じように開けます。

現在のディレクトリで開きたいものの名称が分かっている場合、その名称をタイプしてすばやく目的のフォルダや書類を見つけ出せます。1文字タイプする度にリスト中で該当する項目が順に選択されます。タイプが途切れると次にタイプする文字は前の続きではなく新しい名称の開始とみなされます。

矢印キーを用いてもリスト中を上下できます。

ディレクトリダイアログボックスを開いた時点では、最後に書類を開いたか保存したディレクトリ（最上階層の場合はディスクディレクトリ）が表示されます。

“保存”コマンドを使う

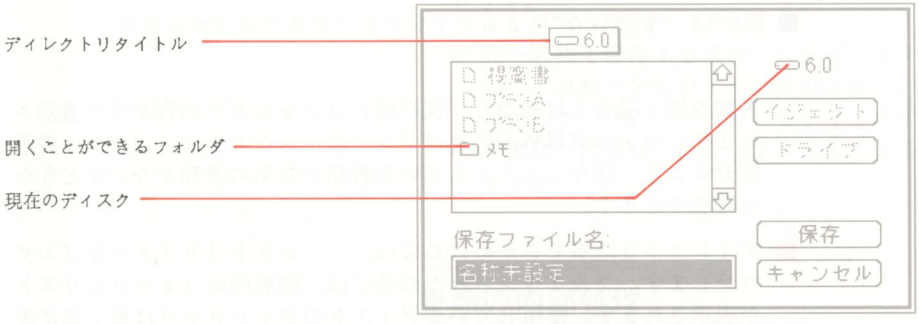
スクリーンに表示された書類はMacintoshのメモリに電気的に保持されているだけです。これを保存しておくには、ディスクに記録することが必要です。

1. アプリケーションのファイルメニューから“保存”を選びます。

   安全のため作業中にも定期的に保存を行なうことが必要ですが、その際には“新規保存”ではなく“保存”を選びます。“保存”では、書類の名称および保存場所はそのままに作業後の内容が保存されます。（“新規保存”を選ぶと作業内容を別の書類として保存したり、他のフォルダやディスクに保存できます）

2. 作業内容をはじめて保存する時は、ディレクトリダイアログボックスにその名称を入力します。

   このダイアログボックスは、“開く”を選んだ場合に表示されるものに似ていますが、保存する書類の名称を入力するためのボックスが設けられています。（“新規保存”を選んでもこのようなダイアログボックスが現れます）



■ 図6-17 "保存"によるディレクトリダイアログボックス

“新規保存”コマンドを使う

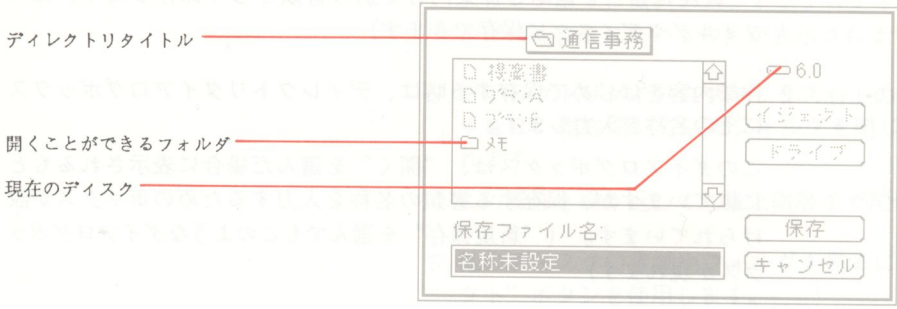
書類を別の名称で保存したい時、または他のフォルダやディスクに保存したい時には“新規保存”コマンドを使用します。

1. アプリケーションのファイルメニューから“新規保存”を選びます。

   ダイアログボックスが現れます。タイトル部分には現在のフォルダまたはディスクのディレクトリ（アイコン付き）が表示され、その下にはフォルダの内容が（英語の場合はアルファベット順で）表示されます。右上部分には現在のディスク（アイコン付き）が示されます。表示されているフォルダはファインダで作成したものです。

■ 表示されたフォルダの内容を調べるには、そのフォルダを選択し、“開く”ボタンをクリックします（またはその名称部分をダブルクリックします）。これによりそのフォルダ内の書類やフォルダが表示されます。

この方法で一階層下のディレクトリへ順に移動できます。この場合、書類を保存したいフォルダの名称が表示されたら、そのフォルダを開きます。



■ 図6-18 "新規保存"によるディレクトリダイアログボックス

書類を開く場合とは異なり、保存時にはフォルダの内容が全て表示されます。フォルダ以外の名称はグレイ表示となります。（グレイ表示部分により、保存しようとしている書類と同名の書類がないかどうかを確認できます）

■ ディレクトリ階層をさかのぼるには、ディレクトリタイトルをプルダウンします。プルダウンされた部分には、階層内のフォルダのリストが表示されます。使用しているディスクのディレクトリは最下部に表示されます。（ディスクのディレクトリは、デスクトップにあるディスクを表します）

■ ディレクトリダイアログボックス右上のディスクアイコンをクリックすれば、現在開いているフォルダを閉じて1つ前のディレクトリに戻れます。

■ “ドライブ”ボタンをクリックする（または*tab*キーを押す）度に、ドライブが順に切り替わります。このボタンがグレイ表示となっている場合、他に使用できるディスクがないことを意味します。

■ フロッピーディスクを入れ替えたい場合、“ドライブ”ボタンを何度かクリックして目的のディスクの表示にします。次に“イジェクト”ボタンをクリックすればそのディスクがイジェクトされます。

2. 新しい書類の場合、または名称を変更しておきたい場合には、その名称を入力します。入力しないとそのままの名称で保存されます。（新しい書類の場合は“名称未設定”と表示されます）

15文字（英語モードでは31文字)分までの長さの名称が設定できます。半角および英語モードのコロン（：）を除き、キーボード上の文字全てが使用できます。また、途中にスペースを入れることもでき、大文字も小文字も使用できます。ただし、半角または英語モードのピリオド（.）で始まる名称は使用できません。長い名称は扱いにくいことがあります。通常は、入力用のボックス内に収まる長さがよいでしょう。

すでにフォルダ内にある書類と同じ名称は使用できませんが、他のフォルダ内の書類の名は使用できます。ただし、複数のフォルダにわたって書類をさがすことを考えれば、同一名称にしない方が賢明でしょう。

3. そのまま“保存”をクリックすれば、最上部にリストされているフォルダに保存できます。

ディレクトリダイアログボックスを開いた時点では、最後に書類を開いたか保存したディレクトリ（最上階層の場合はディスク）が表示されます。

- ❖ 同一名称で保存する場合：“保存”ボタンをクリックした時に、保存する書類の名称がすでに使用されている場合、警告メッセージが現れます。ここで“ＯＫ”をクリックすると、同じ名称の付いた既存書類の内容は、保存しようとしている書類の内容に置き換えられます。

書類の内部処理

すでにディスクに保存されている書類を開いた場合、その書類のコピーがMacintoshのメモリに転送されます。スクリーンを見ながら行なう作業はそのコピーに対して行なうことになり、その間元の書類はそのままディスク上に残っています。ディスク上の元の書類をオリジナルと呼ぶことにします。

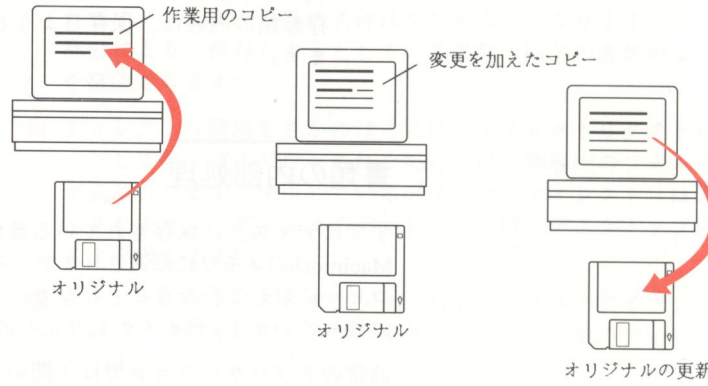
通常のアプリケーションでは、開いた書類（＝コピー）に手を加えて保存する際にオリジナルと同じ名称を用いるかどうかを決める必要があります。（この時点で保存を取りやめることもできます。）オリジナルと同じ名称で保存を行なうと、その時はじめてオリジナルが変更後の内容に書き換えられます。他の名称で保存した場合には、オリジナルは変更されず、変更後の内容は新しい書類としてディスクに保存されます。コンピュータでの作業では、このようにオリジナルが別に保存されているため同じ内容をもとに何度でも納得のゆくまで手を加えることができます。

保存の重要性

書類をスクリーン上で扱っている間、その内容はコンピュータのメモリに電気的に保持されています。作業中に電源コードが抜けたりすると、その時点でディスクに保存されていない内容は全て失われます。時間をかけて作業する場合には、15分おきぐらいファイルメニューから“保存”を選び、定期的に書類の保存を行なうように心がけてください。万一作業中に電源コードが抜けたり停電になったとしても、15分相当の作業内容を失うだけで済みます。（定期的な保存を励行した場合でも、ある種のデータベースプログラムには作業中に電源が切れると全データが失われるものがあります。このようなアプリケーションを使用する場合、頻繁に作業内容をフロッピーディスクにバックアップしておけば被害を最小限にとどめることができます）

不慮の事故に備え、日頃からハードディスクのバックアップを行なっておくことが必要です。詳しくは、付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

❖ **自動保存機能について**：アプリケーションによっては、作業の内容を自動的に保存してくれるものがあります。この機能が利用できるかどうかについては、ご使用のプリケーションに付属のマニュアルをご覧ください。



■ 図6-19　データの扱われかた

プリント

デスクトップからは、書類、スクリーンの内容、およびディスクやフォルダのディレクトリがプリントできます（ImageWriter® IIでは選択されたウインドウの内容がプリントできます）。書類をプリントする場合、その書類の作成に使用されたアプリケーションが始動できる状態にあることが前提となります。また、同一アプリケーションで作成されたものであれば複数の書類を連続的にプリントできます。書類のプリントを指定すると、必要なアプリケーションが自動的に始動されます。

ImageWriter IIをご使用の場合、プリント前にプリンタがレディ状態にあり、セレクトライトが点灯し、用紙がトップーオブーフォーム位置にセットされていることを確認します。

ImageWriter II以外のプリンタまたは複数のプリンタをご使用の場合、また、プリンタポート以外にプリンタが接続されている場合、デスクアクセサリの“セレクタ”を用いて使用プリンタの設定ができます。詳しくは第8章の「セレクタ」のページをご覧ください。

- ❖ マルチファインダとバックグラウンドプリント：この章に記載のプリント機能はマルチファインダ環境にもあてはまります。また、LaserWriter®プリンタとマルチファインダ使用される場合、バックグラウンドでプリントが行なえます。（この場合、書類をプリントしながら他の作業が行なえます）

プリンタを選択する

1. アップルメニューから“セレクタ”を選びます。
2. “セレクタ”のウインドウから使用するプリンタのタイプを選択します。
3. リスト部分のボックス内から使用するプリンタの名称を選択します。

詳しくは第8章の「セレクタ」のページをご覧ください。

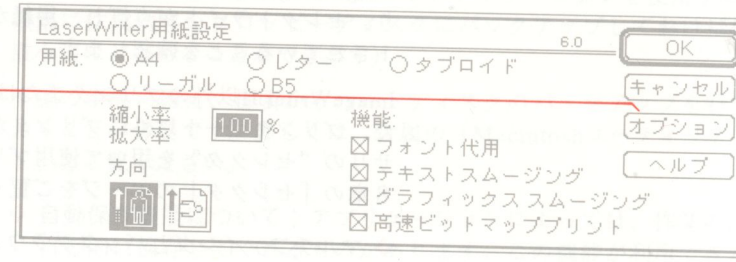
LaserWriterの“用紙設定”コマンドについて

ファイルメニューの“用紙設定”コマンドにより用紙サイズや方向のほか、さまざまな機能設定を行なえます。頻繁に使用される機能は前もって設定されていますので通常は変更不要ですが、個々の機能の働きを知っていると細かい設定が必要な場合に便利です。各機能についてはLaserWriterのマニュアルで詳しく解説されていますが、ここではまだマニュアルに記載されていない新しい機能について解説します。

1. ファイルメニューから“用紙設定”を選びます。

次のようなダイアログボックスが現れます。

“オプション”ボタンのクリックで別機能を表示

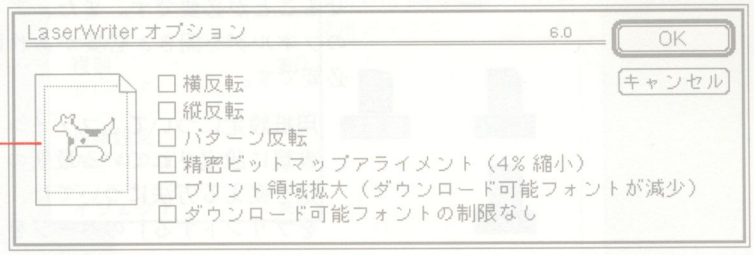


■ 図6-20　LaserWriter用“用紙設定”ダイアログボックス

“高速ビットマッププリント”は、MacPaint書類などのビットマップ情報の前処理を行なうかどうかを指定します。通常はこの機能によりプリント時間が短縮されます。書類の種類によってはこの機能が使用できないことがあり、その際には書類自体には問題はないがプリントができない旨のメッセージが表示されます。この場合、“高速ビットマッププリント”を解除すればプリントができます。

❖ **上級テクニック**：オプションにはグラフィック処理に関するやや専門的な知識を前提としたものがあります。たとえば、“精密ビットマップアライメント”を使用するには、“ビットマップ”や“オブジェクト指向グラフィックス”などについての理解が必要です。また、実際に設定を変化させてプリントを行なってみればオプションによってどのような違いがあるか確認できるでしょう。

2. “オプション” ボタンをクリックして他の機能設定ウインドウを表示させます。



■ 図6-21　“LaserWriterオプション” ダイアログボックス

- “横反転” および “縦反転” によりプリントイメージの方向をそれぞれ水平または垂直に切り換えることができます。
- “パターン反転” により書類のイメージの黒白が反転できます。
- “精密ビットマップアライメント” を選択すると、ビットマップイメージをMacintoshスクリーンのちょうど4倍の解像度でプリントできます（ビットマップイメージは、日本語アプリケーションやMacPaintで作成した書類などで使用されます）。プリントイメージは通常より4%縮小されます。オブジェクト指向グラフィックスやテキストなども同様に4%の縮小となります。このオプションによりビットマッププリントにともなう微細な歪みを防げます。このような歪みはMacPaintで作成したイメージをMacDrawに取り込んだ場合などに発生します。
- “プリント領域拡大” により、通常のページ領域を上回ってプリントを行なえます。ただし、使用中のアプリケーションがこの機能に対応していることが前提です。このオプションはフォントのダウンロードに使用されるLaserWriterのメモリの一部を使用します。必要なフォントが全てダウンロードできない場合、このオプションはオフにしてください。
- “ダウンロード可能フォントの制限なし” を選択しておくと、書類内で使用できるフォントの種類に制限がなくなります。ただし、プリントに要する時間は長くなります。

これらの設定状態は、ダイアログボックス左側に視角的に表されますので確認が容易です。標準設定では、全オプションの設定がオフとなっています。

“ヘルプ” ボタンをクリックすると機能の要約が表示されます。

ファインダから書類をプリントする

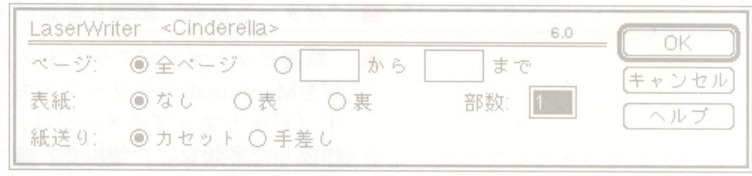
1. プリントしたい書類のアイコンを選択します。

書類や、その作成に用いたアプリケーションが他のディスクに収められている場合、そのディスクを挿入し、書類はそのアイコンを表示させることが必要です。また、アイコンがフォルダ内にある場合にはそのフォルダを開き、必要があればウインドウをスクロールする操作が必要です。

❖ **用紙設定について**：ファインダから書類をプリントする場合、その書類に設定されている最新の“用紙設定”が使用されます。この設定を変える方法については、この後の「アプリケーションから書類をプリントする」のページをご覧ください。

2. ファイルメニューから“プリント”を選びます。

書類に設定されたプリントオプションが、1つまたは複数のダイアログボックスに表示されることがあります。



■ 図6-22　プリントダイアログボックス

ファインダから複数の書類をプリントする

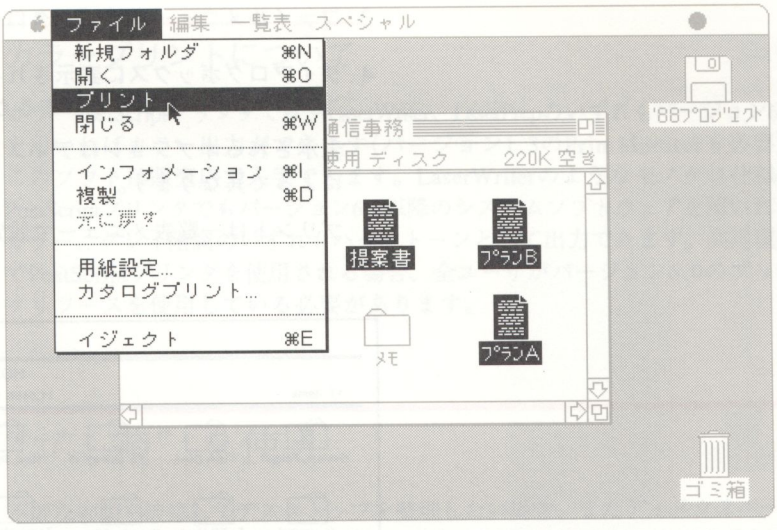
1. プリントしたい書類のアイコンを全て選択します。

*shift*キーを押し下げたままアイコンを1つずつクリックして選択してください。

書類や、その作成に用いたアプリケーションが他のディスクに収められている場合、そのディスクを挿入し、書類はそのアイコンを表示させることが必要です。また、アイコンがフォルダ内にある場合にはそのフォルダを開き、必要があればウインドウをスクロールする操作が必要です。

2. ファイルメニューから“プリント”を選びます。

選択した書類がプリントされます。



■ 図6-23　プリント用に選択した書類

アプリケーションから書類をプリントする

アプリケーションから書類をプリントするには、そのアプリケーションを始動し、書類のウインドウを選択しておきます。

1. ファイルメニューから“用紙設定”を選び、用紙サイズや方向などのオプション設定します。

   用紙設定状態を変える必要がない場合、このステップは不要です。

2. ファイルメニューから“プリント”を選びます。

   アプリケーションによっては、ここで1つまたは複数のダイアログボックスを表示するものがあります。その場合、各種オプションをクリックすることにより細かい設定ができます。ImageWriter II以外のプリンタまたは複数のプリンタをご使用の場合、またプリンタポート以外にプリンタが接続されている場合、デスクアクセサリの“セレクタ”を用いて使用プリンタの設定ができます。詳しくは第7章をご覧ください。

ディスクまたはフォルダのディレクトリをプリントする

1. ファインダで、ディレクトリをプリントしたいディスクまたはフォルダのアイコンまたはディレクトリウインドウを選択します。

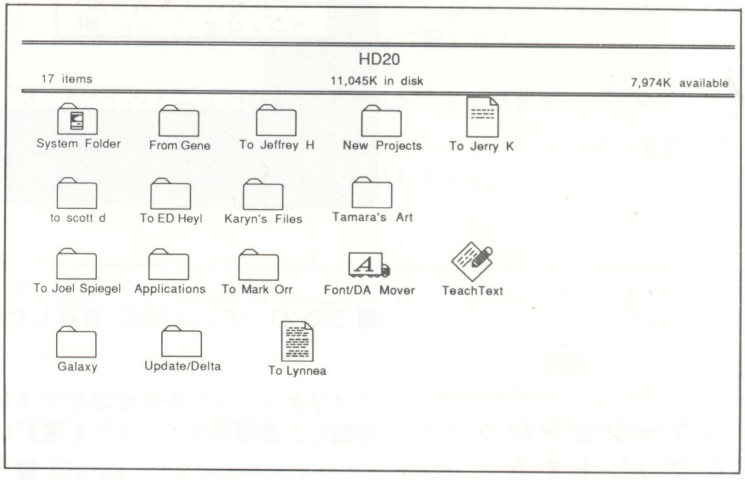
2. ファイルメニューから“用紙設定”を選び、用紙サイズや方向などのオプションを設定します。

3. ファイルメニューから“カタログプリント”を選びます。

4. ダイアログボックスに表示されるオプションを必要に応じて選択し、“ＯＫ”ボタンをクリックするか*return*キーを押します。

表示されるオプションはディスクやフォルダにあるアプリケーションによって異なります。

プリントは一覧表メニューで設定した形式で行なわれます。



HD20

Name	Size	Kind	Last Modified
Applications	--	folder	Fri, Aug 28, 1987 7:13 PM
Font/DA Mover	37K	application	Thu, Oct 8, 1987 12:00 PM
From Gene	--	folder	Mon, Aug 24, 1987 5:07 PM
Galaxy	--	folder	Wed, Dec 9, 1987 4:44 PM
Karyn's Files	--	folder	Sun, Dec 13, 1987 1:41 PM
New Projects	--	folder	Sun, Dec 13, 1987 4:39 PM
System Folder	--	folder	Fri, Dec 11, 1987 3:31 PM
Tamara's Art	--	folder	Sun, Dec 13, 1987 1:41 PM
TeachText	15K	application	Thu, Jan 15, 1987 2:04 AM
To ED Heyl	--	folder	Fri, Dec 11, 1987 11:12 AM
To Jeffrey H	--	folder	Sun, Mar 29, 1987 1:52 PM
To Jerry K	1K	TeachText document	Fri, Dec 11, 1987 11:13 AM
To Joel Spiegel	--	folder	Tue, Oct 27, 1987 3:09 PM
To Lynnea	5K	MacWrite document	Mon, Aug 3, 1987 1:37 PM
To Mark Orr	--	folder	Fri, Oct 30, 1987 4:41 PM
to scott d	--	folder	Tue, Oct 20, 1987 10:40 AM
Update/Delta	--	folder	Tue, Oct 27, 1987 3:09 PM

■ 図6-24　同一ディレクトリのプリント例

カラープリントについて

カラーPostScriptプリンタでは、LaserWriter、LaserPrepのいずれもバージョン6.0を用いればカラー出力ができます(バージョン1.3のPrintMonitorも必要)。このソフトは販売店で入手できます。LaserWriterのようなモノクロ仕様のPostScriptプリンタでもバージョン6.0以降のシステムソフトウェアを用いればカラー、グレイ階調のいずれもハーフトーンとして出力できます。共用環境でPostScriptプリンタを使用される場合、全ユーザがバージョン6.0のプリンタリソースを使用している必要があります。

“ゴミ箱”を使う

不要な書類を破棄してデスクトップを整理したい場合、またディスクスペースを解放したい場合に“ゴミ箱”を使用します。書類、フォルダおよびアプリケーションは、そのアイコンを“ゴミ箱”にドラッグして破棄できます。通常、“ゴミ箱”はアイコン表示されていますが、ディレクトリウインドウ化することもできます。

何かを破棄すると、“ゴミ箱”の両側がふくらみます。スペシャルメニューの“ゴミ箱を空にする”を選ぶと文字通り“ゴミ箱”を空にできます。この時、破棄した書類、フォルダ、アプリケーションの今まで占有していたディスクスペースが解放されます。

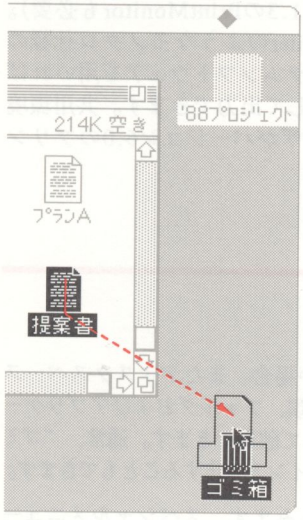
“ゴミ箱”へ破棄したものは、いつまでもそこに残っているわけではありません。破棄した書類やフォルダなどは“ゴミ箱”から取り出して再度使用できますが、次のいずれかの操作を行なうと“ゴミ箱”は自動的に空になります。

- スペシャルメニューから“ゴミ箱を空にする”、“リスタート”、“終了”のいずれかを選んだ場合
- 何かのコピー、複製、名称変更を行なった場合
- アプリケーションを始動した場合
- ディスクを“ゴミ箱”へドラッグしてイジェクトした場合

“ゴミ箱”アイコンを開くと、その内容が表示されます。中にあるものはデスクトップにドラッグすることで復元できます。

また、フロッピーディスクのアイコンを“ゴミ箱”へドラッグすると、そのディスクがイジェクトされます。この場合、ディスクアイコンもデスクトップから完全に消えます。これによりディスクの内容が消去されることはありません（フロッピーディスクを起動ディスクとしている場合も同様にイジェクトできますが、そのアイコンはグレイ表示でデスクトップ上に残ります）。イジェクトについては第10章「フロッピーディスクについて」もご覧ください。

書類、フォルダ、アプリケーションを破棄する



■ 図6-25 “ゴミ箱”へドラッグする

1. 破棄したいもののアイコンが収められているウインドウを開きます。ウインドウ内に目的のアイコンが見えない場合はスクロールします。

2. 破棄したいアイコンを“ゴミ箱”へドラッグします。

   複数のアイコンを破棄する場合、*shift*キーを押し下げたままアイコンを1つずつクリックして選択してください。ディスクやウインドウ内のアイコン全てを選択するには、編集メニューから“全てを選択”を選びます。その後、アイコンのどれか1つをドラッグすると、他のアイコンも同時にドラッグされます。

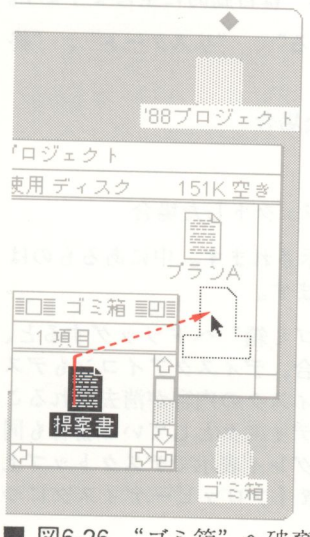
   フォルダを破棄すると、その内容も全て破棄されます。

   破棄した書類などが占有していたディスクスペースを解放するには、スペシャルメニューから“ゴミ箱を空にする”を選びます。(この場合、破棄したものは復元できなくなりますので注意が必要です)

ロックされたディスク、書類、アプリケーションは、そのままでは破棄できません。破棄する前にロックを解除しておく必要があります。(ディスクのロックについては第9章「フロッピーディスクについて」をご覧ください。書類などのロックについては、この章の「書類またはアプリケーションのロックを解除する」のページで解説されています)

“ゴミ箱”のウインドウ内に表示されているものは復元できます。

“ゴミ箱”に破棄したものを復元する



■ 図6-26 “ゴミ箱”へ破棄したものを復元する

1. “ゴミ箱”のウインドウを開きます。復元したいものが見あたらない場合はウインドウをスクロールさせます。

2. 復元したいもののアイコンを、“ゴミ箱”のウインドウからデスクトップまたは“ゴミ箱”以外のウインドウ内にドラッグします。

   複数のアイコンを破棄する場合、*shift*キーを押し下げたままアイコンを1つずつクリックして選択した後、復元先へドラッグします。

   復元したいものの破棄前の保存場所がわからない場合、そのアイコンを選択し、ファイルメニューから“元に戻す”を選びます。これにより、そのアイコンは自動的に破棄前の場所に復元されます。

第7章

ファインダのメニュー

この章には、デスクトップでファインダが提供するメニューおよびメニュー内の各コマンドの使用方法を要約しておきました。

この章について

デスクトップ上の作業で使用するファインダのコマンドは全てメニュー化されています。スクリーン上部のメニューバーには、左側から順に次のメニューのタイトルが表示されます。

- アップルメニュー
- ファイルメニュー
- 編集メニュー
- 一覧表メニュー
- スペシャルメニュー
- カラーメニュー（カラーモニタ使用のMacintosh II系機種のみ）

この章にはメニュー化されたコマンドそれぞれの使用方法を手短にまとめました。コマンドの使用例は他の章で作業内容ごとに詳しく解説されています。



■ 図7-1アップルメニュー

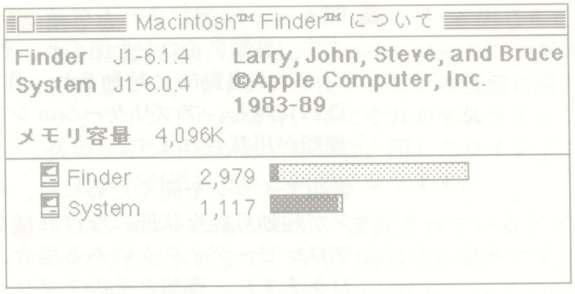
アップルメニュー

デスクトップのアップルメニューには“Finderについて”というコマンドが必ず収められています。Macintoshにインストールされているデスクアクセサリは全てアップルメニューから呼び出すことになります。（マルチファインダをご使用の場合、アプリケーションの切り替えにはアップルメニューも利用できます。詳しくは第12章をご覧ください）

Finder について

アップルメニューから“Finderについて”を選ぶと、現在の起動ディスクに関する情報がウインドウ表示されます。これにより、“System”および“Finder”の2つのシステムファイルのバージョン番号および作者名、そしてご使用のMacintoshに実装されているRAMの容量が確認できます。ウインドウの下半分には、オペレーティングシステムおよびファインダのために確保されているメモリ容量がグラフで示されます。（図7-2）

マルチファインダ使用時には、システムとファインダだけでなく使用中のアプリケーションにアロケートされたメモリもグラフ表示されます。これは、アプリケーション間のメモリ配分を管理する上で重要な情報となります。（詳しくは第12章「マルチファインダ」をご覧ください）

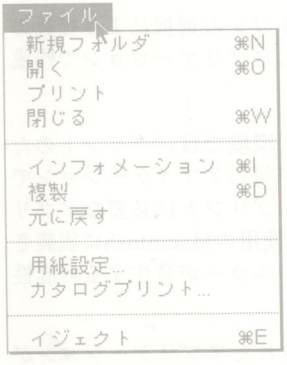


■ 図7-2 “Macintosh Finder について”ウインドウ

デスクアクセサリ

デスクアクセサリは全てアップルメニューから呼び出します。また、ほとんどのデスクアクセサリで編集メニューのカット、コピー、およびペースト機能が利用できます。

デスクアクセサリについては第８章で詳しく解説されています。



■ 図7-3 ファイルメニュー

ファイルメニュー

ファイルメニューのコマンドは選択されたアイコンおよびウインドウに対して働きます。

■ **新規フォルダ**　書類、アプリケーション、フォルダを収めておける空きフォルダが作成されます。新しいフォルダはデスクトップのグレイ部分にではなく、現在選択されているウインドウ内に設けられます。フォルダの作成直後にそのまま入力を行なえば、余計な操作を行なうことなくフォルダ名が設定できます。デスクトップ上に選択されたウインドウがない場合、“新規フォルダ”は使用する必要がありませんので、そのコマンド名はグレイで表示されます。

■ **開く**　選択されたアイコンを開く（ウインドウ化）ことができます。書類アイコンを開くと、その書類の作成に使用されたアプリケーションが自動的に起動され、作業のできる状態で書類が開かれます。これに対し、アプリケーションアイコンを開くと名称未設定の新しい書類が用意されます。

書類アイコンを開くためには、その作成に使用されたアプリケーションが起動可能な状態になければなりません（そのアプリケーションがフロッピーディスクにある場合、そのディスクを前もってセットしておきます）。書類とそのアプリケーションを同じフォルダに収めておくことが必要な場合もあります。

書類とアプリケーションを同時に選択しておくと、書類を開く際にその書類の作成に使用したのとは異なるアプリケーションが使用できます。MacTerminal®（通信ソフト）で作成されたテキスト書類とMacWrite（ワープロソフト）との両方を選択しておいた場合、その書類はMacWriteの方で開かれます。

複数の書類を選択しておいた場合、“開く”を選んだときに起動されるアプリケーションは1番目の書類の作成に使用されたものとなります。

■ **プリント**　ファインダから書類をプリントできます。実際には、アプリケーションの使用中にプリントを行なう方が多いかも知れません。その場合、アプリケーションが持つファイルメニューの“プリント”コマンドを使用します。

ファインダの“プリント”コマンドでもアイコンの選択により複数の書類をプリントできますが、書類が全て同じアプリケーションで作成されていることが前提となります。

❖ **マルチファインダ使用時**：マルチファインダ環境では、プリントのために複数の書類を選択しても、それら全てが同じアプリケーションで作成されている必要はありません。ただし、プリントに必要なアプリケーションは全て同時に起動されるため、ご使用のMacintoshに実装されているRAMの容量によってはメモリ不足のエラーが発生する可能性があります。

書類をプリントするには、その作成に使用されたアプリケーションが必要です。デスクトップにそのアプリケーションが入ったディスクのアイコンが表示されていればプリントができます。

“プリント”を選ぶと、アプリケーション側がダイアログボックスを表示します。ダイアログボックス内のオプションを必要に応じて選択し、“ＯＫ”ボタンをクリックする（または*return*キーを押す）とプリントが開始されます。アプリケーションからのプリントおよびプリンタの使用方法の詳細は、それぞれに付属のマニュアルをご覧ください。

■ **閉じる**　選択されたウインドウを閉じることができます。この操作は選択されたウインドウのクローズボックスをクリックすることと同じです。ウインドウはアイコンの状態に戻ります（デスクアクセサリウインドウの場合、単にそれがデスクトップから消えます）。複数のウインドウがあった場合、閉じたウインドウのすぐ下に重なっていたものが選択された状態になります。

■ **インフォメーション**　選択されているアイコンの情報がウインドウで表示されます。表示内容は次の通りです。

- □ 種類（書類、フォルダ、アプリケーションの区別）
- □ 書類アイコンの場合、その作成に使用されたアプリケーション
- □ サイズ
- □ 保存されているディスクおよびドライブ
- □ 作成日付
- □ 修正日付
- □ アプリケーションのバージョン番号（検出可能な場合のみ）
- □ コメントボックス
- □ 推奨メモリサイズ（マルチファインダ使用時）
- □ アプリケーションメモリサイズ（マルチファインダ使用時）

コメントボックスにはキー入力により自由にメモを残しておけます。入力内容の修正や変更には、編集メニューを含め、通常の編集機能が利用できます。

チェックボックスをクリックすることにより書類やアプリケーションのロックを設定または解除できます（ただし、フォルダはロックできません）。ロックを設定するとチェックボックス内に×印が現れ、選択されている書類やアプリケーションの破棄や名称変更ができなくなります。また、書類の場合、その内容に手を加えても保存できません。

インフォメーションウインドウの表示中にも選択されているアイコンをドラッグしたり開いたりできます。

■ **複製**　選択されているアイコンのコピーを作成します。複製は同一ディスク内で行なわれ、複製したものはオリジナルの名称に“...のコピー”を付けた名称で表示されます。

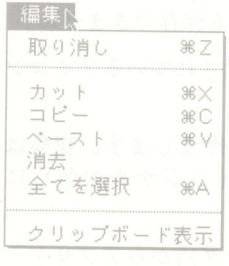
フォルダはその内容ごとコピーされます。フォルダ内からアプリケーションや書類を前もってデスクトップ上または他のウインドウへ移動させておくと、それらを複製の対象から外せます。

■ **元に戻す**　書類、アプリケーション、フォルダをデスクトップのグレイ部分に引き出した場合、あるいは“ゴミ箱”へ破棄した場合、それらをもとの保存場所（ディスクやフォルダ）に戻せます。もとに戻したいものは、そのアイコンを選択して指定します。デスクトップにも“ゴミ箱”のウインドウ内にも選択されたアイコンがない場合、このコマンドは使用する必要がありませんので、グレイで表示されます。

■ **用紙設定**　“カタログプリント”でディレクトリをプリントする際の用紙サイズや方向などのオプション設定を行なうウインドウを表示します。ここで行なう設定はファインダからプリントする書類に対しては働きません。書類の用紙設定は、その作成に使用したアプリケーションが持つ“用紙設定”を用いてください。

■ **カタログプリント**　選択されているディレクトリウインドウの内容がプリントされます。プリントは一覧表メニューで設定されている形式で行なわれます（詳しくはこの後の「一覧表メニュー」のページをご覧ください）。このコマンドは書類の内容ではなく、ウインドウ内に表示されているもの（アイコンや書類名など）をプリントします。

■ **イジェクト**　選択されているフロッピーディスク、または選択されたウインドウにその内容が表示されているディスクをイジェクトします。ディスクが選択されていない場合、ファインダは現在の起動ディスクを始点としてイジェクト可能なディスクを順にさがします。ディスクがイジェクトされるとそのアイコンはグレイ表示となり、再度同じディスクがセットされるまで使用できないことを示します。（ディスクのアイコンを“ゴミ箱”へドラッグしてもイジェクトを行なえます）



■ 図7-4　編集メニュー

編集メニュー

ファインダでは、次のものが編集メニューの対象となります。

■ ディスク、書類、アプリケーションまたはフォルダの名称

■ インフォメーションウインドウ内のコメントボックスの内容（このウインドウを表示するには、アイコンを選択後ファイルメニューから“インフォメーション”を選びます）

■ デスクアクセサリで扱うテキストおよび絵

❖ **アイコンの扱い**：編集メニューの“カット”や“コピー”は、アイコン自体の複製や破棄に使用するものではありません。アイコンをコピーしたり取り除いたりする方法については、第6章の「書類、アプリケーション、フォルダをコピーする」のページをご覧ください。

アイコンを選択すると、その名称部分も選択された状態になります。したがって、選択されたアイコンでは、そのまま入力を行なって新しい名称が設定できます。選択されたテキスト部分をクリックすると挿入ポイントが現れますが、どのようなテキストでもこの方法で編集が開始できます。

- **取り消し**　テキストを扱うアプリケーションおよびデスクアクセサリで最後に行なった編集操作を取り消し、内容を編集直前の状態に戻せます（アプリケーションによってはこれ以外の取り消しも同時に行なうものがあります）。たとえばインフォメーションウインドウのテキストボックス内で入力を誤った場合、そのまま“取り消し”コマンドを使用すれば入力前の状態から操作をやり直せます。

- **カット**　選択部分をスクリーンから消去し、その内容を“クリップボード”に保管します。（“クリップボード”の内容は、“カット”または“コピー”を選ぶ度に更新されます）

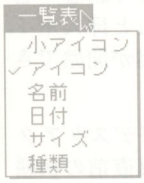
- **コピー**　選択部分と同じ内容が“クリップボード”に保管されます。このとき、選択部分はスクリーンにそのまま残ります（“クリップボード”の内容は、“コピー”または“カット”を選ぶ度に更新されます）

- **ペースト**　“クリップボード”に保管された内容を取り出して挿入ポイントの位置に「貼り付ける」ことができます。新たに選択部分をカットまたはコピーしない限り、“クリップボード”の内容は変化せず、何度でも同じ内容がペーストできます。

- **消去**　選択部分を“クリップボード”に保管することなく削除できます。“クリップボード”の内容には影響ありません。

- **全てを選択**　選択されたウインドウ内のアイコンが全て選択されます。ウインドウがなければデスクトップ上のアイコンが全て選択されます。

- **クリップボード表示**　“クリップボード”の内容が表示されます。最後に使用した“カット”または“コピー”コマンドで保管されたものが表示されます。



■ 図7-5　一覧表メニュー

一覧表メニュー

ディレクトリウインドウはアイコン表示のままにしておくことが多いかも知れませんが、一覧表メニューにより表示形式を変更できます。ディスク、フォルダ、および“ゴミ箱”ウインドウが対象となります。

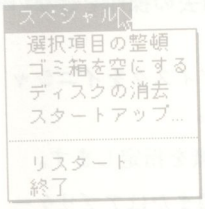
リスト形式のディレクトリでも、小さなアイコンがそれぞれの書類、アプリケーション、フォルダ名の左端に表示されます。どの表示形式であれ、アイコンおよびテキスト部分に対する操作方法に違いはありません。書類のアイコンかその名称部分をクリックすると、その書類が選択されます。また、マウスで名称部分を指すとポインタはＩ字型に変化し挿入ポイントがセットできます。アイコン部分を指すとポインタは矢印に戻りますので、アイコン自体のコピーや移動の選択が行なえます。名称部分も何も選択されていないアイコンは、そのままドラッグすることで移動またはコピーを行なえます。詳しくは第６章の「書類、フォルダ、アプリケーションをコピーする」のページをご覧ください。

現在使用されている表示形式は、一覧表メニュー内のチェックマーク“✓”で示されます。

- **小アイコン**　　アイコンのサイズが小さくなります。書類、フォルダ、およびやアプリケーションの名称はそれぞれのアイコンの右側に表示されます。スクロールせずに見えるアイコン数が増えるため、１つのディレクトリウインドウに書類やアプリケーションが多数ある場合などに便利です。
- **アイコン**　　ディレクトリウインドウの内容が、デスクトップと同じように通常サイズのアイコンで表示されます。
- **名前**　　ディレクトリウインドウの内容がアイコンの名称を中心に順に表示されます。英語の場合はアルファベット順となります。
- **日付**　　ディレクトリウインドウの内容がアイコンの名称を中心に、変更日付順に表示されます。最も新しい日付の書類が一番上に表示されます。フォルダの変更日付は、その作成日時やその中で行なわれた追加または削除の日時に一致します。この表示形式は最新の書類をさがす場合などに便利です。
- **サイズ**　　ディレクトリウインドウの内容がアイコンの名称を中心に、サイズの大きい順に表示されます。この表示形式は最も多くディスクスペースを占有している書類を調べる場合などに便利です。フォルダは、その内容にかかわらずディレクトリの後半にまとめて（英文の場合はアルファベット順で）表示されます。（フォルダのサイズは表示されません）

■ **種類**　　ディレクトリウインドウの内容がアイコンの名称を中心に、書類、アプリケーション、フォルダごとにまとめて表示されます。書類の場合、その作成に使用されたアプリケーションの名称も表示されます。

■ **カラー**　　カラーモニタ使用のMacintosh II系の機種ではアイコンの表示色を設定できます。（この後の「カラーメニュー」のページをご覧ください）



■ 図7-6　スペシャルメニュー

スペシャルメニュー

■ **整頓**　　このコマンドは一覧表メニューの“小アイコン”または“アイコン”が使用されているときにのみ有効です。コマンドの働きおよび表示は、次のように条件により少しづつ変化します。

- □ 選択されたディレクトリウインドウ内でアイコンが全く選択されていない場合、このコマンドは“ウインドウ整頓”と表示されます。“ウインドウ整頓”を選ぶと、全アイコンはウインドウの上から下、また左から右へ向かって互いに近い位置に並べかえられます。アイコンの配置は、ウインドウ内に想定したグリッド（碁盤の目状の線分）を基準に行なわれます。
- □ アイコンがいくつか選択されている場合、このコマンドは“選択項目の整頓”と表示されます。“選択項目の整頓”を選ぶと、選択されたアイコンだけが、それらに最も近いグリッドを基準に互いに近い位置に並べかえられます。この場合、必ずしも上から下、左から右の順で並べられるわけではありません。（アイコンの選択を一度で解除するには、デスクトップのグレイ部分をクリックします）
- □ 選択されたディレクトリウインドウが全くない場合、このコマンドは“デスクトップ整頓”と表示されます。“デスクトップ整頓”を選ぶと、デスクトップ上のアイコンは、グリッドを基準に互いに近い位置に並べかえられます。

❖ **アイコンの整理**：*option*キーを押し下げたままスペシャルメニューを表示させると、このコマンドは単に“整頓”と表示されます。“整頓”を選ぶと、選択されたウインドウ内（ウインドウがなければデスクトップ上）のアイコン全てをより密に並べることができます。

■ ゴミ箱を空にする　“ゴミ箱”の内容を除去し、利用可能なディスクスペースを作ります。（ただし、ファインダがディスクスペースを必要とする場合、このメニューの“終了”または“リスタート”を選んだ場合、または何かアプリケーションを起動した場合、自動的に“ゴミ箱”が空になります。

■ ディスクの消去　選択されたディスクをイニシャライズします（ディスクの内容が完全に消去されます）。このコマンドを選ぶと、ダイアログボックスが現れてイニシャライズ開始の確認を求めてきます。

現在の起動ディスクにはシステムの動作に必要な情報が収められているため、その内容を消去することはできません。この場合、他の起動ディスクでMacintoshを起動しなおした後で再度消去の操作を行ないます。

イニシャライズについては第10章の「フロッピーディスクをイニシャライズする」のページでも詳しく解説されています。

■ スタートアップ　マルチファインダ使用の有無を指定します。

□ マルチファインダが使用されていない場合、書類またはアプリケーションを１つ選択し“スタートアップ”を選ぶと、それがMacintoshの起動直後に自動的に開かれるようになります。

□ マルチファインダが使用されている場合、Macintoshの起動直後、自動的に開きたいアプリケーション（および書類）を指定できます。複数のアプリケーションや書類が指定できます。この機能は、日常的に数種類のアプリケーションを組み合わせて使用される場合などに便利です。詳しくは第12章「マルチファインダ」をご覧ください。

■ リスタート　セットされているフロッピーディスクを全てイジェクトし、“ゴミ箱”を空にし、Macintoshを再起動します（必要な情報は全てイジェクト前に自動的にディスクに保存されます）。これは単なるショートカットであるばかりでなく、起動ディスクを切り替えてMacintoshを再起動するのに最も適した方法でもあります。

■ 終了　セットされているフロッピーディスクを全てイジェクトし、“ゴミ箱”を空にし、Macintoshの電源が切れる状態にします（必要な情報は全てイジェクト前に自動的にディスクに保存されます）。Macintosh II系の機種では、このコマンドにより電源も切れます。

カラーメニュー



■ 図7-7カラーメニュー

Macintosh II系の機種にカラーモニタをご使用の場合、メニューバーにはカラーメニューも表示されます。このメニューをプルダウンするとカラーパレットが表示され、デスクトップ上で選択されているアイコンの表示色が選べます。色の使用によりデスクトップをより効果的に整理できます。カラーメニューがある場合には、一覧表メニューに“カラーアイコン”のコマンドが追加されます。（アイコンをカラーパレット内の色の順序で表示できます）

第8章

デスクアクセサリ

この章ではデスクアクセサリの使用方法を解説します。デスクアクセサリとはアップルメニューに収められているミニアプリケーションで、ファインダやアプリケーションの使用中に呼び出せます。Macintoshに付属のデスクアクセサリには、書類作成中などにも使用できる簡易電卓をはじめ、プリンタの切り替えやに切り貼り用のイラストが保管できるものなどがあります。

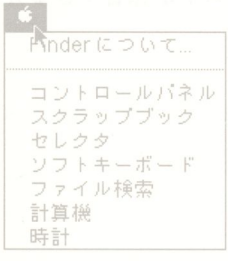
この章について

この章ではMacintoshに付属のデスクアクセサリを解説します。

- 時計
- 計算機
- セレクタ
- コントロールパネル
- ソフトキーボード
- スクラップブック

デスクアクセサリによっては、あらためて解説を要としないほど操作が簡単なものがあります。また、一方では順を追った解説が必要なものもあり、その場合には実際の操作手順をステップごとに太字で示しました。

デスクアクセサリのインストール



■ 図8-1 自動的にインストールされたデスクアクセサリ

Macintoshに付属のディスクアクセサリには、“コントロールパネル”、“スクラップブック”、“セレクタ”、“ソフトキーボード”、“ファイル検索”、“計算機”“時計”があります。これらはアップル社がリリースする正規のシステムソフトウェア（“System”ファイル）に組み込まれており、起動ディスク作成時に自動的にインストールされます（詳しくは第4章「アプリケーションと書類について」をご覧ください）。インストールされたデスクアクセサリは、そのディスクが起動ディスクとなっていればいつでもアップルメニューから呼び出せます。デスクアクセサリの追加および削除にはFont/DA Moverを使用します。（Font/DA Moverの使用方法については「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください）

付属のディスクには上記以外にもデスクアクセサリ（“メモ用紙”、“パズル”など）が収められていますので、これらも必要に応じて起動ディスクに追加できます。また、別売デスクアクセサリの追加インストールも可能です。

❖ “ファイル検索”について：システムに付属のデスクアクセサリのうち、このマニュアルで解説されていないものに“ファイル検索”があります。詳しくは「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

デスクアクセサリを呼び出すには、メニューバー左端のアップルメニューをプルダウンします。

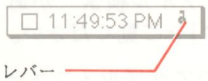
作業内容にもよりますが、通常は書類を扱っている間もデスクアクセサリを開いたままにしておけます（ウインドウの選択状態が変わると、デスクアクセサリ上に他のウインドウが重なることがあります）。デスクアクセサリのウインドウもクリックにより選択ができますし、アップルメニューから再度デスクアクセサリを選んでも同じことができます。また、デスクアクセサリのウインドウもドラッグして移動できます。

デスクアクセサリを閉じるには、そのウインドウのクローズボックスをクリックするか、ファイルメニューから“閉じる”を選びます（作業内容によっては、デスクアクセサリを閉じてからでないと他のウインドウで作業できないことがあります）。一般に、ファインダから書類かアプリケーションを開いたときやアプリケーションを終了したとき、今まで使用されていたデスクアクセサリは自動的に閉じられます。

時計

このデスクアクセサリは、小さなパネルに時間および日付をリアルタイムで表示します。またアラームクロックとしても機能するため、ミーティングなどの時間をセットしておくけばMacintoshがその時間にアラームを鳴らしてくれます。

❖ 参考：“時計”が表示する日時およびアラームクロック機能は、Macintosh内部の時計機能を利用したものです。したがって、いったんセットした時間は起動ディスクが変わってもそのまま残ります。（アラームをセットした後に起動ディスクを変えても、再設定しない限りアラームクロックは最初の設定で機能し続けます）



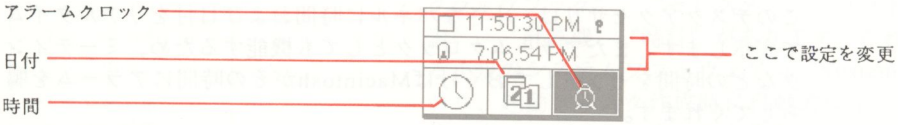
■ 図8-2時計の表示

アップルメニューから“時計”を選ぶと、現在の時間、分および秒だけが表示されます。“時計”が選択されていると、黒く表示されていなくても時間および日付部分は選択された状態にあります。したがって、表示部分をカットまたはコピーして書類内やテキストを受けつける他のデスクアクセサリに取り込めます。

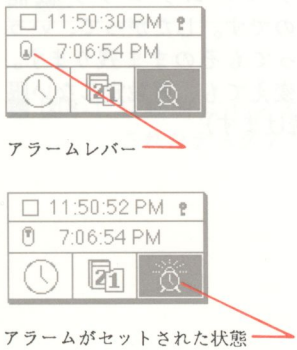
“時計”の右端にある小さなレバーをクリックするとレバーが下向きになり、下に2枚のパネルが現れます。1番下のパネルには、時計、カレンダ、およびアラームクロックのアイコンがあります。このうち1つを選択し、中間のパネルで設定を行ないます。レバーをもう一度クリックすると“時計”は再び1枚のパネルに戻ります。

たとえば時刻を変更する場合、まず1番下のパネルから時計のアイコンを選択します。次に中間のパネルをクリックして選択します。ここで時・分・秒・AM／PMのうち変更したい部分をクリックすると、その右側に小さな矢印が2つ現れます（*tab*キーを押しても時・分・秒・AM／PMの順に選択できます）。選択された数値は上向きの矢印をクリックすると増加し、下向きの矢印をクリックすると減少します。また、選択部分に直接数値を入力することもできます。設定が終ったら、レバーをもう一度クリックして“時計”を1枚のパネルに戻します。“時計”自体を閉じるには、そのクローズボックスをクリックするか、ファイルメニューから“閉じる”を選びます。

“コントロールパネル”からも“時計”の設定を行なえます。詳しくは、この後の「コントロールパネル」のページをご覧ください。



■ 図8-3　時計の機能設定表示



■ 図8-4アラームレバー設定

アラームクロックも日時と同じ方法でセットできます。アラーム機能のセットおよび解除は中間パネル左側のアラームレバーをクリックして行ないます。このレバーを上側にするとアラームがセットされた状態になります。アラームがセットされていると、そのアイコンにベルが鳴動している様子が表現されます。アラームをセットしたまま“時計”を1枚のパネルに戻すには、他のパネルまたは上部右のレバーをクリックします。

アラームをセットした時間になると、Macintoshはスピーカを鳴らしながらアップルメニューのタイトル部分を点滅させます（スピーカのボリュームは“コントロールパネル”で調節できます）。しばらくするとスピーカは静かになりますが、メニューバー左端のアップルマーク（）部分がアラームを解除するまで点滅し続けます。アラームを解除するには、“時計”の機能設定パネルを表示させてアラームレバーをクリックします。



■ 図8-5 “計算機”

計算機

アップルメニューから“計算機”を選ぶと、四則演算機能を持つ卓上電卓が表示されます。計算機のボタンはマウスでもキーボードでも操作できますが、テンキーを利用すると便利です。（“計算機”のボタン配置はテンキーのキー配列に一致しています）

“計算機”に表示される数値は、黒く表示されていなくても選択された状態にあります。したがって、コピーまたはペーストにより自由に文書や他のデスクアクセサリ内に取り込めます。また、逆に書類内の数値をコピーして“計算機”のディスプレイ部分にペーストすることもできます。

セレクタ

“セレクタ”は、Macintoshのさまざまなシステム構成に対応する多機能デスクアクセサリの１つです。主な機能はプリンタや各種デバイスとMacintoshとの通信状態設定にありますが、プリンタの接続状況により（特にMacintoshをネットワーク環境で使用する場合）“セレクタ”の用途は色々と考えられます。

ゾーンとは、相互接続されたネットワークそれぞれを指します。ネットワークの相互接続により高価なデバイス（プリンタなど）の共用が可能となります。

“セレクタ”の典型的な利用例として、Macintoshのプリンタおよびモデムポートに接続されたデバイスの接続および切り離しがあげられます。AppleTalk®ネットワークでは、プリンタやファイルサーバの選択も可能です。ゾーン化されたAppleTalkネットワークの場合、“セレクタ”で各ゾーンを調べて利用したいデバイスをさがし出すこともできます。また、ネットワークとの接続状態の設定にも“セレクタ”が使用できます。

リソースは起動ディスクにインストールれるシステムファイルの一種で、Macintoshがプリンタやマウスと通信するために必要な情報が収められています。通常、各リソースにはそれがサポートするデバイスの名称が付けられています。

“セレクタ”でデバイスやプリンタを選択するには、それらのリソースが現在の起動ディスクに収められている必要があります。付属のディスク、「ユーティリティ２」には、アップル社製のプリンタに対応する最新のリソースが全て収められています。リソースのインストール方法は第４章「アプリケーションと書類についてについて」でも解説されています。

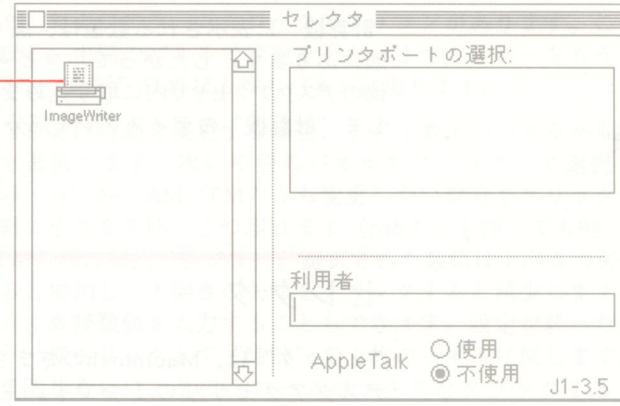
ポート直結のプリンタを選ぶ

ImageWriterなどプリンタがMacintosh裏面のポートに直接接続されている場合、次の方法で設定を行ないます。

1. アップルメニューから“セレクタ”を選びます。

プリンタアイコンが左上に表示されます。

使用可能なデバイスの種類

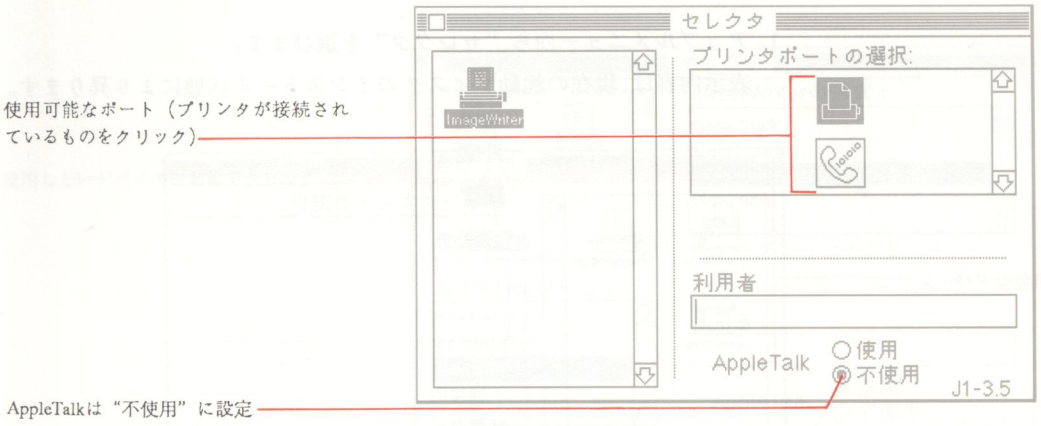


■ 図8-6　セレクタのウインドウに表示されたImageWriterアイコン

❖ 目的のアイコンが表示されないとき：もしプリンタのアイコンが表示されない場合、起動ディスクにそのリソースがまだインストールされていないことが考えられます。

2. Macintoshに直結されているプリンタを表すアイコンを選択します。

Macintoshのポートを表すアイコンが右側に現れます。



■ 図8-7　セレクタウインドウに表示されたポート

3. プリンタが接続されているポートのアイコンを選択します。

4. AppleTalkの設定が“使用”になっていれば、それを“不使用”にします。

ネットワーク経由ではなく、プリンタをMacintoshに直結するためです。

5. “セレクタ”ウインドウのクローズボックスをクリックし、設定を終了します。

ファイルメニューから“閉じる”を選んでもウインドウを閉じることができます。

ここで設定したプリンタを使用し続ける限り“セレクタ”を再度使用する必要はありません。Macintoshをネットワークに接続してデバイスを共有する場合など、設定変更の必要が生じた場合に“セレクタ”を開いて再設定を行ないます。

AppleTalkネットワーク上のデバイスを選ぶ

LaserWriterプリンタ、またはAppleTalkオプションカード装着のImageWriter IIまたはLQは、AppleTalkネットワーク上でMacintoshに接続できます。ネットワークの規模や構成によってはファイルサーバなどのデバイスを共用することも可能です。

1. アップルメニューから“セレクタ”を選びます。

表示内容は、現在の起動ディスクのインストール状態により異ります。



AppleTalk上で利用可能なデバイス

■ 図8-8　セレクタに表示のデバイスアイコン

❖ 目的のアイコンが表示されないとき：LaserWriterプリンタを使用したいのにそのアイコンがない場合などには、起動ディスクにそのリソースがまだインストールされていないことにが考えられます。システムフォルダの内容を確認し、必要であれば付属のディスク、「ユーティリティ2」よりプリンタソースをコピーしてください。（詳しくは第3章の「システムソフトウェアのインストール」をご覧ください）

2. 使用したいデバイスの種類を表すアイコンをクリックします。

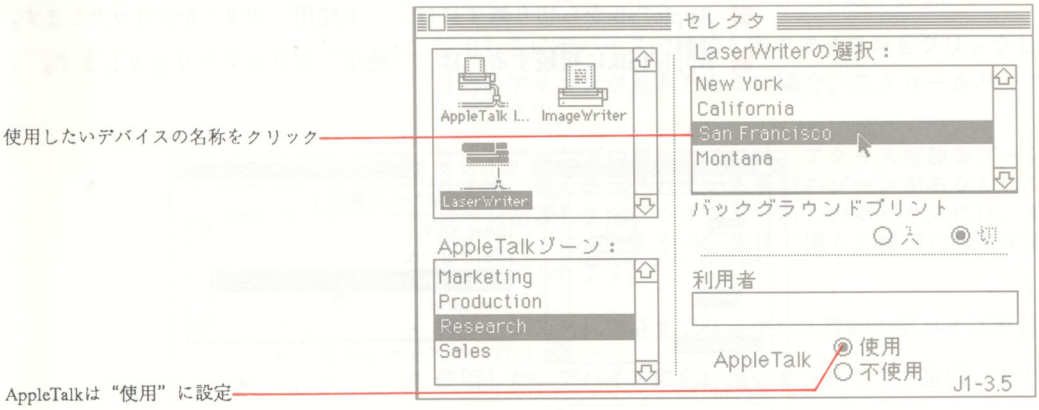
ここで選択するものはMacintoshが接続されているネットワークで利用可能なデバイスにより異なります。次のその例を示します。

- AppleTalkにより1台以上のLaserWriterに接続する場合、LaserWriterのアイコンをクリックします。
- AppleTalkにより1台以上のImageWriter IIに接続する場合、ImageWriterのアイコンをクリックします。
- AppleTalkによりファイルサーバに接続する場合、そのアイコンをクリックします。

アイコンをクリックすると、右上のボックス内に該当する種類の全デバイスの名称が表示されます。

3.使用したいデバイスの名称をクリックします。

ネットワーク上での識別のため各デバイスに名称が付けられていることがあります。名称が1つしか表示されない場合でも、それを選択してください。



■ 図8-9 名称でデバイスを指定する

4.AppleTalkの設定が“不使用”になっていれば、それを“使用”にします。

ネットワーク経由でデバイスをMacintoshに接続するためです。

5.“利用者”のボックスにあなたの名前を入力します。これは、デバイス利用者をネットワーク上の他のユーザに知らせるために必要です。

6.設定を終了するため、クローズボックスをクリックして“セレクタ”のウインドウを閉じます。

ファイルメニューから“閉じる”を選んでもウインドウを閉じることができます。

△重要 “セレクタ”使用後は、そのウインドウを必ず閉じてください。開いたままにしておくと、プリンタを使用していないときにもAppleTalkネットワークにアクセスしたままの状態となります。△

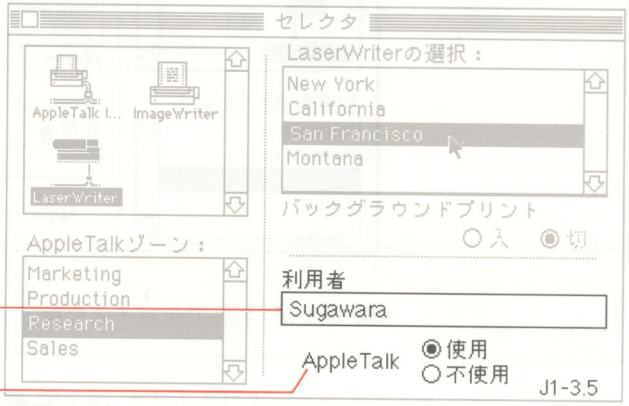
ここで設定したデバイスを使用し続ける限り、“セレクタ”を再度使用する必要はありません。設定変更の必要が生じた場合（プリンタの変更やファイルサーバへのアクセス）、“セレクタ”を開いて再設定を行ないます。

AppleTalkの接続および切り離し

AppleTalkによりコンピュータ同士を接続したりプリンタなどのデバイスを共有できます。（詳しくはAppleTalkのマニュアルをご覧ください。）

1. アップルメニューから“セレクタ”を選びます。

2. 接続か切り離しかを選択します。
   - AppleTalkから切り離すには、“不使用”ボタンをクリックします。
   - AppleTalkに接続するには、“使用”ボタンをクリックします。



■ 図8-10　セレクタのウインドウ

AppleTalk接続状態の設定は、実際の接続状態と一致させておくことが必要です。AppleTalkケーブルの接続または取り外しの際には必ず“セレクタ”を開いて再設定を行なってください

3. “利用者”のボックスにあなたの名前を入力します。これは、デバイス利用者をネットワーク上の他のユーザに知らせるために必要です。

   共用環境では、ユーザ名によりだれがデバイスを利用しているかを知ることができます。たとえば、書類がプリント待ちの状態になった場合、Macintoshは現在プリンタを占有しているユーザの名前を表示してくれます。このユーザに問い合わせれば、現在プリントされている書類の量や所要時間などを確認できます。

他のAppleTalkネットワーク上のデバイスを選ぶ

AppleTalkネットワークは相互接続が可能です。この場合、それぞれのネットワークはゾーンと呼ばれます。Macintoshを相互接続されたAppleTalkネットワークで使用する場合、“セレクタ”で他のゾーンにあるデバイスにアクセスできます。

1. アップルメニューから“セレクタ”を選びます。
2. 使用したいデバイスの種類を表すアイコンをクリックします。

   目的のアイコンが見あたらない場合、スクロールバーでボックス内をさがします。

   ウインドウ左下のボックスには、アクセス可能なゾーンが全て表示されます。黒く表示されている最初のゾーンがあなたのシステムのあるゾーンを表します。ウインドウ右上のボックスには、黒く表示されているゾーンにあり、かつ、先ほど選んだ種類に該当するデバイスの名称が表示されます。
3. 各ゾーンの名称部分をクリックして目的のデバイスを見つけます。
4. 使用したいデバイスの名称部分をクリックで選択します。
5. “利用者”のボックスにあなたの名前を入力します。これは、デバイス利用者をネットワーク上の他のユーザに知らせるために必要です。

アプリケーション内から“セレクタ”を呼び出してプリンタを選んだ場合、プリント前に“用紙設定”を選んで各種設定を確認することが必要です。

コントロールパネル

“コントロールパネル”を用いてMacintoshの各種機能を好みに合わせてカスタマイズできます。スピーカのボリュームをはじめ、マウスやキー入力の反応時間、起動ディスクの設定、デスクトップの表示パターンなども“コントロールパネル”で変更できます。“コントロールパネル”の設定はMacintosh内部に保存されますので、電源がオフの間もそのまま保持されます。（Macintosh内部に保存された各種設定は内蔵のバッテリにより保持されます）

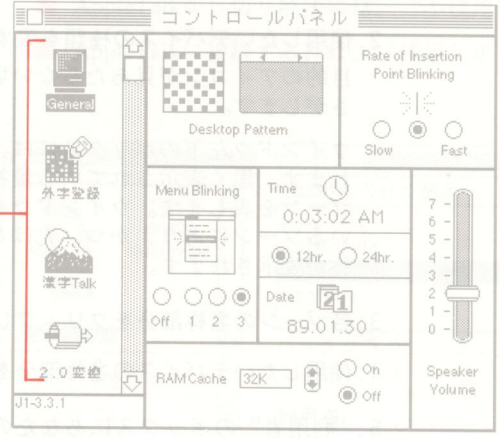
❖ 注意：日本語入力に関する各種設定にも“コントロールパネル”を用います。詳しくは別冊の「Macintosh日本語入力操作ガイド」をご覧ください。

“コントロールパネル”では数多くの機能を設定できます。対象となる機能はパネルの左側にアイコン表示されます。また、多数のアイコンの表示を想定してスクロールバーが設けられています。アイコンをどれか選択すると、パネルの右側部分が設定変更用の表示となります。

コントロールパネル (General)

1．アップルメニューから“コントロールパネル”を選びます。

“コントロールパネル”のウインドウが表示されます。（デフォルトでは“General”アイコンが選択された状態でウインドウが開きます）



■ 図8-11　コントロールパネル（General）

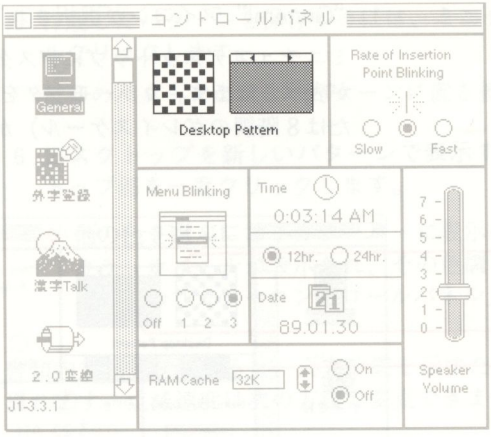
2．表示された項目について必要な設定を行ないます。

デスクトップパターンを変更する（モノクロモニタ）

何種類かのパターンから選択したり、独自にパターンを作成したりしてデスクトップのグレイ部分の表示をカスタマイズできます。

1．“General”アイコンが選択されていない場合、クリックします。

“Desktop Pattern”の部分（ミニチュアデスクトップ）にデスクトップパターンとそれを拡大したものが表示されます。



■ 図8-12　デスクトップパターンの表示

2.好みのパターンを設定します。

- 拡大表示部分のドットをクリック（またはドラッグ）して黒白を反転させます。
- ミニチュアデスクトップ上部の白いバーをクリックしてサンプルパターンを表示させます。（右矢部分をクリックすると次のサンプルパターンへ表示が切り替わります）
- 白いバーの下のパターン部分をクリックしてパターンを設定します。

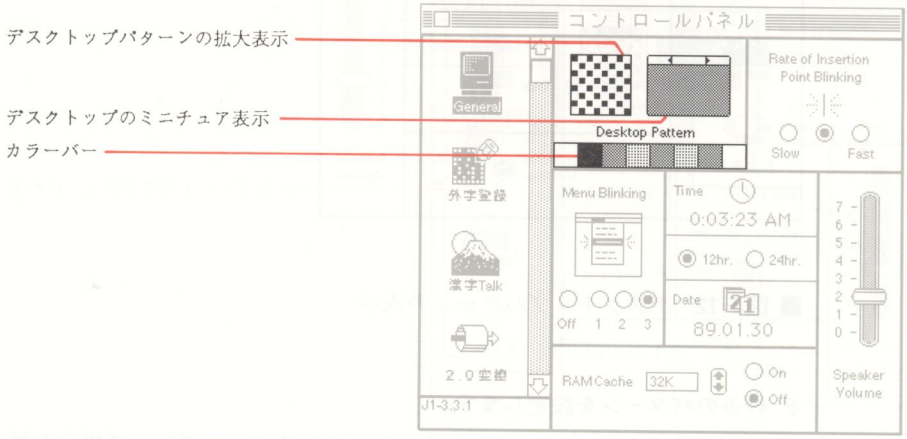
デスクトップパターンを変更する（カラーモニタ）

Macintosh II系の機種にカラーモニタをご使用の場合、デスクトップおよびテキストの選択部分の表示色も変更できます。また、ファインダのメニューバーにはカラーメニューが表示され、アイコン自体の表示色を変更できます。

デスクトップの表示色は、モノクロ表示の場合と同じ方法で設定できます。ミニチュアデスクトップ上部の白いバーをクリックする度にサンプルパターンの表示が変化します。気に入ったパターンが表示されたら、そのパターン自体をクリックします。

1．“General”アイコンが選択されていない場合、クリックします。

ミニチュアデスクトップにデスクトップパターンとそれを拡大したものが表示されます。カラーモニタをご使用の場合、８色のカラーバー（または８階調のグレイスケール）が表示されます。



■ 図8-13　カラーバー付きのデスクトップパターン

2．サンプルパターンの表示を切りかえるには、ミニチュアデスクトップ上部の白いバーをクリックします。

パターンはクリックする度に変化します。クリックを繰り返すとすでにセットされているパターンが順次表示され、最終的に表示は最初のパターンに戻ります。

3．パターンの表示色を変えるには、カラーバー中の１色をクリックします。

カラーバーの表示色はミニチュアデスクトップに表示されているパターンにより変化します。

4．パターンの拡大表示部で、表示を変化させたいドットをクリックします。

ドラッグにより連続的にドットを変化させることもできます。

5. 作成したパターンを保存するには、ミニチュアデスクトップ部をダブルクリックします。

最初のパターンが新しいパターンに置き換えられます。

6. デスクトップを新しいパターンで表示するには、ミニチュアデスクトップ部を一度クリックします。

❖ 他の色を選ぶには：カラーバーに表示の色をダブルクリックするとカラーホイールが表示され、その色調を変更できます。（詳しくはこの後の「カラーコントロールパネル」のページをご覧ください）

挿入ポイントの点滅速度を設定する

書類内でクリックすると、入力位置を示すために点滅する挿入ポイントが現れます。点滅速度は次の方法で変更できます。

1. “General” アイコンが選択されていない場合、クリックします。

必要があればスクロールして “General” アイコンを表示させます。

2. “Slow” （遅い）または “Fast” （速い）のいずれかのボタンをクリックして点滅速度を設定します。

メニューの点滅回数を設定する

1. “General” アイコンが選択されていない場合、クリックします。

必要があればスクロールして “General” アイコンを表示させます。

2. “1” から “3” のいずれかのボタンをクリックして点滅回数を設定します。

点滅させたくない場合には “Off” をクリックします

時刻を設定する

1. “General” アイコンが選択されていない場合、クリックします。

2. 時刻の表示形式を変えるには、“12 hr” （12時間制）または “24 hr” （24時間制）のいずれかのボタンをクリックします。

3. 変更したい部分（時、分、秒またはAM／PM）をクリックし、上向きまたは下向きの矢印をクリックして時間を設定します。

かわりに、数値をキー入力することもできます。

日付を設定する

1. “General” アイコンが選択されていない場合、クリックします。

2. 変更したい部分（年、月または日）をクリックし、上向きまたは下向きの矢印部分をクリックして日付を設定します。

かわりに、数値をキー入力することもできます。

RAMキャッシュを設定する

RAMとはランダムアクセスメモリ（random-access memory）の略で、一般にコンピュータのメモリ容量について言うときにはRAMの容量を意味します。

RAMキャッシュ機能を利用すると、Macintoshでの作業を大幅にスピードアップできます。アプリケーションの実行には同じデータを何度もディスクから読み出す動作が含まれますが、RAMキャッシュとは、このようなデータを保管しておくために確保された特別なRAM領域を指します。頻繁に使用されるデータはRAMキャッシュに保管されるためディスクアクセスの回数は減少し、その分アプリケーションの処理速度が向上します。

1. “General” アイコンが選択されていない場合、クリックします。
2. RAMキャッシュ機能を “On” にセットします。
3. 表示の矢印を使ってRAMキャッシュに使用するRAMの量を設定します。

RAMキャッシュを使用した場合、RAMの一部が占有されるため通常の処理に使用できるRAMの量は減少します。したがって、大量のメモリを必要とするアプリケーションを使用する場合にはRAMキャッシュを使用しない方がよいでしょう。一般的な目安としては、実装RAM容量の約１／４までがRAMキャッシュに利用できます。

これと似た機能に、漢字Talk特有の漢字キャッシュ機能があります。漢字キャッシュ機能は日本語スクリーンフォントの表示をスピードアップするために設けられたものですが、RAMキャッシュ、漢字キャッシュともにOnにする場合は、両方のキャッシュ量が大きすぎないように注意してください。漢字キャッシュについては、付属の「Macintosh日本語入力操作ガイド」をご覧ください。

- ❖ RAMキャッシュとマルチファインダ：マルチファインダの使用を開始すると、RAMキャッシュの設定状態がシステムソフトウェアによりチェックされます。１MBのRAMを実装したMacintoshの場合では、384Kをこえる RAMキャッシュが設定されていると マルチファインダが動作できないため、自動的にそれ以下に再設定されます。また、RAM拡張キットでメモリを増設した場合、マルチファインダ使用時のRAMキャッシュに使用可能な容量も１MBあたり384Kを限度として増加します。

  マルチファインダ使用時には複数のアプリケーションを同時に開いておけますが、この場合、RAMは複数のアプリケーションにより共有されます。このため、マルチファインダ環境では１MBあたりのRAMキャッシュは32 K以下に設定されることをお勧めします。詳しくは第12章をご覧ください。

スピーカボリュームを設定する

1. “General” アイコンが選択されていない場合、クリックします。
2. 表示のボリュームつまみを上下にドラッグして調整します。

   最低のボリュームに設定すると、Macintoshはスピーカを使うかわりにメニューバーを点滅させます。

   ❖ **Macintosh II 系機種の場合：**内蔵のカスタムサウンドチップを利用したより細かい設定が可能です。詳しくはこの後の「サウンドコントロールパネルを使う」のページをご覧ください。

   カラーモニタ使用のMacintosh II系各機種では、“カラーコントロールパネル” により選択部分の表示色を変更できます。

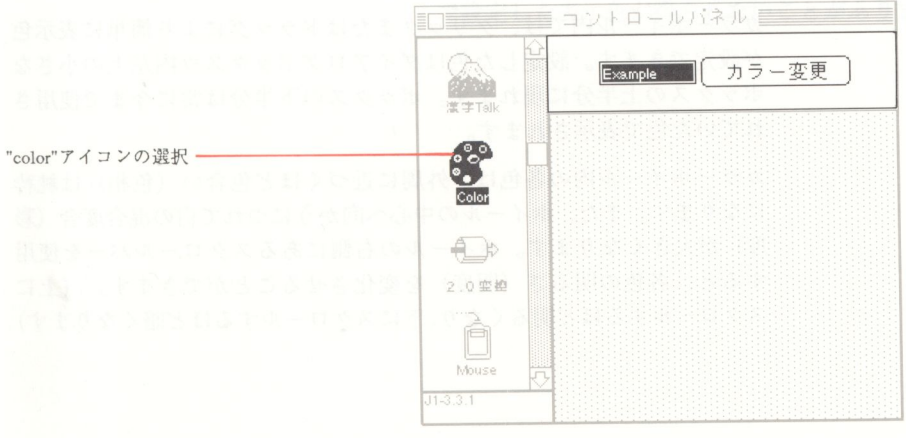
カラーコントロールパネルを使う

アイコンやテキストを選択するとその部分の表示が反転されます。モノクロ時は反転表示は黒かグレイの2種類しかありませんが、カラーの場合には反転部分がカラー化されます。

選択時のハイライトカラーを変更する

1. アップルメニューから “コントロールパネル” を選びます。
2. パネル左側にある “Color” アイコンをクリックします。

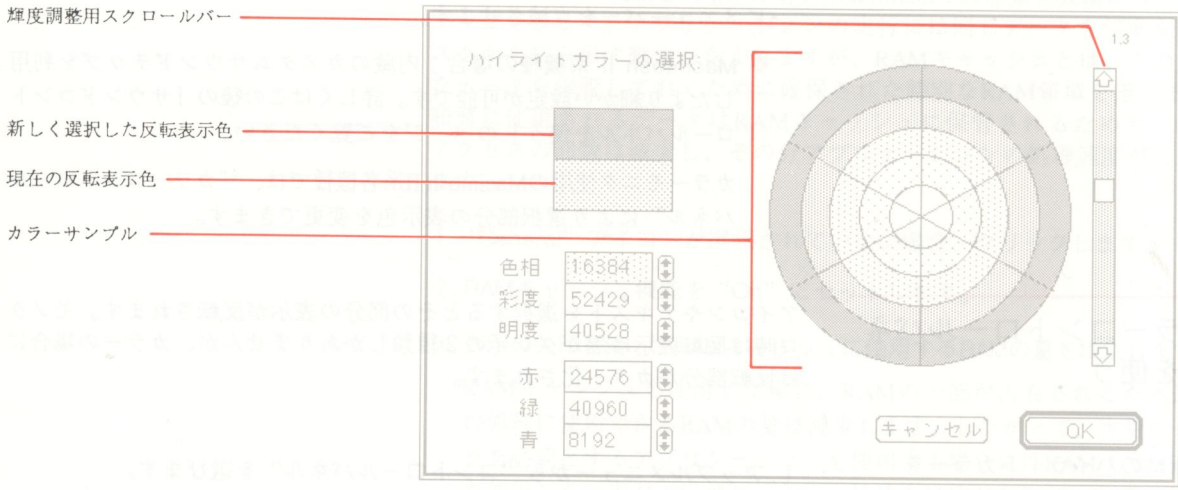
   “カラーコントロールパネル” が表示されます。



■ 図8-14　カラーコントロルパネル

カラーサンプルおよび “カラー変更” ボタンが表示されます。

3．“カラー変更”ボタンをクリックしてカラーホイールダイアログボックスを表示させます。



■ 図8-15　カラーホイールダイアログボックス

4．カラーホイール内の使用したい表示色をクリックします。

カラーホイール内では、クリックまたはドラッグにより簡単に表示色が設定できます。設定した色はダイアログボックスウ内左上の小さなボックスの上半分に現れます。ボックスの下半分は常に今まで使用されていた色で表示されます。

カラーホイール内の各色は、外周に近づくほど色合い（色相）は純粋になります。また、ホイールの中心へ向かうにつれて白の混合度合（彩度）が大きくなります。ホイールの右側にあるスクロールバーを使用すると、各色の明るさ（明度）を変化させることができます。（上にスクロールするほど明るくなり、下にスクロールするほど暗くなります）

ダイアログボックス内の左下には小さな3つのボックスが2組表示されており、カラーホイールから選んだ表示色の特性が数値で表されています。これらのボックスに数値を入力しても表示色を変更できます。たとえば、ことばでは表現できないような表示色をカラーホイールで作り出した場合でも、そのときに表示される数値を書きとめておけば、カラーモニタ付きのMacintosh II系機種のユーザであれば誰にでもその色を伝えることが可能です。表示色を数値で表現することで微妙な色合いも確実に再生できます。

5. 新しい表示色が気に入ったら、"OK" ボタンをクリックします。

アイコンの名称部分などのテキストを選択すると、ここで設定した表示色が使用されるようになります。表示色は再設定を行なうまで変化しません。一部のワープロアプリケーションにはカラー対応でないものがあります。その場合、テキストの選択部分は黒（またはグレイ）で表示されます。

❖ 表示色の数：アップル社製のビデオカードでは、16色まで表示できます。また、ビデオカード拡張キットを取り付けた場合には1600万色以上のカラーパレットからから最大256色を表示することが可能です。

ビデオカード拡張キットを取り付けていない（または256色以上を必要としない）場合、カラーホイールから必ずしも好みの表示色を選べるとは限りません。また、カラー表示を行なうアプリケーションが使用する表示色の定義がカラーホイールとは異なる場合、カラーホイールで設定した表示色が得られないことがあります。

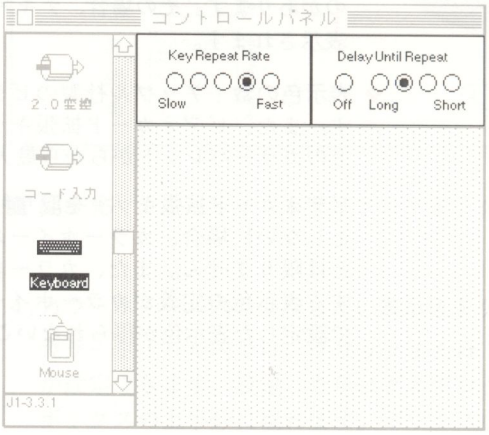
キーボードコントロールパネルを使う

“コントロールパネル”からキーボードの反応速度などを設定できます。

リピート入力速度を設定する

キャラクタキーを押し続けると、同じキャラクタが繰り返し入力されます。この繰り返しの速度は次の方法で変更できます。

1. アップルメニューから“コントロールパネル”を選びます。
   必要があれば、スクロールして“Keyboard”アイコンを表示させます。
2. “Slow”（遅い）から“Fast”（速い）までのボタンのいずれかをクリックします。



■ 図8-16　キーボードコントロルパネル

リピート入力開始までの時間を設定する

1. “Keyboard”アイコンをクリックします。
   必要があれば、スクロールして“Keyboard”アイコンを表示させます。
2. “Long”（長い）から“Short”（短い）までのボタンのいずれかをクリックし、キーを押し下げてからリピート入力が開始されるまでの時間を設定します。リピート入力を使用しない場合は“Off”をクリックします。
   リピート入力していないつもりでも、頻繁にリピート入力してしまう場合は時間を長めに設定するとよいでしょう。

モニタコントロールパネルを使用する

モニタ用の“コントロールパネル”を用いてカラー表示、グレイ階調表示のいずれかが選択できます。また、表示色（または階調数）も設定できます。

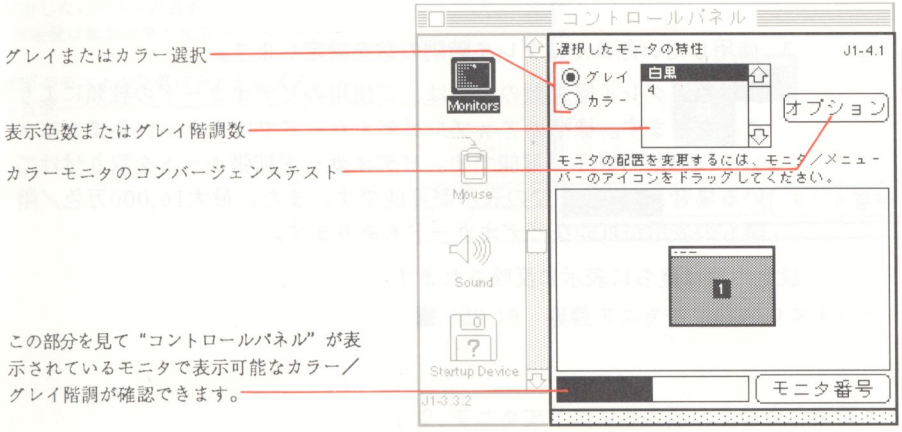
複数のモニタを同時に使用される場合、モニタ用の“コントロールパネル”を用いてモニタの位置関係およびメインモニタの設定ができます。

表示色数またはグレイ階調数を設定する

カラーモニタをご使用の場合、以下に示す方法で表示色が設定できます。グレイ表示の場合、カラーモニタ、モノクロモニタのいずれでも階調数が設定できます。

1．“Monitors”アイコンが選択されていない場合、クリックします。

“モニタコントロールパネル”が現れます。



■ 図8-17　モニタコントロールパネル

コントロールパネル下部には、Macintoshに接続されているモニタのアイコンが表示されます（複数のモニタが接続されていれば、その数だけアイコンが表示されます）。太い枠で囲まれているアイコンは、現在選択されているモニタを示します。いずれのアイコンをクリックすれば、それに対応したモニタが選択されます。

2. “グレイ”または“カラー”ボタンをクリックします。

カラーモニタで通常はカラー表示にしていても、長時間にわたってワープロで作業する場合などにはモノクロに設定しておくとよいでしょう。

もちろんモノクロモニタではカラー表示できませんが、グレイに設定しておけば完全な階調表示が得られます（階調間のレベルが均等）。モノクロモニタ使用時にカラーに設定すると、グレイ階調で表現されるのは緑に相当する部分の明るさだけとなります。

3. 使用したい色またはグレイ階調の数を設定します。

表示色／グレイ階調数の上限は、ご使用のビデオカードの種類によりことなります。標準のアップルビデオカードではカラー16色またはグレイ16階調の表示が可能です。ビデオカード拡張キットを取り付けている場合、256色までの表示が可能です。また、最大16,000万色／階調もの表示が可能なビデオカードもあります。

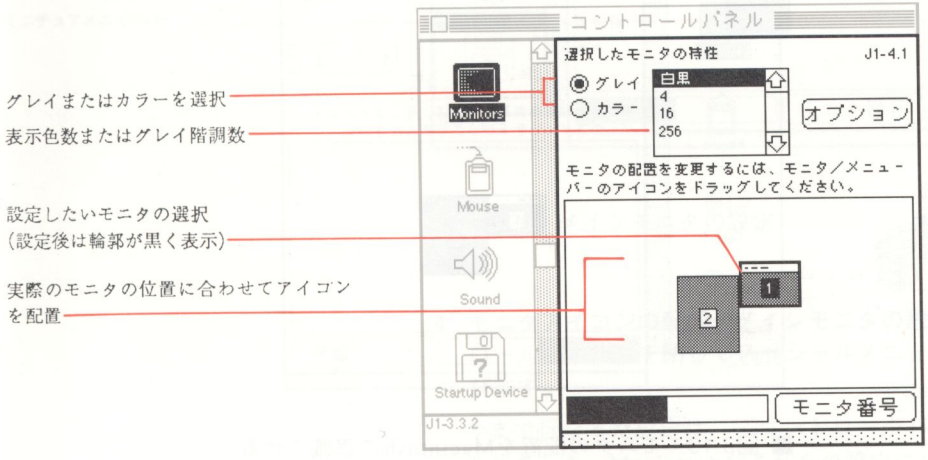
設定内容は直ちに表示に反映されます。

モニタの位置関係を設定する

複数のモニタを効果的に使用するには、それらの位置関係をMacintoshに知らせておくことが必要です。接続した全モニタを同時に使用する場合、Macintoshは“コントロールパネル”で設定されたモニタの配置にしたがってモニタ間のポインタ移動を行ないます。

1．“Monitors”アイコンが選択されていない場合、クリックします。

“モニタコントロールパネル”が現れます。



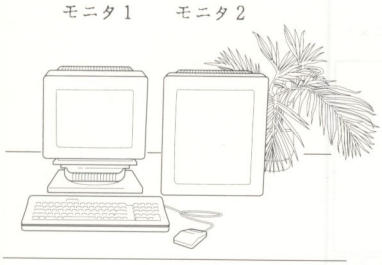
■ 図8-18　複数モニタ使用時のコントロールパネル（Monitors）

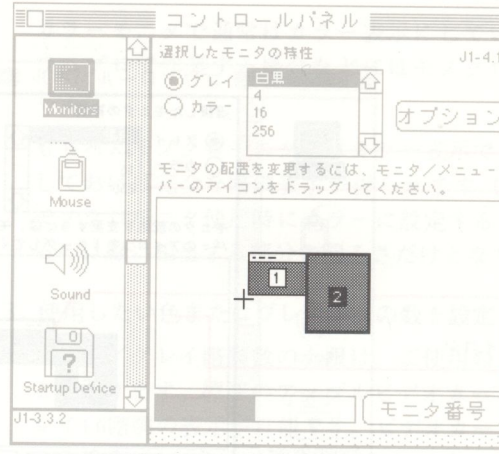
2．モニタアイコンと実際のモニタの配置を一致させます。

“コントロールパネル”下半分のボックス内に表示の各モニタアイコンをドラッグし、実際のモニタの配置と一致させます。たとえば、モニタ２に対応するモニタが、実際にはモニタ１に対応するものの上に置かれている場合、モニタ２のアイコンをドラッグしてモニタ１の上方に配置します。モニタアイコンと実際のモニタの配置が完全に一致するまでアイコンの移動を繰り返します。

複数のアイコンを一括して移動したい場合、*shift*キーを押し下げたままドラッグを行なってください。

❖ 実際のモニタとの対応が不明なとき：アイコンのモニタ番号はビデオカードが装着されている拡張スロットに対応します。このため、複数のモニタを接続している場合、モニタ番号が実際にはどのモニタを指すのか分かりにくいことがあります。Macintosh本体のカバーを外さずにモニタの対応を確認するには、“モニタ番号”ボタンが利用できます。



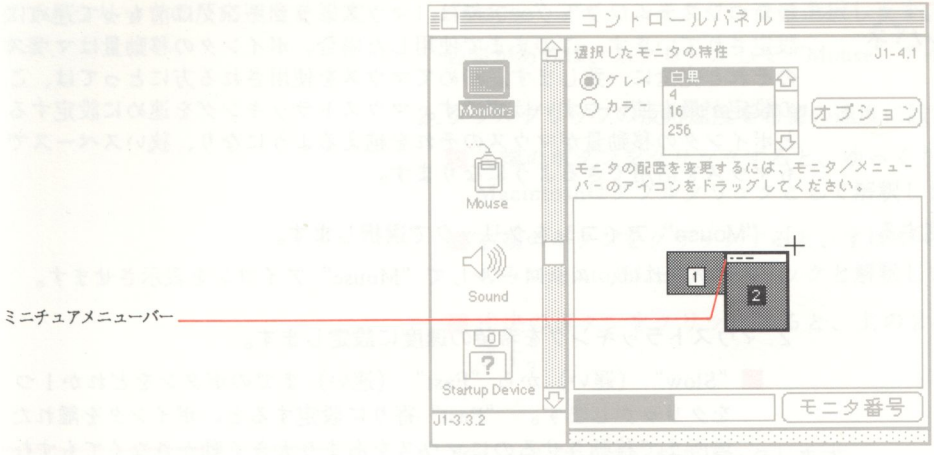


■ 図8-19　モニタの配置をMacintoshに認識させる

3. モニタアイコン上部にあるミニチュアメニューバーを、メインモニタを表すモニタアイコンまでドラッグします。

メインモニタとは、ファインダのメニューバーが表示されるモニタを意味します。複数のモニタを同時に使用する場合、Macintoshの操作はメインモニタを中心に行なうことになります。接続したモニタのうち、どれか1台をメインモニタに設定します。

このコントロールパネルを使用する場合、モニタ1が選択された状態でウインドウが開きます。この設定は必要に応じて変更できます。



■ 図8-20　メインモニタの設定

4．モニタアイコンの配置やメインモニタの設定を変えた場合、“コントロールパネル”を閉じてスペシャルメニューから“リスタート”を選びます。

今まで行なった設定は、“コントロールパネル”を閉じた時点で保存されました。Macintoshをこれらの設定にしたがって動作させるには、再起動が必要です

❖ オプションボタンについて：この機能は使用するモニタおよびビデオカードによって異なる働きをします。

マウスコントロールパネルを使う

最新のシステムソフトウェアでは、マウストラッキングは前もって遅めに設定されています。このままで使用した場合、ポインタの移動量はマウスのそれと完全に一致します。初めてマウスを使用される方にとっては、この設定が最も使いやすいはずです。マウストラッキングを速めに設定するとポインタの移動量がマウスのそれを越えるようになり、狭いスペースでもマウスを活用できるようになります。

マウストラッキングを設定する

1. “Mouse” アイコンをクリックで選択します。

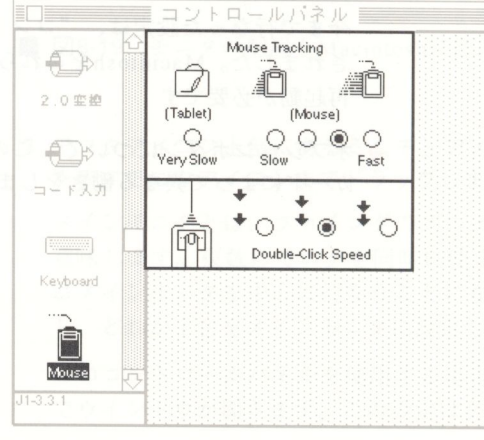
   必要があれば、スクロールして “Mouse” アイコンを表示させます。

2. マウストラッキングを希望の速度に設定します。

   - “Slow” （遅い）から “Fast” （速い）までのボタンをどれか1つをクリックします。 “Fast” 寄りに設定すると、ポインタを離れた場所まで移動させるのにマウスをあまり大きく動かさなくてもすむようになります。

     または、

   - “Very Slow” （大変遅い）をクリックします。ポインタの移動速度が一定になります。



■ 図8-21 マウスコントロールパネル

ダブルクリックの反応速度を設定する

1. “Mouse” アイコンをクリックで選択します。

   必要があれば、スクロールして “Mouse” アイコンを表示させます。

2. ダブルクリックの反応速度を希望の速度に設定します。

   - 左端のボタンをクリックすると、ゆっくり2度クリックした場合もMacintoshはダブルクリックとして解釈します。
   - 右端のボタンをクリックすると、すばやく2度クリックした場合にのみMacintoshはダブルクリックと解釈します。
   - 中央のボタンをクリックすると、上の2種類の中間の設定となります。

サウンドコントロールパネルを使う

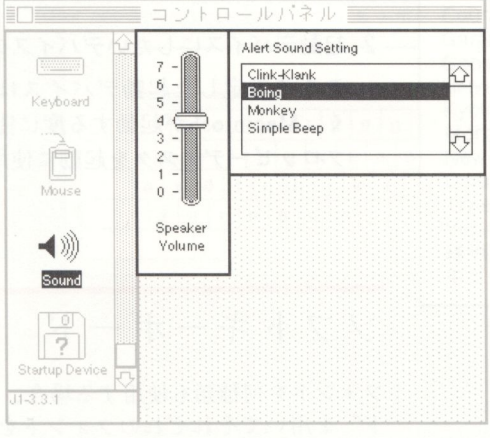
1. “Sound” アイコンをクリックします。

2. 表示されたボリュームつまみを上下にドラッグし、スピーカの音量を好みの大きさに設定します。

   最低の音量に設定すると、Macintoshはスピーカを鳴らす必要のあるとき、かわりにメニューバーを点滅させます。（“コントロールパネル” の “General” アイコンをクリックしても同じ設定ができます。どちらか一方で設定を変えると、もう一方の設定も自動的に変わります）

3. “Alert Sound Setting” と表示されたボックスから、好みの警報音をクリックで選びます。

   数種類のサウンドから選べます。また、クリックすると実際にスピーカが鳴りますので、パターンを全て試した上で設定ができます。



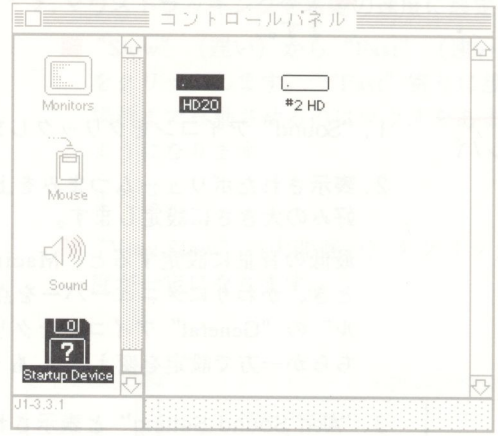
■ 図8-22　サウンド関連のコントロール

起動デバイスコントロールパネルを使う

1台のMacintosh SEまたはMacintosh IIにつき複数のハードディスクをご使用の場合、そのうち1台を起動デバイスに指定しておきます。起動デバイスとは、Macintoshが起動する際に使用する装置を指します。（詳しくは第11章をご覧ください）

1. “Startup Device” アイコンをクリックします。

   必要があれば、スクロールして “Startup Device” アイコンを表示させます。



■ 図8-23　起動デバイスコントロールパネル

   起動に使用できる全てのデバイスのアイコンが表示されます。

2. 起動デバイスにしたいデバイスのアイコンをクリックします。

   ここで設定した起動デバイスは再設定するまで解除されることはなく、Macintoshが起動する度に使用されることになります。（ただし、フロッピーディスクを起動に使用しないことが前提です）

ソフトキーボード

フォントを何種類も使用する場合、デスクアクセサリの “ソフトキーボード” を用いてそれぞれのフォントを構成するキャラクタを一覧できます。このデスクアクセサリは、アクセント記号などを使用する欧文フォントを用いる場合などに特に便利です。（*Soupçon*や*mañana*など）

ソフトキーボードを使う

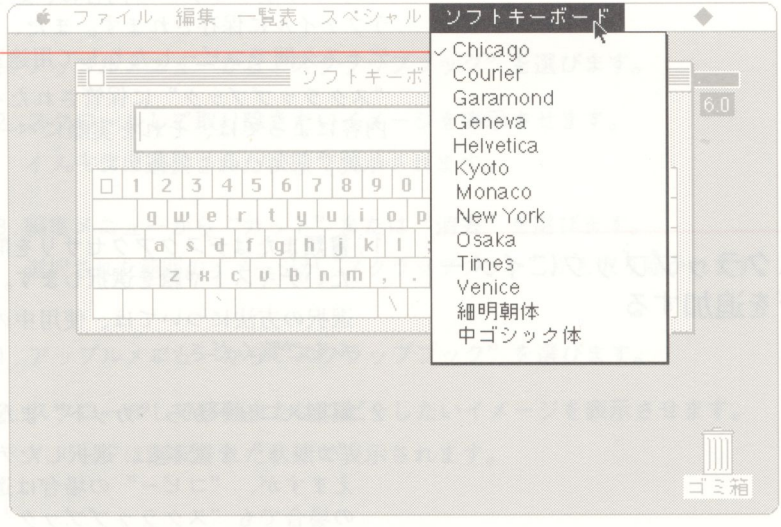
1. アップルメニューから“ソフトキーボード”を選びます。
メニューバーが変化し、次のようなウインドウが現れます。



■ 図8-24　ソフトキーボード（アップルキーボードの例）

ウインドウにはキーボードの絵（テンプレート）が表示され、使用中のフォントで各キーにキャラクタ表示されます。テンプレートには前に指定されたフォントが使用されますが、設定がない場合にはMacintoshで最も頻繁に使用されるシステムフォントが使用されます。“ソフトキーボード”には、起動ディスクにインストールされているものであればどのフォントでも表示できます。

2. 他のフォントを表示させるには、メニューバーから“ソフトキーボード”のメニューをプルダウンし、好みのフォントを選びます。



■ 図8-25　ソフトキーボードのメニュー

選んだフォントは“ソフトキーボード”のウインドウに表示されます。フォントの種類にかかわらず、*option*、*shift*、または*caps look*キーを押しながらの入力も可能です。

3. キーボードでタイプするか、“ソフトキーボード”のキーをクリックしてキャラクタを入力してみます。

   入力したキャラクタは“ソフトキーボード”上部のテキストボックス内に現れます。ここに現れたテキストも、カットおよびペーストの編集機能を利用して他のデスクアクセサリや書類に取り込めます。（ペースト後のテキストには“ソフトキーボード”と同じフォントが使用されないことがあります）

アクセント記号などを含むキャラクタセットの使用方法は第8章の「オプションキャラクタ」のページに、解説されています。

スクラップブック

多用する絵やテキストは“スクラップブック”に保管しておけば、いつでも取り出して使用できます。これにより、書類やテキストを受けつける他のデスクアクセサリからカットしたりコピーしたものをペーストできます。（たとえば、よく使うレターヘッドを“スクラップブック”に保管しておけば手紙の作成時に繰り返し使用できます）

“スクラップブック”の内容は、起動ディスクの“Scrapbook File”というファイルに保存されます。また、このファイルを数種類用意しておき、ディスク間でコピーしたりして用途別に使い分けることも可能です。

“スクラップブック”に保管されたイメージ（絵やテキスト）の大きさや内容によっては、それを実際にペーストするまでイメージ全体を見ることができないことがあります。

スクラップブックにイメージを追加する

1. 書類またはデスクアクセサリを開き、“スクラップブック”に追加したいテキストや絵を選択します。

   選択の方法については、使用中のアプリケーションに付属のマニュアルをご覧ください。

2. 編集メニューから“カット”または“コピー”を選びます。

   “カット”を選ぶと、選択したテキストまたは絵はスクリーンから消えますが、“コピー”の場合は選択部分がそのまま残ります。いずれの場合でも“スクラップブック”には選択したものが追加され、次に“カット”または“コピー”を選ぶまでそのまま保管されます。

3. アップルメニューから“スクラップブック”を選びます。

4. 編集メニューから“ペースト”を選びます。

選択したものは、“スクラップブック”の奥から順に保管されます。“スクラップブック”ウインドウ左下の数字は、表示内容の保管位置を表します。右下隅には保管されているイメージがテキストであるか絵であるかが示されます。また、スクロールバーを使用すれば“スクラップブック”の内容をひと通り見ることができます。



■ 図8-26　スクラップブックの表示例

スクラップブックからイメージを取り除く

1. アップルメニューから“スクラップブック”を選びます。

2. スクロールして取り除きたいイメージを表示させます。

イメージは選択された状態で表示されます。

3. 編集メニューから“カット”または“消去”を選びます。

選択された範囲のイメージが“スクラップブック”から取り除かれます。

スクラップブックから書類へイメージを移動またはコピーする

1. アップルメニューから“スクラップブック”を選びます。

2. スクロールして移動またはコピーしたいイメージを表示させます。

イメージは選択された状態で表示されます。

3. 編集メニューから“カット”または“コピー”を選びます。

イメージは“クリップボード”に保管され、次の“カット”または“コピー”を選ぶまでそこに残ります。

4. 保管したイメージを追加したい書類を開きます。

その書類のウインドウがすでに開いている場合、そのウインドウをクリックして選択します。

5. 書類内でイメージを入れたい場所を選択します。

6. 編集メニューから“ペースト”を選びます。

イメージが書類内にペーストされます。

スクラップブックを複製する

“スクラップブック”の内容を収めたファイル、“Scrapbook File”はドラッグして他の起動ディスクにその複製を作成できます。

1. “システムフォルダ”アイコンを開き、その中の“Scrapbook File”アイコンを選択します。

2. ファイルメニューから“複製”を選びます。

“Scrapbook Fileのコピー”の名称の付いたアイコンが新たに表示されます。

3. 新しく表示されたアイコンを他の起動ディスクのアイコンにドラッグします。

移動先にすでに“Scrapbook File”がある場合、前もって“ゴミ箱”へドラッグし破棄しておきます。このファイルを保存しておきたい場合には、他のフォルダへドラッグしてください。（内容が分かるように名称を変更しておくとよいでしょう）

4. システムフォルダ内で、“Scrapbook Fileのコピー”アイコンを選択し、名称部分を編集します。

アイコンが選択されていな場合、そのアイコンをクリックします。次に、“のコピー”の部分のみを選択し、*backspace*（または*delete*）キーを押します。

“スクラップブック”のファイルは、“Scrapbook File”の名称でシステムフォルダ内に収めておくことが必要です。他の名称にしたり、保存場所を変えたりすると、Macintoshが“スクラップブック”をさがし出すことができなくなります。

以上の方法で、同じ起動ディスク上に数種類の“スクラップブック”を保存しておけます。この場合、同一フォルダに入れておく場合にはそれぞれのファイルに異なった名称を付けておくことが必要です。Macintoshは、システムフォルダ内の“Scrapbook File”というファイルだけを“スクラップブック”のファイルとして識別します。

第9章

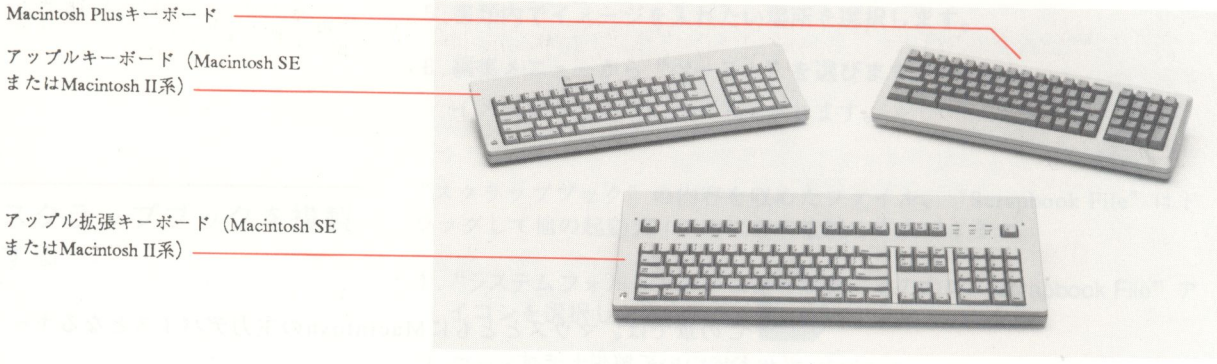
キーボードについて



この章では、マウスとともにMacintoshの主力デバイスとなるキーボードについて解説します。

Macintoshの機種によりキーボードの大きさ、形、およびキー配列は少し異なります。

- Macintosh Plusには、1種類のキーボードが用意されています。
- Macintosh SEおよびMacintosh II系の機種には、アップルキーボードまたはアップル拡張キーボードのいずれかが使用できます。



■ 図9-1　Macintosh用キーボード

キーボードの主要部分はいずれのタイプでも同じですが、キー配列に多少の違いがあります。Macintosh SEおよびMacintosh II系用の2タイプのキーボードには、Macintosh Plus用キーボードにはないキーが設けられています。（技術的な相違点については付属の「オーナーズガイド」をご覧ください）

この章について

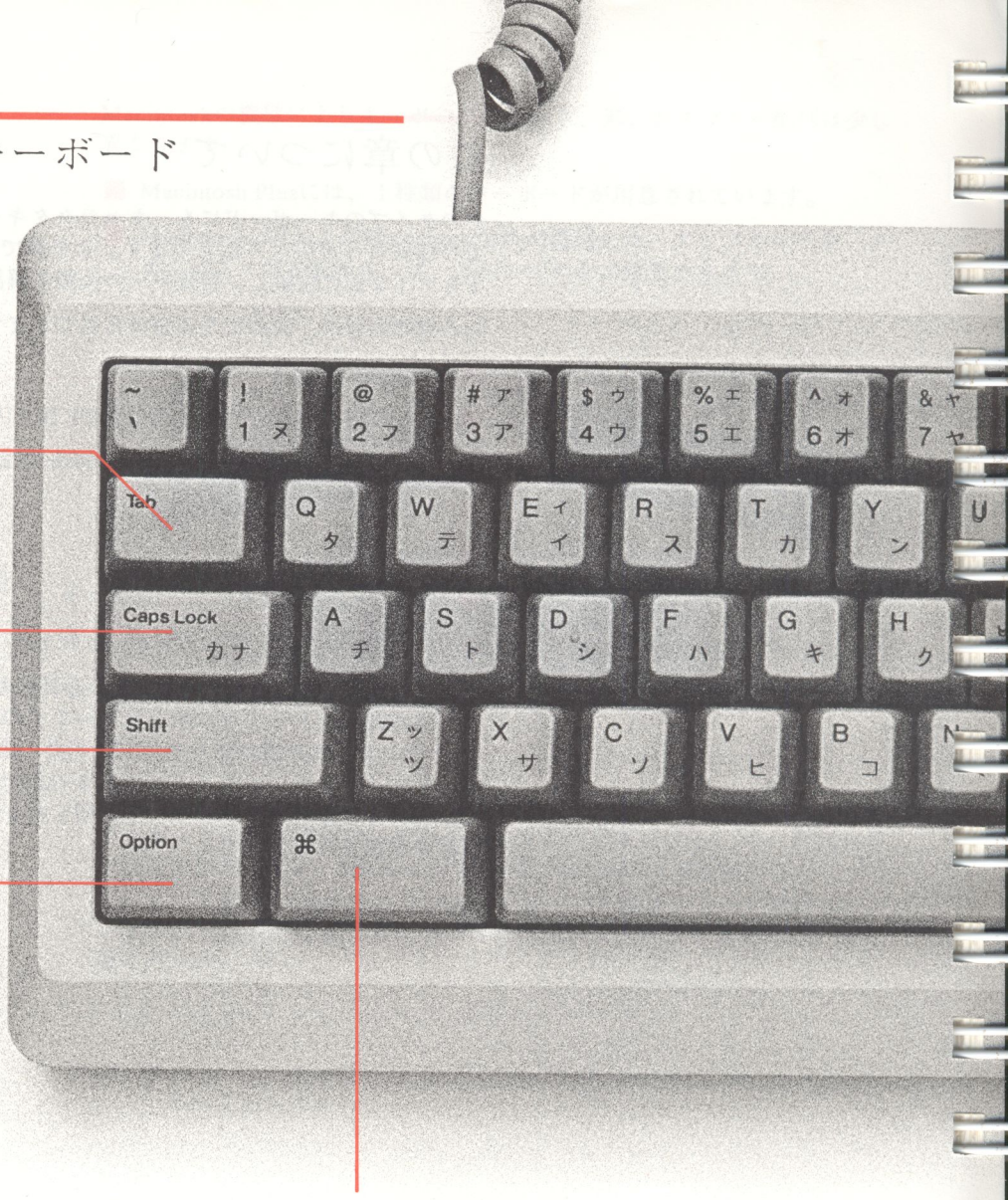
どのタイプのキーボードにも、キャラクタキー、テンキー、矢印キー、および特殊キーが設けられています。この章では、Macintosh用のキーボードをタイプ別に図解し、特殊キーの役割を解説します。

この章の内容は、次のように分けられています。

- Macintosh Plusキーボード
- アップルキーボード（Macintosh SEおよびMacintosh II系）
- アップル拡張キーボード（Macintosh SEおよびMacintosh II系）
- オプションキャラクタ
- Easy Access
- メニューコマンドのショートカット
- ファインダのキーボードショートカット

以上の内容を順を追ってお読みになる必要はありません。この後には各キーボードの図解がタイプ別に示されていますので、この中からご使用のキーボードについての情が得られます。図解の後のページには、オプションキャラクタやインタナショナルキャラクタの入力方法が解説されています。この章の終りには、コマンドキーを利用したショートカットと呼ばれる操作方法が解説されています。

Macintosh Plusキーボード



タブキー：挿入ポイントを水平方向へ移動させるキーです。タブキーを押す度に、挿入ポイントは次のタブストップ（または入力場所）までジャンプします。

キャプスロックキー：このキーを使用すると、アルファベットは全て大文字で入力されます。（数字や記号キーは全く影響されません。）

シフトキー：このキーを押し下げたままキーを押すと、そのキーの上段に示されているキャラクタ（大文字）や記号が入力されます。

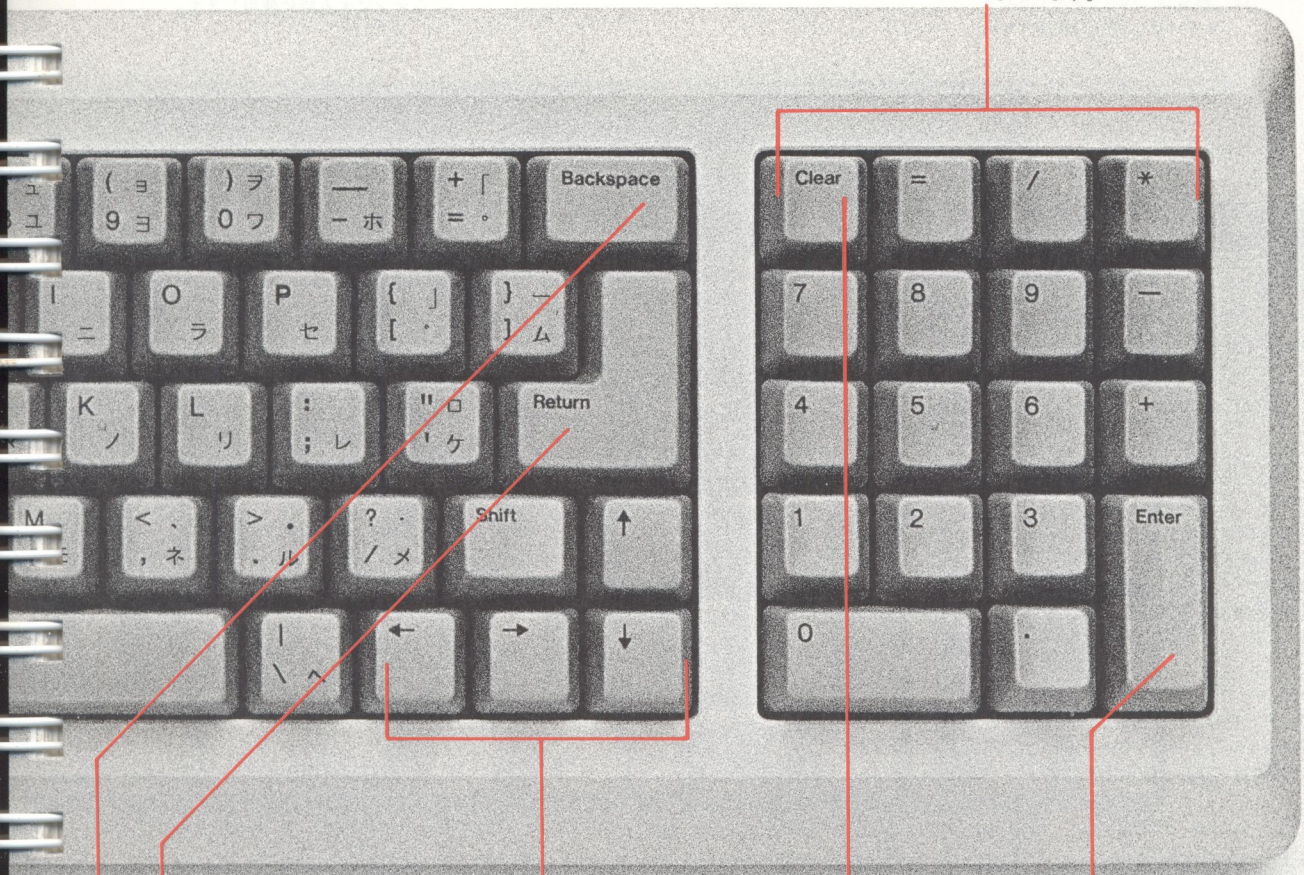
オプションキー：このキーを押し下げたままでキャラクタキーを押すと、キーボードにはない特殊なキャラクタ（アクセント付きなど）が入力できます。

コマンドキー：他のキーとの組み合わせにより、ショートカットと呼ばれる操作を行い、キーボードから直接メニューのコマンドを選ぶことができます。また、アプリケーションによってはコマンドキーとの組み合わせで進行中の処理（プリントなど）のキャンセルに使用されることがあります。

■ 図9-2　Macintosh Plusキーボード

上の写真は実際のものと異なる場合があります。

テンキー：数値の入力をすばやく行うことができます。キーの配列は、デスクアクセサリの“計算機”のボタン配列に一致しています。



リターンキー：テキストの挿入ポイントを次の行の先頭へ移動させるキーです。ダイアログボックスでは、太枠で示されたボタン（“OK”など）をクリックするかわりにリターンキーを押すことができます。

矢印キー：マウスを移動させるかわりに、矢印キーを用いても挿入ポイントの移動ができます。

エンターキー：ダイアログボックスでは、太枠で示されたボタン（“OK”など）をクリックするかわりにエンターキーを押すことができます。アプリケーションによっては、データを所定の場所に入力する際にリターンキーではなく、エンターキーを押すことが必要なものがあります。

バックスペースキー：現在選択されている部分を削除するキーです。挿入ポイントが選択されている時は、1字づつ後退してテキストを削除できます。

クリアキー：バックスペースキーと同様に、現在選択されている部分を削除します。アプリケーションによっては、このキーの働きが異なる場合があります。

アップルキーボード



パワーオンキー：Macintosh II系の機種では、電源をオフの状態からオンにする時に使用します。

エスケープキー：escはescapeを意味します。このキーの機能はアプリケーションにより異なります。

タブキー：挿入ポイントを水平方向へ移動させるキーです。タブキーを押す度に、挿入ポイントは次のタブストップ（または入力場所）までジャンプします。

コントロールキー：コマンドキーと同様に、他のキーと組み合わせて使用することによりショートカットや特殊な操作を行います。

シフトキー：このキーを押し下げたままキーを押すと、そのキーの上段に示されているキャラクタ（大文字）や記号が入力されます。

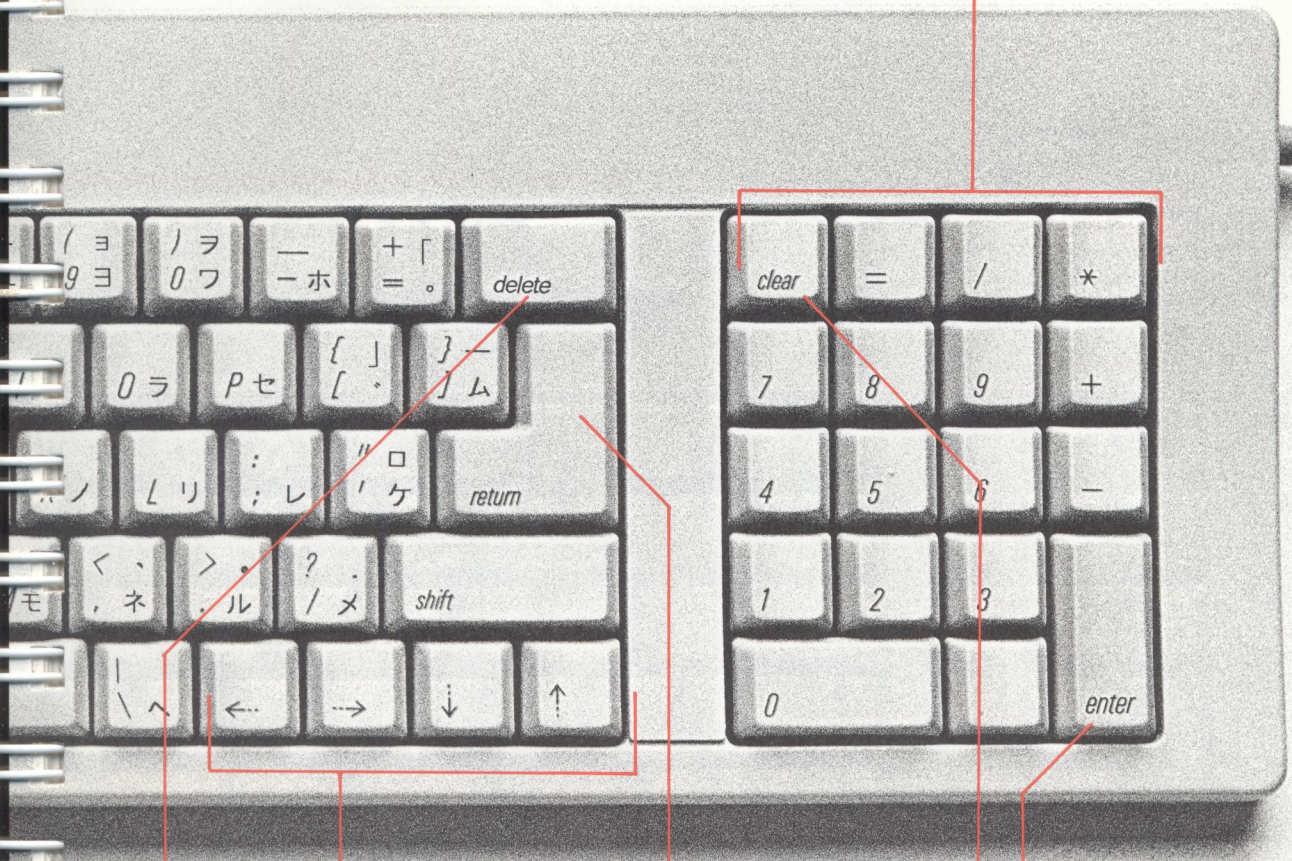
オプションキー：このキーを押し下げたままでキャラクタキーを押すと、キーボードにはない特殊なキャラクタ（アクセント付きなど）が入力できます。

キャプスロックキー：このキーを使用すると、アルファベットは全て大文字で入力されます。（数字や記号キーは全く影響されません。）

コマンドキー：他のキーとの組み合わせにより、ショートカットと呼ばれる操作を行い、キーボードから直接メニューのコマンドを選ぶことができます。また、アプリケーションによってはコマンドキーとの組み合わせで進行中の処理（プリントなど）のキャンセルに使用されることがあります。

■ 図9-3　アップルキーボード

上の写真は実際のものと異なる場合があります。



テンキー：数値の入力をすばやく行うことができます。配列はデスクアクセサリの“計算機”のボタン配列に一致しています。

エンターキー：ダイアログボックスでは、太枠で示されたボタン（“OK”など）をクリックするかわりにエンターキーを押すことができます。アプリケーションによっては、データを所定の場所に入力する際にリターンキーではなく、エンターキーを押すことが必要なものがあります。

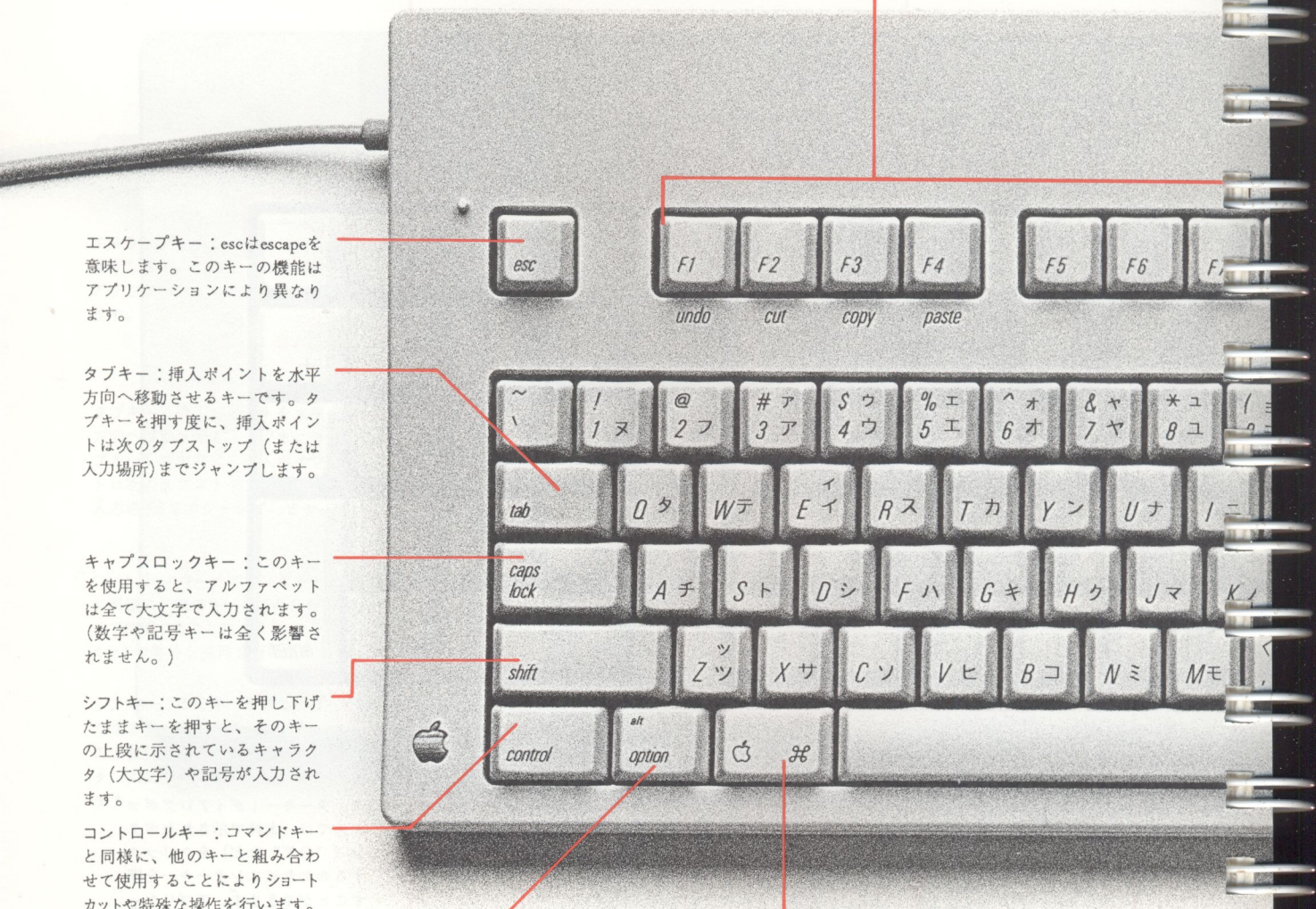
クリアキー：デリートキーと同様に、現在選択されている部分を削除します。アプリケーションによっては、このキーの働きが異なる場合があります。

矢印キー：マウスを移動させるかわりに、矢印キーを用いても挿入ポイントの移動ができます。

リターンキー：テキストの挿入ポイントを次の行の先頭へ移動させるキーです。ダイアログボックスでは、太枠で示されたボタン（“OK”など）をクリックするかわりにリターンキーを押すことができます。

デリートキー：現在選択されている部分を削除するキーです。挿入ポイントが選択されている時は、1字づつ後退してテキストを削除できます。

アップル拡張キーボード



ファンクションキー：UNIXやMS-DOSなど、通常のMacintoshオペレーティングシステム以外で使用する特殊キーです。

エスケープキー：escはescapeを意味します。このキーの機能はアプリケーションにより異なります。

タブキー：挿入ポイントを水平方向へ移動させるキーです。タブキーを押す度に、挿入ポイントは次のタブストップ（または入力場所）までジャンプします。

キャプスロックキー：このキーを使用すると、アルファベットは全て大文字で入力されます。（数字や記号キーは全く影響されません。）

シフトキー：このキーを押し下げたままキーを押すと、そのキーの上段に示されているキャラクタ（大文字）や記号が入力されます。

コントロールキー：コマンドキーと同様に、他のキーと組み合わせて使用することによりショートカットや特殊な操作を行います。

オプションキー：このキーを押し下げたままでキャラクタキーを押すと、キーボードにはない特殊なキャラクタ（アクセント付きなど）が入力できます。

コマンドキー：他のキーとの組み合わせにより、ショートカットと呼ばれる操作を行い、キーボードから直接メニューのコマンドを選ぶことができます。また、アプリケーションによってはコマンドキーとの組み合わせで進行中の処理（プリントなど）のキャンセルに使用されることがあります。

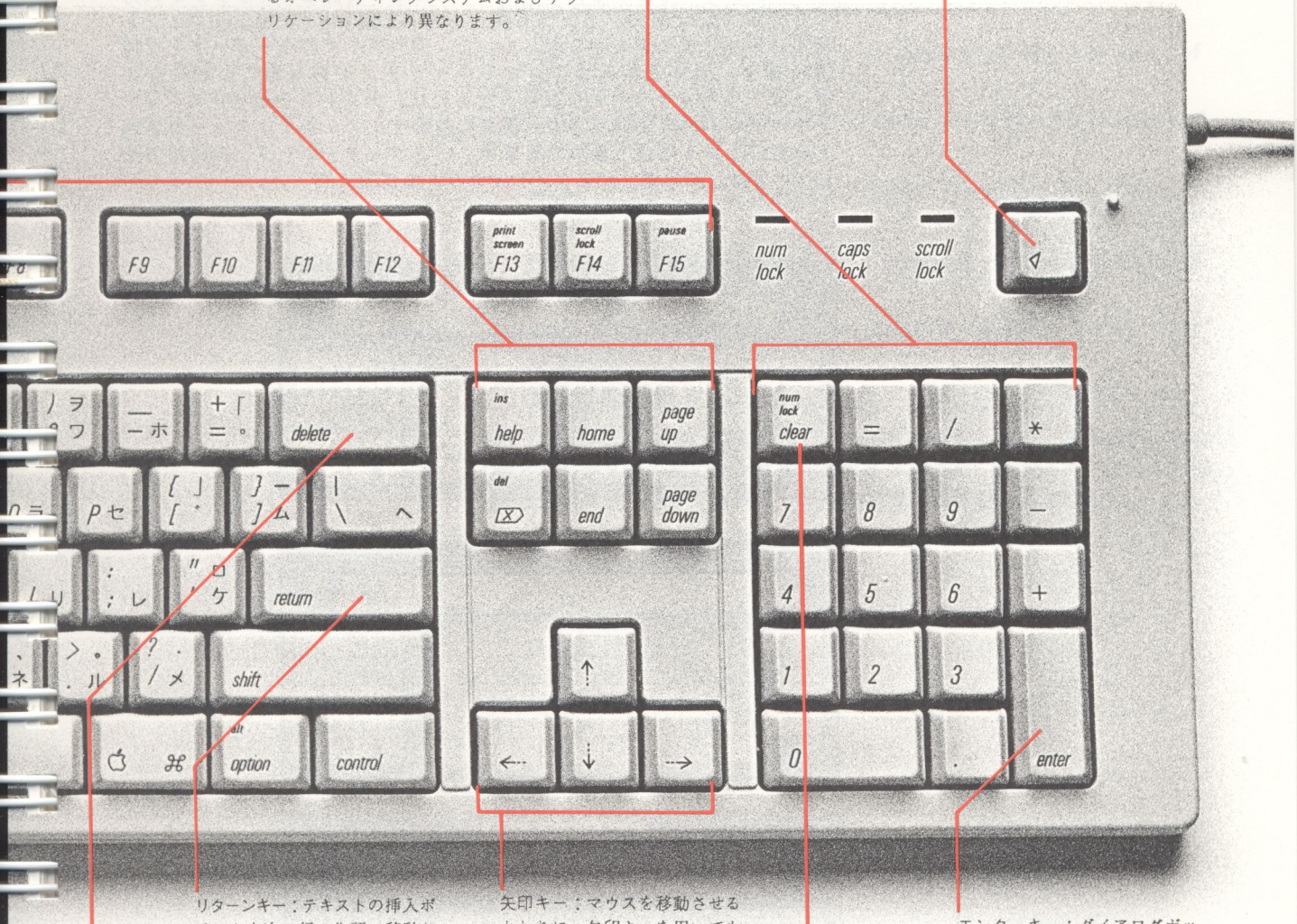
■ 図9-4　アップル拡張キーボード

上の写真は実際のものと異なる場合があります。

特殊キー：通常のMacintoshオペレーティングシステム以外での使用を目的としています。これらのキーの機能は、使用するオペレーティングシステムおよびアプリケーションにより異なります。

テンキー：数値の入力をすばやく行うことができます。配列はデスクアクセサリの“計算機”のボタン配列に一致しています。

パワーオンキー：Macintosh II系の機種では、電源をオフの状態からオンにする時に使用します。



リターンキー：テキストの挿入ポイントを次の行の先頭へ移動させるキーです。ダイアログボックスでは、太枠で示されたボタン（“OK”など）をクリックするかわりにリターンキーを押すことができます。

矢印キー：マウスを移動させるかわりに、矢印キーを用いても挿入ポイントの移動ができます。

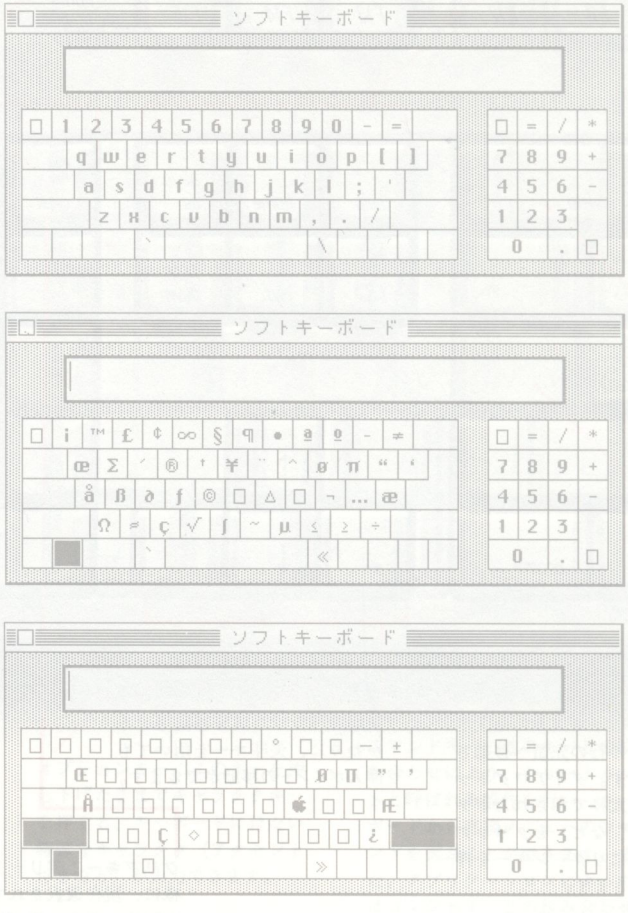
エンターキー：ダイアログボックスでは、太枠で示されたボタン（“OK”など）をクリックするかわりにエンターキーを押すことができます。アプリケーションによっては、データを所定の場所に入力する際にリターンキーではなく、エンターキーを押すことが必要なものがあります。

デリートキー：現在選択されている部分を削除するキーです。挿入ポイントが選択されている時は、1字づつ後退してテキストを削除できます。

クリアキー：デリートキーと同様に、現在選択されている部分を削除します。アプリケーションによっては、このキーの働きが異なる場合があります。

オプションキャラクタ

*option*キーのみ、または*option*キーと*shift*キーの両方を押し下げたままキャラクタキーを押すと、キーボードにはない特殊なキャラクタが入力できます。図9-5には、アップルキーボードを例としてChicagoフォントのオプションキャラクタを示しました。他のタイプのキーボードをご使用の場合、表示されるオプションキャラクタが異なることがあります。これらのキャラクタを表示させるには、デスクアクセサリの“ソフトキーボード”を使用します。現在の起動ディスクにインストールされているフォントは全て表示できます。“ソフトキーボード”の使用方法については、第8章「デスクアクセサリ」をご覧ください。



■ 図9-5　アップルキーボードのオプションキャラクタ

アクセント記号付きのキャラクタを入力する

optionキーを押し下げたままキャラクタキーを押すことにより、アクセント記号などの付いた特殊なキャラクタを入力できます。ただし、使用するフォントの種類により制限されるものもあります。

次に、主な発音符付きキャラクタのoptionキーを利用した入力方法を示します。

- *lèvre* などのアクサングラーブ（`）optionキーを押したままeとタイプします。
- *école* などのアクサンテギュ（´）option キーを押したままeとタイプします。
- *maître* などのアクサンシルコンフレクス（^）option キーを押したままiとタイプします。
- *Böblingen* などのウムラウト（¨）option キーを押したままuとタイプします。
- *mañana* などの鼻母音化記号（~）option キーを押したままnとタイプします。
- *façade* などのセディユ（ç）option キーを押したままcとタイプします。

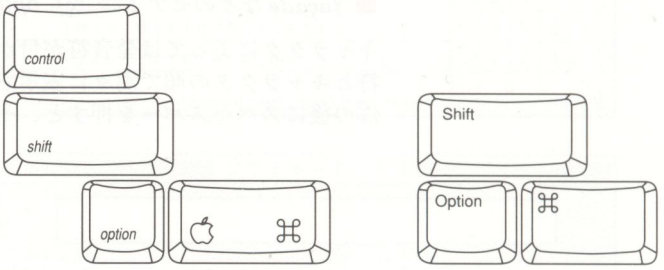
キャラクタによっては発音符が付かないものがあります。その場合、発音符とキャラクタの順で別々に表示されます。また、option キーでの入力操作の後にスペースバーを押すと、その発音符自体が入力されます。

Easy Access

“Easy Access” とはシステムフォルダに新しく収められているファイルで、“固定キー” および “マウスキー” というの２つの機能を提供します。これらの機能は、両手でのキーボード操作、あるいはマウスの操作が困難なかたのコンピュータ操作を補助するものです。“Easy Access” 機能は、片手でキーボードを使用した場合やポインタの細かい動きをコントロールしたい場合にも有効です。

“固定キー” 機能を使う

この機能を用いると、キーを１つづつ順に押すだけで複数のキーを同時に押し下げたのと同じ操作を行なえます。これにより、*shift*キーなどを併用したキー操作を片手で行なえます。*shift*、*option*、*control*、およびコマンドキーは他のキーと組み合わせて使用されるため、“モディファイアキー” と呼ばれます。



Macintosh SEまたはMacintosh II系　　Macintosh Plus

■ 図9-6　モディファイアキー

モディファイアキーは、他のキーと組み合わせて使用することによりショートカットや上級テクニックに活用できます。通常、モディファイアキーだけを押して何か操作を行なうことはできません。

1. “固定キー” 機能をオンにするには、*shift*キーを続けて５回押します。この間、マウスを動かさないようご注意ください。

   誤ってマウスを動かしてしまった場合、もう一度やり直してください。

“固定キー”機能が使用可能な状態になると、次の３種類のアイコンのうち１つがメニューバー右端に現れます。


“固定キー”機能が使用可能な状態にあることを示します。


モディファイアキーをどれか一度押すと表示されます。この後に何かキーを押せば、前に押したモディファイアキーを押し下げたままそのキーを押したのと同様の操作ができます。このアイコンを“SETアイコン”と呼ぶことにします。

操作の一例として、コマンドキーを一度押してみます。この時、SETアイコンが現れます。この後に*D*のキーを押すと、コマンドキーを押し下げたまま*D*キーを押した場合と同じ操作となります。*D*キーを押した後は、再度SETアイコンが表示されます。（モディファイアキー以外のキーを押すと、SET状態が解除されます）

また、３つのキーを同時に押し下げる操作（コマンドーシフトー３など）の場合、コマンドキーは*shift*キーを押してもSET状態にとどまり、*3*キーを押した時点でSET状態が解除されます。（これは、*3*キーがモディファイアキーでないためです）


このアイコンは、モディファイアキーを二度連続して押した時に現れます。このアイコンを“LOCKアイコン”と呼びます。この機能は、モディファイアキーを押し下げたままで操作をしたい場合に便利です。たとえば、コマンドキーをLOCK状態にした後、*C*および*V*キーを交互に使用すればコピーおよびペースト操作を繰り返せます。LOCK状態のモディファイアキーを解除するには、そのキーを一度だけ押します。この時点でLOCKアイコンはONアイコンに戻ります。

“固定キー”機能使用時は、どのモディファイアキーを押してもメニューバー右端のアイコンによりその状態が示されます。

2．“固定キー”機能をオフにするには、*shift*キーを続けて５回押します。

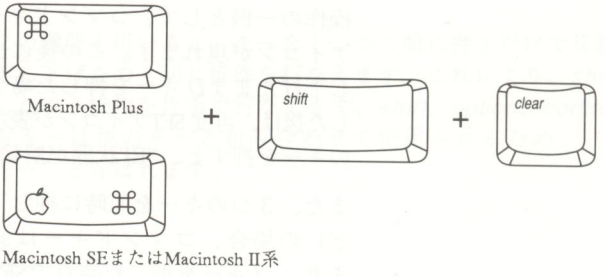
かわりにモディファイアキーをどれか２つ同時に押しても“固定キー”機能をオフにできます。（キーボード上では*option*キーとコマンドキーは隣あっていますので、これらを用いるとよいでしょう）

“マウスキー”機能を使う

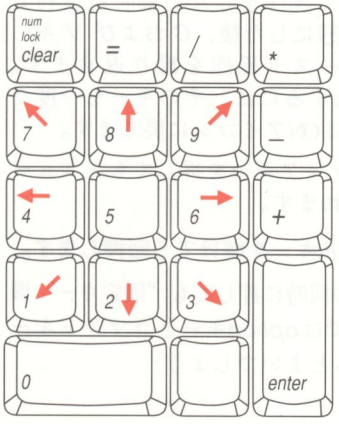
この機能を用いると、キーボードのテンキーでマウスの代用できます。これには、クリックやドラッグなど、通常のマウス操作の全てが含まれます。また、この機能でもポインタの微調整が容易に行なえることに気づかれると思います。

1. “マウスキー”機能をオンにするには、コマンド、*shift*、および*clear*キーを同時に押します。

   すでに解説した“固定キー”機能を用いても同様の操作ができます。



■ 図9-7　“マウスキー”機能をオンにする



■ 図9-8　テンキーとポインタの移動方向

2. テンキーを用いてポインタの移動、クリック、ドラッグなどの操作を行ないます。

   テンキー中央の*5*キーの回りのキーでポインタを移動させます（各キーによるポインタの移動方向は図9-8のようになります）。*5*キーはマウスボタンの役割をはたします。

   ■ クリックするには、*5*キーを一度だけ押します。

   ■ ダブルクリックするには、*5*キーを続けて二度押します。

テンキーの*0*キーを一度押すと、マウスボタンを押し下げた（プレスした）状態になり、キーを放した後も、この状態が維持されます（ドラッグ時などに使用します）。小数点キー（.）を押すと、マウスボタンを放した状態に戻ります。

3. “マウスキー”機能をオフにするには、コマンド、*shift*、および*clear*キーを同時に押し下げます。

- テンキーでポインタを移動させる際、キーを押し続けると次第にポインタが速く移動するようになります。ポインタの動きが速すぎると思われる場合、アップルメニューから“コントロールパネル”を選び、“Mouse Tracking”の設定を遅めにしてください。（“Tablet”に設定すると最も遅くなります）
- テンキーでポインタを移動させる際、キーを押してすぐに放すとポインタ位置を微調整できます（ポインタが1ピクセル分だけ移動します）。ポインタを遠くまで移動したい場合、キーを押し下げたままでポインタを目的位置に近づけ、その後キーを連続的に叩けば細かい位置の調整ができます。
- シフトクリックを行ないたい場合にも“固定キー”および“マウスキー”機能が利用できます。その際、まず“固定キー”機能をオンします（*shift*キーを5回続けておします）。ONアイコンがメニューバー右端に現れたら、*shift*キーを2回押してLOCK状態にします（これで*shift*キーを押しづ続ける必要がなくなりました）。最後に、テンキー中央の*5*を押してクリックおよび選択を始めます。後は、テンキーを使用して選択したい部分へポインタを移動させ、*5*キーでクリックします。

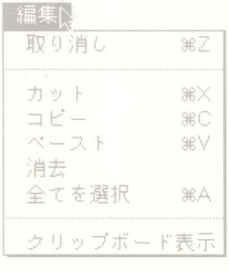
これらの新しい機能をフルに活用するには多少の練習が必要かもしれませんが、いったん慣れればたいへん便利な機能となります。

これらの機能を必要とされない場合、起動ディスクのシステムフォルダから“Easy Access”アイコンを“ゴミ箱”へドラッグして取り除いておけます。その後“Easy Access”が必要になった時は、ユーティリティディスクから同じものをコピーすれば再度使用できるようになります。（“Easy Access”はシステムフォルダ内にないと動作しません）

メニューコマンドのショートカット

ファインダでは、アップルメニュー以外のメニューはキー操作のみでも使用できます。メニュー内のコマンドのうち、右側にプロペラ状のマーク⌘が表示されているものはコマンドキーによるショートカットで選べます。たとえば、編集メニューの“コピー”コマンドの右側には⌘Cと表示されいますが、ショートカット（コマンドキーを押し下げたままCとタイプ）が使用できることを表しています。

ショートカット操作ではマウスを使用せずにキーボードからコマンドが選べるため、キーボードで入力を行ないながらカットやペーストをする際などに便利です。この操作は、コマンドキーを押し下げたまま、メニュー内のコマンドを表すキャラクタをタイプするだけの簡単なものです。



■ 図9-9　コマンドキーのショーカット

ファインダのキーボードショートカット

次に解説するショートカットは、ファインダ上でのみ有効です。これらを活用するとデスクトップ上の操作を簡略化できます。

■ *Option* キー　　このキーを押し下げたままファイルメニューから“全てを閉じる”を選ぶと、ウインドウを全て閉じることができます。

ディレクトリウインドウがアイコン表示となっている場合、*Option* キーを押し下げたままスペシャルメニューから“整頓”を選ぶと、ウインドウ内のアイコン全てを見やすく並びかえることができます。

*Option*キーを押し下げたままディスクかフォルダアイコンをダブルクリックすると、その中のアプリケーションまたは書類を開けます。作業を終了すると、ダブルクリックを行なった直前の状態でファインダに戻ります。

■ コマンドキー　　このキーを押し下げたままウインドウをドラッグすると、そのウインドウを選択することなく移動できます。

ディレクトリウインドウがアイコン表示となっている場合、コマンドキーを押し下げたままアイコンをどれかドラッグしてマウスボタンを放すと、スペシャルメニューから“整頓”を選んだ時と同じ位置にアイコンが置かれます。

コマンドキーを押し下げたままグレイ表示の（＝ウインドウ化されている）アイコンをダブルクリックすると、そのアイコンのウインドウが選択されます。

■ *Option*キーとコマンドキー　　これらのキーを両方とも押し下げたまま“Finder”アイコンをダブルクリックすると、そのアイコンの入ったディスク（システムファイルが入っている場合）が起動ディスクとなります。この場合、切り換え先のFinder ファイルが同一バージョンでなくてはなりません。また、英文システムとの切り換えは行なわないでください。

第10章

フロッピーディスクについて

この章はMacintoshを使用される方すべてを対象に構成されています。Macintoshには最低1基のフロッピードライブが装備されているからです。フロッピーディスクを扱う際に何か不明な点がある時はこの章を参照してください。

容量が800 Kや400 Kのフロッピーディスク、また、1.4 MBの高密度ディスクにはハードディスクほどの容量がないかわりに、郵送したり持ち歩いたりできるほどコンパクトなため、オフィスで作成したデータを自宅へ持ち帰ったりする際などに利用できます。また、ハードディスクの内容をバックアップする際にもフロッピーディスクが使用できます。

この章について

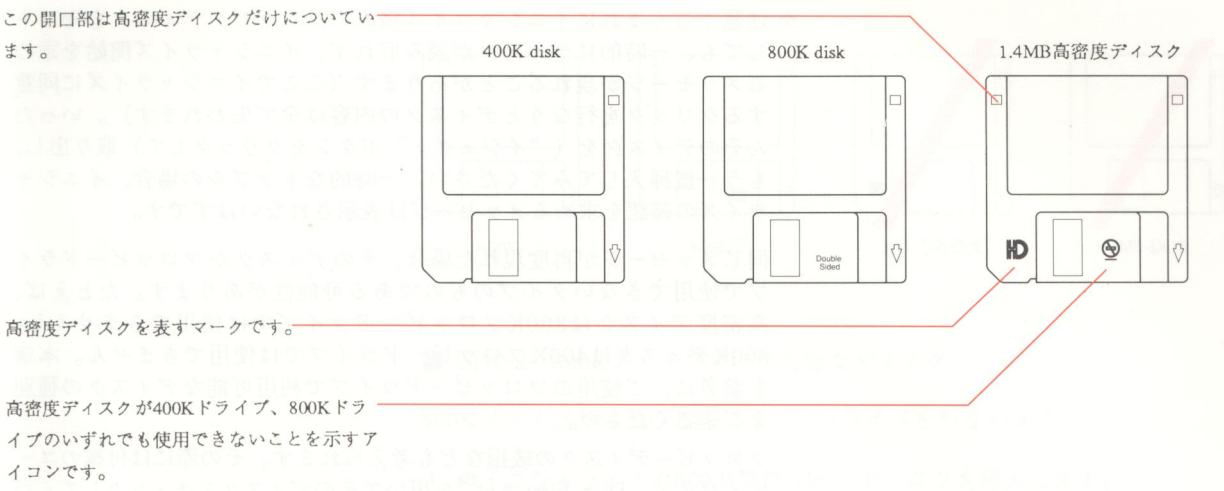
この章では、次の内容について解説します。

- フロッピーディスクのイニシャライズ（初期化）
- フロッピーディスクのイジェクト
- フロッピーディスクのコピー
- フロッピーディスクのロック（記録内容の保護）

フロッピーディスクの容量とフォーマット

記憶メディアに保存可能な最大情報量を“容量”といいます。Macintoshでは、次の容量のフロッピーディスクが使用されます。

- “Single Sided”（片面）と記された（または何も記されていない）フロッピーディスクには、400K（キロバイト）の容量があります。
- “Double Sided”（両面）と記されたフロッピーディスクには、800キロバイト（KB）の容量があります。情報はディスクの両面に記録されます。片面ディスクと同じ記録フォーマットにイニシャライズすれば、片面ディスクしかサポートしていないフロッピードライブでも使用できます。
- “HD”（高密度）と記されたフロッピーディスクには、1.4メガバイト（MB）の容量があります。情報はディスクの両面に高密度で記録されます。このタイプのディスクは、SuperDrive™（Apple FDHD™）でのみ使用します。



■ 図10-1　ディスクとドライブの関係

フロッピーディスクのイニシャライズ

新品のディスクは、情報を保存したり取り出したりする前にMacintosh用のフォーマットにイニシャライズ（初期化）する必要があります（新品のディスクは、停車位置を示す境界線がまだ引かれていない駐車場のようなものです。イニシャライズはこの境界線を引く作業に相当します）。フロッピーディスクを挿入した時、それが未イニシャライズであったり、（破損またはMacintosh以外のコンピュータ用フォーマットのため）内容が読み取れない場合には、Macintoshはそのディスクをイニシャライズするかどうか、また、イニシャライズする場合はどの記録フォーマットにするかを聞いてきます。

アプリケーションの使用中に未イニシャライズのフロッピーディスクを挿入すると、ほとんどの場合、作業中の内容はそのままにイニシャライズを開始できます。（イニシャライズ時に表示されるメッセージはアプリケーションにより多少異なる場合があります）

❖ 注意：ごくまれにイニシャライズ済みのフロッピーディスクをセットしても、一時的にディスクが読み取れず、イニシャライズ開始を求めるメッセージが現れることがあります（ここでイニシャライズに同意するクリックを行なうとディスクの内容は全て失われます）。いったんそのディスクを（“イジェクト”ボタンをクリックして）取り出し、もう一度挿入してみてください。一時的なトラブルの場合、イニシャライズの確認を求めるメッセージは表示されないはずです。

同じメッセージが再度現れた場合、そのディスクがフロッピードライブで使用できないタイプのものである可能性があります。たとえば、高密度ディスクは800Kフロッピードライブでは使用できませんし、800Kディスクは400Kフロッピードライブでは使用できません。本章を参考に、ご使用のフロッピードライブで利用可能なディスクの種別をご確認ください。

フロッピーディスクの破損なども考えられます。その際には付属のユーティリティ、Disk First Aid™を用いてそのディスクをチェックしてください（詳しくは別冊の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください）。また、フロッピードライブ内部の汚れなどが原因していることも考えられます。フロッピードライブのトラブルについては販売店にご相談ください。

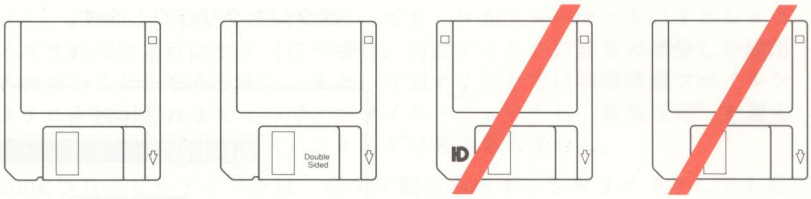
フロッピーディスクに修復不可能な損傷がある場合、そのディスク自体が使用できません。別のフロッピードライブが、使用できれば、それを利用して同じディスクが正常に読み取られるかどうかを確認してみてください。それでも同じ問題が発生した場合、そのディスク自体が使用できないことになります。

800Kフロッピードライブ

800Kフロッピードライブは、両面（800K）および片面（400K）の記録フォーマットに対応します。しかし、800Kディスクは両面フォーマットにイニシャライズして使用される場合がほとんどでしょう。800Kディスクの容量は両面イニシャライズにより最大限に活用できます。

800Kフロッピードライブでは、高密度ディスク使用時の信頼性は保証されません。高密度ディスクはSuperDrive™（FDHD™）でのみご使用ください。

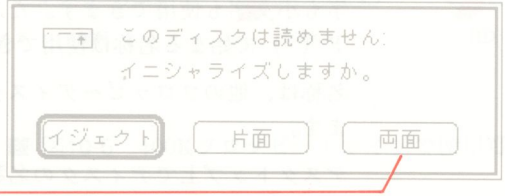
△重要　両面をイニシャライズした800Kフロッピーディスクは、400Kフロッピードライブでは使用できません。ドライブに挿入するとダイアログボックスが現れ、イニシャライズするかどうかを聞いてきます。ここでイニシャライズに同意すると、そのディスクの内容は全て消去され、片面フォーマットに再イニシャライズされます。△



■ 図10-2　800Kドライブで使用可能なディスク

800Kドライブでは次の方法でイニシャライズを行ないます。

1. 未イニシャライズの800 Kフロッピーディスクを挿入します。
   ダイアログボックスが現れます。

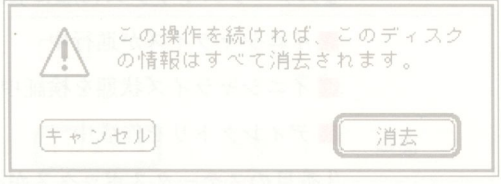


このボタンをクリックします。

■ 図10-3　イニシャライズ確認用のダイアログボックス

2. ダイアログボックス内の“両面”ボタンをクリックします。

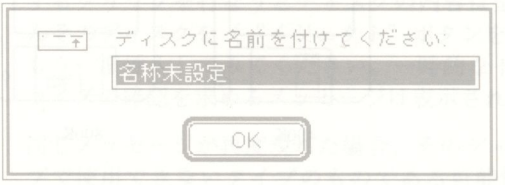
3. 次に現れるダイアログボックス内の“消去”ボタンをクリックします。



■ 図10-4　イニシャライズ開始前のダイアログボックス

最初のダイアログボックスでイニシャライズに同意しても、最終的なイニシャライズの開始は次のダイアログボックスで決めることができます。これは、イニシャライズによりディスクに保存されている情報が全て消去されることを再確認していただくためです。

4. イニシャライズしているフロッピーディスクの名称を入力し、“OK”ボタンをクリックします。



■ 図10-5　イニシャライズ中のディスク名称設定

ディスクに付ける名称には多少の制限があります。13文字（英語モードでは27文字）分までの長さの名称を付けることができます。また、半角および英語モードのコロン（:）を除き、キーボード上の文字全てが使用できます。また、途中にスペースを入れることもでき、大文字も小文字も使用できます。ただし、半角または英語モードのピリオド（.）で始まる名称は使用できません。

名称は、他のフロッピーディスクと容易に区別できるようなものにします。

デスクトップ上でディスクの名称に重複があった場合、（ディスクがロックされていないなければ）そのまま名称を変更できます。名称の変更はアイコンの場合と同じ方法で行ないます。詳しくは、第6章の「アイコンの名称を変更する」のページをご覧ください。

5. イニシャライズの完了を待ちます。（約1分）

イニシャライズの進行状況を示すため、次の内容のメッセージが小さなステータスボックスに順に表示されます。

- イニシャライズが進行中
- イニシャライズ状態を検証中
- ディレクトリを作成中

3番目のステータスボックスが消えたら、イニシャライズの完了です。

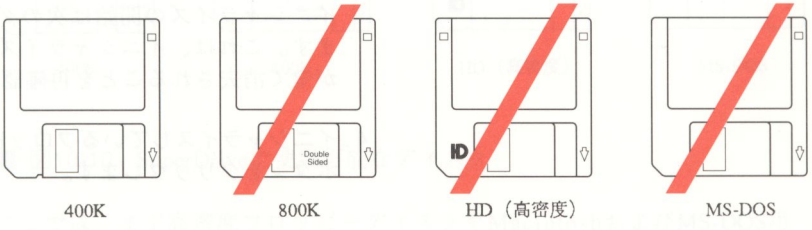
このようにしてイニシャライズしたフロッピーディスクは階層構造ファイルシステム対応となり、ファインダおよびアプリケーションでフォルダが活用できるようになります。アプリケーション内で“新規保存”を選ぶ度に、または名称未設定の書類を保存する度にディレクトリダイアログボックスが表示され、各階層のフォルダが使用できます。詳しくは第6章の「フォルダ、ディレクトリ、階層ファイルシステムを活用する」および「書類とアプリケーションの操作」のページをご覧ください。

400Kフロッピードライブ

400Kフロッピードライブではフロッピーディスクの片面しか使用されません。しかし、両面ディスクであっても、片面フォーマットにイニシャライズすれば使用可能です（この場合、両面ディスクの容量の半分しか使用されないことになります）。また、片面ディスクでは階層構造ファイルシステムが使用されませんので、ファイルメニューから“新規保存”を選んでも、ダイアログボックスにフォルダは表示されません。

△重要

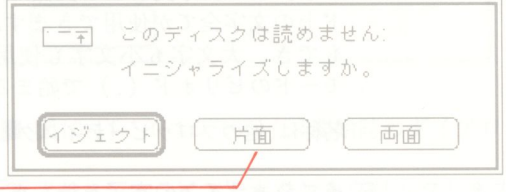
400Kフロッピーディスクは、必ず片面のみのイニシャライズとしてください。両面をイニシャライズできることがありますが、400 Kフロッピーディスクでは裏面の信頼性テストが行なわれません。もし裏面に欠陥があると、保存した情報が全て失われることがあります。△



■ 図10-6　400Kフロッピードライブで使用可能なディスク

400Kドライブでは次の方法でイニシャライズを行ないます。

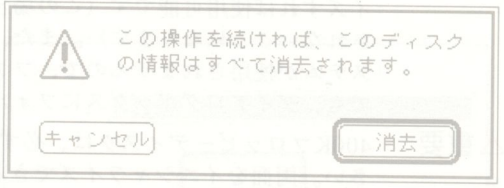
1. イニシャライズしたい400 Kフロッピーディスクを挿入します。
   ダイアログボックスが現れます。



■ 図10-7　イニシャライズ確認用のダイアログボックス
（400 Kフロッピードライブ）

2. ダイアログボックス内の“片面”ボタンをクリックします。

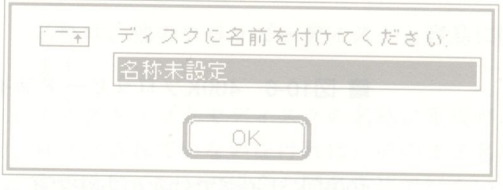
3. 次に現れるダイアログボックス内の“消去”ボタンをクリックします。



■ 図10-8　イニシャライズ開始前のダイアログボックス

最初のダイアログボックスでイニシャライズに同意しても、最終的なイニシャライズの開始は次のダイアログボックスで決めることができます。これは、イニシャライズによりディスクに保存されている情報が全て消去されることを再確認していただくためです。

4. イニシャライズしているフロッピーディスクの名称を入力し、“ＯＫ”ボタンをクリックします。



■ 図10-9　イニシャライズ中のディスク名称設定

ディスクに付ける名称には多少の制限があります。ディスクには13文字（英語モードでは27文字）分までの長さの名称を付けることができます。また、半角および英語モードのコロン（：）を除き、キーボード上の文字全てが使用できます。また、途中にスペースを入れることもでき、大文字も小文字も使用できます。ただし、半角または英語モードのピリオド（.）で始まる名称は使用できません。

名称は、他のフロッピーディスクと容易に区別できるようなものにします。

5. イニシャライズの完了を待ちます。（約１分）

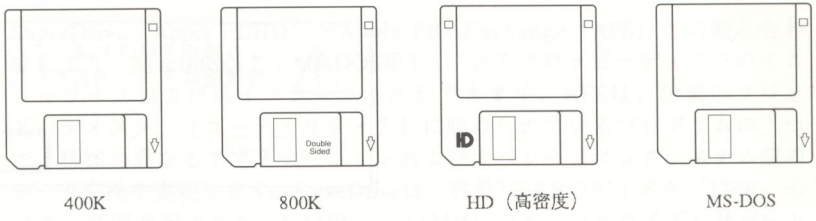
イニシャライズの進行状況を示すため、次の内容のメッセージが小さなステータスボックスに順に表示されます。

- イニシャライズが進行中
- イニシャライズ状態を検証中
- ディレクトリを作成中

３番目のステータスボックスが消えたら、イニシャライズの完了です。

SuperDrive

Apple SuperDrive（FDHD）では、従来の400Kおよび800Kフロッピーディスクに加え、容量1.4MBの高密度（HD）フロッピーディスクも使用できます。また、Macintoshだけでなく、MS-DOSコンピュータの記録フォーマットにイニシャライズされたディスクにも対応するため（Apple File Exchange使用時）、MacintoshとMS-DOSコンピュータ間のデータ交換も可能です。（ただし、対応機種、方法に制限があります）



400K　800K　HD（高密度）　MS-DOS

■ 図10-10　SuperDriveで使用可能なディスク

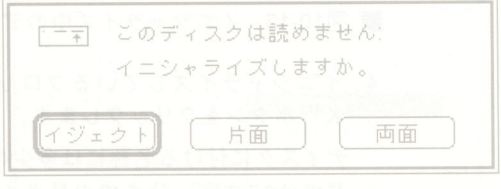
ここでは、まず高密度フロッピーディスクをMacintoshおよびMS-DOS用にイニシャライズする方法を解説します。また、400K、800K、および高密度フロッピーディスクを混用する際の注意点も記載されています。

ディスクをMacintosh用にイニシャライズする

高密度ディスクは次の手順でイニシャライズできます。

1. イニシャライズしたい高密度ディスクをSuperDriveにセットします。

   ダイアログボックスが現れます。

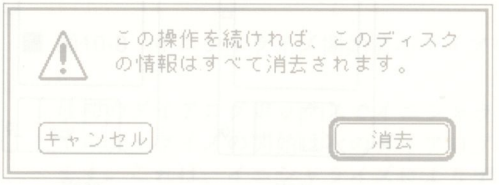


■ 図10-11　イニシャライズ開始時のダイアログボックス

2. “イニシャライズ”ボタンをクリックします。

   最初のダイアログボックスでイニシャライズに同意しても、最終的なイニシャライズの開始は次のダイアログボックスで決めることができます。これは、イニシャライズによりディスクに保存されている情報が全て消去されることを再確認していただくためです。

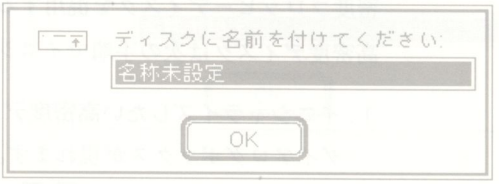
△重要　400Kまたは800Kドライブでイニシャライズした高密度フロッピーディスクは、SuperDriveではご使用いただけません。このような高密度フロッピーディスクをSuperDriveにセットしても正常にイニシャライズされたディスクとは認識されず、ダイアログボックスが現れてイニシャライズの必要性を知らせてきます。イニシャライズを開始するとディスクの内容は全て消去されます。イニシャライズは、必要なデータを他のディスクにバックアップした上で開始してください。△



■ 図10-12　イニシャライズ確認用のダイアログボックス

3．次に現れるダイアログボックスの“消去”ボタンをクリックします。

ディスク名称の入力を要求するダイアログボックスが現れます。



■ 図10-13　イニシャライズ中のディスク名称設定

4．イニシャライズしているフロッピーディスクの名称を入力し、“OK”ボタンをクリックします。

ディスクに付ける名称には多少の制限があります。13文字（英語モードでは27文字）分までの長さの名称を付けることができます。また、半角および英語モードのコロン（：）を除き、キーボード上の文字全てが使用できます。また、途中にスペースを入れたり、大文字も小文字も使用できます。ただし、半角または英語モードのピリオド（.）で始まる名称は使用できません。

名称は、他のフロッピーディスクと容易に区別できるようなものにします。

デスクトップ上でディスクの名称に重複があった場合、（ディスクがロックされていないなければ）そのまま名称を変更できます。名称の変更はアイコンの場合と同じ方法で行ないます。詳しくは、第6章の「アイコンの名称を変更する」のページをご覧ください。

イニシャライズした高密度ディスクは、どのSuperDriveでもご使用いただけます。

ディスクをMS-DOS用にイニシャライズする

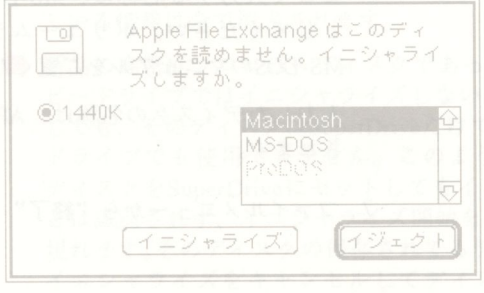
SuperDrive（Apple FDHD）とApple File Exchange（AFE）との組み合わせにより、Macintosh上でMS-DOS用3.5インチフロッピーディスクのイニシャライズおよび再イニシャライズができます。AFEは、付属のフロッピーディスク、「ユーティリティ2」に収められているプログラムの1つで、種類の異なるアプリケーションおよびオペレーティングシステム間のデータ交換を実現します。SuperDriveは、容量720KBのディスク（720K）のほか、高密度ディスク（1,440K＝1.44MB）のイニシャライズもサポートしています。

フロッピーディスクは次の手順でMS-DOS用にイニシャライズできます。

1. 未イニシャライズのディスクをセットする前に、AFEを開きます。

2. イニシャライズしたいディスクをSuperDriveにセットします。

   高密度ディスクをセットした場合、次のダイアログボックスが現れます。通常のディスクの場合に現れるダイアログボックスは次ページの図に示されています。



■ 図10-14　高密度ディスク使用時のAFEダイアログボックス

■ 図10-15　通常容量のディスク使用時のAFEダイアログボックス

3. 高密度ディスクがセットされた場合、ダイアログボックスは“1440K”を選択した状態で表示されます。それ以外の場合は“720K”のボタンをクリックします。

4. ダイアログボックス内右側の“MS-DOS”と表示された部分をクリックします。

5. “イニシャライズ”ボタンをクリックします。

   約1分後、ディスクの名称を要求するダイアログボックスが現れます。（実際の所要時間はイニシャライズするディスクの容量により異なります）

6. ディスクの名称を入力し、*return*キーを押します。

   ここで入力する名称は、MS-DOSにおいて有効なボリュームラベルとしてください。ボリュームラベルの形式については、ご使用のMS-DOSのマニュアルをご覧ください。

   入力したディスクの名称は、AFEウインドウ右側のボックス上に表示されます。

7. ファイルメニューから“終了”を選びます。

SuperDriveと従来型フロッピードライブの混用

SuperDriveでは、高密度フロッピーディスクに加え、800Kおよび400Kディスクも使用でき、これらのディスクに対する読み書きも800Kおよび400Kドライブを使用した場合と同じように正常に行なわれます。また、未イニシャライズのディスクがセットされると、そのメディアの種別を自動的に判別してイニシャライズを行ないます。

高密度フロッピーディスクは従来の800Kや400Kメディアとは異なる磁気密度を持っています。したがって、高密度フロッピーディスクは従来のフロッピードライブでは使用できません。800Kまたは400Kフロッピードライブ、あるいはその両方とSuperDriveが利用可能な環境では、高密度フロッピーディスクを従来型フロッピードライブで使用しないでください。従来型フロッピードライブでは高密度フロッピーディスクの読み書きに対する信頼性は保証されません。また、従来型フロッピードライブで高密度フロッピーディスクをSuperDrive用にイニシャライズすることも避けてください。

△重要　800Kまたは400Kフロッピードライブには高密度フロッピーディスクをセットしないでください。これら従来型フロッピードライブでの高密度フロッピーディスクに対する読み書き信頼性は保証されません。また、従来型フロッピードライブで高密度フロッピーディスクをSuperDrive用にイニシャライズすることも避けてください。△

800Kまたは400Kフロッピードライブ、あるいはその両方とSuperDriveが利用可能な環境では次の点に留意願います。

- 高密度フロッピーディスクを800 Kまたは400 Kフロッピードライブに挿入すると、Macintoshはそのディスクのイニシャライズを求めてきます。その場合、イニシャライズをキャンセルしてディスクをイジェクトしてください。イニシャライズを開始するとディスクに記録されている情報は全て消去されます。
- 新品の高密度フロッピーディスクであっても800Kまたは400Kフロッピードライブではイニシャライズしないでください。イニシャライズしても、そのディスクはSuperDriveだけでなく800Kや400Kフロッピードライブでも使用できません。このようにしてイニシャライズしたディスクをSuperDriveにセットしてもイニシャライズ済みのディスクとは識別されず、イニシャライズ開始を求めるダイアログボックスが現れます。そのディスクの保存されてるデータを消去したくない場合、イニシャライズをキャンセルしてディスクをイジェクトしてください。次に、ディスクを800 Kドライブにセットし、その内容を他のディスクにコピーします。誤ってイニシャライズされた高密度ディスクは、SuperDriveでイニシャライズしなおしててください。

内蔵された状態のフロッピードライブがSuperDriveかどうかを見分けることは困難です。またフロッピーディスク自体の外見にもほとんど違いがないため、タイプの異なるフロッピードライブが利用できる環境では混乱を招きやすくなります。メディアの混乱を防ぐには次のような方法が役に立ちます。



■ 図10-16　高密度ディスク識別用ロゴ

- 高密度フロッピーディスクには、それがSuperDriveでしか使用できないことをラベルに明記しておきます。
- 装置やフロッピーディスクを何人かで共用する場合、前もって高密度フロッピーディスクがSuperDriveでしか使用できないことを利用される方に知らせておきます。

以上の点に注意しながらSuperDriveが持つ機能と容量をフルにご活用ください。

MacintoshとMS-DOSコンピュータ間のデータ交換

SuperDriveは、容量の拡大を実現するだけでなく、MS-DOSの記録形式にイニシャライズされたフロッピーディスクの使用もサポートしています。

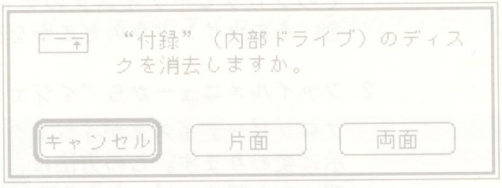
SuperDriveでは、容量720Kおよび1.44MBの3.5インチMS-DOSディスクに対する読み書きに対応します。ただし、MS-DOSのディスクを単にSuperDriveにセットするだけでは使用できません。

MS-DOS形式のディスクをご使用になる場合、付属のユーティリティ、Apple File Exchangeを用いることにより、SuperDrive経由でMacintoshとMS-DOSコンピュータとの間で容易にデータ交換が行なえます。詳しくは付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

ディスクの消去

片面だけをイニシャライズした800 Kフロッピーディスクを、両面にイニシャライズしなおしたい場合があります。また、フロッピーディスクに蓄積された不要な情報を一度に消去してディスクを再利用したい場合もあります。このような時、フロッピーディスクを再イニシャライズするとその内容を白紙に戻せます。

1. 再イニシャライズしたいフロッピーディスクを挿入します。
2. スペシャルメニューから“ディスクの消去”を選びます。
   次のようなダイアログボックスが現れます。



■ 図10-17　ディスク消去時のダイアログボックス

3. **ダイアログボックス内で、“片面”または“両面”ボタンのいずれかをクリックします。**

フロッピーディスクの内容は、再イニシャライズにより全て消去されます。

この場合、既にフロッピーディスクには名称が付いているため、そのためのダイアログボックスは表示されません。名称を変更したい場合、(フロッピーディスクがロックされていなければ) そのままデスクトップ上でその操作を行なえます。名称変更はアイコンの場合と同じ方法で行ないます。詳しくは、第6章の「アイコンの名称を変更する」のページをご覧ください。

4　**イニシャライズの完了を待ちます。（約1分）**

イニシャライズの進行状況を示すため、次の内容のメッセージが小さなステータスボックスに順に表示されます。

- イニシャライズが進行中
- イニシャライズ状態を検証中
- ディレクトリを作成中

3番目のステータスメッセージが消えたら、再イニシャライズの完了です。

フロッピーディスクをイジェクトする

フロッピーディスクを取り出すには、ファインダのファイルメニューから“イジェクト”を選ぶほか、そのフロッピーディスクのアイコンを“ゴミ箱”へドラッグするなどの方法があります。

Macintoshがイジェクトされたフロッピーディスクを必要とする時には、そのディスクの挿入を求めてきます。

ファインダの“イジェクト”コマンドを使う

1. イジェクトしたいフロッピーディスクのアイコンを選択します。

   そのフロッピーディスクのディレクトリウインドウが開いている場合、そのウインドウのどこかをクリックすると選択できます。

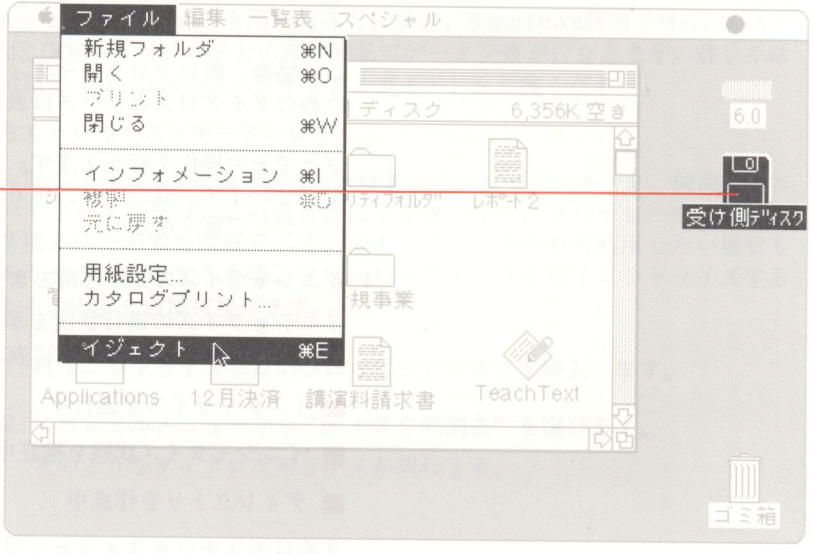
2. ファイルメニューから“イジェクト”を選びます。

   フロッピーディスクがイジェクトされると、そのアイコンはグレイ表示に変わります。この方法は、1基のフロッピードライブを利用してディスク間のコピーをする際に使用します。

   アイコンを選択せずに“イジェクト”を選ぶと、ファインダはそれがイジェクト可能なディスクをさがします。フロッピーディスクが挿入されていれば、自動的にイジェクトされます。

△重要

フロッピーディスクがイジェクトの途中で引っかかってしまい取り出せない場合、無理に引き出さずにいったんドライブ内へ押し込んだ後、再度“イジェクト”を選んでください。△

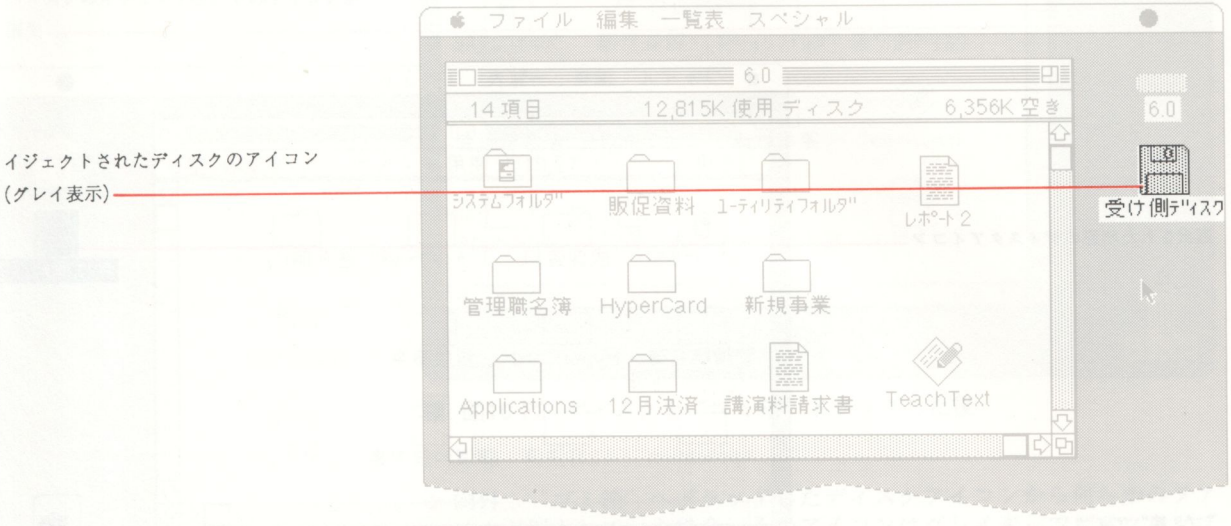


■ 図10-18 “イジェクト”コマンドを選ぶ

フロッピーディスクをイジェクトした後も、グレイ表示のアイコンがデスクトップ上に残っている限りMacintoshはそのディスクの管理に必要な情報を失いません。

グレイ表示のアイコンを開こうとすると、警告ボックスが現れてそのフロッピーディスクの挿入を求めてきます。

グレイ表示のアイコンも、通常のアイコンと同様にドラッグできます。



■ 図10-19 “イジェクト”コマンド使用後

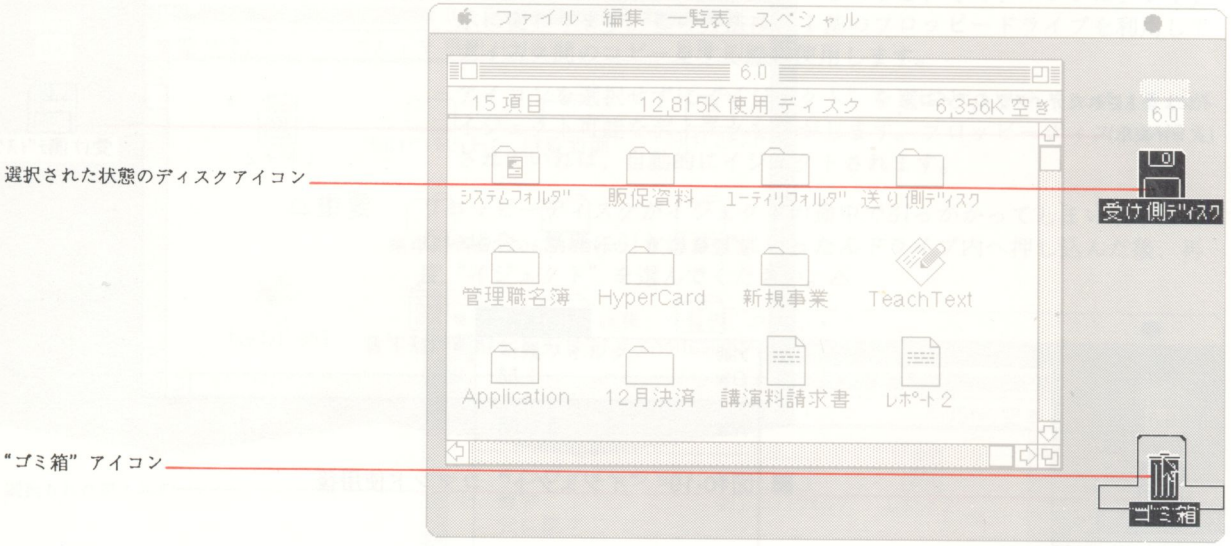
フロッピーディスクをイジェクトしても、そのアイコンがグレイ表示でデスクトップにある限りファインダはそのディスクが必要になる度にディスクの挿入を求めてきます。

■ 図10-20 ディスク再挿入を求めるメッセージ

フロッピーディスクアイコンを“ゴミ箱”へドラッグする

1. イジェクトしたいフロッピーディスクのアイコンを“ゴミ箱”へドラッグします。

   ポインタを“ゴミ箱”上に重ね、そのアイコンが黒く表示されるようにしてください。

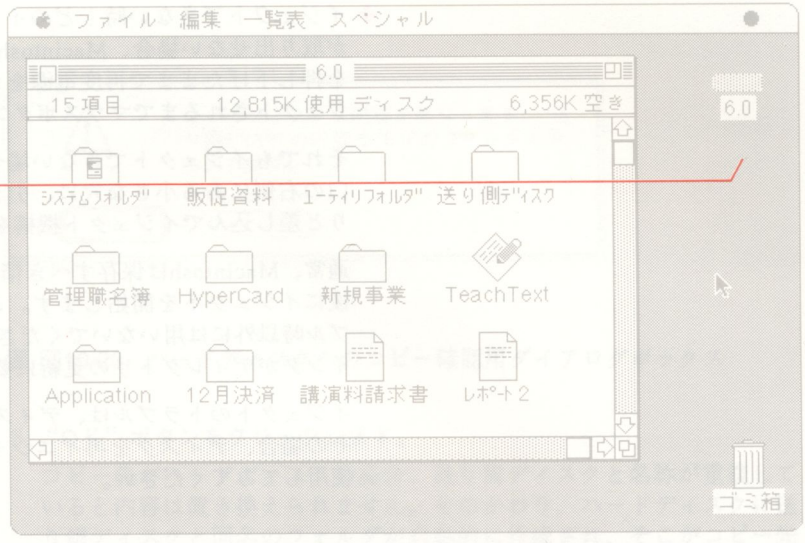


■ 図10-21　ディスクを“ゴミ箱”へドラッグする

2. マウスボタンを放します。

   フロッピーディスクがイジェクトされ、そのアイコンもデスクトップ上から消えます。この時、ファインダはそのディスクが挿入されていたという情報を失います。フロッピーディスクをイジェクトする場合、この方法が適していることが多いはずです。

   “ゴミ箱”へのドラッグによりフロッピーディスクの内容が消えることはありません。



ディスクのイジェクト後、そのアイコンが消失

■ 図10-22 ディスクを“ゴミ箱”ドラッグした後

❖ **例外**：“ゴミ箱”へドラッグしたディスクアイコンから何らかのファイルが開かれていた場合、そのアイコンはグレイ表示でデスクトップ上に残ります（これはフロッピーディスクを起動ディスクにしている時などに起こります。起動ディスクの場合、そこから“Finder”や“System”ファイルが開かれているためです）。この場合、グレイ表示のアイコンを開いたり取り除いたりする際には、ディスクの再挿入が必要となります。（他の起動フロッピーディスクからMacintoshを始動するには、スペシャルメニューから“リスタート”または“終了”を選びます。詳しくは第11章の「起動ディスクの切り替え」のページをご覧ください）

他の方法でフロッピーディスクをイジェクトする

スペシャルメニューから“リスタート”または“終了”を選ぶと、挿入されているフロッピーディスクが全てイジェクトされます。（アイコンも消去）

また、次のキーの組み合わせによっても特定のフロッピードライブからのイジェクトができます。

- ドライブ1からイジェクトするには、コマンドおよび*shift*キーを押し下げたまま1とタイプします。
- ドライブ2からイジェクトするには、コマンドおよび*shift*キーを押し下げたまま2とタイプします。
- 3基目のドライブからイジェクトするには、コマンドおよび*shift*キーを押し下げたまま0とタイプします。

上記いずれの場合もディスクアイコンがグレイ表示でデスクトップ上に残ります。（ファインダはディスクのイジェクトを記憶しており、必要な時にはディスクの再挿入を求めてきます）

❖ **イジェクトできない時：**どのイジェクト方法でもフロッピーディスクが取り出せない場合、Macintoshの電源をオフにした後、マウスボタンを押し下げたままで再度電源をオンにします。この時、ディスクがイジェクトされるまでマウスボタンを押し下げたままにします。

それでもイジェクトできない場合は、フロッピードライブの差し込み口の右側にある小さな穴に、引き伸ばしたゼムクリップなどをゆっくりと差し込んでイジェクト機構を手動で作動させます。

通常、Macintoshは保存すべき情報をフロッピーディスクに書き込んだ後にイジェクトを開始します。このため、上記の方法はいずれもトラブル時以外には用いないでください。次にディスクを挿入した時、ファインダがディレクトリの更新に要する時間が長くなります。

イジェクトのトラブルは、ディスク損傷の前兆であることがあります。その場合、ディスクを再イニシャライズするか、内容を消去した後に使用してみてください。

フロッピーディスクをコピーする

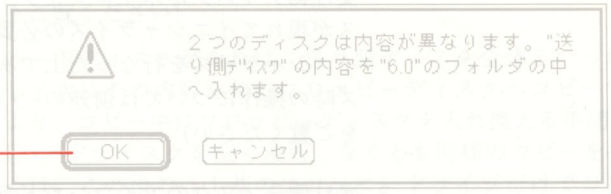
ここでは、フロッピーディスクのコピー方法を目的別に解説します。付属のシステムディスクなど、アプリケーションや重要な情報が収められたディスクはバックアップを作成しておくことが大切です。マスタディスクは大切に保管し、作業にコピーを使用すれば不慮の事故による情報の損失に対処できます。

フロッピーディスクをハードディスクにコピーする

フロッピーディスクに収められているアプリケーションなどはハードディスクにコピーして処理を高速化できます。

1. コピーしたいフロッピーディスク（送り側ディスク）をフロッピードライブに挿入します。
2. 送り側ディスクのアイコンを、ハードディスクのアイコンにドラッグします。

   ダイアログボックスが現れます。



このボタンをクリックし、送り側ディスクからハードディスクへのコピーを開始

■ 図10-23　ハードディスクへのコピー確認用ダイアログボックス

3.“ＯＫ”ボタンをクリックします。

コピー先がハードディスクの場合、送り側ディスクと名称が重複していると内容は置き換えられません。そのかわり、ハードディスクに送り側ディスクと同名のフォルダが自動的に作成され、そこがコピー先となります。

△重要

1枚のディスクに複数のシステムフォルダがあるとトラブルの原因となります（システムフォルダが必要なのは起動ディスクだけです）。このページに記載の方法でフロッピーからハードディスクへコピーする場合、余分なシステムフォルダがハードディスクに作成されないようにしてください。ディスクのアイコンを開いて内容を調べ、余分なシステムフォルダがあれば“ゴミ箱”へドラッグして破棄してください。△

フロッピーディスク間のコピー

コピーしたい内容を収めたディスク（送り側ディスク）、およびコピー先のディスク（受け側ディスク）のアイコンの両方が表示されていれば、いつでもディスク全体のコピーができます。

フロッピーディスク対フロッピーディスクのコピーには2通りの方法があります。これらの違いはハードディスク経由でコピーするかどうかにあります。

フロッピードライブ2基を用いてコピーする

フロッピードライブが2基装備されたシステムでは、次の方法でディスクのコピーができます。

1.関係のないディスクがセットされていれば、ここでイジェクトしておきます。

フロッピードライブを両方とも空にしておけば、送り側および受け側のディスクを同時にセットしておけます。

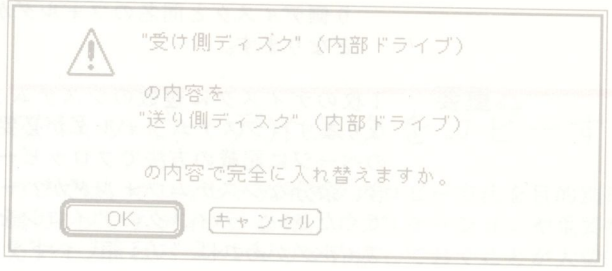
他にもフロッピーディスクがセットされてる場合、そのアイコンを選択し、“ゴミ箱”へドラッグすれば、イジェクトされます。（ファイルメニューから“イジェクト”を選んでもイジェクトが行なわれますが、この場合、イジェクトされたディスクのアイコンはグレイ表示でデスクトップ上に残ります）

2. 送り側、受け側のディスクをセットします。

受け側ディスクが未イニシャライズの場合、ここでダイアログボックスが現れてイニシャライズの必要性を知らせてくれます。この場合、イニシャライズを行なった上で次の操作へ進みます。（イニシャライズ時の操作については前述の「フロッピーディスクのイニシャライズ」をご覧ください）

3. 送り側ディスクのアイコンをドラッグし、受け側ディスクのアイコンに重ね合わせます。

このとき、受け側ディスクの内容を、送り側ディスクの内容で完全に置き換えてよいかどうかの確認を求めるダイアログボックスが現れます。このダイアログボックスは受け側ディスクが空の場合にも表示されます。



■ 図10-24　ディスク間のコピー開始を確認するダイアログボックス

ダイアログボックスが表示するメッセージには、フロッピードライブの使用状況を示すため、コピーに用いるドライブが“外部ドライブ”または“内部ドライブ”として表示されます。Macintosh SEまたはMacintosh II系機種の場合、内部フロッピードライブが2基装備されていると、送り側も受け側も“内部ドライブ”と表示されます。

4. “ＯＫ”ボタンをクリックします。

コピーは、この時点で開始されます。Macintoshは受け側ディスクの内容を全て消去した上で、そこに送り側ディスクの内容を書き込みます。

❖ 正常にコピーできない場合：受け側ディスクに送り側ディスクの内容を収容できるだけの容量が不足していると、その旨を知らせるメッセージが表示され、コピーは行なわれません。この場合、受け側ディスクに保存されたファイルを消去するか、他のディスクを使用するなどして再度コピーを行なってください。

コピー完了後、受け側ディスクには、その内容を示す名称を新たに設定しておけばよいでしょう。(詳しくは第6章の「アイコンの名称を変更する」をご覧ください)

ハードディスクを媒介としてコピーする

ハードディスクがあれば、送り側ディスク全体をいったんそこへコピーし、次にその内容を他のフロッピーディスクへコピーできます。これにより、コピー中にフロッピーディスクを入れ換える手間を省けます。
(ハードディスクを全く使用しなくとも同様のコピーを行なえます。詳しくは、この後の「1基のフロッピードライブだけでコピーする」のページをご覧ください)

1. 送り側ディスク（コピー元のディスク）をフロッピードライブに挿入します。
2. ハードディスクのアイコンが開いていない場合、これを選択し、ファイルメニューから“開く”を選びます。

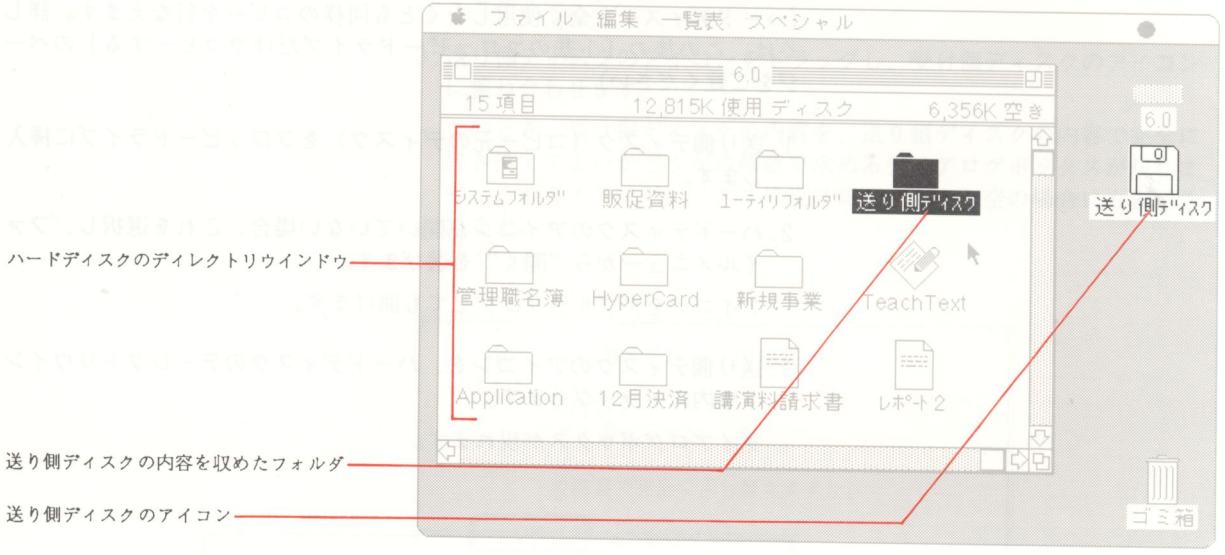
   アイコンをダブルクリックしても開けます。
3. 送り側ディスクのアイコンを、ハードディスクのディレクトリウインドウ内にドラッグします。

   ダイアログボックスが現れます。

■ 図10-25　ハードディスクへのコピー確認

4.“ＯＫ”ボタンをクリックします。

コピーは秒単位で完了します。コピー完了後、ハードディスクのディレクトリウインドウ内に送り側ディスクと同名のフォルダが表示されます。



■ 図10-26　ハードディスクへのコピー

5.送り側ディスクを“ゴミ箱”へドラッグしてイジェクトします。

6.受け側ディスクをフロッピードライブに挿入します。

新品のフロッピーディスクを挿入した場合、Macintoshはイニシャライズの開始を求めてきます。（イニシャライズ操作は、この章の「フロッピーディスクのイニシャライズ」のページですでに解説されています）

7.ハードディスクアイコン上へドラッグしたフォルダを開きます。

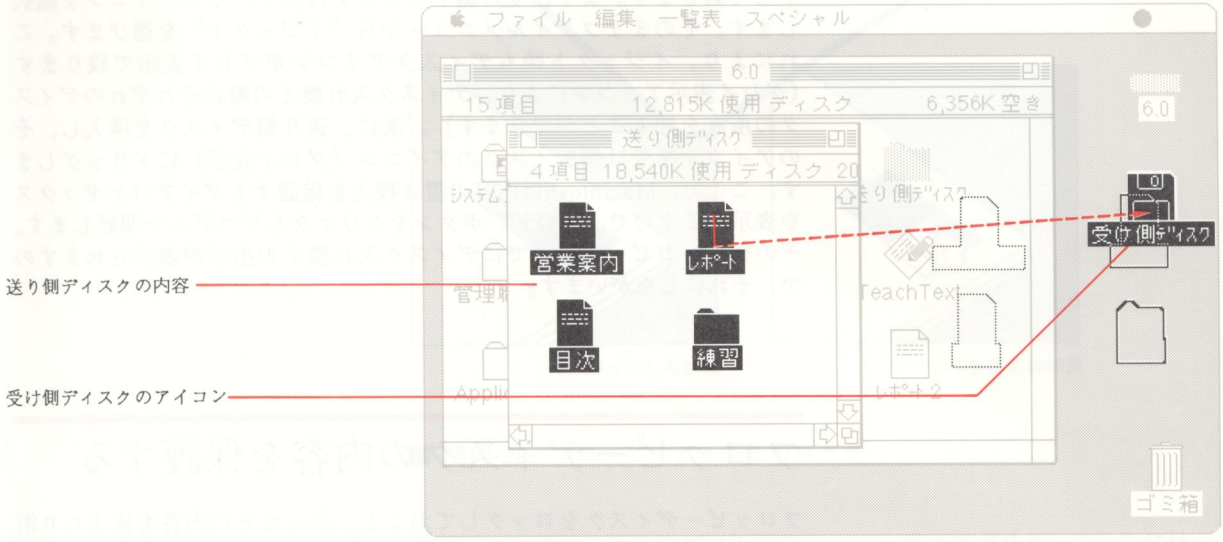
フォルダのアイコンはクリックすれば選択されます。次にファイルメニューから“開く”を選べばフォルダが開きます。

8 フォルダ内の全アイコンを選択します。

フォルダのウインドウが選択された状態にあることを確認の上、編集メニューから“全てを選択”を選べば、ウインドウ内の全アイコンが同時に選択できます。

9. フォルダ内の全アイコンを、黒く表示されたまま受け側ディスクのアイコン上へドラッグします。

選択されたアイコンが表す ファイルが全て受け側ディスクへコピーされます。



■ 図10-27 ハードディスクからフロッピーディスクへのコピー

❖ 正常にコピーできない場合：受け側ディスクに送り側ディスクの内容を収容できるだけの容量が不足していると、その旨を知らせるメッセージが表示され、コピーは行なわれません。この場合、受け側ディスクに保存されたファイルを消去するか、他のディスクを使用するなどして再度コピーを行なってください。

10. 送り側のフォルダが不要であれば、破棄します。

フォルダを“ゴミ箱”へドラッグすれば、フォルダごと破棄できます。

受け側ディスクをイジェクトします。これは送り側ディスクの完全なコピーとなっています。これがバックアップ用のコピーであれば、安全な場所に保管しておくことが必要です。

コピー完了後、コピーのために使用したハードディスク上のフォルダには送り側ディスクの内容が保存されたまま残されています。これが不要であれば、フォルダごと“ゴミ箱”へドラッグして破棄できます。

コピー完了後、受け側ディスクには、その内容を示す名称を新たに設定しておけばよいでしょう。（詳しくは第6章の「アイコンの名称を変更する」をご覧ください）

フロッピードライブを1基だけ用いてコピーする

フロッピードライブが1基しかない場合も、ディスクの内容を別のディスクにコピーできます。ただし、コピー中にフロッピーディスクの入れ換えが必要となります。（この方法は、フロッピードライブとハードディスクがそれぞれ1基ずつのシステムでも使用できます）

コピーに関係のないフロッピーディスクが挿入されていれば、イジェクトしておきます。まず、受け側ディスクを挿入し、そのアイコンを選択します。そのままファイルメニューから“イジェクト”を選びます。これにより、イジェクト後もディスクアイコンがグレイ表示で残ります（グレイ表示アイコンにより、ディスク入れ換えの際にそれぞれのディスクの所在を知ることができます）。次に、送り側ディスクを挿入し、そのアイコンを受け側ディスクのアイコン（グレイ表示）にドラッグします。ここで、Macintoshは内容の置き換えを確認するダイアログボックスを表示しますので、“ＯＫ”ボタンをクリックしてコピーを開始します。その後は、コピー完了までにディスク入れ換えの指示が表示されますので、それにしたがいます。

フロッピーディスクの内容を保護する

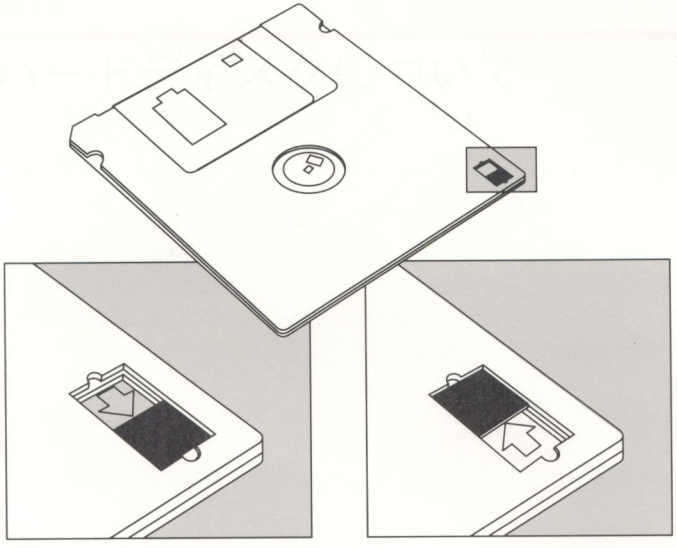
フロッピーディスクをロックしておくと、誤ってその内容を変えたり消去したりするような事故を防げます。（アプリケーションや書類の内容は、ファイルメニューの“インフォメーション”を選んでロックできます。詳しくは第６章の「書類またはアプリケーションをロックする」のページをご覧ください。また、AppleShare®ファイルサーバを使用した環境ではフォルダのロックもできます）

フロッピーディスクをロックする

1. フロッピーディスクを裏面端に小さなタブがあることを確認します。

2. フロッピーディスクをロックするには、タブを外側へずらします。（タブをずらした後は小さな穴が開いた状態になります）

ディスクがロックされていると、新たに情報を保存したり、保存されている内容に手を加えたりすることはできません。ロックされたディスクに収められた書類は開くことができ、通常はプリントすることも可能です。しかし、ディスクに保存、または保存内容に対して名称変更、削除、移動、複製、編集を行なうことはできません。



■ 図10-28　フロッピーディスクのロック

❖ **ディスクのロックとアプリケーション**：一部のアプリケーションには、ロックされたディスクを受け付けないものがあります。また、ファインダはロックされたディスクに対するデスクトップ上の操作は一切記憶しません。また、起動ディスクがロックされていると正常に動作しないデスクアクセサリもあります。

第11章

ハードディスクについて

この章には、Macintoshコンピュータで使用するSCSIハードディスクについての情報がまとめられています。SCSIとはSmall Computer System Interfaceの略で、通常“スカジー”と発音します。

ご使用のハードディスクがSCSI仕様であるかどうかにかかわらず、この章の内容がハードディスク活用の手がかりとなります。また、ハードディスクのイニシャライズが必要になった場合もこの章をご覧ください。

この章について

この章では次の内容について解説します。

- SCSIハードディスクの使用準備（イニシャライズおよび再イニシャライズ）
- ハードディスクの活用方法

ハードディスクを使用すると、より快適で効率的な作業が可能となります。これは、ハードディスクの高速性により情報の保存や読み出しにともなう待ち時間が短縮されるためです。また、ハードディスクにはフロッピーディスクとは比較にならないほど多くの情報を保存しておけます。（20MBのハードディスクの容量は、800Kフロッピーディスク約25枚分に相当します）

ハードディスクでの作業は、フロッピーディスクの場合と何ら変わるところはありません。ディスクアイコンの使用、アプリケーションや書類の管理、フォルダの活用などは、通常のMacintosh操作テクニックがそのまま使用できます。構造上の大きな違いはディスクのイジェクトにありますが、作業上はハードディスクをイジェクト不可能な高速／大容量のフロッピーディスクと見なしても構いません。

通常、ハードディスクはMacintoshシステムの起動ディスクとして使用します（起動ディスクとは、Macintoshの電源をオンにする度に起動情報が読み出されるディスクを指します）。起動ディスクとして使用するハードディスクには、システムソフトウェアをインストールしておくことが必要です。

SCSIハードディスクの使用準備

新しいハードディスクはイニシャライズを行なうことにより、はじめてシステムソフトウェアをインストールし、各種情報を保存できるようになります。

△重要　使用可能な状態のハードディスクを再度イニシャライズすると、そこに保存されている情報は全て失われます。イニシャライズ前には、ハードディスクに情報が保存されているかどうかを確認してください。重要な情報は、イニシャライズ前に全てフロッピーディスクなどにバックアップしておくことが必要です。

ハードディスクのイニシャライズ状態を調べるには、システムディスクをMacintoshのフロッピードライブに挿入し、電源をオンにします（すでにMacintoshの電源がオンになっている場合、スペシャルメニューから“終了”を選んだ後、システムディスクを挿入し、再度電源をオンにします）。この後表示されるデスクトップにハードディスクのアイコンがあれば、イニシャライズが完了していることになります。その場合にも、必要に応じて再度イニシャライズすることが可能です。△

❖ **外部ハードディスクを使用する場合**：外部SCSIハードディスクの場合にも同様の使用準備が必要です。アップル社製の外部SCSIハードディスクであれば、この章で解説する方法が使用できます。アップル社以外のハードディスクを使用される場合は、そのハードディスクに付属のマニュアルに記載の指示にしたがってください。

SCSIハードディスクのイニシャライズ

1. Macintoshの電源がオンになっている場合、ファイルメニューから“終了”を選んで電源をオフにします。

   Macintoshに挿入されているフロッピーディスクは、ここで自動的にイジェクトされます。

   Macintosh PlusまたはMacintosh SEの場合、スクリーンの表示がいったん消えた後、“リスタート”ボタンのあるダイアログボックスが現れます。

   Macintosh IIファミリの機種の場合、電源が完全に切れます。

2. システムディスクをフロッピードライブに挿入し、Macintoshを再始動します。

   Macintosh PlusまたはMacintosh SEの場合、ダイアログボックスの“リスタート”ボタンをクリックします。

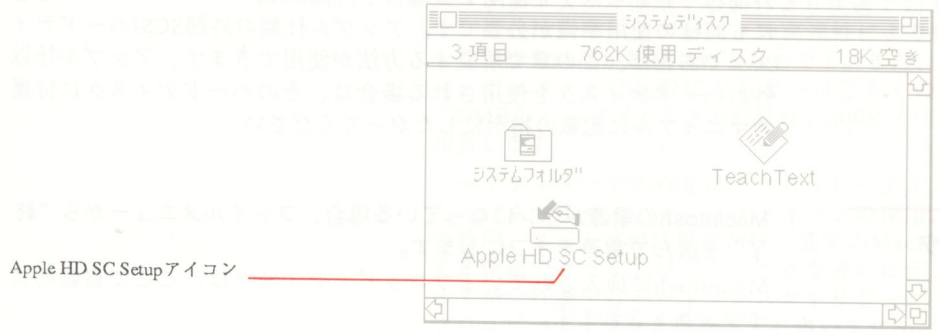
   Macintosh II系の機種の場合、キーボード上のパワーオンキーを押します。

   しばらくすると、デスクトップが表示され、システムディスクのアイコンが現れます。

3．“システムディスク”アイコンを開きます。

アイコンを選択した後、ファイルメニューから“開く”を選びます。（アイコンをダブルクリックして開くこともできます）

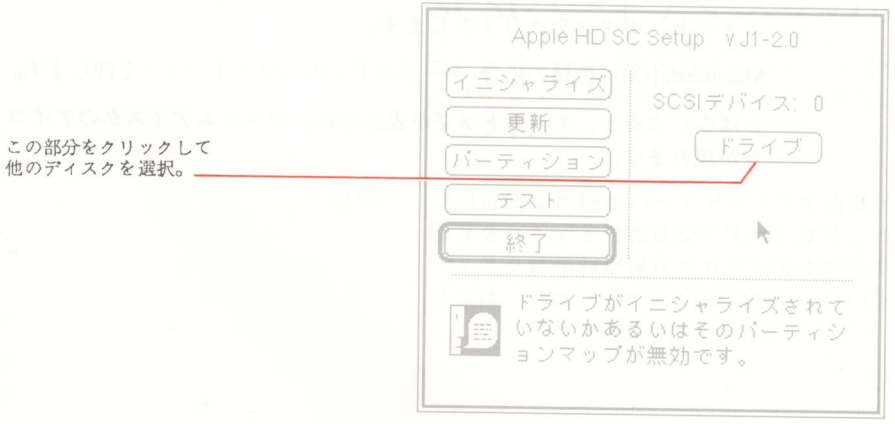
システムディスクのディレクトリウインドウ内を見て、“Apple HD SC Setup”のアイコンがあることを確認します。



■ 図11-1　システムディスクのディレクトリウインドウ

4．“Apple HD SC Setup”のアイコンをクリックします。

ダイアログボックスが現れます。



■ 図11-2　Apple HD SC Setupのメッセージ

5. 必要であれば、イニシャライズしたいディスクを“ドライブ”ボタンをクリックして選択します。

SCSI ID番号は0～6のいずれかが表示されます。ハードディスクが1台しかない場合、0が表示されます。ハードディスクが複数台ある場合、“ドライブ”ボタンをクリックしてイニシャライズしたいディスクのSCSI ID番号を表示させてください。

クリックしても目的の番号が表示されない場合、SCSIターミネータおよびケーブルが正しく接続されているかどうかを確認してください。詳しくは「オーナーズガイド」をご覧ください。

6. ダイアログボックス内の“イニシャライズ”ボタンをクリックします。

イニシャライズを開始するとハードディスクに保存された情報は全て失われます。このため、Macintoshはここでイニシャライズ開始の確認を求めてきます。

7. “OK”ボタンをクリックします。

ハードディスクのイニシャライズが開始されます。イニシャライズ中には進行状況を示すためにメッセージが表示されます。イニシャライズ完了までの時間はハードディスクの容量などによって異なりますが、20MBのハードディスクでは5分ほど要します。

イニシャライズの完了もメッセージにより知ることができます。

❖ **問題があったとき**：イニシャライズの失敗を知らせるメッセージが現れた場合、もう一度イニシャライズを試みてください。それでもイニシャライズできない時は、このマニュアルの付録B「トラブルシューティング」をご覧ください。

付録Bに記載の方法で対処してもイニシャライズできない場合、販売店にご相談ください。また、身近にMacintoshの使用経験者がいらっしゃる場合にはその方にも相談してみてください。

8. イニシャライズが完了したハードディスクに名称を付け、“ＯＫ”ボタンをクリックします。

イニシャライズが完了した時点で、Macintoshはハードディスクの名称を求めてきます。スペースを含めて13文字(英語モードでは27文字)分までの長さの名称を付けることができます。半角および英文モードのコロン（：）を除き、キーボード上の全ての文字が使用できます。ただし、始まりが半角または英文モードのピリオド（.）はさけてください。

9. “終了”ボタンをクリックします。

スクリーンはデスクトップの表示に戻ります。イニシャライズしたハードディスクのアイコンがデスクトップの右上隅に表示されていることを確認します。

■ 図11-3　イニシャライズ完了後の画面

❖ **次に行なうこと：**イニシャライズが完了したら、すぐにシステムソフトウェアのインストールを行ないこのハードディスクを起動ディスクにしておきます。詳しくは、第３章の「システムソフトウェアのインストール」のページをご覧ください。起動ディスクについては付録Ａで詳しく解説されています。

SCSIハードディスクの再イニシャライズ

今まで使用されていたハードディスクの内容を全て消去し、白紙の状態から使用を再開したいことがあります。その場合、イニシャライズ時と同じように“Apple HD SC Setup”を使用し、ハードディスクを再イニシャライズします。（この章の「SCSIハードディスクのイニシャライズ」に記載の方法を参照してください）

- **再イニシャライズ前に：**ハードディスクに重要な書類やアプリケーションなどがある場合、再イニシャライズ前にそれら全てをフロッピーディスクにバックアップしておくことが必要です。バックアップしておくべきものがあまり多くない場合は、それらのアイコンを１つずつフロッピーディスクにドラッグするだけですみます。

  バックアップ量がかなり大きい場合、HD Backupという付属のユーティリティが利用できます（この使用方法については付属の「Macintosh ユーティリティガイド」をご覧ください）。また、大容量のバックアップのためにはApple Tape Backup 40SCという装置も準備されています。詳しくは販売店にご相談ください。

Apple HD SC Setupのその他の機能

Apple HD SC Setupのダイアログボックスには６つのボタンが表示されます。“イニシャライズ”および“終了”ボタンはイニシャライズ時に使用しますが、他の４つのボタン（“更新”、“パーティション”、“テスト”および“ドライブ”）はSCSIハードディスクのメンテナンス時に用います。

更新

システムソフトウェアがバージョンアップされた場合、そのドライバリソースをハードディスクにインストールしてシステムの性能をさらに高めることができます。バージョンアップに関する情報は販売店を通じて入手できます。Apple HD SC Setupを利用すると、ハードディスクに保存されている情報を全く損なわずにシステムソフトウェアが更新できます。“更新”ボタンをクリックすれば最新のドライバリソースがハードディスクにインストールされます。

また、使用中にドライバリソースをこわした場合にも“更新”ボタンで再インストールができます。（ドライバに異常があるとディスクアイコンが表示されなくなり、そのディスクは起動ディスクとしての機能を失います）

❖ Apple HD SC Setupのバージョンについて：このマニュアルはバージョン2.0のApple HD SC Setupの使用を想定しています。このバージョン2.0ではSCSIハードディスクのパーティション化対応という重要な変更が行なわれています。このため、従来のApple HD SC Setupとの互換性はありません。

バージョン1.5のApple HD SC Setupでイニシャライズされたハードディスクの場合、“更新”ボタンでドライバリソースをインストールすることはできません（ボタンをクリックしてもエラーメッセージが表示されるだけです）。この場合、新しいバージョンのApple HD SC Setupでそのハードディスクを再イニシャライズし、最新ドライバリソースのインストールが必要です。（再イニシャライズを行なうとハードディスクの内容は全て失われます。前もってハードディスクの内容をバックアップしておいてください）

パーティション

Apple HD SC Setupを用いて、１つのSCSIハードディスクをパーティションと呼ばれる区画に分割して使用できます。この機能は、将来のMacintoshの機能拡張に備えたもので、同一ハードディスク内に種類の異なるオペレーティングシステムや他のコンピュータからのデータを混在させることができます。たとえば、ハードディスクの半分をMacintoshオペレーティングシステムで使用し、もう半分A/UX®オペレーティングシステム（アップル社によりMacintosh上に移植されたUNIX）などの使用に確保しておけます。パーティションの作成方法については付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

テスト

Apple HD SC Setupの“テスト”ボタンをクリックしてハードディスクをテストできます。テストには4分ほど要しますが、その間にハードウェアの正常な動作に必要な条件が全て整っているかどうかが確認されます。（ソフトウェア面のテストは行なわれません。また、ハードディスクに保存の情報には全く影響がありません）

テストは何度行なっても構いませんが、正常な動作の確認のためには１カ月に一度ほどで十分でしょう。（Macintosh使用時には気づかないような異常も検出されますので、保存情報の損失につながるトラブルの防止に役だちます）

テストで異常が検出された場合、重要な情報は全てハードディスクからフロッピーディスクへバックアップすることが必要です。バックアップ中にエラーとなった場合には、付属のユーティリティ、Disk First Aidを用います（Disk First Aidの使用方法は付属の「Macintoshユーティリティガイド」で解説されています）。その後のテストでも異常が検出されたら、ハードディスクを再イニシャライズします（再イニシャライズするとハードディスクの情報は全て消去されます）。再イニシャライズ後も異常が認められるようでしたら、そのハードディスクの使用を中止し、販売店にご相談ください。

ドライブ

ダイアログボックスの“ドライブ”ボタンをクリックしてイニシャライズやテストを行なうディスクドライブを選択できます。クリックする度にMacintoshで使用されているSCSIディスクドライブが順に選択されます。このボタンは次のような目的でも使用します。

1台のMacintoshに複数のSCSIハードディスクが接続されている場合、“ドライブ”ボタンによりプログラムが検出するSCSIディスクドライブの優先順位を調べることができます。優先順位はSCSI ID番号により表されます（この優先順位にしたがいMacintoshの起動に使用されるディスクドライブが決定されます）。ただし、Apple HD SC SetupでSCSI ID番号を変更することはできません。外部SCSIハードディスクのSCSI ID番号を変更方法については、そのハードディスクに付属のマニュアルをご覧ください。（内部ハードディスクのSCSI ID番号は常に0となります）

- アップル社以外のSCSIディスクドライブについて：Apple HD SC Setupでは、アップル社以外のSCSIディスクドライブは検出されません。また、システムソフトウェアのバージョンアップにおいてもアップル社製以外のハードウェア製品の正常な動作は保証されません。

付属のオーナーズガイドの「SCSIデバイスの接続」のページには、SCSIデバイスに関するさらに詳しい解説や正しい接続方法が記載されています。

ハードディスク活用の手引き

容量やアクセス速度を別にすれば、ハードディスクはフロッピーディスクと同じ感覚で使用できますが、注意すべき点がいくつかあります。それらをここにまとめておきました。

- ファイルの整理には気を配ってください。ハードディスクには、アプリケーションや書類などのファイルを大量に保存し、マウスのクリックで必要なファイルをすばやく取り出すことができます。ファイルの整理にはフォルダを使用しますが、何層にもわたってフォルダを作成しただけでは、その中からファイルをさがしだすのが面倒な場合もあります。ファイルを整理する際には、まず作業のしやすさを考慮することが大切です。また、大量のファイルの中からすばやく書類やアプリケーションをさがしだすには、付属のデスクアクセサリ、“ファイル検索”が役にたちます。

■ 長時間にわたって作業する場合は途中で電源をオフにしないでください。ハードディスクは、かなり長い期間にわたって故障なしで機能するよう設計されています。一般に、8時間以内に作業を終える場合はハードディスクの電源は入れたままで支障ありません。ハードディスクは長時間の使用に耐えますが、頻繁に電源のオン／オフを行なうほうが可動部品の摩耗度合は大きくなります。途中で休憩をとる時などは電源を入れたままにしておいても差しつかえありません。

■ Macintoshの電源を切る際は必ずスペシャルメニューの“終了”を選んでください。“終了”を選ぶと、Macintoshは自動的に電源オフに必要な処理を行ない、ディレクトリの内容を更新して、安全に電源を切れる状態となります。Macintosh II系の機種では、電源自体も自動的にオフになります。また“終了”で電源を切ると、次回電源を入れた時に短時間で起動が完了するようになります。

いきなり電源スイッチを切ると、次回電源を入れた時の起動時間が長くなるだけでなく、ディスクの内容やディレクトリがダメージを受けることもあります。ディレクトリの修復には付属のユーティリティ、Disk First Aidが利用できます（詳しくは付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください）。Macintoshが正常に起動しない場合には、別の起動ディスクを用いて起動できます。（起動用のフロッピーディスクか、他にもハードディスクがあればそこからも起動できます）

■ バックアップを励行してください。バックアップとは、ディスクの内容やファイルの完全なコピーを作成しておくことです。装置の異常であれ操作ミスであれ、データが損なわれた場合にバックアップがあれば損失分を取り戻すことができます。ハードディスクは高い信頼性を持っていますが、不慮の事故に備えてバックアップを作成しておくことは必要です。万一トラブルがあった場合、作業に費やした時間が長いほど損失も大きくなります。重要な書類は必ずバックアップを作成しておくようにしてください。

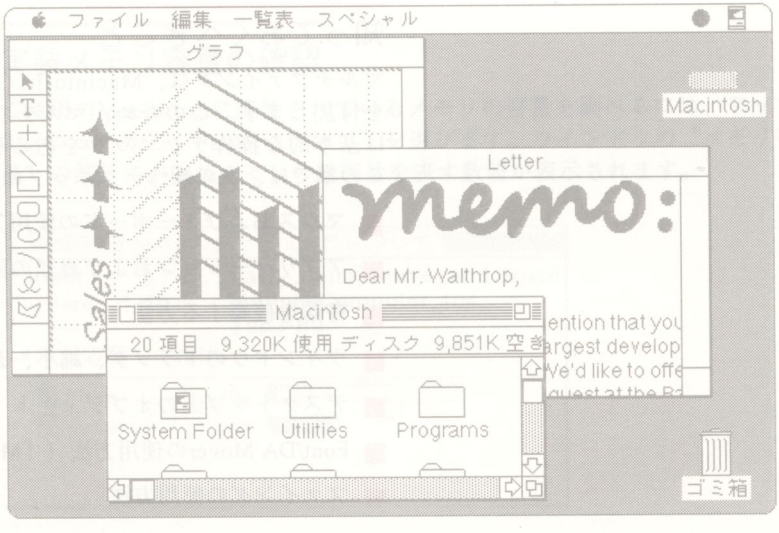
ハードディスクのバックアップは1週間おきでも毎日でも構いませんが、大切なことは作業のペースに合わせて定期的に行なうことです。バックアップは、ディスク間のコピーと同様に行なうことができます。大量の書類をバックアップする場合、付属のユーティリティディスクに収められているHD Backupというプログラムが便利です。詳しい使用方法は「Macintoshユーティリティガイド」で解説されています。また、ハードディスクのバックアップにはApple Tape Backup 40SCという装置も準備されています。

■ トラブル時には付録B「トラブルシューティング」を参照してください。付録Bにはハードディスク関連のトラブル対処法がまとめられています。トラブルが再発する場合は販売店にご相談ください。

第12章

マルチファインダ

Macintoshの作業環境であるデスクトップの各種機能は、ファインダにより実現されています。マルチファインダを利用すると、同じ作業環境をマルチタスク環境へと拡張できます。この章には、マルチファインダを使用する上で必要となる情報がまとめられています。



■ 図12-1 マルチファインダ使用時のデスクトップ

マルチファインダについて

マルチファインダにより、Macintosh Plus、Macintosh SEおよびMacintosh II系の全機種に対応するマルチタスク環境が実現されました。マルチファインダでは複数のアプリケーションを同時に開いておけます。このため、あるアプリケーションをバックグラウンドで実行しながら、同時に別のアプリケーションで作業を行なうことが可能となります。

- 種類の異なるアプリケーションを並行して実行できます。たとえば、アプリケーションを終了することなく、他のアプリケーションで別の書類を見たり、手を加えたりできます。
- ファインダの機能は、常に使用できる状態にあります。アプリケーション使用中に別のアプリケーションを開いたり、作業中に不要となった書類を破棄したり名称変更をしたりできます。
- マルチファインダにはバックグラウンド処理機能があります。あるアプリケーションで作業を行ないながら、同時に他のアプリケーションに処理を継続させることができます。LaserWriterプリンタ対応のバックグラウンドプリント用アプリケーションが付属していますので、書類をプリントしながら他の書類の編集なども行なえます。また、ネットワークでLaserWriterを共用する場合、書類ごとにプリント開始時間が指定できます。これにより、プリンタの利用者が少ない時間帯を指定しておき、自動的にプリントさせることなどが可能となります。

知っておくべきこと

マルチファインダは、Macintoshシステムにさらに強力で柔軟な作業環境を付加します。このため、マルチファインダの機能をフルに活用するには基本的な操作テクニックをある程度身につけていることが必要です。この章では、次の操作テクニックの理解が前提となります。

- マウスおよびキーボードの使用方法
- アプリケーションおよび書類の開き方
- 書類を破棄する方法
- ウインドウのドラッグ、縮小、および拡大
- デスクトップ上のオブジェクト（アイコンなど）の操作
- Font/DA Moverの使用方法（「Macintoshユーティリティガイド」参照）
- ファインダの使用方法

以上の操作テクニックは、全てこのマニュアルの第１章および第５章で解説されています。具体的な操作方法が不明な場合、ここで第１章または第５章に戻り、必要な操作を習得してください。Macintoshの作業環境に慣れた後は、マルチファインダによりさらに進んだ機能を利用できます。

使用条件

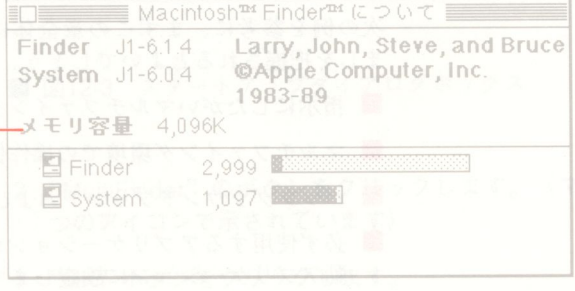
マルチファインダは、このマニュアルで解説されているシステムソフトウェアに組み込まれている機能の１つです。マルチファインダを使用するには、バージョン6.0.4(最新バージョン)のシステムソフトウェアがインストールされていることが必要です。それ以前のバージョンでは、マルチファインダは使用できません。

マルチファインダは、Macintosh Plus、Macintosh SE、およびMacintosh IIの各機種に対応していますが、最低２メガバイトのメモリ（RAM）が実装されていることが必要です。２メガバイトを越えるメモリがあれば、マルチファインダ環境の処理効率はさらに向上し、さらに柔軟な処理が可能となります。これは、メモリが大きいほど同時に開くことのできるアプリケーションも多くなるためです。

大きなアプリケーションを使用する場合、マルチファインダの機能をフルに活用するには４メガバイト程度のRAMが必要となる場合があります（高度な処理を行なうアプリケーションほど、そのサイズが大きくなる傾向があります）。RAMの増設については、販売店にご相談ください。

実装メモリ容量の確認

ご使用のMacintoshに実装されているメモリの容量を調べるには、アップルメニューから“Finderについて”を選びます。ウインドウの“メモリ容量”の部分に、実装メモリの総容量を表す数値が表示されます。



■ 図12-2 “Macintosh Finder について”ウインドウによるメモリ容量の確認

メモリ容量はバイトを単位として表示されますので、これを1,024で割れば何メガバイトに相当するかを知ることができます。たとえば“2,048”と表示された場合、2メガバイトのメモリが実装されていることになります。

❖ **“メモリ容量”が表示されない場合**：最新のシステムソフトウェアがインストールされていないと、メモリ容量が表示されません。インストール方法については、第3章をご覧ください。

この章について

この章の解説内容は次のとおりです。

- バックグラウンドプリント機能の使用準備、およびマルチファインダ機能のオン／オフ
- マルチファインダ環境での作業、およびアプリケーションの切り替え
- バックグラウンドプリントの概説、およびアプリケーション使用中にLaserWriterプリンタでプリントする方法
- アプリケーション使用時のメモリ配分について（2メガバイト実装の場合、特に重要となります）
- スタートアップダイアログボックスによる起動アプリケーションの設定方法
- マルチファインダ活用の手引き

この章の利用方法

次の例を参考に、まずこの章全体に眼を通してマルチファインダのあらましを把握されるとよいでしょう。

- 指示にしたがいマルチファインダをスタートします。
- マルチファインダ環境での操作例のページに眼を通します。
- バックグラウンドプリントおよびメモリ管理に関する部分を読みます。
- 必ず使用するアプリケーションがあれば、指示にしたがい、それを起動アプリケーションに設定します。

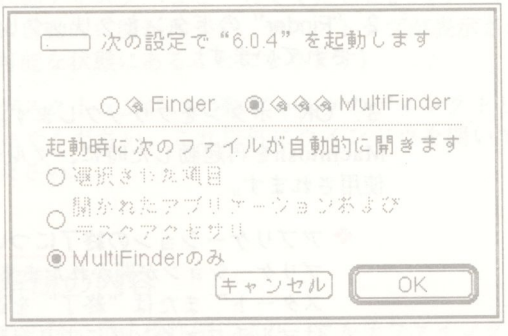
マルチファインダ環境での作業に慣れるにしたがい、操作方は通常のファインダの場合と似ていることに気づかれるでしょう。しかし、マルチファインダをフルにご活用いただくには、多少の予備知識が必要となります。

- **マルチファインダの使用条件**：マルチファインダを使用するには、最新のシステムソフトウェアがインストールされている必要があります。インストール方法については第3章をご覧ください。

マルチファインダの使用を設定する

マルチファインダの使用を指定するには、スタートアップダイアログボックスを用います。デスクトップ上に複数のディスクアイコンがある場合、起動に使用するディスクが選択されていることを確認してください。（選択はクリックで行ないます）

1. スペシャルメニューから、“スタートアップ”を選びます。
   ダイアログボックスが現れます。



■ 図12-3　スタートアップダイアログボックス

2. “MultiFinder”のボタンをクリックします。（マルチファインダは3つのアイコンで示されています）
3. “OK”ボタンをクリックします。
   これにより操作の内容が確定され、ダイアログボックスが閉じます。

4. 今すぐにマルチファインダをスタートするには、スペシャルメニューから“リスタート”を選びます。

ここでマルチファインダをスタートせずに、このままの状態で作業を行なうこともできます。

以上の設定により、Macintoshを再起動すればマルチファインダが自動的にスタートするようになりました。

マルチファインダの使用を解除する

マルチファインダ環境でもほとんどのアプリケーションが問題なく実行できますが、マルチファインダとの互換性のないアプリケーションも考えられます。マルチファインダ使用時にアプリケーションの動作に異常が認められた場合などには、いったんマルチファインダを終了してそのアプリケーションを実行します。

1. スペシャルメニューから“スタートアップ”を選びます。

ダイアログボックスが現れます。

2. “Finder”のボタンをクリックします。（Finderは1つのアイコンで示されています）

3. “OK”ボタンをクリックします。

Macintoshを再起動した時に、マルチファインダのかわりにファインダが使用されます。

- **アプリケーションの終了について：**マルチファインダの使用時、アプリケーションが開かれたままの状態でスペシャルメニューから“リスタート”または“終了”を選ぶと、ほとんどのアプリケーションはマルチファインダにより自動的に終了します。この時、保存されていない書類が開かれていると、マルチファインダはその書類を保存するかどうかを聞いてきます。保存のクリックを行なうと、マルチファインダは書類の保存を行なった後に、作業に使用されていたアプリケーションも自動的に終了させます。保存をしない場合、アプリケーションだけが終了します。

マルチファインダの操作例

マルチファインダはあらゆる処理に柔軟に対応します。マルチファインダに慣れるにつれて、その多彩な機能を組み合わせ、目的に応じた作業環境を作り出すことができるようになります。ここでは、実際にMacintoshを操作しながらマルチファインダ環境の一部分に触れてみることにします。

マルチファインダがインストールされ、使用可能な状態にあることを確認してください。

作業の内容

繁雑さを避けるため使用するアプリケーションを次の２つに限定し、マルチファインダ環境で実際に作業を行ないます。

- ファインダ（デスクトップ環境を実現するシステムソフトウェアで、Macintoshにおける作業の基盤となります）
- TeachText（簡易ワープロアプリケーション）

起動ディスクのディレクトリウインドウ内にTeachTextのアイコンがあることを確認してください。TeachTextがない場合、システムディスクから起動ディスクへコピーしてください。（ファインダはMacintoshの起動時に自動的に開かれます。デスクトップが表示されれば、ファインダは使用可能な状態にあることになります）

デスクトップには起動ディスクのディレクトリウインドウ以外は開かないでください。これ以外にウインドウを開いている場合、全て閉じてください。

解説の内容

この後に示す操作例により、マルチファインダ環境での作業やアプリケーションの切り替えがいかに簡単であるか理解していただけると思います。ここでは次の操作が取りあげられています。

- マルチファインダのデスクトップおよびメニューバー
- アプリケーションの始動方法
- アプリケーション間を移動するための４種類の方法
- マルチファインダ環境でのデスクアクセサリの動作

実際に行なう操作は**太字**で示されています。それ以外の部分には操作の目的などが解説されています。順を追って読み進みながら、指示にしたがい操作を行なってください。

デスクトップ



■ 図12-4　小さなFinder アイコン

マルチファインダの使用時には、スクリーンにデスクトップが表示されます。（ファインダは、Macintoshの起動直後に必ず開かれるアプリケーションです）

1. メニューバー右端に、ファインダのアイコンが小さく表示されていることを確認してください。

   デスクトップの様子はマルチファインダを使用していない場合と同じですが、メニューバーの右端には現在使用中のアプリケーションがアイコンで示されます。この段階ではファインダのアイコンが表示されていますが、これはファインダが最初に実行されるアプリケーションとなっているためです。

アプリケーションの起動



■ 図12-5　TeachTextアイコン

アプリケーションは必要な時にいつでも始動できます。新たにアプリケーションを始動しても、今まで実行されていたアプリケーションはそのまま使用可能な状態で残ります。

2. TeachText のアイコンを開きます。

   しばらくすると、“名称未設定”のタイトルの付いた空のウインドウがスクリーン全体に表示されます。メニューバー右端のアイコンがファインダからTeachTextに変化していることに注意してください。

3. メニューバー内のタイトルが、TeachTextを起動する前とは異なっていることを確認します。

   メニューバー内のタイトルは、始動されたアプリケーションに合わせて変化します。この場合、TeachText用のメニュータイトルが表示されます。

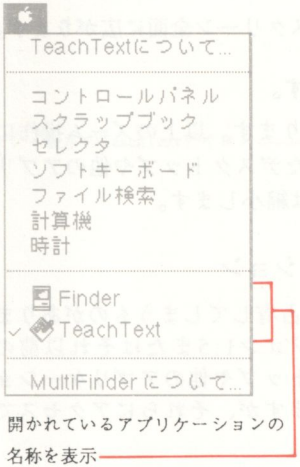
   通常、メニューバーの内容はアプリケーション間で大きな違いはありません。このため、他のアプリケーションへ移動してもメニューバーの変化には気づかない場合があります。しかし、アプリケーションの違いが重要となる場合には、表示されているメニューバーがどのアプリケーションのものかを意識する必要があります。（同時に複数のアプリケーションを開いている場合、操作の混乱を招く恐れがあります。特にアプリケーションの終了時には気を配る必要があります）

移動方法（1）：アップルメニュー

マルチファインダ環境では、アップルメニューはデスクアクセサリを呼び出すだけでなく、開かれているアプリケーション間の移動にも使用します。

4. アップルメニューをプルダウンし、その内容を確認します。

   使用中のアプリケーションが何であるかを確認するには、アップルメニューをプルダウンします。メニュー内の“...について”の部分には、フォアグラウンドで使用されているアプリケーション名が表示されます。（この場合は“TeachTextについて”）



■ 図12-6　アップルメニュー

5. プルダウンしたアップルメニュー内の下の部分の表示内容を確認します。

マルチファインダ使用時には、開かれているアプリケーションの名称が全てアップルメニュー内に表示されます。アイコン左側の マークは、現在使用されているアプリケーションを示します。（この場合はTeachText）

この中から使用したいアプリケーションを選べます。アプリケーションを選ぶと、その処理はバックグランド（後面）からフォアグランド（前面）へと移行し、作業可能な状態になります。

6. アップルメニューから“Finder”を選びます。

以上の操作により、開いたアプリケーション間の移動が完了しました。（この場合はTeachTextからファインダへ移動）

ファインダを選ぶと、ただちにメニューバー右端のアイコンが変化します。これと同時に、ファインダのウインドウが最優先の表示となります。この時TeachTextのウインドウはデスクトップ上に残りますが、処理は後面へ移行した状態にあります。

❖ 参考：操作を誤って使用したいアプリケーションのウインドウを見失った場合、アップルメニューをプルダウンして必要なアプリケーションのウインドウを選択できます。

移動方法（2）：ウインドウ

選択されていないアプリケーションのウインドウをクリックすると、そのウインドウへ処理を切り替えることができます。

7. TeachTextのウインドウ（ファインダウインドウの下に表示）のどこかをクリックします。

以上の操作により、開いたアプリケーション間の移動が完了しました。（この場合はファインダからTeachTextへ移動）

8. サイズボックスを用いてTeachTextのウインドウを縮小し、デスクトップの様子が分かるようにします。

ウインドウはできるだけ小さくしてください。サイズボックスがドラッグできなくなったら、マウスボタンを放してください。（ウインドウのサイズは、マウスボタンを放した時点で変化します）

9. ズームボックスをクリックします。

ウインドウはTeachText始動直後のようにスクリーン全面に広がります。

10. もう一度ズームボックスをクリックします。

TeachTextのウインドウは最小サイズになります。以上のズーム操作により、作業時にはウインドウを広げ、またデスクトップや他のアプリケーションウインドウへ移動する場合には縮小します。

デスクトップ全面を使用するアプリケーション

アプリケーションには、デスクトップ全面を占有してしまうものがあります（このようなアプリケーションにバージョン1.5またはそれ以前のMacPaintがあります）。この場合、デスクトップや他のアプリケーションはウインドウの下に完全に隠れてしまいますが、それらにアクセスできなくなったわけではありません。

アプリケーションがデスクトップ全面を占める場合でも、アップルメニューを利用すれば、ファインダを含めて他に開かれているアプリケーションへ移動できます。移動後は、そのアプリケーションのウインドウが選択された状態となり、メニューバーの内容も合わせて変化します。しかし、この場合デスクトップはまだ表示されません。（デスクトップが表示されているかどうかは、“ゴミ箱”アイコンの有無によっても確認できます）

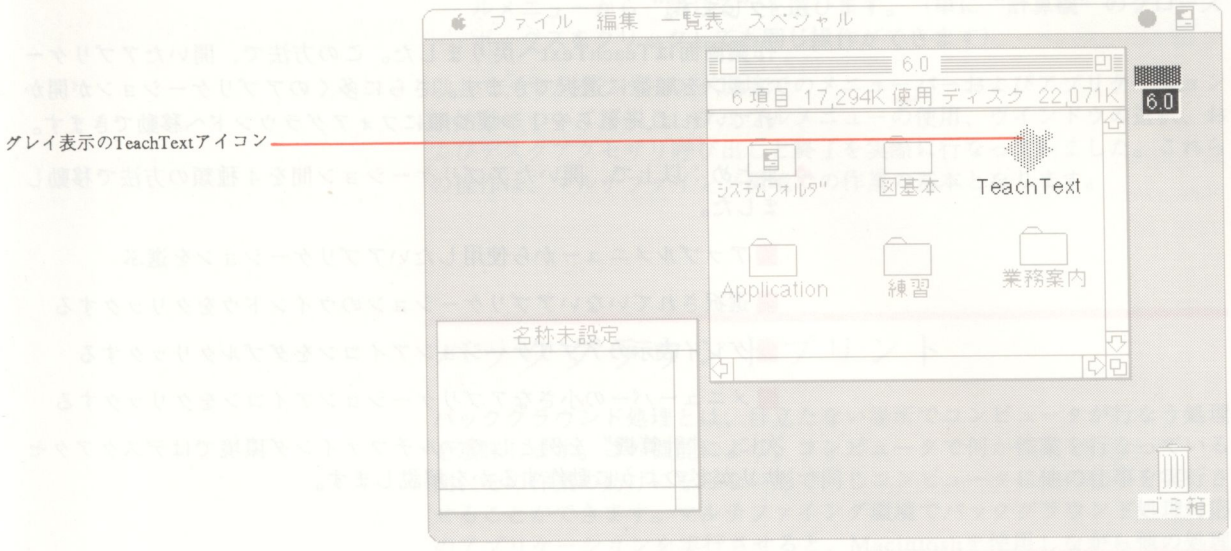
“ゴミ箱”かデスクトップ上の操作が必要な場合、デスクトップ全面を占めているアプリケーションを終了させます。デスクトップでの作業が完了したら、終了したアプリケーションを再始動します。

11. TeachTextのウインドウをスクリーンの左下隅へドラッグします。

これでデスクトップの大半およびファインダのディレクトリウインドウの一部が見えるようになります。この段階では、TeachTextのウインドウだけが選択された状態にあります。

12. ファインダのディレクトリウインドウをクリックで選択します。

マルチファインダ使用時にもウインドウの動作は従来と変わるところはなく、ウインドウは１つしか選択できません。ファインダのディレクトリウインドウは、クリックで選択した時点で最前面の表示となります。TeachTextのウインドウも開かれたまま残っていますが、もはや選択された状態にはありません。



■ 図12-7　ウインドウの選択状態

移動方法（3）：グレイ表示のアイコン

次に、アプリケーション間移動の3番目の方法を用いてみます。

13. ファインダのディレクトリウインドウにTeachTextのアイコンがあることを確認します。

    フォルダを開いた場合と同様、TeachTextのアイコンはグレイ表示となっています。

14. グレイ表示のTeachTextアイコンをクリックします。

    これで、TeachTextが再び選択されました。このように、グレイ表示のアイコンをダブルクリックすることにより使用するアプリケーションを切り替えることができます。（グレイ表示のアイコンを選択した後、ファイルメニューから“開く”を選んでも同じ操作ができます）

移動方法（4）：メニューバーの小アイコン

次に、アプリケーション間移動の4番目の方法を示します。これが最も簡単で速い方法です。

15. メニューバー右端に小さく表示されたTeachTextのアイコンをクリックします。

    TeachTextのすぐ“裏側”にあるアプリケーションが、ただちに前面へ移行されます。

16. メニューバー右端に小さく表示されたファインダのアイコンをクリックします。

作業画面はTeachTextへ戻りました。この方法で、開いたアプリケーションを順番に選択できます。さらに多くのアプリケーションが開かれていれば、それらを1つずつ順にフォアグラウンドへ移動できます。

❖ まとめ：以上で、開いたアプリケーション間を4種類の方法で移動しました。

- アップルメニューから使用したいアプリケーションを選ぶ
- 選択されていないアプリケーションのウインドウをクリックする
- グレイ表示のアプリケーションアイコンをダブルクリックする
- メニューバーの小さなアプリケーションアイコンをクリックする

次に、“計算機”を例としてマルチファインダ環境ではデスクアクセサリがどのように動作するかを解説します。

デスクアクセサリ

デスクアクセサリは、マルチファインダ使用時にも呼び出せます。ただし、一度呼び出したデスクアクセサリは、アプリケーションの始動時にも終了時にも自動的に閉じることはありません。

17. アップルメニューから“計算機”を選びます。

“計算機”が現れると、TeachTextウインドウの選択が解除されると同時に、メニューバーの内容も変化します。

18. TeachTextのウインドウ内でクリックを行ない、次にTeachTextのファイルメニューから“終了”を選びます。

これにより、“計算機”が表示されたままの状態でTeachTextが終了されました（TeachTextのアイコンはグレイ表示となり、それが現在使用されていないことを示しています）。しかし、“計算機”はそのままの状態で残っています。

19. ファインダのディレクトリウインドウ内でクリックを行ないます。

ファインダのディレクトリウインドウが選択されました。この時、“計算機”はウインドウの下に隠れてしまっても、まだ使用可能な状態にあります。

20. “計算機”が完全に見えるまで、ファインダのディレクトリウインドウを下へドラッグします。

ドラッグ操作はマウスボタンを放した時点で終了します。

21. “計算機”をクリックして使用可能な状態に戻します。次に、ファイルメニューから“閉じる”を選びます。（単に“計算機”のクローズボックスをクリックしても同じ操作ができます）

以上で、マルチファインダ環境でのメニューバーおよびアプリケーションの始動について解説し、アップルメニューの使用、ウインドウの選択、およびデスクアクセサリ呼び出しと終了を実際に行なってみました。これらの操作は、マルチファインダ環境での作業の基本となります。

バックグラウンドプリント

バックグラウンド処理とは、目立たない場所でコンピュータが行なう処理を意味します。この機能により、コンピュータで何か作業を行なっている間、その作業の妨げにならない形で同じコンピュータに他の仕事を実行させることができます。マルチファインダ環境でバックグラウンド処理対応のアプリケーションを実行させると、Macintoshを使用しながら他の処理を同時に進行させることが可能です。

マルチファインダが持つバックグラウンド処理機能に、バックグラウンドプリントがあります。バックグラウンドプリントをLaserWriterと組み合わせることにより、アプリケーションでの作業をしながら同時に書類のプリントを行なえます。

バックグラウンドプリントのしくみ

Background Printing使用時には、ファイルメニューから“プリント”を選ぶ度にプリント対象の書類が起動ディスクに保存され、そこから書類の内容がプリンタへ送り込まれます（技術的には、この処理は**スプール**と呼ばれます）。書類をいくつかプリントする場合にも、それぞれがスプール機能によりシステムフォルダ内のフォルダ、“Spool Folder”に保存されます。書類は、Spool Folderから順次プリンタへ送り込まれます。

スプールされた書類の内容は、通常の処理には関係のない場所に一時的に保存されます。

スプールを行なうと、プリント開始のタイミングにほんのわずかなずれが生じますが、プリントにともなう待ち時間が大幅に減少します。スプールされた書類の処理は全てバックグランドで進行するため、その間コンピュータを他の作業に使用できます。

バックグラウンドプリントの使用により“プリント”コマンドの使用方法が変わることはありません。Macintoshがプリントに費やす時間が削減されます。

バックグラウンドプリント機能の確認

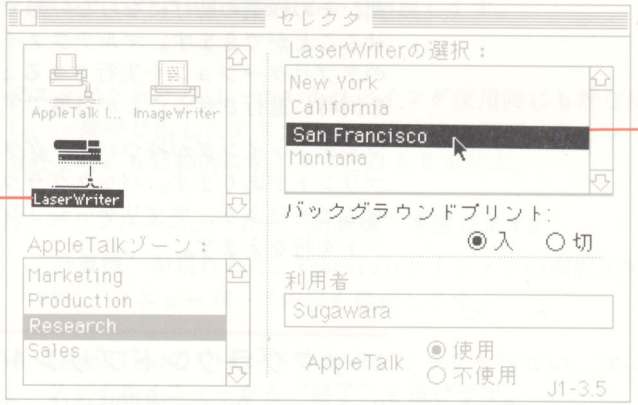
マルチファインダは、バックグラウンドプリントの使用が設定された状態で供給されますが、バックグラウンドプリント機能をオフにしておくこともできますので、プリント前にこの機能が使用できる状態にあるかどうかを調べる必要があります。

1. アップルメニューから“セレクタ”を選びます。

2. ウインドウ内左上のボックスから、LaserWriterのアイコンを選択します。

   バックグラウンドプリントはLaserWriterに対してのみ有効です。

   アイコンをクリックすると、右上のボックス内に使用可能なLaserWriterプリンタの名称が一覧表示されます。その下に、バックグラウンドプリントのオン／オフを行なうボタンが表示されます。



LaserWriterのアイコンを選択し、バックグラウンドプリントの設定状況を表示

使用したいLaserWriterプリンタを選択

■ 図12-8　セレクタによるバックグラウンドプリント設定

3. “入”ボタンが選択されていることを確認します。

4. 必要に応じ、使用したいLaserWriterプリンタを選択します。

   LaserWriterの名称が選択されていないと、PrintMonitorがプリントする書類の送出先を決定できません。（PrintMonitorについてはこの後で解説します）

5. “セレクタ” のウインドウを閉じます。

バックグラウンドプリント機能の使用状況にかかわらず、プリントは通常の方法で開始できます。バックグラウンドプリント使用時には、プリントの待ち時間が減少されるほか、プリント処理自体をコントロールできます。たとえば、書類のプリント状態をモニタしたり、プリントを開始する日時や時刻を指定したり、処理の進行状態に関するレポートを要・不要なども指定できます。このような各種機能は、PrintMonitorというアプリケーションによって実現されています。

PrintMonitor

バックグラウンドプリント機能の使用時には、“プリント” コマンドを選ぶとただちにPrintMonitorが始動します。このPrintMonitorによりプリント処理に関する各種設定を行なえます。しかし、PrintMonitor自体は内部処理用のアプリケーションですので、その存在を意識する必要はありません。

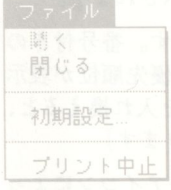
マルチファインダ環境で動作する各種アプリケーションと同様、プリント処理の設定を行なう際にはPrintMonitorのウインドウを前面に表示させます。PrintMonitorのウインドウを使用するには、次のような方法があります。

- プリントが行なわれていない場合、PrintMonitorのアイコンを選択し、開けます。（アイコンはシステムフォルダ内にあります）
- プリントが進行中の場合、PrintMonitorはすでに開かれた状態にあります。PrintMonitorのウインドウを前面に表示するには、いくつかの方法があります。まず、アップルメニューに表示“PrintMonitor”を選ぶ方法があります。また、メニューバー右端の小さなアイコンをクリックしてPrintMonitorのウインドウを選択することもできます。システムフォルダ内のPrintMonitorアイコン（グレイ表示）をダブルクリックしてもそのウインドウを選択できます。

以上のいずれかの操作により、メニューバーがPrintMonitor用に変化します。

PrintMonitorのファイルメニューには、次の機能があります。

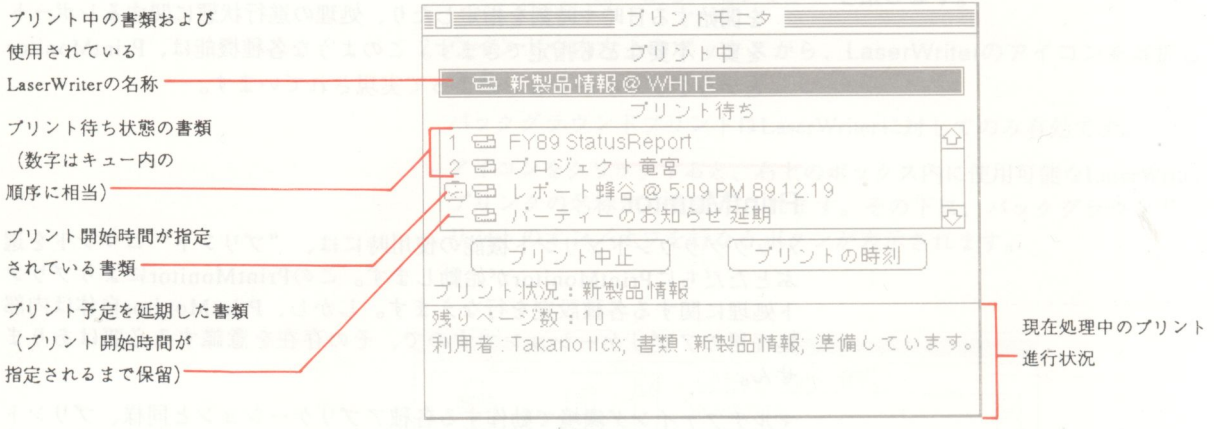
- PrintMonitorのウインドウを開く／閉じる
- 初期設定用ダイアログボックスを開く
- プリントを中断（または再開）させる



■ 図12-9　PrintMonitorのファイルメニュー

PrintMonitorのウインドウ

アップルメニューまたはアイコンを使用してPrintMonitorを開くと、次のようなウインドウが現れます。



■ 図12-10　PrintMonitorのウインドウ

PrintMonitorのウインドウには、さまざまな情報が表示されます。それぞれの表示内容について、ウインドウ上部から順に解説します。

■ **プリント中**　プリント中の書類および使用されているプリンタの名称が表示されます。

■ **プリント待ち**　バックグラウンドプリントを指定した書類の名称、およびそれぞれの処理状況が表示されます。これらは、次のように分類されています。

□ プリント待ちの状態にある書類は、番号付きで名称が表示されます。番号は各書類のプリント優先順位を表しています。書類名のほか、プリントに使用されるプリンタの名称も表示されます。

表示されている優先順位は、いつでも変更できます。番号付きの書類名をドラッグして表示順序を入れ換えると、優先順位が表示順に変更されます。（たとえば書類１と２の位置を入れ換えると、プリントは書類２、１の順に行なわれるようになります）

□ プリント開始時間を指定した書類は、小さな時計のアイコンによって識別できます（プリント開始時間を設定するには、“プリントの時刻”ボタンを用います）。また、プリントが予定された時刻および日付を確認することもできます。

□ プリントを延期した書類は、その名称の先頭に短い線（－）が表示されます（“プリント延期”のメッセージも表示されます）。この場合、書類は“プリントの時刻”ボタンを用いてプリント開始時間を設定するまで、このままの状態でウインドウ内に残ります。

“プリント待ち”ボックスに５つ以上の書類がある場合、表示をスクロールできます。

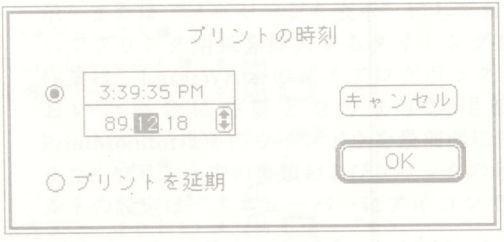
❖ **LaserWriterが複数台ある場合：**ネットワークにより複数のLaserWriterプリンタが接続されている場合、使用するプリンタを指定できます。“プリント”コマンドを選ぶ前に、“セレクタ”を用いて設定を行なってください。

■ **リストから削除／プリント中止**　“プリント待ち”表示のすぐ下のボタンには、“リストから削除”または“プリント中止”と表示されます。どちらの表示となるかは、選択された書類により異なります。

□ プリント待ちの書類を選択した場合、ボタンには“リストから削除”と表示されます。ボタンをクリックすると、選択されている書類のプリント予定を取り消せます。（シフトクリックを用いれば複数の書類が選択できます）

□ プリント中の書類を選択すると、ボタンには“プリント中止”と表示されます。ボタンをクリックすると、プリントを途中でキャンセルできます。

■ **プリントの時刻**　このボタンを用いて書類のプリントを開始する日時および時刻を設定します。設定したい書類を選択した後、このボタンをクリックするとダイアログボックスが現れます。



■ 図12-11　プリント開始時間設定用ダイアログボックス

日時および時刻の設定は、デスクアクセサリの“時計”と同じ方法で行ないます。このダイアログボックスには、現在の日時および時間しか表示されません）

表示された日時のうち設定変更したい部分をクリックすると、小さな矢印が右側に現れます。上下の矢印をクリックして表示の数値を増減します。選択した部分には、キーボードから直接数値を入力することもできます。*Tab*キーを押すと、表示順に（月から日、年など）選択部分が移行します。プリント開始時間の設定を終えたら、クローズボックスをクリックします。

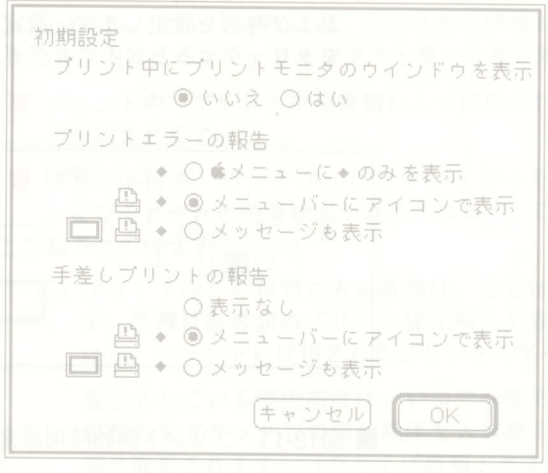
ダイアログボックス内の“プリントを延期”ボタンをクリックしておけば、無期限で書類のプリントを延期できます。その後、プリント予定が決まった時点で再度ダイアログボックスを開き、プリント開始時間を設定できます。

設定を終えたら、“OK”ボタンをクリックして設定を登録します。かわりに“キャンセル”ボタンをクリックすれば、今までの設定を無効にできます。

- **プリント状況**　“プリント中”または“プリント待ち”部分にリストされている書類を選択すると、その書類に関する情報が表示されます。

初期設定ダイアログボックス

PrintMonitorのファイルメニューから“初期設定”を選ぶと次のダイアログボックスが表示され、PrintMonitorの機能設定が行なえます。



■ 図12-12　Preferencesダイアログボックス

■ **プリント中にプリントモニタのウインドウを表示**　この設定を“いいえ”にしておくと、プリント中にPrintMonitorのウインドウが表示されなくなります。ここでの設定が“いいえ”でも、アップルメニューを用いればいつでもPrintMonitorのウインドウを表示させることができます。デフォルトの設定は“いいえ”となっています。

“はい”に設定した場合、プリントが開始される度にPrintMonitorのウインドウがデスクトップ上に現れます。デスクトップに使用中のウインドウがある場合には、PrintMonitorのウインドウが作業を中断することはありません。このため、場合によってはPrintMonitorのウインドウを見るために、他のウインドウをドラッグしなければならないことがあります。（アップルメニューからもPrintMonitorのウインドウを最前面に表示できます）

■ **プリントエラーの報告**　この設定により、プリント中にトラブルが発生した場合に警告メッセージが表示されます。トラブル時には警告メッセージが最優先で表示されますので、使用中のウインドウがある場合には作業が一時的に中断されます。プリント中にプリンタの用紙がなくなったり、メモリが足りなくなった場合などに警告メッセージが表示されます。デフォルトの設定は“メニューバーにアイコンで表示”となっています。

“メニューバーに◆のみを表示”に設定した場合、トラブルがあっても警告メッセージは表示れませんが、警告の内容は保存されますので必要に応じて参照できます。書類が予定通りプリントされていなかった場合などには、アップルメニューからPrintMonitorを呼び出せば、プリント中に発生したエラーに関する警告メッセージが表示されます。（PrintMonitorのアイコンを選択しても開けます）

■ **手差しプリントの報告**　この設定を“メニューバーにアイコンで表示”または“メッセージも表示”にしておくと、PrintMonitorが手差しでプリンタ用紙を挿入するタイミングを知らせてくれます。この作業は、LaserWriterのダイアログボックスで“手差し”を選択しておいた場合に必要となります。用紙挿入のタイミングで、PrintMonitorはそのウインドウを最前面に表示するよう求めてきます。また、プリント中の書類およびプリンタの名称も表示されます。デフォルトの設定は“メニューバーにアイコンで表示”となっています。

“表示なし”に設定した場合、PrintMonitorは用紙挿入のタイミングを報しません。LaserWriterは、用紙挿入が必要になってから約１分待機しますが、その間に用紙がセットされないと自動的にプリント処理をキャンセルします。

アップル社製以外の用紙フィーダには、（用紙送りがメカニカルであっても）“手差し”の選択が必要なものがあります。このような用紙フィーダをLaserWriterに取り付けている場合、設定は“表示なし”にしておく必要があります。この種の用紙フィーダでは、用紙が供給されていても警告メッセージが表示されるからです。

プリント中止／プリント再開

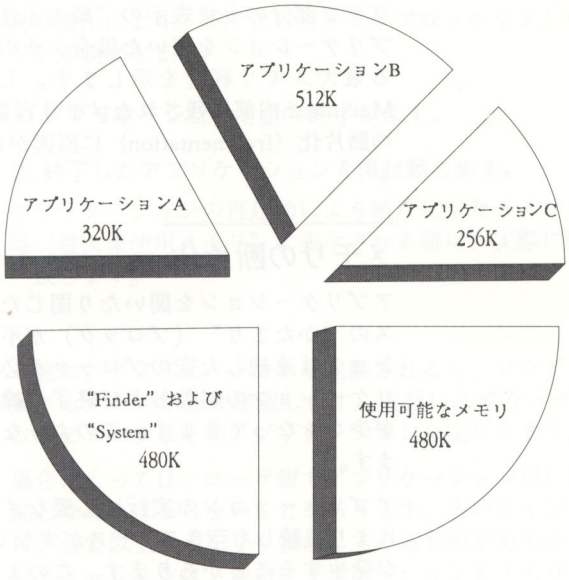
これらのどちらが表示されるかは、プリント処理の状態により変化します。

- “プリント中止”と表示されている場合にこれを選ぶと、現在処理されている書類のプリントが完了した時点でプリント処理が中断されます（前述の“プリント中止”ボタンをクリックすると、ただちにプリントが中止されます）。“プリント中止”を選んだ後は、表示は“プリント再開”に変わります。
- “プリント再開”と表示されている場合にこれを選ぶと、中断部分からプリントが再開されます。プリントが再開すると、表示は“プリント中止”に戻ります。

メモリ管理について

コンピュータのメモリには、容量という限界があります。このため、アプリケーションの実行や、処理状態の監視に使用できるメモリの量にも制限があります。マルチファインダ環境では複数のアプリケーションを同時に開けますが、開かれるアプリケーションの数が増えるにつれてMacintoshが行なうメモリ管理も複雑化します。内部的にはアプリケーションごとに配分（アロケート）可能なメモリが割り出されますが、メモリ不足のエラーが発生しアプリケーションが開けない場合もあります。この場合の対処方法はいくつか考えられますが、その前にMacintoshが行なうメモリ管理のあらましを理解する必要があります。

ここで、コンピュータのメモリを一般的な家庭用冷蔵庫に例えてみましょう。冷蔵庫内部の保存場所はいくつかに区切られていますが、そのうちフリーザや野菜入れなどは一定の広さしかありません。一方、それ以外の部分なら棚板を移動させることで自由に容量を変更できます。たとえば、９インチのボトル１ダースを立てたまま保管したい時、棚板が５インチほどの間隔で配置されていたとします。この場合、棚板を９インチ以上の間隔に付けなおせば問題なくボトルは収まります。

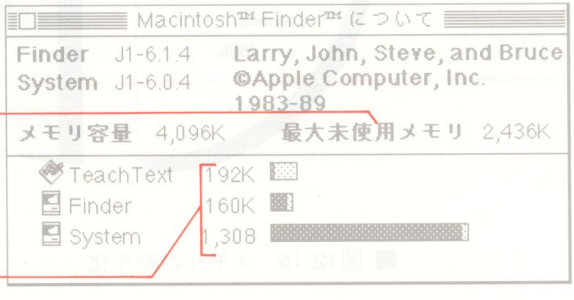


■ 図12-13　Macintosh内部のメモリ配分

Macintosh内部のメモリも、冷蔵庫の例と同じように、ある領域は“Finder”や“System”といった特別なプログラムのために確保されています。その他の領域は、実行するアプリケーションに合わせて比較的自由に使用されます。

ファインダのメモリグラフ

メモリのアロケート状態を示すため、ファインダには下図のようなメモリグラフを表示する機能が組み込まれています。このグラフを表示するには、アップルメニューから“Finderについて”を選びます。これにより、現在開かれているアプリケーションそれぞれについて、Macintoshが割り当てられたメモリ、およびその消費量を確認できます。



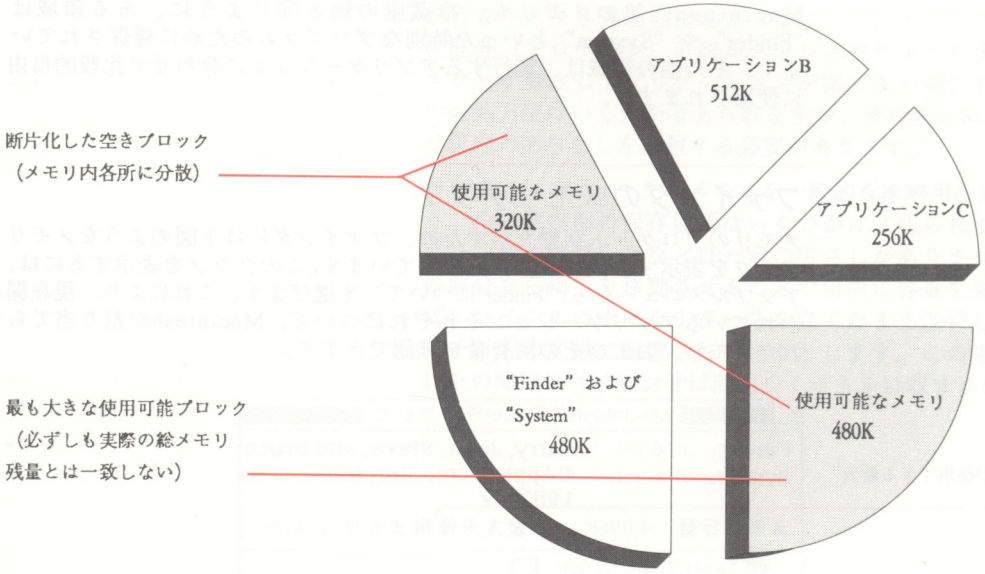
■ 図12-14　“Macintosh Finderについて”ウインドウ

グラフ部分の上に表示の“最大未使用メモリ”は、その時点で新たにアプリケーションを開いた場合、そのアプリケーションのために使用できる最大メモリ容量を示します。しかし、表示される数値は必ずしもMacintosh内部に残されたメモリ容量とは一致しません。これは、メモリの**断片化**（fragmentation）に原因があります。

メモリの断片化

アプリケーションを開いたり閉じたりする度に、メモリには空きスペースの“かたまり”（ブロック）が不規則な位置に残ります。アプリケーションは連続した空のブロックが必要数ないと実行できませんが、アプリケーションの起動および終了が繰り返されると連続した空のブロックが少なくなってきます。このような空きスペースの変化を断片化と呼びます。

アプリケーションの実行に必要なメモリが残っている場合でも、断片化により連続した空きスペースが少なくなっていると、メモリ不足のエラーが発生することがあります。このような場合には、断片化したメモリブロックをまとめて１つの大きな空きスペースをつくり出すことが必要です。



■ 図12-15　メモリの断片化

断片化したメモリブロックをまとめる

次の操作により、断片化したメモリブロックをまとめ１つの大きなブロックを作成できます。

1.アプリケーションを全て終了します。

2.終了したアプリケーションを再起動します。

アプリケーションの再起動により断片化したメモリを回復できます。この時“最大未使用メモリ”に表示される値は、実際に残されたメモリ容量と一致します。

アプリケーションのメモリサイズを変更する

一般に、アプリケーションが起動されると、コンピュータ側はその実行に要するメモリ容量を確認します。実行に必要なメモリブロックがあれば、コンピュータはそのアプリケーションを実行します。

場合によっては、ユーザ側でアプリケーション用に確保されたメモリを調節しなければならないことがあります。古いタイプのアプリケーションには、必要以上のメモリを要求してくるものがあるからです。（この種のアプリケーションは、他のアプリケーションとメモリを共有するようには設計されていません。マルチファインダでは、アプリケーション間のメモリ共有が想定されています）。また、作業中に書類が大きくなってくると、アプリケーションが起動時に要求したメモリ容量を越えてしまうこともあります。

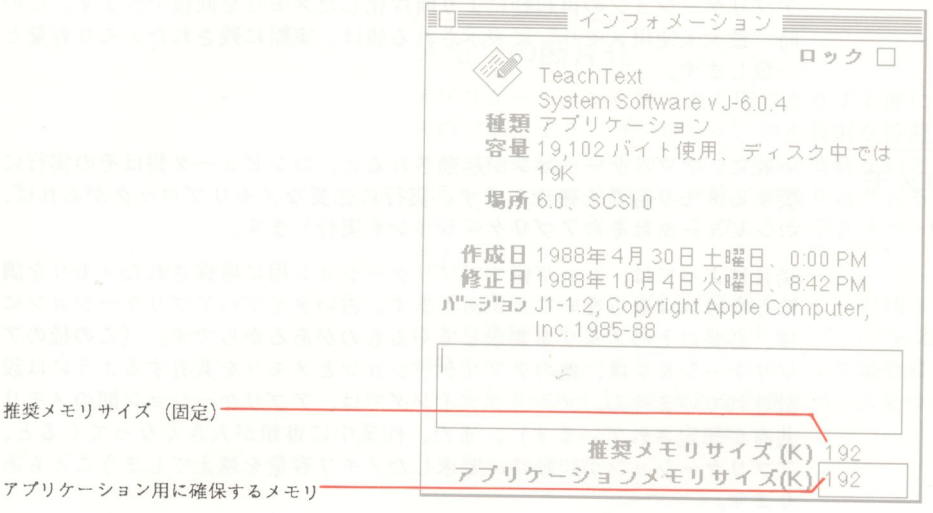
アプリケーションのインフォメーションウインドウを使用すると、アプリケーションのメモリ配分をコントロールできます。メモリ不足の場合にはメモリに配分を大きくし、また、逆に配分を減らせば複数のアプリケーションのためメモリの消費を抑えることができます。

△重要　アプリケーションのメモリサイズを小さくする前に、そのアプリケーションのバックアップを作成しておいてください。△

アプリケーションのメモリサイズは次の方法でを変更できます。

1.対象のアプリケーションを表すアイコンを選択し、次にファイルメニューから“インフォメーション”を選びます。

インフォメーションウインドウが現れます。



■ 図12-16　インフォメーションウインドウ

ウインドウ内下部の2行には、次の情報が表示されます。

- **推奨メモリサイズ**　選択されたアプリケーション用に確保すべきメモリサイズの推奨値が表示されます。（推奨メモリサイズは参考のために表示されますので、これを変更することはできません）
- **アプリケーションメモリサイズ**　選択されたアプリケーションに現在確保されているメモリサイズが表示されます。表示の数値を編集し、メモリサイズを増減できます。

マルチファインダが使用されていないと、この2行は表示されません。（この章の「マルチファインダの使用を設定する」のページをご覧ください）

△重要　アプリケーションメモリサイズは推奨値以下に設定しないでください。推奨値以下の設定では、アプリケーションの動作に異常が発生することがあります。（アプリケーションがキーボードやマウスの操作に全く反応しなくなる場合もあります）

メモリサイズの推奨値が表示されないアプリケーションの場合、かわりにインフォメーションウインドウには“—”と表示されます。そのアプリケーションが必要以上のメモリを消費しているようでしたら、推奨メモリサイズをアプリケーションの供給元に問い合わせてみてください。△

2. マウスで“アプリケーションメモリサイズ”のボックスを選択します。

ボックスが選択されるとボックス全体が黒く表示されます。

このボックスが選択できない場合、そのアプリケーションが開かれていることが考えられます。アプリケーションを開いたままでそのメモリサイズを変更することはできません。アプリケーションを閉じるには、そのファイルメニューから“終了”を選びます。

3. 設定したいメモリサイズを入力します。

たとえば大規模なスプレッドシートを使用する場合、384Kから512Kまでの拡張が必要となるかもしれません。

- ❖ **設定を推奨値に戻すには：**ボックスを空のままにしておけば、後で自動的に推奨値が設定されます。

4. クローズボックスをクリックしてインフォメーションウインドウを閉じます。

設定したメモリサイズは、次回そのアプリケーションを起動した時から有効となります。

スタートアップコマンド

マルチファインダ環境では、複数のアプリケーション（および書類）を選択しておき、これらがMacintoshの起動時に自動的に開くように設定しておけます。この機能は、何日かにわたって書類やアプリケーションを同じ組み合わせで作業する場合などに便利です。

“スタートアップ”コマンドを選ぶ前には、起動時に自動的に開きたいアプリケーションや書類のアイコンを選択しておけます。起動アプリケーションの設定は“スタートアップ”コマンドで表示されるダイアログボックスで行ないます。

- ■ **選択された項目**　“スタートアップ”コマンドを選んだ時点で選択された状態にあるアプリケーションや書類を意味します。書類やアプリケーションは、全て同一のフォルダ内にあることが前提となります。複数のフォルダにわたる選択は対象となりません。

  アプリケーションが1つだけしか選択されていない場合、その名称が“選択された項目”のかわりに表示されます。（何も選択されていない場合、このボタンはグレイ表示となり、クリックできません）

■ 開かれたアプリケーションおよびデスクアクセサリ “スタートアップ” コマンドを選んだ時点で開いた状態にあるアプリケーションやデスクアクセサリを意味します。現在アプリケーションやデスクアクセサリが開かれており、それらが始動時に自動的に開かれるようにしたい場合、このボタンをクリックします。(何も開かれていない場合、“開かれたアプリケーションおよびデスクアクセサリ” はグレイ表示となり、クリックできません)

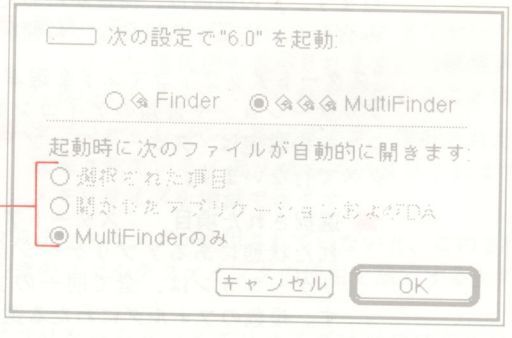
■ MultiFinder のみ／Finder のみ　マルチファインダ（マルチファインダが使用されていない場合はファインダ）を起動時のアプリケーションとすることを意味します。このボタンは、他の2つのボタンのいずれかもクリックしない場合、自動的に選択されます。

起動アプリケーションの設定

1. 使用したい起動アプリケーションのオプションを決めておきます。
   オプションには、“選択された項目”、“開かれたアプリケーションおよびデスクアクセサリ”、および “MultiFinder のみ／Finderのみ” があります。(3番目のオプションはマルチファインダの使用状態により変化します)

2. ファインダが選択されていなければ、これを選択します。
   “スタートアップ” コマンドは、ファインダのスペシャルメニューにしかありません。
   ファインダのウインドウが表示されていれば、その中のどこかをクリックすれば選択されます。アップルメニューからも選択できます。

3. スペシャルメニューから “スタートアップ” を選びます。
   ダイアログボックスが現れます。



■ 図12-17　スタートアップダイアログボックス

4. 使用したいオプションの左側のボタンをクリックします。
5. “OK” ボタンをクリックします。

起動アプリケーションの設定を変えた場合、“OK” ボタンをクリックしないと設定が有効となりません。

マルチファインダ活用の手引き

マルチファインダを効果的に使用していただくための情報を以下にまとめておきました。最初に解説されている内容はマルチファインダのショートカット機能で、その次に解説されているのはメモリを増設していない場合に便利な機能です。

- **一時的なマルチファインダの解除**　マルチファインダ環境ではうまく動作しないアプリケーションを使用する場合などには、マルチファインダの使用を一時的に解除できます。コマンドキーを押し下げたままでMacintoshを起動（またはリスタート）すると、マルチファインダを使用しない通常のデスクトップが現れます。コマンドキーは、Macintoshの起動後メニューバーが表示されるまで押し下げたままにしてください。作業後、通常の方法でもう一度Macintoshを起動（またはリスタート）すればマルチファインダ環境に戻ります。

  マルチファインダの使用を完全に取り消すには、スタートアップダイアログボックスを用います。（この章の「マルチファインダの使用を解除する」のページをご覧ください）

- **RAMキャッシュ機能の使用**　RAMキャッシュとは、アプリケーション使用時のデータの読み出しを高速化するために確保された特別なメモリ領域です。この機能を用いると作業をスピードアップできますが、アプリケーション自体が使用できるメモリは、RAMキャッシュ用に確保した分だけ減少します。1メガバイトのメモリが実装されている場合、32 KのRAMキャッシュが適当です。（メモリが不足してしまう場合、RAMキャッシュ機能は解除できます）

  RAMキャッシュの設定状態は、アップルメニューから“コントロールパネル”を呼び出して確認できます（“RAM Cache”の部分に表示）。RAMキャッシュが32 Kを越える設定となっている場合、それ以下の設定にしてください。これによりRAMキャッシュ用に確保されていたメモリ領域を解放できます。（新しい設定を有効にするには、Macintoshを再起動する必要があります）

- **Font/DA Mover の使用**　Font/DA Moverは、通常のファインダ環境（マルチファインダが使用されていない状態）での使用が想定されています。

- **HD Backup の使用**　HD Backupは、マルチファインダ環境での使用は想定されていません。HD Backupでハードディスクのバックアップを行なう場合、事前にマルチファインダの使用を解除しておいてください。

- **起動ディスクの切り替え**　Macintoshを再起動しないで起動ディスクを切り替えることができますが、これをマルチファインダ使用時に行なうとエラーメッセージが現れます。マルチファインダ環境で起動ディスクを切り替える場合、マルチファインダの使用を解除し、Macintoshの再起動を行なってください。また、スペシャルメニューから“終了”を選んで、他の起動ディスクからあらためてMacintoshを起動することもできます。

付録A

起動ディスクについて

この章では、システムソフトウェアのインストールによる起動ディスクの更新および作成方法を順を追って解説します。参考のため、起動ディスクの機能的なあらましのほか、そのカスタマイズ方法や切り替え方法も解説されています。

この章について

この章では次の内容について解説します。

- 起動ディスクの機能
- 起動ディスクの作成と更新
- 起動ディスクの構成
- 起動ディスクの優先順位
- 起動ディスクの切り替え
- 起動ディスクのカスタマイズ
- 起動ディスク機能の取り消し
- 起動ディスク内容の整理

起動ディスクの機能

システムソフトウェアには、Macintoshの起動に必要なファイルが含まれています。このようなファイルはシステムフォルダにまとめて収められていますが、システムフォルダを持ったディスクを**起動ディスク**と呼びます。

電源投入後、Macintoshはディスクドライブを順に調べて起動ディスクをさがします。この時、起動に必要なファイルの入ったシステムフォルダが見つからないと、左に示すアイコンのいずれかが表示されます。

- ディスクが全く見つからなかった時には、クェスチョンマークアイコンが表示されます。
- ×マークのアイコンは、ディスクは挿入されていてもそれが起動ディスクではない場合に現れます。
- “笑顔のMacintosh”アイコンは、起動ディスクが検出されたことを意味します。このディスクにはMacintoshの動作に必要なシステムソフトウェアが収められており、そのアイコンは常にすスクリーン右上隅の表示されます。（図A-4）

起動ディスクのその他の機能

Macintoshの起動に必要な情報のほか、現在の起動ディスクのシステムフォルダは次のような情報も提供します。

- 使用されているシステムソフトウェアのバージョン
- “コントロールパネル”で設定可能な機能
- アプリケーションで使用可能なフォントの種別（欧文フォントは“System”ファイル内に格納、日本語フォントはフォントファイルとしてシステムフォルダ内に存在）
- アップルメニューから呼び出せるデスクアクセサリの種類（“System”ファイル内に格納）
- “スクラップブック”の内容

起動ディスクの作成と更新

付属のシステムディスクは起動ディスクとなっていますが、それを複製し、オリジナルは安全な場所に保管してください。

起動ディスクの作成は、イニシャライズ済みのディスクにシステムソフトウェアをインストールすることにより行ないます。また、既にお持ちの起動ディスクに最新のシステムソフトウェアを再インストールし、その内容を更新することもできます。いずれの場合も、作業には付属のインストーラディスクに収められたプログラム、Installerを用います。

作業をはじめる前に

- Macintoshに付属のディスクは作業用にバックアップを作成しておくことが必要です。オリジナルディスクはマスタディスクとして大切に保管しておきます。また、システムソフトウェアのインストール時もそのバックアップしたコピーを使用すれば安心です。コピーの内容を誤って消したり何かトラブルが起きた場合にも、マスタディスクがあれば何度でも再インストールできます。（バックアップの作成には、第10章の「フロッピーディスク全体をコピーする」のページが参考になります）
- 起動用にしたいディスクがイニシャライズされていなければ、イニシャライズを行なってください。

  Apple SCSIハードディスクのイニシャライズについては第11章の「SCSIハードディスクの使用準備」をご覧ください。

  フロッピーディスクのイニシャライズについては第10章の「フロッピーディスクの使用準備」をご覧ください。

起動ディスクを作成／更新される前に

既存の起動ディスクを更新される場合、以下の点に留意してください。新たに起動ディスクを作成される場合、次の「Installerの使用方法」へお進みください。

- **更新の対象となるディスクの内容は前もってバックアップしておいてください。**今までご使用になっていたアプリケーションと新しいシステムソフトウェアとの互換性を考慮する必要があります。システムソフトウェアを更新し、旧バージョンにしか互換性のないアプリケーションを使用すると保存情報の損失を引きおこすことがあります。

  バックアップは、目的のファイルを他のディスクへコピーすることにより行なえます。また、バックアップ用ユーティリティとして、HD Backupが付属しています。（使用方法は「Macintoshユーティリティガイド」に記載されています）

- **LaserWriterプリンタを複数のユーザで共用できるネットワーク環境では、全てのユーザが同一バージョンのLaserWriterおよびLaserPrepを使用していることが必要です。**異なるバージョンが混用されていると、プリントが正常に行なわれない場合があります。

従来のシステムソフトウェアがインストールされたハードディスクをお持ちの場合、システムフォルダごとバックアップを行い、そのシステムフォルダを“ゴミ箱”へドラッグした上で以下の操作を行ってください。

❖ 注意：システムを更新される場合、ユーザ辞書ファイルのコピーを忘れずに取っておいてください。

Installerの使用方法

Installer（インストーラ）は、システムの動作に必要なソフトウェアファイルを自動的に起動ディスクへコピーします。Installerは、フォント、デスクアクセサリ、サウンドリソースなどを起動ディスク上のSystemというシステムファイルへコピーします。

Installerをご使用になる前に、付属のディスクのバックアップを準備してください。

Installerは次の手順でご使用ください。

1. すでにMacintoshに電源が投入されている場合、スペシャルメニューから“終了”を選びます。

2. Macintoshのフロッピードライブに「インストーラディスク」をセットします。

   ディスクはラベル面を上にし、シャッタの付いた側から先に挿入してください。

3. Macintoshを再起動させます。

   しばらくすると、デスクトップが表示されます。

4. インストーラディスクのアイコンを選択して開きます。

アイコンはクリックすれば選択されます。アイコンを選択した状態でファイルメニューから“開く”を選べば、そのアイコンが開きます。(かわりに、アイコンをダブルクリックするだけでも同じ操作ができます)

インストーラディスクの内容がウインドウ表示されます。

5. インストーラのアイコンを選択して開きます。

アイコンはクリックすれば選択されます。アイコンを選択した状態でファイルメニューから“開く”を選べば、そのアイコンが開きます。(かわりに、アイコンをダブルクリックするだけでも同じ操作ができます)

まもなくInstallerの起動メッセージが表示されます。

6. 起動メッセージをお読みになった後、“ＯＫ”ボタンをクリックします。

簡易インストール用のダイアログボックスが現れます。

7. システムソフトウェアのインストール先となるディスクを選択します。

ディスクアイコンの右側には、上図のように、現在選択されている(つまり、これから行なうインストールの対象となる)ディスクの名称が表示されます。ここに目的のディスク名が表示されていない場合、“ドライブ”ボタンをクリックしてディスクを切り替えてください。ディスクの名称はボタンをクリックする度に変化し、システムで使用可能な全ディスクの名称が順に表示されます。目的のディスクを通り過ぎた場合、繰り返しクリックすれば、表示は最初のディスクに戻ります。

❖ 注意：インストールするソフトウェアをご自分でお選びになりたいかたのため、Installerにはカスタマイズ機能が組み込まれています。“カスタマイズ”ボタンをクリックすれば、表示は簡易インストールからカスタマイズに切り替わります。簡易インストールにない構成でインストールを行ないたい場合などにご利用ください。

カスタマイズ機能の詳細については、この後の「システムソフトウェアのカスタマイズ」をご覧ください。

8. “インストール” ボタンをクリックします。

Installerはシステムソフトウェアを自動的にインストールし始めます。システムソフトウェアは、ステップ8で指定された構成でインストールされます。

インストール中は、その進行状況を示すダイアログボックスが表示されます。その後、インストールの進行につれてコピーされているファイル（フォント、デスクアクセサリ、サウンドリソースなど）の名称が次々と表示されます。

Installerは複数のフロッピーディスクからファイルを読み込んでインストールを行ないます。Installerは不要になったディスクを自動的にイジェクトし、その都度メッセージを表示して必要なディスクを要求しますので、メッセージにしたがってディスクを入れ替えてください。インストールは数分で完了します。

インストールが完了すると、Installerはメッセージを表示し、さらに別なディスクにシステムソフトウェアをインストールするかどうかの確認を求めてきます。

❖ Installerのメッセージについて：フロッピーディスクを対象にインストールを行なうと、容量不足のためInstallerが途中で処理を中止する場合があります。その場合、Installerを終了し、第10章の「フロッピーディスクについて」を参考に再度インストールを行なってください。

さらに別のディスクにインストールを行ないたい場合、“続ける” をクリックし、ステップ7～9の作業を繰り返してください。

9. “終了” をクリックします

スクリーンはInstallerからデスクトップへ戻ります。

10. スペシャルメニューから “リスタート” を選びます。

Macintoshはフロッピーディスクを全てイジェクトし、システムソフトウェアのインストールされたハードディスクから起動します。フロッピーディスクから起動したい場合、そのディスクをイジェクト直後にフロッピードライブに押し込んでください。

システムソフトウェアのカスタマイズ

Installerのカスタマイズ機能を利用すれば、システムソフトウェアを独自の構成でインストールできます。簡易インストールにない構成でインストールしたい場合にご利用ください。

また、簡易インストール後にシステムソフトウェアを追加したい場合にもカスタマイズ機能が利用できます。プリントリソースのうち、ハードディスクにLaserWriter用のものだけをインストールしたい場合などに便利です。

次のソフトウェアが個別にインストールできます。

- 各種フォントファイル
- Macintosh用システムソフトウェア（全機種）
- アップル社製プリンタ用ソフトウェア（全機種）
- AppleShareワークステーションソフトウェア
- Macintosh用システムソフトウェア（機種別）
- 最小構成のMacintosh用システムソフトウェア（機種別）

  システムソフトウェアを最小構成でインストールした場合、ディスク容量は節約できますが、使用できるフォントやデスクアクセサリの種類は少なくなります。

カスタム機能を用いたシステムソフトウェアのインストール方法は次のとおりです。

1. すでにMacintoshに電源が投入されている場合、スペシャルメニューから“終了”を選びます。
2. Macintoshのフロッピードライブに「インストーラディスク」をセットします。

   ディスクはラベル面を上にし、シャッタの付いた側から先に挿入してください。
3. Macintoshを再起動させます。

   しばらくすると、デスクトップが表示されます。

4. インストーラディスクのアイコンを選択して開きます。

アイコンはクリックすれば選択されます。アイコンを選択した状態でファイルメニューから“開く”を選べば、そのアイコンが開きます。（かわりに、アイコンをダブルクリックするだけでも同じ操作ができます）

インストーラディスクの内容がウインドウ表示されます。

5. インストーラのアイコンを選択して開きます。

アイコンはクリックすれば選択されます。アイコンを選択した状態でファイルメニューから“開く”を選べば、そのアイコンが開きます。（かわりに、アイコンをダブルクリックするだけでも同じ操作ができます）

まもなくInstallerの起動メッセージが表示されます。

6. 起動メッセージをお読みになった後、“ＯＫ”ボタンをクリックします。

簡易インストール用のダイアログボックスが現れます。

7. “カスタマイズ”ボタンをクリックします。

8. 起動用のフロッピーディスクを作成される場合、もう一方のフロッピードライブにイニシャライズ済みのディスクをセットします。（フロッピードライブを２基装備したシステムのみ）

このステップはフロッピーディスクの起動ディスク化を想定したものです。ハードディスクにインストールを行なう場合、そのまま次のステップ８へお進みください。フロッピーディスクを起動用にできるのは最小構成のシステムソフトウェアを選んだときのみです。しかもフロッピーディスクは1.4MBの高密度ディスクが必要となります。したがってMacintosh Plusや旧Macintosh SE をお使いの方は起動用フロッピーディクを作成できません。

9. **システムソフトウェアのインストール先となるディスクを選択します。**

ディスクアイコンの右側には、現在選択されている（つまり、これから行なうインストールの対象となる）ディスクの名称が表示されます。ここに目的のディスク名が表示されていない場合、“ドライブ”ボタンをクリックしてディスクを切り替えてください。ディスクの名称はボタンをクリックする度に変化し、システムで使用可能な全ディスクの名称が順に表示されます。目的のディスクを通り過ぎた場合、繰り返しクリックすれば、表示は最初のディスクに戻ります。

10. **インストールしたいシステムソフトウェアおよびプリンタソフトウェアを選びます。複数の項目を選ぶには、*shift*キーを押し下げたままクリックを行なってください。**

ダイアログボックス内左上のウインドウには、インストール可能なシステムソフトウェアの構成が一覧表示されます。目的の構成が見あたらない場合、ウインドウの表示をスクロールしてください。

インストールするシステムソフトウェアは、ウインドウの表示内容をクリックして指定します。ウインドウの下には、クリックされた項目の解説が表示されます。複数の項目を選んだ場合、それらの内容が一覧表示されます。

ここで、“簡易インストール”ボタンをクリックすれば、簡易インストールのダイアログボックスへ戻れます。簡易インストールでは、Macintoshファミリの機種別に用意された構成でインストールが行なえます。詳しくは、この章の「簡易インストール」をご覧ください。

11. **“インストール”ボタンをクリックします。**

インストール中は、その進行状況を示すダイアログボックスが表示されます。その後、インストールの進行につれてコピーされているファイル（フォント、デスクアクセサリ、サウンドリソースなど）の名称が次々と表示されます。

Installerは複数のフロッピーディスクからファイルを読み込んでインストールを行ないます。Installerは不要になったディスクを自動的にイジェクトし、その都度メッセージを表示して必要なディスクを要求しますので、メッセージにしたがってディスクを入れ替えてください。インストールは数分で完了します。

インストールが完了すると、Installerはメッセージを表示し、さらに別なディスクにシステムソフトウェアをインストールするかどうかの確認を求めてきます。さらに別のディスクにインストールを行ないたい場合、“続ける”をクリックし、ステップ8～11の作業を繰り返してください。

❖ Installerのメッセージについて：フロッピーディスクを対象にインストールを行なうと、容量不足のためInstallerが途中で処理を中止する場合があります。その場合、Installerを終了し、第10章の「フロッピーディスクについて」を参考に再度インストールを行なってください。

12. “終了”をクリックします

スクリーンはInstallerからデスクトップへ戻ります。

13. スペシャルメニューから“リスタート”を選びます。

Macintoshはフロッピーディスクを全てイジェクトし、システムソフトウェアのインストールされたハードディスクから起動します。フロッピーディスクから起動したい場合、そのディスクをイジェクト直後にフロッピードライブに押し込んでください。

起動ディスクの内容

システムソフトウェアには、Macintoshの起動に必要なファイルが含まれています。このようなファイルはシステムフォルダにまとめて収められ、システムフォルダを持ったディスクは起動ディスクとして使用できます。システムフォルダのウインドウには多数のアイコンが表示されます（アイコンの数は、同じMacintoshでも機種や装置の接続状態により異なります）。ただ単にMacintoshを起動するだけなら、システムフォルダには、“System”、“Finder”、“漢字Talk”といったファイルが収められます。通常、システムフォルダには上記以外のファイルも多数収められていますが、これらがさまざまな機能をMacintoshに付加します。たとえば、ImageWriterやLaserWriterを使用するためには、それに合ったプリントリソースファイルをシステムフォルダに収めておく必要があります。また、スピーカの音量やマウスの反応時間などの設定機能も、システムフォルダ内に収められた“コントロールパネル”用の各種リソースファイルにより実現されています。

起動ディスクのアイコンをダブルクリックすれば、ディスクの内容がウインドウ表示されます。ハードディスクを起動ディスク化した場合のように、容量に余裕があればシステムフォルダ以外にもファイルやフォルダを収めておけます。システムフォルダのアイコン上に表示されている小さなMacintoshアイコンは、その中に“Syetem”ファイルが収められていることを示しています。

システムフォルダのアイコンをダブルクリックすれば、フォルダの内容がウインドウ表示されます。

起動ディスクのカスタマイズ

欧文フォントおよびデスクアクセサリはシステムフォルダ内の“System”というファイルに収められます。“System”ファイルの内容は、起動ディスクの使用目的に合った構成にしておきます。この場合、Font/DA Moverという付属のユーティリティを用います。Font/DA Moverにより、各種欧文フォントやデスクアクセサリのうち必要なものだけを起動ディスクにコピーし、不要なものを削除して起動ディスクをカスタマイズすることが可能です（“System”ファイルは、通常の方法では開くことができません。したがって、その内容をドラッグして移動させることもできません）。日本語のフォントは種類によりインストール方法が異なります。詳しくは、付属の「Macintosh日本語入力操作ガイド」をご覧ください。

アプリケーションには、必要なフォントやデスクアクセサリがうまく適合するように前もって設定されたSystem ファイルの入ったフロッピーディスクで供給されるものがあります。これらのフォントやデスクアクセサリも、Font/DA Moverを用いてハードディスク（またはその他の起動ディスク）へコピーできます。Font/DA Moverの使用方法については、付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

システムフォルダ内にあるその他のファイルは、ドラッグにより他の起動ディスクのシステムフォルダへコピーし、そのディスクをカスタマイズできます。“スクラップブック”の例では、そのファイル（Scrapbook File）を数種類用意しておき、目的に合わせてそれらを使い分けることなどが可能です。また、日本語入力フロントエンドプロセッサ（2.0変換など）も複数入れることができ、Macintoshを使用される方が自由にコントロールパネルで選択できます。

起動ディスクの検出

電源投入後、Macintoshはディスクドライブを調べて起動ディスクをさがします。通常はハードディスクから起動を行なっていても、フロッピードライブに起動ディスクを挿入しておけば、そこからMacintoshを起動できます。Macintoshは起動ディスクが検出された時点で起動を開始しますが、起動ディスクが見つからない場合を想定すると次の順序で使用可能なドライブを調べます。

- ドライブ1（内部フロッピードライブ）
- ドライブ2（他に内部または外部フロッピードライブがある場合）
- “コントロールパネル”で設定の起動デバイス（Macintosh SEまたはMacintosh II系各機種のみ）
- 内部ハードディスクまたはSCSIハードディスク（SCSI ID番号0）
- SCSIポートに接続のデバイス（SCSI ID番号6から0の順）

複数の外部ハードディスクがあり、それぞれにシステムフォルダが入っている場合、“コントロールパネル”で起動に使用するものを設定しておく必要があります。詳しくは第7章「デスクアクセサリ」をご覧ください。

外部ハードディスクをご使用の場合、そのハードディスクに付属のマニュアルを参照してSCSI ID番号を確認します。

システムフォルダの混用

1つの起動ディスクにつき、システムフォルダとして機能できるフォルダは1つだけです。ハードディスクには誤って複数のシステムフォルダをインストールしてしまうことがあります。購入したアプリケーションの入ったフロッピーディスクが起動ディスクであった場合、ディスクごとハードディスクにコピーするとそのシステムフォルダも同時にコピーされてしまいます。

ハードディスクに複数のシステムフォルダを入れておいてもMacintoshはどれを起動に使用すべきか判断できません。そのため、意図したものでないシステムフォルダをMacintoshが使用する場合があります。インストールしたはずのフォントやデスクアクセサリが使用できない場合、システムフォルダの混在が考えられます（日本語フォントはシステムフォルダ内にファイルとして、また欧文フォントやデスクアクセサリは“System”ファイル内にインストールされるため、これらが入ったシステムフォルダで起動することが必要です）。また、“コントロールパネル”が見慣れない表示となったり、いつの間にか設定が変わっている場合にも同様の原因が考えられます。問題はこれだけにとどまりません。複数のシステムファイルを起動ディスクに入れておく理由は全くありません。

起動ディスクに複数のシステムフォルダがあるかどうかを調べるには、付属のユーティリティ“ファイル検索”が利用できます。詳しくは「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

起動ディスクの切り替え

現在の起動ディスクのアイコンは、デスクトップ右上隅に表示されます。作業中に他の起動ディスクに入っているフォントやデスクアクセサリを使いたい場合などには、起動ディスクを切り替えることができます。また、必要に応じてMacintoshが自動的に起動ディスクを切り替えることもあります。なお、ここでいう起動ディスクとは、原則的にハードディスクを指します。

マルチファインダが使用されていないとき、次のいずれかの場合に起動ディスクが切り替わります。

- 別の起動ディスクを使用してMacintoshをリスタートした場合。
- “コントロールパネル”で起動デバイスの設定を変更した後Macintoshをリスタートした場合(Macintosh SEまたはMacintosh II系各機種のみ)
- *option*キーを押し下げたまま、別の起動ディスクからアプリケーションを開いた場合。(切り替え先に、現在使用されているFinderと同一バージョンか、それよりも新しいFinderがあることが必要です。切り替え先のFinderのバージョンが古い場合、起動ディスクを切り替えることはできません。また、英語版システムソフトウェアと漢字Talkとシステムウェア間での切り替えもしないでください。システムエラーの原因となります)
- *option*およびコマンドキーの両方を押し下げたまま、切り替え先のディスクのFinderのアイコンをダブルクリックした場合。(一定時間キーを押し下げたままにすると、ダイアログボックスが現れ“デスクトップを再構成する”のメッセージが表示されます。その場合“ＯＫ”ボタンをクリックします)

他の起動ディスク(最新の“System”および“Finder”の両ファイルを格納)からアプリケーションを開いた場合、Macintoshが自動的にそのディスクを起動ディスクとする場合があります。この処理は内部的に行なわれるため、切り替えのタイミングも含め、使う側でコントロールできません。

起動ディスク内容の整理

1枚の起動用フロッピーディスクには、付属のシステムソフトウェアの全てを収めておくことはできません。ハードディスクの場合も、通常は使用しないシステムファイルなどを取り除いておけば活用できるディスクスペースを増やすことができます。

Macintoshに付属の各ディスクを保存しておけば、その内容は何度でも他のディスクにコピーできます。起動ディスクの内容を整理したりカスタマイズする際は次の点を参考にしてください。

- Apple HD SC Setupが起動ディスクにコピーされている場合、それを“ゴミ箱”へドラッグし破棄します。
- 起動ディスクに、不要なプリントリソースがインストールされていないかどうか確認します。たとえばMacintoshにImageWriterプリンタを直結して使用する場合、AppleTalk ImageWriter、LaserWriter、LaserPrepなどのリソースは必要ありません。不要なリソースのアイコンは、“ゴミ箱”へドラッグして破棄します。
- JIS第2水準のフォントを使用しない場合など、不要なフォントがあればそのフォントファイルを“ゴミ箱”へドラッグし破棄します。

付属のディスクをマスタとして保管してあれば、システムソフトウェアをインストールしなおすことができます。作成した起動ディスクから不要部分の削除を行なっても、マスタからいつでもコピーできます。

❖ **ディスクの空きスペースが少なくなったら**：保存する情報が増えた場合、それを別々のフロッピーディスクの分けておくより、ハードディスクにまとめて保存しておく方が効率的です。使用する情報は全てハードディスクに保存し、フロッピーディスクはバックアップに使用するとよいでしょう。

付録B

トラブルシューティング

トラブルの発生にはさまざまな原因があります。電源プラグが抜けていたためにMacintoshが作動しないといった単純なトラブルがある一方、ハードディスクに問題がある場合には本格的な修理が必要となることがあります。この付録には比較的単純なトラブルの対処方法が記載されています。何かトラブルが発生した場合、まずこの付録を参照してください。記載の指示にしたがっても問題が解決できない場合には販売店にご相談ください。

▲警告　コンピュータでの作業中に重大なトラブルが起きたら、直ちに電源コードを取り外してください。これが緊急時に電源を切る最も簡単で確実な方法です。▲

この付録について

ここではMacintoshの使用中に発生するトラブルを想定し、その原因および対処方法をまとめておきました。以下のいずれかに該当するトラブルが発生した場合、まずここに記載の対処方法をお試しください。

この付録でとりあげられているトラブルは、症状別に次の2種類に分けられています。

- 一般的なトラブル（スクリーンが暗い、デスクトップが現れない、ディスクがイジェクトできない、マウスやキーボードが正しく機能しないなど）
- マルチファインダ使用時のトラブル（アプリケーションを開けない、バックグラウンドプリントができないなど）

一般的なトラブル

ここで取り上げられているトラブルの多くは結線のゆるみや外れ、通気不良、ディスクの損傷などが原因で発生するものです。

- **スクリーンが暗い。**まず、電源がMacintosh側へ供給されているかどうかを確認します。Macintoshの電源が投入されているかどうか、また、電源コードが確実に接続されているかどうかを調べてください。

  - ☐ コンセント側にもスイッチがある場合、そのスイッチがオンになっていることを確認します。
  - ☐ 調光器の付いたコンセントは使用しないでください。
  - ☐ スイッチ付きの電源延長コードなどを使用している場合、そのスイッチがオンになっていることを確認します。
  - ☐ Macintosh本体から独立したモニタの場合、モニタが電源に接続されており、パワーライトが点灯していることを確認します。また、モニタのオン／オフスイッチがオンの位置にあることも確認します。（詳しくはモニタに付属のマニュアルをご覧ください）

  輝度およびコントラストコントロールの設定を確認します。設定が低すぎると、電源が投入されていてもスクリーンは暗いままとなります。（設定方法はMacintoshに付属の「オーナーズガイド」でも解説されています。Macintosh本体から独立したモニタをご使用の場合、それに付属のマニュアルもご覧ください）



■ 図B-1　クェスチョンマーク アイコン



■ 図B-2　×印アイコン



■ 図B-3　“泣き顔のMacintosh”



■ 図B-4　“笑顔のMacintosh” アイコン

■ **デスクトップが現れない。**Macintoshを起動した（またはディスクを挿入した）時に何か問題があれば、アイコンによりその状態が示されます。アイコンの内容は、状態により次のように変化します。

- □ クェスチョンマーク（?）ディスクアイコンは、Macintoshに電源が投入されても起動ディスクが見つからなかったことを示します。
- □ ×印のディスクアイコンは、Macintoshに電源が投入されても起動ディスク以外のディスクしか見つからなかったことを示します。
- □ “泣き顔のMacintosh” アイコンは、システムソフトウェアに問題があるため処理を継続できないことを示します。場合によっては、ハードウェア側に問題のあることもあります。販売店にご相談ください。（フロッピーディスクは手動でイジェクトし、システムの電源を切っておいてください）
- □ “笑顔のMacintosh” アイコンは、この時点まで全てが順調であることを示します。
- □ “笑顔のMacintosh” アイコンは、この時点まで全てが順調であることを示します。

■ マウスを動かしてもポインタが移動しない。マウスは、平らな表面上を滑らせて使用します。

マウスが確実に接続されているかどうかを確認します（いったんマウスケーブルを取り外し、もう一度接続しなおしてください）。Macintosh SEまたはMacintosh II系の各機種では、マウスをキーボードに接続できます。マウスをキーボードに接続している場合、キーボードがMacintosh本体に正しく接続されているかどうかも確認します。いったんマウスとキーボードのケーブルを全て取り外し、接続しなおせば万全です。

マウスとMacintosh本体間の接続が完全な場合、マウス自体に問題があるかもしれません。その場合にはマウスを清掃してみてください。（清掃方法は「オーナーズガイド」で説明されています）

マウスではなくソフトウェア側に原因がある場合もあります。別な起動ディスクからMacintoshを起動するとマウスが正常に動作する場合、最初に使用されていた起動ディスクに問題があることになります。

■ **キー入力してもスクリーンに何も表示されない。**キーボードがMacintosh本体に確実に接続されていることを確認します。

処理の進行上、入力できない時に入力を行なっても表示はなされません（たとえば、グラフィックス用のアプリケーションの使用中、入力に専用のツールが必要な時にはキーボードは使用できません）。デスクアクセサリの“ソフトキーボード”を呼び出して、各キーをチェックしてみます。ここで問題がなければキーボードに異常はありません。異常が認められた場合には販売店にご相談ください。

■ **ダイアログボックスに爆弾アイコンが表示された。**ソフトウェア上の問題が発生したためMacintoshを再起動する以外に対処できなくなったことを意味します。爆弾アイコンが表示されたら、“リスタート”ボタンをクリックします。（同じ起動ディスクで再スタートさせます。）また、再起動前に電源をいったん切ることが必要な場合があります。それでも同じ問題が起きたら、その起動ディスクは使用しないようにしてください。

爆弾アイコンが表示された場合、それまでにディスクに保存していない作業内容は全て失われます。（約15おきに保存するようにしておけば、このような場合の損失を最小限にとどめることができます）

爆弾アイコンがあるダイアログボックスには、“ID=33”のようなエラーコードが表示されることがあります。エラーコードによる対処にはMacintoshの技術的な知識が必要となります。（エラーコードが表示された場合、それを記録しておいて修理や問い合わせの際に報告してください）

■ **フォルダ内のアプリケーションが開かない。**システムフォルダと同じ階層にないと動作しないアプリケーションもあります。アプリケーションをドラッグしてフォルダから取り出して、起動ディスクのディレクトリウインドウ内へ移動させます（または、デスクトップのグレイ部分へ移動させます）。それでもアプリケーションを開けない場合、そのアプリケーションのバックアップで試してみます。（これで開くことができた場合、バックアップをコピーして使用します）

■ **ディスクに何も保存できない。**これには次のような原因が考えられます。

□ イニシャライズされていないディスクには保存ができません。イニシャライズされていないフロッピーディスクを使用すると、Macintoshはイニシャライズの確認を求めるダイアログボックスを表示します。（詳しくは、第10章の「フロッピーディスクのイニシャライズ」のページをご覧ください）

□ ディスクがロックされていても保存ができません。フロッピーディスクの裏側にはロック用の小さなタブが付いていますので、イジェクトしてこれがロック位置にあるかどうかを確認します。ロックされている場合、これを解除してもう一度フロッピードライブに挿入します。（ディスクのロックについては、第10章の「フロッピーディスクの内容を保護する」のページをご覧ください）

□ ディスクに空き容量がなくなると保存ができません。ディスクの空き容量は、ファインダのデスクトップ上で次の方法のいずれかで確認できます。

1. 空き容量を確認したいディスクを開きます。この時、アイコン表示のディレクトリであることが必要です。空き容量は、ウインドウのタイトルバーのすぐ下の部分の右端に、“404K空き”のように表示されます。

2. 空き容量を確認したいディスクを選択し、ファイルメニューから“インフォメーション”を選びます。ディスク容量から使用済み容量を差し引けば空き容量が分かります。

ディスクから不要な書類やアプリケーションを取り除けば、空き容量は増加します。ディスクの内容を全て取り除くには、スペシャルメニューの“ディスクの消去”コマンドが使用できます。空き容量不足で保存ができなくなった場合、他のディスクに保存することもできます。

■ フロッピーディスクをイジェクトできない。Macintoshがイジェクトに必要な情報を入手できないことが原因です。まずスペシャルメニューから“終了”を選びます。次に、マウスボタンを押したままで電源を入れます。それでもイジェクトできない場合、ディスクの差し込み口の右側にある小さな穴に、引き伸ばしたゼムクリップなどを挿入し、強制的にイジェクトします。

■ ファインダのデスクトップにハードディスクのアイコンが表示されない。次のいずれかの原因が考えられます。

□ ハードディスクがまだイニシャライズされていないのかもしれません。アップル社製のSCSIハードディスクの場合、システムディスク1に収められているApple HD SC Setupでイニシャライズを行ないます。詳しくは、第10章「ハードディスクについて」をご覧ください。

□ 外部ハードディスクの場合、Macintoshの電源を入れる前にスイッチを入れ、ウォームアップしておく必要があります。（そのハードディスクの推奨ウォームアップ時間を確認してください）また、爆弾アイコンが表示された場合、Macintoshを再起動した時点でハードディスクの状態が処理の進行に追従していなかったことも考えられます。電源をいったん切って再投入してみてください。

□ 複数のSCSIハードディスクがMacintoshに接続されている場合、SCSI ID（デバイス優先順位）番号が重複していることも考えられます。システムディスク１に収められているApple HD SC Setupを開きます。ダイアログボックスが表示されたら、“ドライブ”ボタンをクリックして各ハードディスクのSCSI ID番号を確認します。SCSI ID番号に重複があった場合、再設定が必要です。設定方法については、各ハードディスクに付属のマニュアルをご覧ください。

□ ハードディスク用のリソースがこわれている場合があります。アップル社製のSCSIハードディスクの場合、付属の「システムディスク」に収められているApple HD SC Setupを用いて修復を行なえます。Apple HD SC Setupを開き、ダイアログボックス内の“更新”ボタンをクリックします。処理が完了したら“終了”をクリックします。

リソースに問題があった場合、修復後はハードディスクアイコンが表示されるはずです。ハードディスクから再起動するためスペシャルメニューから“リスタート”を選びます。

他社のSCSIハードディスクの場合、そのマニュアルに記載のリソース不良時の対処方法にしたがいます。

□ トラブルの起きたハードディスクが起動ディスクである場合、システムファイル“System”の問題が考えられます。付属の「インストーラディスク」を用いてこのファイルを再インストールします。詳しくは付録A「起動ディスクについて」をご覧ください。

トラブルが解決できない場合、Font/DA Moverを用いてフォントおよびデスクアクセサリを保護するため別の“System”ファイルへコピーします。次に、その“System”ファイルをハードディスク内のシステムフォルダアイコンへドラッグします。

□ ハードディスクの稼働中に停電があると、その後障害が発生することがあります。ハードディスクの修復には付属のDisk First Aidが利用できます。詳しくは付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください。

それでもハードディスクのアイコンが表示されない場合、販売店にご相談ください。

■ **Apple HD SC Setupでドライブの選択ができない。**これはダイアログボックスの“ドライブ”ボタンをクリックした場合のエラーですが、次のいずれかの原因が考えられます。

- ☐ Apple HD SC Setupは、SCSIディスクドライブ以外は検出しません。イニシャライズ方法については、そのドライブに付属のマニュアルを参照してください。
- ☐ アップル社製の外部SCSIディスクドライブの場合、Macintosh本体との接続、およびそのドライブのスイッチが投入されていることを確認します。SCSIターミネータおよびケーブルが正しく接続されていることが必要です。SCSIデバイス接続に関する注意事項は、Macintoshに付属の「オーナーズガイド」に記載されています。
- ☐ アップル社製以外のSCSIディスクドライブが接続されている場合に上記エラーが発生することがあります。接続を全てチェックし、そのドライブのスイッチが入っていることを確認します。また、そのドライブに付属のマニュアルも参照してください。

■ **Macintosh IIに内蔵のファンが普段より騒がしい。**Macintosh内部の温度が高くなると、それに応じてファンの動作も激しくなります。本体回りに十分な換気スペースが確保されているかどうか確認します。また、室温を調べ、Macintoshが置かれている部屋を涼しくしてください。室温を下げることができない場合、Macintoshの電源を切ってください。（緊急の場合はそのまま電源プラグを取り外します）

また、電源ユニットのすぐ隣の拡張スロットを空けておくことも対策となります。ファンは電源ユニット内部にあり、温度により制御されます。拡張スロット内のカードはわずかに発熱するため、拡張スロットを全て使用しない場合には電源ユニット側のスロットを空けておきます。

■ **警告なしでMacintoshの電源が切れてしまう。**まず、停電が考えられます（この場合、他の電気製品も機能しなくなります）。停電の際には、Macintosh PlusまたはMacintosh SEの場合、本体裏面の電源スイッチをオフ位置に戻します。Macintosh IIの場合、停電により電源オフの状態になります。

Macintosh II系機種の場合、本体の通気口付近に通風の妨げになるものがあると内部の温度上昇によりオーバーヒートすることがあります。室温が異常に高い場合にもオーバーヒートが起こります。これにより内蔵の保護回路が働くと電源が切れます。この時の室温を調べておきます。また、本体周囲に十分な通風スペースがあるかどうか確認し、通風の妨げとなるものは全て取り除いてください。Macintosh内部の温度が下がるまで（約30分）放置し、その後再起動します。

■ **ソフトウェア上のトラブルが発生した。**ソフトウェア関連のトラブルの多くは、使用する起動ディスク全てに最新のシステムソフトウェアをインストールしておくことで未然に防げます（第３章／付録Ａの「Installerの使用方法」参照）。複数の起動ディスクで同じトラブルが発生する場合、販売店にご相談ください。
アプリケーションによっては、専用にカスタマイズされたシステムファイルを必要とするものがあります。この種のアプリケーションを使用する場合、その起動ディスク（アプリケーションの入ったフロッピーディスク）でMacintoshを再起動します。

また、専用のデータファイル（ヘルプファイルなど）を１つのフォルダにまとめておくことが必要なアプリケーションもあります。400 Kフロッピーディスクにこのようなフォルダが収められている場合、フォルダをドラッグして800 Kフロッピーディスク（両面イニシャライズ）やハードディスクへコピーしてもアプリケーションが正しく動作しないことがあります。その際には、フォルダの内容をアプリケーションの入ったディレクトリウインドウ内へドラッグしてみてください。

■ **ここに記載されていないトラブルが発生した。**以上のどれにも当てはまらないトラブルが発生した場合、次のいずれかの原因が考えられます。

□ アプリケーションがディスクからメモリに読み込まれた後に問題が発生した。　　トラブルは一時的なものとも考えられます。もう１度そのアプリケーションを始動してみます。

□ ディスク上の情報の保存状態に問題がある。　　付属のDisk First Aidで修復を試みます。
（付属の「Macintoshユーティリティガイド」をご覧ください）

□ 重度の障害と思われる。　　販売店にご相談ください。

この付録に記載の処置で対処できない場合、いったんMacintoshの電源をオフにし、しばらくして再度電源をオンにします。再度Macintoshが起動した後にトラブルが再発しない場合、そのトラブルは一時的なものであると考えられます。同じトラブルが発生する場合、起動ディスク（ハードディスクを含む）の問題が考えられます。他の起動ディスクを用いても同じトラブルが起きるかどうかを確認します。（安全のため重要な情報の入ったディスクは使用しないでください）

マルチファインダ使用時のトラブル

マルチファインダ使用時の一般的なトラブルの原因を次にまとめておきます。

- インストールに不備がある。（システムソフトウェアおよびBackground LaserWriterが正しくインストールされているかどうかを確認します）
- 使用したい機能が正しく設定されていない。
- 作業に必要なメモリ（RAM）が不足している。
- バックグラウンドプリントに必要なディスク容量が不足している。

以上の問題を解決しておけば未然に防ぐことのできるトラブルが少なくありません。それでもトラブルが解消できない場合、いつでもマルチファインダの使用を中止し、作業は通常のファインダ（シングルタスク環境）で継続できます。また、ハードディスクやメモリを増設する際には販売店にご相談ください。

- **アプリケーションを開けない。**メモリに空き領域があってもそれが断片化していると、今まで使用できたアプリケーションを開けなくなる場合があります。断片化を解消するには、いったん使用中のアプリケーションを全て終了させ、その後あらためて再始動します。（メモリおよび断片化については、第12章の「メモリ管理について」をご覧ください）

  アプリケーションが必要とするメモリサイズが使用可能な最大メモリブロックよりもやや小さい場合、そのアプリケーションの実行を“ＯＫ”か“キャンセル”で選択できることがあります。このような状態でアプリケーションを実行した場合、安全のため作業内容は頻繁に保存してください。また、アプリケーションに動作に異常が認められた場合には作業を終了してください。

- **アプリケーションのアイコンがメニューバーに表示されない。**一部のアプリケーションは多数のメニュータイトルを持っているものがあり、メニューバーにそのアイコンを表示するスペースが不足している場合があります。この場合、アイコン表示の有無はアプリケーションの動作には何の影響もありません。

- **デスクアクセサリが使用できない。**マルチファインダ環境に対応していないデスクアクセサリがあります。スペルチェック用のデスクアクセサリなどは、対象となる書類がマルチファインダ上で見つからないと使用できません。このようなデスクアクセサリを使用したい場合には、マルチファインダを解除します。（第12章の「マルチファインダの使用を解除する」をご覧ください）デスクアクセサリの使用終了後、マルチファインダを再始動します。

また、メモリ不足によりデスクアクセサリが開けない場合もあります。この場合にはMacintoshは警告音を鳴らします。複数のアプリケーションが開かれている場合、そのうちどれか1つを閉じる必要があります。

■ **ディスクまたはフォルダのアイコンが開かない。**ハードディスクには多数のアプリケーション、フォルダ、および書類を保存しておけます。保存量が多いと、ファインダが管理する情報（名称、作成日、保存場所など）も増えます。ファインダがメモリ不足のエラーを表示したら、“インフォメーション”ウインドウでファインダのアプリケーションメモリサイズを増やす必要があるでしょう。

ファインダのメモリサイズは通常のアプリケーションと同じ方法で変更できます。（通常のアプリケーションと異なり、ファインダは開かれたままの状態でメモリサイズの変更ができます）システムフォルダを開き、ファインダのアイコンを選択し、ファイルメニューから“インフォメーション”を選びます。ウインドウ内の“アプリケーションメモリサイズ”のボックスを選択し、新しいメモリサイズを入力します。ここで行なった設定を有効にするには、Macintoshを再起動する必要があります。

■ **バックグラウンドプリントができない。**これには次の条件が満たされているかどうかを確認します。

□ マルチファインダおよびバックグラウンドプリントの使用が指定されている必要があります。アップルメニューから“セレクタ”を選び、“入”ボタンが選択されていることを確認します。（詳しくは第12章の「バックグラウンドプリント機能の確認」をご覧ください）

バックグラウンドプリント機能はマルチファインダ使用時にのみ利用できます。マルチファインダが使用されていないと、“入”および“切”ボタンはグレイで表示されます。マルチファインダの使用はスタートアップダイアログボックスで指定します。（第12章の「マルチファインダの使用を設定する」をご覧ください）

□ 必要なプリントリソースが全てインストールされている必要があります。“セレクタ”を開いた時にバックグラウンドプリント関係の表示がない場合、プリントリソースのインストールが必要です。

□ AppleTalkが“使用”に設定されている必要があります。“セレクタ”を開き、“不使用”が設定されている場合、“使用”を選択します。

□ 起動ディスクにスプール用の空きスペースが必要です。これは、バックグラウンドプリントする書類は一時的にディスクに書き込まるためです。スプールする書類が大きいと、フロッピーディスクが起動ディスクとなってい場合にPrintMonitorが必要量の空きスペースを見つけられず、このことが原因でエラーとなります。

このエラーが発生すると、メッセージにより書類が大きすぎることが分かります（この時、スプールに使用されているディスクも示されます）。この場合、バックグラウンドプリント機能を解除すれば、通常の方法で書類のプリントを行なえます（解除は“セレクタ”で行ないます）。プリントを開始するには、再度“プリント”コマンドを選びます。書類はフォアグラウンドでプリントされますので、その間はMacintoshで他の作業を行なうことはできません。

□ LaserPrinterが使用できる状態にあることが必要です。バックグラウンドプリント機能は、LaserWriter系プリンタのみを対象としています。

□ デスクアクセサリの“時計”に設定された時間を進めたり遅らせたりすると、それ以前にプリント開始時刻が設定された書類のプリント予定に影響が出ます。これは、PrintMonitorが“時計”と同じようにMacintosh内部の時計機能を使用しているためです。また、“コントロールパネル”で時間の設定を変えた場合にも同じ問題が起きます。

書類が予定通りにプリントされなかった場合、PrintMonitorを開き、ウインドウ内の“Waiting”と表示されたリスト内からその書類を選択します。次に、“Set Print Time”ボタンをクリックし、プリント開始時刻を再設定します。

□ ご使用のアプリケーションがバックグラウンドプリント機能に対応したものであることも条件です。そうでないアプリケーションを使用すると、書類がプリントできないばかりでなく、システムがキーボードやマウスの操作に反応しなくなる場合もあります。また、上記の対処方法は無効ですので、このようなアプリケーションを使用するにはバックグラウンドプリント機能を解除し、通常の方法でプリントを行なってください。

今まで使用できたアプリケーションでも、その後のバージョンアップなどによりバックグラウンドプリントができなくなる場合があります。この場合、バックグラウンドプリント機能を解除し、フォアグラウンドでプリントを行なってください。また、そのアプリケーションの入手先に問い合わせてみても解決策が得られる場合があります。

■ **マルチファインダ使用時、以上に該当しないトラブルが発生した。**一部、マルチファインダに対応できないアプリケーションも存在します。アプリケーションの動作に何らかの異常が認められた場合、そのアプリケーションのマルチファインダ環境での使用は見合わせてください（参考までに、第12章の「マルチファインダの使用を解除する」および「一時的なマルチファインダの解除」もご覧ください）。また、そのアプリケーションの入手先に、マルチファインダ対応版が入手可能かどうか問い合わせてみてください。

索引

数字・アルファベット順

●マーク　44
◆マーク　44, 245
×マークアイコン　256, 272
:（コロン）　98, 119, 194, 196, 222
.（ピリオド）　98, 119, 194, 196, 222
1.4MBKディスク　190
12時間制　153
"12 hr."　153
"1440K" ボタン　200
2.0変換　266
24時間制　153
"24 hr."　153
3.5インチフロッピーディスク　199
3.5インチMS-DOSディスク（1.44MB）　202
3.5インチMS-DOSディスク（720K）　202
400K（フロッピー）ディスク　190, 201
"720K" ボタン　202
800K（フロッピー）ディスク　28, 190, 192, 193, 199

A

A/UX　224
"Alert Sound Setting"　165
Apple FDHD　→ "SuperDrive" 参照。
Apple File Exchange（AFE）　199
Apple HD SC Setup　30, 220-225, 276
Apple Tape Backup 40SC　223, 226
AppleTalk　143-149, 279
AppleTalkオプションカード　146

B

Background LaserWriter　278
backspaceキー　70, 91, 175

C

caps lockキー　168, 174, 176, 178
clearキー　175, 177, 179
CloseView　160
"Color"　155, 160
controlキー　176, 178

D

deleteキー　70, 91, 177, 179
"Desktop Pattern"　150
Disk First Aid　192, 224, 226, 277
Double Sided　190　→ "両面" も参照。

E

Easy Access　184
enterキー　175, 177, 179
escキー　176, 178

F

"Fast"　153, 158, 164
"Finderについて"　130, 229, 247
"Finderのみ"　252
"Finder" ボタン　232
Finder　94, 95, 96, 130, 186, 207, 247, 268
Font/DA Mover　140, 253, 266

G

"General"　150, 152, 153, 155
"Grays"　160

H

HD Backup　190, 223, 226, 253, 258

I

I字型（Iビーム）ポインタ　44, 88
ImageWriter　144
ImageWriter II　121, 125, 146
ImageWriter LQ　146
Installer　34-39, 257-258

K

"Keyboard"　158

L

LaserPrep　127, 258
LaserWriter　121-123, 127, 146, 228, 240, 243, 245, 258　→ "PrintMonitor"、"バックグラウンドプリント"、"用語設定" も参照。
"Long"　158

M

MacDraw　123
Macintoshユーザインタフェース　1
"Macintosh Finderについて" ウインドウ　131, 229, 247
Macintosh II　2, 29, 130, 136, 137, 138, 151, 155, 157, 166, 172, 173, 210, 219, 226, 266, 268, 272, 276
Macintosh Plusキーボード　173-174
Macintosh Plus　2, 29, 172, 219, 276
Macintosh SE　2, 29, 166, 172, 173, 210, 219, 266, 268, 272, 276
MacPaint　123, 234
"Monitors"　159, 161

"Mouse" 164, 165
MS-DOS 199-202
"MultiFinderのみ" 252
"MultiFinder" ボタン 231

O

"OK" ボタン 194, 196
optionキー 137, 168, 174, 176, 178, 180, 181, 186, 268

P

PostScriptプリンタ 127
PrintMonitor 127, 241, 242, 243, 244, 280
→ "バックグラウンドプリント" も参照。
ウインドウ 242, 245
機能設定 244

R

RAM 130, 132, 154, 229, 278
RAMキャッシュ 154, 253
"RAM Cache" 253
random-access memory 154
Read Me書類 91, 92
returnキー 175, 177, 179

S

"Scrapbook File" 168, 170, 266
SCSI (Small Computer System Interface) 27, 217, 221, 224, 266
SCSI ID番号 31, 221, 225, 266, 275
SCSIターミネータ 31, 221, 276
SCSIディスクドライブ 225
SCSIデバイス 31
SCSIハードディスク 217-219, 224, 266, 274
SCSIハードディスクの使用準備 218
SCSIポート 266
shiftキー 71, 124, 128, 161, 168, 174, 176, 178, 180, 184, 207
"Short" 158
Single Sided 190 → "片面" も参照。
"Slow" 153, 158, 164
"Sound" 165
Spool Folder 239
"Startup Device" 166
SuperDrive 190, 197-202
System 96, 130, 140, 207, 247, 257, 266, 267, 268, 275

T

tabキー 142, 174, 176, 178, 244
TeachText 42, 43, 91, 92, 110, 233, 234

U

UNIX 224

V

"Very Slow" 164

五十音順

あ－ア

アイコン 71, 96, 98-99, 107, 110, 127, 128, 134, 136, 151, 186, 205
"笑顔のMacintosh" 256, 272
"泣き顔のMacintosh" 272
一括選択 74
コピー 99
情報を調べる 102
整理 137
操作 96
名称変更 97, 98
表示色 138
"アイコン" 135
"空きフォルダ" 54, 108
アクサングラーブ (`) 181
アクサンシルコンフレクス (^) 181
アクサンテギュ (´) 181
アクセント記号 166, 181
新しい書類の作成 111
新しいフォルダの作成 54
アップル拡張キーボード 172-173, 178
アップルキーボード 167, 172, 173, 176, 180
アップルマーク 142
アップルメニュー 149, 150, 155, 158, 167, 169, 229, 234, 235, 240-242, 247, 253, 257 → "デスクアクセサリ" も参照。
"～について" 234
"Finderについて" 130, 229, 247
アプリケーション 110-115, 117, 125, 127, 128, 191, 215, 228, 229, 232, 235, 236, 246, 248, 250, 252
～の起動 42
～の終了 232
～メモリサイズ 133, 250-251, 278, 279
～を開けない 278
アイコン 47
アプリケーションアイコン 47
アプリケーションの起動 42
アプリケーションの終了 232
アプリケーションメモリサイズ 133, 250-251, 278, 279
アラーム 141-142

い－イ

"イジェクト" 134, 203, 204
"イジェクト" ボタン 116, 118, 192
イジェクト 127, 137, 190, 203, 205, 207, 208, 274
"イジェクト" 134, 203, 204
"イジェクト" ボタン 116, 118, 192
強制～ 274
ドライブ1から～ 207
ドライブ2から～ 207
フロッピーディスクを～できない 274
一覧表メニュー 104, 107, 126, 135, 138
"アイコン" 135
"サイズ" 136
"小アイコン" 135
"種類" 136
"名前" 135
"日付" 136
一括選択 75
移動 17, 76, 77, 100, 109, 186
ウインドウの～ 17, 77, 186
挿入ポイントの～ 49
フォルダ間で書類を～する 109

ポインタが～しない　272
ポインタの～量　164
イニシャライズ　28, 29, 31, 190-199, 203, 218, 221, 222, 225, 273, 274
～開始前のダイアログボックス　193, 196
～確認用のダイアログボックス　195
～されていないディスク　273
再～　199, 203, 223, 224
“入”ボタン　240
色合い　156, 157
色の明るさ　156
インストーラディスク　34, 35, 257
インストール　140, 167, 224, 257
インストール
システムソフトウェア　34
インフォメーションウインドウ　102
“インフォメーション”　103, 104, 105, 133, 250, 274

う－ウ

“ウインドウ整頓”　136
ウインドウ　14-15, 76-81, 132, 186, 236
～サイズ　15
～単位のスクロール　84
～のズーム　16
～を閉じる　81
移動　17, 77, 186
拡大　79
縮小　80
ウェルカムメッセージ　4
ウォームアップ時間　274
腕時計　44
ウムラウト（¨）　181

え－エ

英語
～入力　44
～版システムソフトウェア　268
“笑顔のMacintosh”アイコン　256, 272
エラーコード　273
選ぶ　13, 68

お－オ

オーバーヒート　276
欧文
～テキスト　88
～フォント　166, 257, 266
オブジェクト指向グラフィックス　122, 123
オプションキャラクタ　180
“オプション”ボタン　123
オペレーティングシステム　130, 199, 224
音量　165　→“ボリューム”も参照。

か－カ

階層ファイルシステム　58, 59, 105, 107, 113, 152 ,194
～の構造　108
階調　159, 160
～数　159
グレイ～　159
“外部ドライブ”　210
鍵マーク　104
拡大（ウインドウ）　160
拡張スロット　162, 276
カスタマイズ　37, 39, 149, 266
片面
～ディスク　190
～フォーマット　192, 203
“片面”ボタン　195
“カタログプリント”　126, 133, 134
“カット”　50, 89, 91, 134, 168, 170
“カラー”　136
“カラーアイコン”　138
カラーサンプル　155
カラーバー　152, 153
カラーパレット　138, 157
カラー表示　155, 159
カラープリント　127
カラーホイールダイアログボックス　156
カラーホイール　153, 156-157
カラーメニュー　138, 151
カラーモニタ　130, 136, 138, 151, 155, 157-160
簡易インストール　36, 259～
→“Installer”も参照。
換気　276
漢字
～Talk　186, 154, 268
～キャッシュ　154

き－キ

キーボードショートカット　186
キーボード　158, 168, 171, 172, 173, 180, 185
接続　273
キー　158, 207
～入力　273
～配列　172
キャラクタ～　158, 173, 180, 181
起動　166
～動アプリケーション　252
～アプリケーションの変更　95
～時間　226
再～　163
起動ディスク　130, 137, 140, 141, 144, 146, 167, 168, 170, 184, 186, 215, 218, 223, 226, 255, 256, 266, 267-269, 272
～のカスタマイズ　266
～の機能　256
～の切り替え　253, 268
～の作成と更新　257
～と複数のシステムフォルダ　267
～内容の整理　269
切り替えのタイミング　268
起動デバイス　166
起動用フロッピーディスク　269
輝度　271
キャラクタ　158, 166, 168, 181
キャラクタキー　158, 173, 180, 181
“キャンセル”ボタン　109
キャンセル　13, 17, 77
強制イジェクト　274
行単位のスクロール　83
共用環境　148
切り替えのタイミング（起動ディスク）　268
記録
～内容の保護　190
～フォーマット　191

く－ク

クェスチョンマーク（？）アイコン　256, 272
クリック　8, 68, 69, 165
“クリップボード表示”　135
“クリップボード”　50, 89, 90, 91, 134, 135, 170
グレイ階調　159
グレイ表示　205
　～のアイコン　205
クローズボックス　17, 76, 81, 141
黒く表示　8

け－ケ

“計算機”　140, 143
警報音　165
現在の起動ディスク　130, 137, 180
　アイコン　268

こ－コ

“更新”ボタン　221
“高速ビットマッププリント”　122
高密度（フロッピー）ディスク　190, 192, 199, 201, 202
互換性　224, 232
“コピー”　50, 90, 134, 168, 170
コピー　99, 102
　アイコンの～　99
　ハードディスクからフロッピーディスクへの～　213
　ハードディスクへの～　209, 212
　フロッピーディスクの～　190, 208
コマンドキー　174, 176, 178, 185, 186, 207, 253, 268
“ゴミ箱を空にする”　127, 128, 137
“ゴミ箱”　127, 128, 133, 135, 137, 203, 206, 207
コメントボックス　133
コンセント　271
コントラスト　271
“コントロールパネル”　140, 149, 150, 155, 158, 159, 161, 163, 165, 253, 257
コントロールパネル（General）　150

さ－サ

再イニシャライズ　199, 203, 223, 224
再起動　163
サイズ変更　17, 76
サイズボックス　15, 19, 76
　使用方法　78
“サイズ”　136
“最大未使用メモリ”　248, 249
彩度　156
サウンド　155, 165
サウンドチップ　155
作業環境　93
作成日時　102
作成日付　133

し－シ

時間　153
色相　156
色調　153
時刻　142
　～の表示形式　153
システムソフトウェア　94, 140, 164, 218, 225, 229-231, 256, 257, 269, 278
　インストール　34
システムディスク　3, 219
　起動画面　4
システムファイル　130　→“システムソフトウェア”も参照。
システムフォルダ　144, 170, 184, 209, 256-267
システムフォント　167
四則演算　143
室温　276
自動改行機能　44
シフトクリック　71, 74, 184
修正日付　133
“終了”　2, 29, 127, 137, 207, 226, 274
縮小（プリント）　123
“種類”　136
ショートカット　184-186
“小アイコン”　135
“消去”　91, 135
“消去”ボタン　193, 196
使用条件　229
“使用”　147, 148
初期化　190, 191　→“イニシャライズ”も参照。
初期設定ダイアログボックス　244
“初期設定”　244
書類　41, 85, 110, 111, 112, 119, 120, 125, 127, 128
　アイコン　46
　サイズ　102
　作成　42, 44, 91, 110
　作成日付　133
　修正日付　133
　整理　42
　内部処理　119
　名称変更　52
　ロック　104
白　156
“新規作成”　51, 111, 117, 194, 195
“新規フォルダ”　54, 108, 131
信頼性テスト　195

す－ス

ズームボックス　16, 17, 76, 79, 80
ズーム（ウインドウ）　16
推奨メモリサイズ　133, 250
“スクラップブック”　90, 140, 168, 169, 257
スクリーン　271
スクリプトマネージャ　44
スクロール　72, 76, 82, 83
　～アロー　24
　機能　82
　行単位の～　83
　～バー　19, 76, 82, 85, 113
　～ボックス　25, 84, 85
“スタートアップ”　137, 231, 232, 251, 252
ステータスボックス　194, 196, 203
スピーカ　142, 155, 165
スプール機能　239, 280
スペース　98, 119, 194, 196, 222
スペースバー　181
スペシャルメニュー　2, 29, 127, 128, 136, 137, 163, 186, 207, 226, 231, 232, 252, 274

"ウインドウ整頓" 136
"ゴミ箱を空にする" 127, 128, 137
"カラー" 136
"整頓" 136, 137, 186
"選択項目の整頓" 136
"ディスクの消去" 137
"デスクトップ整頓" 136
"リスタート" 127, 137, 163, 207, 232
"全てを選択" 128, 135
スペルチェック用のデスクアクセサリ 278

せ-セ

"整頓" 136, 137, 186
整頓 →"スペシャルメニュー"参照。
"精密ビットマップアライメント" 122, 123
接続 276
～状態の設定 143, 148
セディユ (Ç) 181
"セレクタ" 121, 125, 140, 143, 144, 145, 146, 148, 149, 240
"選択項目の整頓" 136
"選択された項目" 251, 252
選択する 8, 13, 68, 75, 88
"全てを選択" 128, 135
"選択項目の整頓" 136
"選択された項目" 251, 252
～部分のペースト 50
一括～ 75
テキストの～ 88

そ-ソ

ゾーン 149
操作性 1
挿入ポイント 44, 87
移動 49
設定 87
点滅速度 87
ソフトウェア上のトラブル 277
インストールの不備 278
デスクアクセサリが開けない 279
デスクトップが現れない 272
ハードディスクのアイコンが表示されない 274
"ソフトキーボード" 140, 166, 168, 180, 273

た-タ

ターミネータ 221 →"SCSI"も参照。
ダイアログボックス 45, 59, 60, 122, 124, 193, 195, 196, 197, 198, 199, 243, 251, 252
"開く" 59
"保存" 117
LaserWriterオプション 123
LaserWriter用紙設定 122
イニシャライズ開始前 193, 196
イニシャライズ確認用 193, 195
カラーホイール～ 156
初期設定～ 244
スタートアップ 251, 252
プリント 124
プリント開始時間設定 243
タイトルバー 17
"ダウンロード可能フォントの制限なし" 123
"縦反転" 123
ダブルクリック 70, 88, 110, 112, 116, 118, 153, 165, 186, 268
～の反応速度 165
単語(ワード) 70

ち-チ

調光器 271

つ-ツ

通気口 276

て-テ

"ディスクの消去" 137
ディスク 117, 120, 127, 128, 135, 137, 191, 226, 279
～間のコピー 100-101, 204
～消去時のダイアログボックス 203
アイコン 127
空き容量 128, 274
ドライブとの関係 191
ロック 190, 273
停電 120, 275, 276
ディレクトリ 85, 105, 106, 116, 118, 125, 133, 135, 194, 196, 203
～ウィンドウ 14, 106, 107, 134-136, 186
～ダイアログボックス 45, 113, 115-118, 194
～ダイアログボックス(新規保存) 118
～ダイアログボックスで書類を開く 115
～ダイアログボックス(保存) 117
～タイトル 116, 118
～の修復 226
～のプリント 126
テキスト
～の選択 88
～のペースト 90
～の編集 86
欧文～ 88
欧文～ 166, 257, 266
"手差し" 245
"手差しプリントの報告" 245
デスクアクセサリ 130, 131, 134, 139-143, 166, 168, 180, 215, 238, 252, 257, 266, 278
～が開けない 279
"計算機" 140, 143
"コントロールパネル" 140-165, 253, 257
"スクラップブック" 90, 140, 168, 169, 257
"スタートアップ" 137, 231, 232, 251, 252
"セレクタ" 121, 125, 140, 143, 144, 145, 146, 148, 149, 240
"ソフトキーボード" 140, 166, 168, 180, 273
"時計" 140, 141, 142
"パズル" 140
"ファイル検索" 108, 140, 141, 225
"メモ用紙" 140
インストール 140
"デスクトップを再構成する" 268
"デスクトップ整頓" 136

デスクトップ　8, 15, 76, 93, 94, 96, 121, 127, 130, 151-153, 186, 233, 236
～が現れない　272
～の整理　8
～パターン　150-152
“テスト”ボタン　224
テスト　224, 225
デバイス優先順位　→“SCSI ID番号”参照。
テンキー　143, 173, 175, 177, 179, 184
電源　2, 29, 120, 137, 149, 226, 270, 271, 276
～延長コード　271
～コード　271
～スイッチ　2, 226
テンプレート　167
点滅　155, 165
～回数　153

と－ト

ドキュメント　110　→“書類”も参照。
特殊キー　173, 179
特殊キャラクタ　180, 181
“時計”　140, 141, 142
“閉じる”　59, 81, 114, 132, 141, 186
ドライバ　224
～リソース　223, 224
“ドライブ”ボタン　116, 118, 225
ドライブ1　207, 266
ドライブ1からのイジェクト　207
ドライブ2　207, 266
ドライブ2からのイジェクト　207
ドラッグ　9, 10, 17, 68, 78, 85, 88, 100, 161, 186
トラブル　270
～の防止　224
一般的な～　271
“取り消し”　134

な－ナ

“内部ドライブ”　210
内部ハードディスク　266
“泣き顔のMacintosh”アイコン　272
“名前”　135

に－ニ

“～について”　234
日本語　70, 123, 149, 154, 266
～入力　44
～入力フロントエンドプロセッサ　266
～フォント　257

ね－ネ

ネスティング　57, 105, 107
ネットワーク　146, 147, 228, 243, 258

の－ノ

“～のコピー”　99, 133

は－ハ

バージョン　127, 130, 133, 224, 225, 229, 257, 258, 268
～アップ　280
パーティション　224
ハードディスク　29, 31, 166, 217, 218, 221-226, 274
～稼働中の停電　275
～からフロッピーディスクへのコピー　213
～のアイコンが表示されない　274
～へのコピー　209, 212
アイコン　275
外部～　219, 274
外部SCSI～　225
修復　275
他社のSCSI～　275
テスト　224
内部～　266
複数の外部～　267
リソース　275
破棄　127-128
爆弾アイコン　273, 274
“パズル”　140
“パターン反転”　123
発音符付きキャラクタ　181
バックアップ　120, 223, 224, 226
バックグランド　235, 239
バックグラウンドプリント　121, 228, 239, “初期設定”　244
“手差し”　245
“手差しプリントの報告”　245
“プリントエラーの報告”　245
“プリント延期”　243
“プリント再開”　246
“プリント状況”　244
“プリント中”　242, 244
“プリント中止”　243, 246
“プリント中にプリントモニタのウインドウを表示”　245
“プリントの時刻”ボタン　242, 243, 280
“プリント待ち”　242, 243, 244, 280
“プリントを延期”ボタン　244
“メニューバーに◆のみを表示”　245
“メニューバーにアイコンで表示”　245
“リストから削除”　243
PrintMonitor　127, 241, 242, 244, 245, 280
バッテリ　149
発熱　276
パワーオンキー　29, 176, 179, 219
反転　123
反応速度　158

ひ－ヒ

歪み　123
“日付”　136
日付　153
ビットマップ　122, 123
ビデオカード　157, 160, 162
～拡張キット　157, 160
鼻母音化記号（~）　181
表示形式　135
表示色　117, 136, 151, 156, 159, 160
特性　157
“表示なし”　245
“開かれたアプリケーションおよびデスクアクセサリ”　252
“開く”　13, 92, 110, 112, 115, 132
“開く”ボタン　113, 115, 116, 118

ふ－フ

“ファイル” 12
“ファイル検索” 108, 140, 141, 225
ファイルサーバ 146
ファイルメニュー 12, 51, 54, 59, 81, 92, 99, 103-105, 118-117, 122-132, 141, 170, 186, 195, 204, 239, 244, 250, 274
“イジェクト” 134, 203, 204
“インフォメーション” 103, 104, 105, 133, 250, 274
“カタログプリント” 126, 133, 134
“新規フォルダ” 54, 108, 131
“閉じる” 59, 81, 114, 132, 141, 186
“開く” 13, 92, 110, 112, 115, 132
“複製” 99, 133, 170
“プリント” 124, 125, 132, 239
→“用紙設定”も参照。
“元に戻す” 128, 133
“用紙設定” 122, 125, 133, 149
ファインダ 94-96, 130, 151, 162, 185, 186, 228, 232, 233, 252
機能 95
書類を開く 112
メニュー 129
メモリサイズ 279
ファンクションキー 178
ファン 276
フォーマット 191 →“イニシャライズ”も参照。
記録～ 191
フォアグランド 235
フォルダ 53, 105, 107, 109, 114, 116, 118, 119, 127, 128, 131, 135, 194, 273, 279
～間で書類を移動する 109
フォント 123, 154, 166, 168, 180, 181, 257
“ダウンロード可能フォントの制限なし” 123
欧文～ 166, 257, 266
システム～ 167
日本語～ 257
不要な～ 269
復元 127-128
複数のアプリケーションを開く 279
複数の外部ハードディスク 267
複数のシステムファイル 267
複数のシステムフォルダ 209
複数のLaserWriter 243
複数のSCSIハードディスク 225, 275
複数モニタ使用時のコントロールパネル（Monitors） 161
複数モニタの同時使用 159-162
“複製” 99, 133, 170
“不使用”ボタン 145, 148
不要なフォント 269
不要なリソース 269
プリンタ 121, 127, 143-146, 228
～ポート 143
～リソース 127, 144, 146
“プリント” 124, 125, 132, 239
“プリントを延期”ボタン 244
“プリントエラーの報告” 245
“プリント延期” 243
“プリント再開” 246
“プリント中止” 243
“プリント状況” 244
“プリント中” 242, 244
“プリント中止” 243, 246
“プリントの時刻”ボタン 242, 243, 280
“プリント待ち” 242, 243, 244, 280
“プリント中にプリントモニタのウインドウを表示” 245
“プリント領域拡大” 123
プリント 92, 121-125, 132, 148, 149, 228, 280
～開始時刻 280
～待ち 148
～の自動化 228
～を開始する日時および時刻 243
～を途中でキャンセル 243
縮小 123
プルダウン 11, 72
～メニュー 12
フロッピーディスク 189-191
～間のコピー 209
～のコピー 190, 208
～の挿入 3
～の内容を保護する 214
～のロック 215
～をイジェクトできない 274
容量 190
フロッピー（ディスク）ドライブ 189, 192
ドライブ1 207, 266
ドライブ1からのイジェクト 207
ドライブ2 207, 266
ドライブ2からのイジェクト 207

へ－ヘ

ページ 123
“ペースト” 50, 89, 90, 91, 135, 169, 170
“ヘルプ”ボタン 123
変更日付 136
編集メニュー 50, 88-91, 128, 131, 134, 168-170
“カット” 50, 89, 91, 134, 168, 170
“コピー” 50, 90, 134, 168, 170
“クリップボード表示” 135
“消去” 91, 135
“全てを選択” 128, 135
“取り消し” 134
“ペースト” 50, 89, 90, 91, 135, 169, 170
編集 91

ほ－ホ

ポート 145
ポインタ 7, 44
～が移動しない 272
～の移動量 164
“保存” 51, 117, 119, 120
“保存ファイル名” 45
“保存”ボタン 119
保存 120
～のタイミング 46
～場所 106, 107
ボリューム 142, 155
～つまみ 155, 165
ボリュームラベル 200

ま－マ

マウス 68, 164, 272
～ケーブル 7, 272

～とキーボードの接続　272
～トラッキング　164
～の使いかた　68
～ボタン　7
～ボタンを押したままで電源投入　274
～ボタンを押したままにする（プレス）　72
マニュアル　91, 122
マルチタスク　228
マルチファインダ　102, 103, 121, 132, 133, 137, 154, 227-235, 239-241, 246, 249, 250-253, 278, 279
～使用時のデスクトップ　227
～使用時のトラブル　278
～の一時解除　253
～の使用条件　231
～の操作例　233

め－メ

名称設定
アイコン　97, 98
ディスク　194
明度　156
メインモニタ　159, 162, 163
～の設定　163
メガバイト　230
“メッセージも表示”　245
メディア　201
メニュー　11, 72, 130, 185
“メニューバーに◆のみを表示”　245
“メニューバーにアイコンで表示”　245
メニューバー　10, 11, 17, 94, 130, 151, 155, 162, 165, 234, 237, 238, 278
“メモ用紙”　140
メモリ　119-130, 154, 229, 246-249, 277, 278
メモリ管理　246
メモリグラフ　247
メモリサイズ（容量）　102, 250
メモリの断片化　248, 278
メモリ配分　247, 249
メモリ不足　132, 246, 249, 279
メモリ容量　130, 154, 229, 230, 249
メモリ容量の確認　229

も－モ

モディファイアキー　184
モデムポート　143
“元に戻す”　128, 133
“モニタ番号”ボタン　162
モニタ　159-160, 162, 163, 271
～の位置関係　159, 161
～番号　162
複数～の同時使用　159-162
モノクロ～　159, 160
モノクロモニタ　159, 160

や－ヤ

矢印キー　116, 173, 175, 177, 179

ゆ－ユ

ユーザインタフェース　1
優先順位　242

よ－ヨ

用紙サイズ　125, 133
“用紙設定”　122, 125, 133, 149
“高速ビットマッププリント”　122
“精密ビットマップアライメント”　122, 123
“ダウンロード可能フォントの制限なし”　123
“縦反転”　123
“パターン反転”　123
“プリント領域拡大”　123
“ヘルプ”ボタン　123
“横反転”　123
用紙設定　124
用紙フィーダ　243
容量　190, 246
“横反転”　123

ら－ラ

“カラー変更”ボタン　155, 156
ランダムアクセスメモリ　154

り－リ

“リスタート”ボタン　219, 273
“リスタート”　127, 137, 163, 207, 232
“リストから削除”　243
リソース　143, 144, 146, 223, 224
リピート入力　158
“利用者”　147, 148, 149
“両面”ボタン　193
両面　192, 203
～ディスク　190, 195

ろ－ロ

ロック　96, 104, 128, 133, 214, 273
～の解除　105
書類の～　104
ディスクの～　190, 273

わ－ワ

ワープロ機能　91

アップルパブリッシングシステム

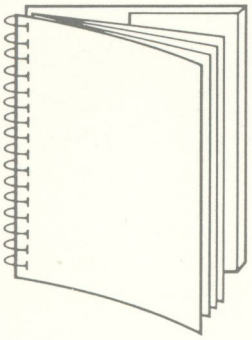
このマニュアルの編集および構成にはApple® Macintosh®コンピュータおよびページレイアウトプログラム、QuarkXPress™日本語版が使用されました。イラスト部分はAdobe®Illustrator 88™およびAdobe Separator™を使用して作成され、Linotronic® 300にて出力されたものです。LaserWriter®ページ記述言語、POSTSCRIPT®はAdobe Systems Incorporatedにより開発されています。

文章は、細明朝体および中ゴシック体を使用しています。欧文書体の一部は、Apple Garamondを使用しています。記号などにはITC Zapf Dingbats®およびモノスペースのApple Courierフォントを使用しています。

アップルパフ

このマニュア
Apple® Ma
よびページ
QuarkXPress™
イラスト部分
およびAdobe
成され、Linc
たものです。
言語、POSTS
Incorporated

文章は、細明
を使用してい
Apple Garam
号などにはIT
モノスペース
を使用してい



この扉はしおりとして
お使いください。

Macintosh® System Software User's Guide Version 6.0.4



Apple Computer Japan
アップルコンピュータジャパン株式会社
〒106　東京都港区六本木1-4-30　第25森ビル23F ☎(03)224-7000(代)

J030-3399-A
Printed in Singapore